
カラダがどんどん改造されるわけ

秋山悠真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カラダがどんどん改造されるわけ

【Nコード】

N91010

【作者名】

秋山悠真

【あらすじ】

第2章はシリアスになる予定だったんですが…。過去最高のバカっぽい展開に…。自分でも、一体どうしたのかわかりません（笑）そして、しばらく投稿出来なくてすみませんでした。また見てね^
^ ; ;

第1話 チンピラと科学者と妹と豚カツ

俺の名前は神崎駿。かんざきしゅん

普通で平凡な、高校1年生だ。

学業、スポーツ、家柄、どれを取っても普通の人。

彼女もいなければ、イケメンでモテモテって事もない。

まあ別に、自分が平凡である事に特に文句はない。

普通に毎日楽しいし、家に帰って夜中までネットゲ（オンラインゲー
ム）するのも好きだ。

まあ、唯一自慢できるとしたら、出来の良い可愛い妹がいるぐらい
か。

あいつの存在は、本当に母さんには感謝してる。

そんな俺だが、今は追われる身。

俺は軽いピンチに襲われている。

誰に追われてるかって・・・？

「さてテメエー！ 逃げんじゃねー！ 殺すぞっ！」

そう言つて走る俺を追いかけてくる、派手なシャツを着た、金属バットを持ったお兄さん達。

シャツの袖口から見える、鮮やかな龍のタトゥー。

いやこの場合、刺青と言つた方が適切か。

スキンヘッドの頭や、頬に傷跡のある顔など、かなりドスのきいた人達だ。

そう、俺はチンピラ数人に追われている。

いや、もしかしてヤクザですか？

しかし、あまりの現実感の無さに、俺は逆に冷静だ。

なぜこんな状況かつて？

女の子を助けようとしたんだよ。

俺は普通に、本屋で漫画本を購入し、帰宅する途中だった。

だけど見ちまつたんだ、俺が通っている学校の制服を着た女子が、野郎達に囲まれて路地裏に連れ込まれるのを。

ほっときや良かったって？

ああ、確かに俺はその場で立ちすくみ、悩んだ拳句、立ち去ろうとした。

でもさ、その子さ、超可愛い子なんだよ！

ま、まあ……チラっとしか顔見てないけどな…。

あんな子ウチの学校に居たっけか？

誰だったかなー。

いや、知ってる知らないの問題じゃないだろ。

君ならどうする？

少しは考えるよな？

ギャルゲーなら、これはイベント。ここで行けばフラグが立つかもしれない。

ああそうさ、自分はまだ世の中の汚れた世界を知らない子供^がだったんだよ！

なんとかその場を穏便にすませれば、カッコイイかって、下心出しちまって、

「おいお前ら、俺の知り合いに何やってんだ！」

なんて、話し合いでなんとかなるって、うっかり声をかけなければ・
・・。

だがそんな事を考えてる場合じゃない。

早く逃げ切らなきゃ・・・。

「ハア、ハア、う、うわあ！」

ズザザザーっと、俺は盛大にこけた。

その隙に、チンピラ達、1・・・2・・・3・・・4・・・5人！
は、あつという間に追いついてきた。

「あ〜ん？ もう逃げないのかな？ クソガキ！ 大人に対する礼儀っていうもんを、た〜っぷりと教えてやるよ。」

そう言うと彼らは、ニヒヒだとか、バ〜カだとか、汚い言葉を吐きながら近づいて来る。

し、しまった！ くっそ、だ、ダメだ・・・。
足が竦んで動きやしねえ・・・。

そんな俺におかまいなしと、チンピラのリーダー格の男がバットを振り下ろした。

「ぐはっ！！」

背中に殴打されるバット。

ドサッ。

殴られた衝撃で地面に胸を強く打った。

おかげで呼吸が出来ない・・・、く、苦しい・・・。

「死んどけや、このクソガキー！」

再度振り下ろされる金属バット。

こ、殺される・・・。

ガキーン！と、それが頭をかすめて地面に衝突する音。

・・・へ？ た、助かつ・・・た・・・？

「俺達は、善良な大人だからなあ？ 別にお前を殺したりはしないさ。」

「出すもん出せば、ま、この場は見逃してやってもいいんだぜー。」

ニタリと気味の悪い表情で、人差し指と親指で輪っかを作り、これだよこれ。

と、手を突き出してくるリーダー格。

俺は瞬時に理解し、ズボンのポケットから財布を取り出し・・・こ、これで・・・と掠れた声で言いながら、そいつを差し出した。

登場だけはカッコ良かったものの、これが現実。

そして頭の中は真っ白。

ただただ怖くて、手が震えていた。

「お、物分りがいいじゃねえか。そうそう子供はそうでなきゃーな。」

ニヒヒと、また気味の悪い顔で金を確認する彼ら。

「結構持ってんじゃないか。いいぜ、今日はこれで許してやるよ。」

バーカとそいつらは捨てゼリフを吐いて、立ち去ろうと踵を返したその先に、奇妙な彼女おほさんが立っていた・・・。

そして一喝。

「お前達みたな雑魚を見ると、本当に虫唾が走る。」

「何の力もない弱者しか相手に出来ない、有象無象のチンピラどもがあー！」

腕を組み、仁王立ちの長身の女性。その姿は赤いジャージに汚れた白衣、伸びた髪はボザボザで、さながらメドウーサ。極めつけは分厚い淵無しメガネ。

見在目、チンピラ以上に不審者だった。

「誰だお前？ ニートのババアか？ 邪魔だ。すっこんでろっ。」

どけ、てめえと、バットで殴りかかろうとする彼ら。

「ふ、ふはははは、はーはっはあああー！！」

突然、嘲笑とも取れる高笑いをする彼女おほさん。

「な、なんだこいつ、気色悪い・・・。」

思わず気圧されて立ち止まるチンピラ達。

「ふむ。超天才の私に対してニートだ、ババアだ？ 言ってくれな、この三下共が・・・。」

彼女は、口元に薄笑いを浮かべると、なにやらコードの着いた手袋を右手にはめた。

そんな見下された態度に逆上して、チンピラの一人が、

「うるせんだよ、ババア！」と叫びながらバットを持って突進していった。

そしてバットを振りかざし、彼女と接触するその瞬間、男は宙を舞った。

その奇妙な彼女は、殴られるその瞬間、腕を取り、間接を決め、その男を地面に叩き付けた。

だがまだ腕は放さない。関節を決めたまま、その肘に向けて、体重を乗せたエルボーをお見舞いした。

バキィィっと、明らかに骨の折れた音。

辺りが静まり返った。

倒された男は、腕を折られたのも気づかず、その場で気絶している。

チンピラ達は、完全に呆気にとられその場で立ちすくんでいる。

そんな中、ハッと我に返ったリーダー格が、この野郎と呟きながら叫んだ。

「て、てめえ！！ この落とし前、指の1本や2本じゃすまさねぞ！」

げ、やはり本物でしたか……。

「お前らやつちまえ！」

その号令と共に、「死ねえええ！」と襲い掛かる、チンピラ達3人。

しかし、その拳こぶしやら蹴りやらバットやらを、次々にかわしていく彼女おはさん。

格が違うとばかりに余裕の表情で、「ち、面倒な……」と彼女おはさんは、手袋をはめた右手を彼らに向けて、瞬間、青白い電流がその掌てのひらから放射された。

彼女は^{おぼさん}呟きながら、こちらに向かって歩き出した。

そして、「大丈夫か？」と手を差し延べてきたその瞬間、

俺の意識は途絶えた

.....。

目覚めると、目の前には恍惚と照らすライトがあった。

そして、どうやら診療台のようなものに寝かされているらしい。

口には半透明のマスクが固定され、吸うと心地よい酸素が送られてくる。

病院か.....？

そっか、俺、倒れちゃったんだな。

人生初だな、こんなこと。

辺りを見回すと、様々な機械や機器が置いてあり、そして奥にはジヤンク品のような物が所狭しと、散乱している。

・・・ん？ 病院じゃない？

ベッドから起き上がり、ふと事務用のデスクを見つけたので近寄ると、机の上に手袋と、その先コードに繋がった、小型のタンクのよ
うな物がある。

「じ、これは・・・。」

手に取ったその時、奥の扉が開き、先ほどの女性おほさんが入ってきた。

「ああ、それは一度しか使えない、使い捨てでな・・・。ま、護身に持っていただけの物で・・・。だがしかし、それを作るのに300万程費用がかかっている。だから、さすがに同じ物は作れないし、同じ物をまた作っても面白くもなるともない・・・。」

ふう、と溜息を吐くと、彼女おほさんは、さらに続けた。

「ま、金はまだまだあるんだが、私もボランティアではない。今回の300万は私の仕事料として、お前からいただくでしょう。ということで、払ってくれるか？300万。ん？いや違うな、仕事をした上での報酬だ、原価では割りに合わないな。ふむ、まあ君も学生
のようだし、500万にまけておこう。」

「は、払えるわけないだろ！」

な、何言っただこの人。

話長いし、勝手に自己完結しちゃうし。

俺は半ば呆れていると、彼女は不満な表情を見せ、

「む。なんだ折角助けてやったのにその態度は。呼吸困難で、酸欠の君を助けて上げた恩を、君は何も感じないのか？」

そして、やれやれ最近の若者はと呟きながら、椅子に腰掛け、ポケットからタバコを取り出した。

ああそうか、この状況。確かに俺はこの人に助けてもらったみたいだ。

ここは素直に感謝するべきだなと思い、感謝の意を述べた。

「あ、いや・・・、その、ありがとうございました。あのまま倒れていたら、俺・・・。その、助かりました。」

「うむ、素直でよろしい。しかし君も頑張ったな。女の子を助けに入るなんて、なかなか勇気が・・・いや、相手はヤクザ5人。この場合、結局逃げただけのお前は、ただの無鉄砲なバカ・・・か。」

え〜と、まあ、その通りです、はい。確かに、今回の事で自分の浅はかさが良く分かりました。

高校生に入って大人ぶってはいたが、まだまだ考えが甘かった・・・でもあの子は逃げたみたいだし、それだけは良かったな。うん・・・

・・・あれ？

ちょっと気になる事がある。聞いてみるとしよう。

「え〜と、女の子を助けに行ったのを知ってたんですか？」

「ああ。私はあの子が、彼らに尾行されていたところから知っている。つまり、君が助けようか悩んでいたのも、見ていた。ということだ。」

何か？と不思議なものを見る目でこちらを一瞥すると、タバコを一本取り出し火を着けた。

最初から見えていたって!？

じゃあ何でもっと早く助けに来てくれなかったんだ、ちきしょー！
！！

助けてもらった立場で文句も言えず、俺はジト目で彼女を睨んだ。

「ん？なんだ？」

しかもそういえば、俺の財布は……。

慌ててポケットを探るが、当然そこには何も無い。

「NO~~~~~!!!!!!」

今月の生活費がああああああ!!!

俺は叫び、膝から崩れ落ち、床をガンガン叩いた。

「ああ、そうか。分かったぞ。助けるならもつと早く助けてくれと言いたいのか？それはすまなかった。お前がどうなるうが、女の子がどうなるうが、興味がなかったものでな。いや、それ以上に私は面倒事が嫌いだな。まあ、あの時助けに入ったのも、私の気まぐれのようなものだ安心して……。」

「何が安心してだ！意味分かんねえし！俺の財布を返せ~~~~~!!!」

彼女は、うるさい奴だと小さく愚痴ると、

「財布ぐらいでメソメソするな。どうせ学生の財布の中身など、たかが知れているのだから？」

メソメソって言うなよ……。確かにちょっと涙目だけどさ。

「あの財布の中には、俺と妹の今月の生活費が入ってたんだ……。ああ、今月どうやって食っていけばいいんだ……。」

「ふむ……。なんだお前、親いないのか？」

「いや、いるけどあんまり家に帰って来ないんだ。仕事で。あと、俺はお前じゃない。神崎だ。神崎駿^{かんざきしゅん}。」

「そうか、では神崎、私もおばさんではない。さつきから何度も失礼なルビの振り方をしているようだが、私はお姉さんだ。一応まだ20代なのだぞ。」

「そんな事どうでもいいよ。お姉さん？20代？肌力サカサじゃねーか。」

「じゃなくて、金、どうしよ。。」

「ふむ、元気になったようだし、そろそろ出て行ってくれるかな。私は研究があるので。これ以上お前に割く時間はないからな。そもそも、私とお前では、時間の重みが違うのだよ。私の1分はお前の3日分ぐらいある。私が1日研究を遅らせれば、科学の進歩は3年は遅れるだろう。さあ帰れ。」

「だからお前じゃなくて、神崎だ。しかも、帰りの電車賃もねえんだよ！……あのさ、あんた俺に金貸してくんない？乗りかかった船って奴でさ。」

……ちつとお姉さんは舌打ちをすると、

「だから子供は」と言いながらタバコを無造作に消すと、俺を睨んで言い放った。

「如月^{おきづき}だ。神崎君、君は本当に子供^{こども}だね。恩を受けた身でありながら、その上、金を貸せと？帰りの電車賃程度くれてやってもいいが、君には社会の常識というものがいいのか？……そうか、君はゆとり世代というやつだったな。このままでは日本の将来は知れたものだな。」

まったくと、ボサボサの髪を掻き上げ、またタバコを取り出して火を着けた。

「す、すみません……。」

俺は素直に謝った。確かに状況からみてこの人……如月さんには借りがあったのに、失礼な態度だった。

しかし、ゆとり世代は関係ないだろ。

さて、どうするか。とりあえず、電車賃だけでも貸してもらいますかね。

と、金の話を切り出すタイミングを考えていると、如月さんからあの提案が投げかけられた。

「ふむ。神崎君、生活費が無いと言ったな。分かった。バイトしないか？」

「え？バイト？何のですか？」

「私の実験の手伝いをしてほしい。なあに、簡単なバイトだ。ただの人体じ・・・ゴホン・・・生体じ・・・んんっ・・・そのベッドに横になって、しばらく寝てもらっただけで構わない。」

・・・。

あからさまに怪しいんですけど？

この人、見た目通りマッドサイエンティストって奴では・・・。

「ん、なんだ？こんな簡単なバイトが嫌なのか？君も変わり者だな。」

だから、あなたに言われたくないし・・・。

「まあ折角、都合良く実験体・・・んんっ、協力者が調達出来そう

だからな、私も誠意を見せようじゃないか。」

しょうがないと言いつつ、机の引き出しを開け、なにやら封筒を取り出した。

「これを受け取れ。前金だ。いくら入ってるか知らんが、その位あれば何とかなるだろ。」

はあ、と何気なくそれを受け取ると、

「!?!? あおう、物凄く厚みがあるんですけど。」

そう、それはきつと一流サラリーマン幹部が、ボーナスを手渡しで貰ったらこの位の厚みだろうと思える程のものだった。

「ん? そうか? 確認してみてください。」

分かりましたと、中身の札束を出すと、それは全て諭吉様。

え〜と、軽く百枚は下らないんですけど・・・。

「あの、こんなに貰っていいんですか? まだ実験も始めてないのに。」

「ああ、そうだったな。分かった。」

そう言うと、如月さんは封筒を手に取り、一枚取り出し、

「今日はもう遅い。とりあえずこれで帰ってくれ。残りは明日渡そう。学校帰りに寄れるか？」

とりあえず、その一枚は素直に受け取って置く。

しかし、

「寄れるけどさ、そうじゃなくて……。そ、そのバイトって、こんなに金を貰っていいんですか？
そもそも俺の身体、大丈夫なんですよね？」

「なんだ？色々面倒な奴だな、君は。妹と二人分なのだろう、今月はまだ始まったばかりだぞ。それで足りるのか？」

いや、あのう、充分足りませんし、俺が気になってるのは身体の方なんですけど。

「はい、充分すぎます。それより、俺、実験で死んだり、身体可笑しくなったりしませんよね？」

。。。。

無反応の如月さん。

あれ？

お〜い？

ふう〜と、彼女はタバコを吐くと、ちつと舌打ちし、「これだから子供は」と呟いた。

いや、子供とか関係ないでしょ、今の流れ。

そう思いますよね？

「貴様、私を誰だと思ってるんだ？私は超天才科学者なのだぞ。歴史上の稀代の天才科学者どもは、不老不死だの、宇宙の真理だの下らん研究を続けてきたようだが、私にとってはそれすら通過点にすぎないのだよ。分かるか？人はいつか死ぬ。そんな事は当たり前だ！人は細胞分裂を繰り返す、死ぬまでな。しかし、それも限界がある。テロメアだ？そんな物伸ばす方法なんていくらでもあるのさ。まだ気づかないのか？これだからいつまで経っても人の進歩は・・・」

「あ、いや、その、すみませんでした。超天才の如月さんを疑ったりして、という事は、俺の身体の心配はいらないうことですよね。」

「ごめんなさい、話長すぎるんです・・・。」

「ああ、もちろんだ。私に失敗はない。」

失敗はないって、何する気なんだ……。

まあ、恩も返さないだし、こんなに貰えるなら様子みながら引き受けるか……。

「神崎君、話は以上か？終わったなら、もう帰ってくれ。」

はいはい分かりました……。ったく、この人は。

さて、所変わって自宅の近くまで戻ってきました。

時計を見ると、8時30分すぎ。ちょっと遅くなったな。

ま、今日はイベントが続いたからな。しょうがないさ。

住宅街の路地を曲がると、我が家が見えてきた。

都心の住宅街という一等地にある、小さめながらも、庭付き一戸建

てだ。

まあ、扶養されてる俺が自慢してもしようがないが、これは全部母さんのおかげ。

母さんは、一流薬品会社で新薬の研究をしている研究者だ。

なにやら、博士号も持っているらしい。

父親はつていうと、父さんには会ったことはない。

とはいえ、離婚や他界したとか、そう言う事ではない。

元々、母さんは結婚をしていない。

それに、父親の話はしないから、生きているのかすら知らない。

昔、自分は本当に母さんの子供なのかと、疑っていたこともあるけど、今では間違いなく自分は母さんの子だと思ってる。

なんとなくだけどね。母さんもそう言っていたし。

そんな事を考えていると、自宅に到着。

「ただいまー、遅くなってごめんなー、彩乃あやの？いないのか？」

はーい、お帰りなさいーいと、風呂場の方で声がしたと思ったら、パ

タパタと玄関まで妹がやってきた。

妹は、俺が帰るといつも玄関まで迎えに来るのだ。

なかなか甲斐甲斐しい奴だろ？

「お帰りなさい、兄さん。」

妹は、出迎えの挨拶は笑顔だったが、すぐに不機嫌になり、もお・・
、と言いながら頬を膨らませ、

「メール見たんですか？」と腕を組んで、無い胸を張っている。

頬を膨らませる前に、そろそろ胸を膨らませた方がいいぞ。とは口
に出さず、メール？と思いつつ携帯を確認。

うお！ 妹からメール23件。着信7件。

おいおい、今時、兄妹でこの件数おかしいだろ。他人に見られても
したら完全に誤解されるぞ。

とはいえ、あまり怒らない妹が怒っていた（というより拗ねていた）
ので、すまん、気づかなかつたと、とりあえず、謝っておいた。

「今日は6月10日ですよ。兄さんの誕生日なんですよ。」

「色々準備してたのに、こんなに遅く帰ってきてえー」

むうと、さらに頬を膨らませ、怒った感じを強調している。

「そっか、悪かったって、今日は色々あってさ。ほら、まだ9時前だし。な？」

そう言っつて、携帯の時計を見えるように向ける。

「もおー。いつも早く帰って来るのにい、今日に限って遅いなんて」

「お風呂も先に入っちゃたんですからねっ」

いやそんな仁王立ちで、また無い胸張られても……。

しかも風呂は関係ないだろ……。

「分かった分かった。兄ちゃんが悪かった。」

「このとおり」と、両手を合わせ靴を脱ぎ、居間へと向かう。

「もお、兄さんっ」と、まだ収まらないのか、パタパタと後を着いて来る妹。

全く、いつまで経っても兄さん兄さんと、もう中学生だったのに、兄離れ出来ない奴だなと思いつつ、冷蔵庫を開け、麦茶をコップに開けると、一気に飲み干す。

あゝ、今日は結構熱かったからなあ。さすがに喉が渴いた。

しかも、あのマッドサイエンティスト（如月さん）の研究室、地下にあつてすげージメジメしてたし・・・。

そんな事を思い出していると、妹が、兄さん兄さんとなにやら急かしてくる。

「なんだよ」と振り向くと、

「なんだよじゃないですよ。テーブルの上、見てないんですかあ？ほら、兄さんの好きなお料理、いっぱい作っただですよ。」

そうか、忘れてた。こいつは褒めて褒めて魔人だった。褒めるまで何度も聞いてくる程の、大魔人さんだったっけ。

「おうそうか」と、気づいてなかった振りをして、テーブルを見渡す。

「へー、骨付きチキンに、シーザーサラダ。お、肉じゃがもあるのか。美味そうだなー。」

「しかも、今回は、ケーキも手作りだな？綺麗に出来ているし、凄いいじゃないか、彩乃。」

と、ちょっと大きさに褒めてやる。

すると妹はだんだん機嫌が良くなり、「えへへ、凄いでしょお」と、得意げだ。

「あとねえ、兄さんの大好物！豚カツもあるんですよ。しかもこれから揚げますからあ、揚げたてになるんですっ。」

うふふうとさらに上機嫌でその場で手を広げ、1回転する綾乃さん。

そして、ツインテールがピコピコと揺れている。

その一連の動きがなかなか可愛いんだが、ただでさえ背が低く、しつこいが胸も無い為、子供っぽさに拍車をかけている。

髪型も少女趣味な感じで、そろそろツツコミたいのだが、まだ中一だし、そこはまあいいか。

それはさておき、豚カツは楽しみだ。確かに俺の好物で、さらに

妹の豚カツはとても美味しい。

何でも、二種類の油を用意して、二度揚げしたり、手間をかけているらしい。

さすが、家事炊事万能の我が自慢の妹。

こいつばかりは、誰にもやらねえぞ。

嫁には絶対行かせねえし、俺が結婚してもそのまま側に置く。

もちろん彼氏が出来たら、ぶっ殺す。

あれ？

俺の方が、妹離れ出来てないのか？

いやいや、父親がいない分、自分が代わりにならなくては。

そう、そう言う気分ってなわけ。

断じてシスコンではない！

俺が黙ってコブシを握っていると、妹が訝しがって「何してるんですか、兄さん？」と顔を覗いてくる。

「一人で変な事してないですねえ、先にお風呂入っちゃって下さいよあ。その間に出来ますからあ。」

「んじゃ、入ってくるわ」と俺は風呂場に向かった。

.....。

「ぶづ、気持ちいい。夏はやっぱり、熱い風呂だね。」

湯船につかりながら考える。

本当にうちの妹は出来た妹だ。

こうやって誕生日や、クリスマスだ正月だと、イベントはいつも頑張るし、普段も家事に余念が無い。

まだ中一だっただけになあ。

いつからだっけか？

こんなにあいつがしっかりしたのは。

だいぶ前からそうだった気がするなあ。

母さんは、今でこそ殆ど家にはいないが、妹が小さい頃までは毎日家にいた。

何でも、自室を研究室に改造し、自宅で研究をしていたとか。

当時は思いもしなかったが、社員がそんな事を許されるなんて、母さんは大したポジションにいるんだなって、最近思うようになってた。

そして、そのおかげもあって、俺も妹もヤサグレないですんでいる。

・・・そうか、母さんが家にいなくなった頃からだ。妹が俺に対して敬語を使うようになり、家事炊事をするようになったのは。

今考えると、なんて才能なんだ。我が妹、彩乃さん。

うむ。やっぱり俺とは違う血が流れているからだろうか。

そう、妹は実は義妹なのだ。

本人が、知っているかどうか、話題にした事がないので知る由も無いが、実は俺が4つの時に、突然母さんが連れて来たのだった。

「駿ちゃん、ほら、あなたの妹でちゅよ」って。

もちろん当時は子供だから、何も疑問を持たず妹だと受け入れられたし、その後もすっかりお兄さんぶっていた。

少し経ってから、本当の妹じゃないんだなって思ったけど、母さん

に訳を聞いた事もないし、聞く気もなかった。

どうですか、一般的にみて、可笑しいですかね？

だって、赤ん坊の頃からあいつを知ってるんだ。血の繋がりなんて、どうでもいいよ。

誰がなんと言おうと、あいつは俺の妹だし。

たとえ本当の家族がやって来ても、渡す気はさらさらないしな。

………言うておくが、義妹だからといって、変な期待はするなよ？

俺はシスコンじゃない。

ま、家族として愛してるけどさ。家族としてだ。

それに妹を嫌いな兄が、世の中にいるかい？

え？いるって？

それはすまなかった。

うちの妹は、とても可愛いもんで。

誰に言うでもなく、自慢する俺。

しつこいようだが、家族愛だぞ。

.....。

おっと、いけねえ、長風呂になっちまう。

そろそろ出ないと、綾乃さんが拗ねるからな。

じゃ、そう言う事で、俺は豚カツを食べてきます.....。

.....。

.....。

.....。

.....。

ああ、食ったなあ。

凄い量だったが、俺は完食した。

さすがにケーキは無理かと思ったが、美味しい美味しいと食べてたらあいつが喜ぶもんで・・・、つい、全部いつちまった。

おかげで胃がもたれそうだ。

・・・・・・・・。。。

ああそうか、結婚すると幸せ太りするって言うけど、こころして毎日嫁さんの為に残さず食べて、世の男性は太っていくんだな。

納得。

将来結婚したら、気を付けるとしよう。

で、説明がくどくなるが、俺は今2階の自室にいる。

食後は当然眠くなるから、ベッドの上だ。

ちなみに妹の部屋は隣。

そうだ、妹にプレゼント貰ったんだっけ。

・・・・・・・・。。。

何だか、随分と可愛い感じの紙袋だ。

ファンシーな色合いで、袋の表面がエナメルのような素材で出来ている。

なんだか、袋が随分豪華で、中の物をいやでも期待させてしまう。
なるほど……。

何が入ってるのかなと、紙袋をガサガサ……。

中身を取り出し、顔の前で眺める。

キラキラ光って、なかなかきれいだ。

それは、人口水晶の中に、銀色に光り輝くハートが入ったアクセサリ。

……じゃなくて、紐がついているから携帯ストラップか……。

妹は、「後で見てね〜」なんて言っていたが、その後に説明していた事を思い出す。

「今若い子の間で流行ってる物でして〜、恋人同士で持つと、永遠の愛が手に入るかもってやつなのです！しかも手作りですから、同じ物は他にないんですよ！」

「もちろん、彩乃は兄さんと同じ物をもっていますから、安心して下さいね！」

．．．．なんて言ってたっけ。

．．．．何を安心するんだ？

そもそも、「そんな物は、好きな男の子にあげなさい。」と言ってやったら、「だって、好きな男の子なんていないんだもん。」とか言って、むくれてたっけ。

あれだな、流行っているからほしかったってやつだな。

まあ、折角妹がくれた誕生日プレゼントだ、素直に携帯に付けておくか．．。

さあて、宿題でもやって寝ますかね。

面倒だなあ。

．．．．．

なんだか、あのマッドサイエンティストを思い出すな．．．。

第2話へ続く

第1話 チンピラと科学者と妹と豚カツ（後書き）

おかげ様で、1話の投稿が無事終了いたしました。

ご協力いただいた方々、誠にありがとうございました。

まだ主人公は改造されておりませんし、読者様も今後の展開は大体予想が出来るかと思いますが、なるべく良い意味で、期待を裏切る方向でいきたいと考えております。

2話3話と、早めの投稿をしていきますので、

是非、続きもご購入の程、宜しく願います。

第2話 アイドル白河真琴！

・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。

「デイビット！本当に行つてしまふの？」

「ああ行くさ。僕は戦士なのだからね。」

「そんな怪我で、もう戦えるわけじゃない！」

「でも僕は戦わなきゃならない・・・。」

「でも、敵は3万の大群。あなた一人でどうなるものではないわ。

私と逃げましょうお願い！」

「ああ、キャサリン。出来れば僕もそうしたいさ。」

「だったら・・・・・・・・。」

だああああ！！

朝からうるさい！ しかも内容が重い！

何の話しだこれ？

・・・・・・・・・・・・・・・・。

ああそうか、新しい目覚まし試したんだっけか。

「死なないでえええええ！デイビット~~~~~！！！」

ピッと、アラーム？を止めて裏面を見る。

「死地に赴く戦士」にセットされている……。

なんのこっちゃ、これは封印だな。

いや、しかし完全に目が覚めたな。

実は、かなり使える目覚ましなのかも。

明日はどれにしようかと数秒悩んだ挙句、どうしても良くなり目覚ましを放り投げ、さっさと着替える。

時間を確認すると、いつもより大分早い。

折角早起したんだ、たまには朝食でも作ってやるかと思い、下へ降りて台所に入ると、既に妹が起きていた。

「お早う、彩乃。」

「あ、お早うございます、兄さん。」

制服姿にエプロンを着けた妹は、朝だというのに爽やかな笑顔で振り返った。

あいかわらずこいつ、朝は元気だな。

女の子って、低気圧・・じゃなかった、低血圧が多いんじゃないかなかたつけ？

そんな事を考えていると、

「兄さん、今お弁当作ってますから、ちゃんと持って行ってくださいね。」

と、元気に微笑む我が妹。

対する俺は朝は弱いので、「へーい、サンキュウ」と、素っ気ない感じで応える。

「じゃあ俺、トースト焼くから。お前も食うか?」

「あ、じゃあお願いします。え〜と、オレンジジャムで。」

「はいよ〜」

.....

てな感じで朝の準備を終えて、いざ通学。

妹は先に行きました。

え? 何で一緒に家を出ないかって?

いつもは途中まで一緒なのだが、何だか今日は朝練があるんだと。

でも、あいつ家庭科部だったよな。

何の朝練だ？

疑問に思いつつも、「忘れないで下さいね」と念を押していた妹の顔を思い出し、弁当を鞆に入れて家を出た。

あ、そうだ、今日から自分の身体を犠牲にして大金を・・・じゃなかった、恩返しバイトだった。

遅くなる事を、あいつに伝えとかないとな。

ポケットから携帯を取り出し、歩きながらメールを打つ。

え〜と何て打つかな。「今日はバイトで人体実験だから、帰るの遅くなる。」と、こんなもんだろ。

ピッと送信。

程なく歩いているとメールが返ってきた。

「意味分らないんですけど・・・。」

うむ。なるほど、まあそうであろう。

だが、これは真実。

説明が面倒なので、スルーしてしまおう。

さて、それとは違う説明をしなくてはいけない。

俺の通う学校は、「私立三坂学園」。

最寄駅から三つ目の駅を降りて、さらに歩くこと20分、道中、山あり谷あり（うそ）裏道ありと

進んだ、小高い丘の上にある。

おかげで、夏場のこの上り坂がしんどいったらない。

この為に、原付を買ってしまったおうかと悩んだこともあるが、免許をそもそも持ってないし、規則で禁止されているので、却下。

ま、来年あたり、なれた頃に挑戦してみますか。

とそろそろ学園も近くなってくると、見知った顔に良く会う。

「お早う」「オッス」「神崎、お早う」などの挨拶で忙しくなる。

こう人が多くなってくると面倒なので、俺は一際ぶっきらぼうになっってしまう。

そのせいもあってか、あまり友達もいない。

.....

いや、いたか、あそこに一人.....

「おい、コノヤロー。起きてっか？」

そう言って、下を向いて歩いている野郎をこづく。

「いてっ、何すんだこら。」とそいつは勢い良く振り向くと、「なんだ神崎か、はよー」とつぶやき、また半寝状態で歩き出す。

あいかわらず朝に弱いこいつは、さかざきしんたろう坂崎慎太郎。

高校に入ってから、俺の悪友だ。

同じ帰宅部出身。

ま、男の説明はこの位でいいだろう。

え？ 容姿ぐらい教えろって？

男の詳細なんか聞いてどうする。

しょうがない、え〜と、髪の毛は生えてて、まだハゲてはいないかな。

あとそうだな・・・、太ってはいないが、運動していない為ブヨブヨだ。

恐らく彼は、モテない部類だろう。

イメージ湧きましたか？

そうこうしているうちに、学園の門の近くまでやってきたわけだが・
・、

「やけに今日は人が多いな・。」と、坂崎に聞こえるようにつぶやく。

「ああ、親衛隊の方たちだな。今日は白河が来るんじゃない？」

「親衛隊？」と疑問系で投げかけると、俺より事情通の坂崎が、色々説明してくれた。

どうやら彼ら（女の子もいるが）は、しろかわまこと白河真琴の親衛隊らしい。

もちろん、白河のことなら俺でも知っている。

同じクラスの女の子で、芸能人。

はっきり言って、超可愛い。

元から、芸能プロダクション所属だったらしいが、高校入学後、アイドルデビュー。

で、先日始まった、月9のドラマのヒロインに抜擢され、一躍時の人となった。

映画の主題歌決定や、各種バラエティに登場するなど、最近ではTVで見ない日は無い。

こうして彼女は、可愛くて高嶺の花だった存在から、雲の上の人へ

と昇格したのであった。

しかし、親衛隊まで出来ているとは……。

2年生、3年生も含めて、ざっと20人以上はいるな。

女の子も多いし、良く分からん。

立ち止まって傍観していると、

「なあ神崎、面白そうだからこのまま見ていこうぜ。」

と、坂崎が何だか興味津々のご様子。

携帯で時間を確認すると、だいぶ余裕がある。

ま、暇だからいいかと快諾すると、すぐにその車がやってきた。

学園入り口の、人混みの喧騒を掻き分け、Lクラスの黒い外車が門の前に到着する。

全面スモーク張りで、中に誰が乗っているかも分からない状態だが、当然、誰が出て来るか知っているかのごとく、親衛隊がドアの前に立ち、2列に並んで道を作る。

そして後部座席のドアが開き、白河真琴が登場した。

髪は栗色のショートカット。

大きな猫目と太めの眉で、目元はキリツとして見えるが、低めの鼻と小さい口元が、全体的に優しさを出している。

背が155センチ（ぐらい？）と低めで丸顔の為、完全に口リ系かと思いきや、物事をはつきり言う性格とその人に媚びない態度が、女子にも人気があり、男子からも、ギャップ萌えなのだそうです。（坂崎談）

「胸も結構あるしな。」（坂崎談）

車から降りると、親衛隊が一斉に、「お早うございます、真琴様！」と、随分練習したんだろうなあと思わせるほど、息の合った挨拶をする。

対して白河は、苦笑いだった。

「あ、あははははー。な、なんだろうな、コレ。」

「いったい何の騒ぎなの？」と、白河が問うと、親衛隊のリーダーらしき生徒が前に出て答えた。

「はっ、我々は、三坂学園所属、白河真琴ファン倶楽部の初期メンバーです。」

「えっ、なによそれ？」

「我々は、学園にいる間、真琴様に悪い虫が付いたり、暴漢どもに

襲われたりしないよう、常にお側で警護をする為……

「あゝ、うん、気持ちはありがたいよ、うん。応援してくれて、ありがとう。」

「いえいえ、我々は、真剣に真琴様を応援する為、同士を集め、さらには裏から手をまわし、親衛隊と真琴様だけになるよう、クラス替えを……」

うんうん、はあゝと、うなづきながら白河は話を聞いていたが、徐々に顔を赤らめてついに噴火した。

「やめてよ！バカバカしい。周りに迷惑がかかるでしょう？それに、そんな事したら、私が友達と仲良くしたり出来ないじゃない！」

おおー、言うねえ。はつきり言ったね。

俺は関心して見ていた。

あれだけの人数に対して、しっかりと自分の意志を伝えられるなんて、カリスマ性もありそうだな。

親衛隊は、すっかり意気消沈している。無理もない。

そして隣のバカ（坂崎）がつぶやいた。

「怒った顔も、すげー可愛い……」

と、ニヤニヤしている。

気持ち悪いから・・・、友人としてやめてくれるかな。

気持ちは分からなくないが・・・。

「はい、という事であなた達の倶楽部は解散！ これから、白河真琴公式ファン倶楽部にきちんと入ってね。詳しくは、ホームページを見ること。」

宜しく、じゃあ行くね〜と、スタスタ歩いて行く白河。

親衛隊は、肩を落として各々散っていく。

ちよつと彼らがかわいそうな気もしつつ、俺は校舎へと向かった・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

授業中。

今は数学の小テスト中。

早々とあきらめ、都合良く窓際の席である俺は、校庭で体育の授業をしている女子達を眺めていた。

ボールを蹴って、1塁に走る。

で、守備の人がボールを掴んで1塁に送球、アウト！。

なるほど、キックベースねえ。

今更、男どもでやったって対して面白くないのに、キャアキャア楽しそうだな。

ハーフパンツが緑ってことは、3年か？

しかしあれだな、中学の頃は1年の時に3年生を見たりすると、えらい大人に見えたけど、高校入ってから、そんなに学年の差は感じないな。

それだけ俺達が、大人になってきてるってことだよな。

などと考えていたら、ふと、今朝の出来事を思い出した。

……久しぶりに登校してきた、白河真琴。

物怖じせず、親衛隊にはつきりと言いつた……。

やっぱり、芸能人やる為には、あの位の度胸が必要なのだろう。

ちょっと可愛い位の子なんて、そこらじゅうにたくさんいるしな。

そこから先は、努力と、生まれ持った天性のカリスマ性ってことなのだろうか。

・例外に無く、俺も、彼女の魅力には惹かれることがある。

つい授業中も、彼女を目で追ってしまうことがある。

周りを見渡すと、男子の大半が、同じように見てる。

そんなことがよくある。

本人は、見られている意識はあるのだろうか？

視線を感じているのだろうか？

気になって、数席離れた白河を見る。

考え事でもしているのか、頬杖を付いて、シャーペンの頭をトントんと唇にあてている。

もつとも、テスト中だ。

答えを考えているのだろうか。

そのままボーっと彼女を見つめっていると、ふいに彼女は振り返り、こちらを見た。

う、目があった……。

そのまま硬直してしまつ。

白河も、そのままじい〜とこちらを見ている。

な、なんだこの状況。

なんだろう、ここで先に目を逸らしたら、ヘタレの烙印を押されてしまいそうな気がした。

今朝の、あの親衛隊の時のような態度で、

「ヘタレな男は嫌いだから。」って、そんな方向に進みそうな気配がある。

彼女は普通に見ているだけかも知れない……。

でも、キリツとしたその目元から感じるその視線は、何か逆らえないものを感じる。

緊張しながら、そのまま目を合わせていると、彼女が突然ニコツと微笑んだ。

うおっ！

やられた！

い、今、胸の辺りがキュンと・・・。

俺は急激に赤面していくのを感じ、すぐさま顔を逸らした。

まずい、バレたか・・・。

何秒経った？いや何分だ？

時間の流れがあいまいに感じつつ、そろそろと思い、もう一度彼女を見た。

!!!!!!!!!!!!

彼女はまだ見ていた。

しかも、笑顔のまま、小さく手を振り振りしている。

そして口パクで、「やつほお〜」と、たぶん言った・・・。

ダメだ、もう見れない！

俺はその後、授業が終わり、放課後になるまで、ずっと外を見ていた……。

……

はあああああ。

深い溜息をついた。

やっと放課後だ。

「おい、神崎、この後どうする？」

説明はいらないだろう、坂崎だ。

こいつは目の前の席なんだ。

「今日はちょっと用事があったな。」

先に帰っていいぞーと、手を振って、しっしっとしてやるよ、その動作でテスト中の出来事が脳裏にフラッシュバックした。

・・・っつ。

意味無く赤面している俺にはお構いなく、坂崎は、

「そついえば今日さ、数学のテストの時、

(な、何を言いやがんだこ、こいつ・・・。)

・・・聞いて驚け、白河がこつち見てさ、手を振ってたんだぜ!」

(ドツキーン!! 心臓が飛び出るかと思った。)

「まいったな。あいつ、俺のこと好きなのかなー。やばいなー。
なあ神崎、ここは、勝負かけて告るべきか?」

ふゝ、幸せな奴で良かったと、俺は安息し、「やめとけ」と一言だけ言っておいた。

・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

さて、教室には誰も居なくなつたみたいだし、そろそろ行くか。

正直、白河には会いたくなかつたから、わざわざ下校時間をずらしたってわけ。

我ながら、ヘタレ感は否めない。

しょうがないだろ！

女の子は苦手なんだよ。

今までまともに話しなんかしたことないし。

妹いるけどな……。

しよせん妹だから。

子供だし。

雑念を払いながら下駄箱で靴を履き替えて、外に出る。

早くバイトに行かないと。

約束だからな。

そう思いつつ歩いていると、

「神崎く〜ん。」

ん？ 俺か？ どこからか、微妙に聞こえるか聞こえないか程の音がする。

見廻しても誰もいない……。

あれ？

まあいいかと、歩きだすと、

「か・ん・ざ・き・く〜ん」

さらに「ここだよー」と、確かに聞こえた。

どこからだど、訝しがつてもう一度辺りを見廻す……。

……いた。

何者かが体育館の陰から、手だけを出して「こっちこっち」と呼んでいる。

はあ、しゃあねえ。

面倒事じゃなきゃいいがと思いつつも、あの手と声は間違いなく女の子、誰なのか気になったので、確かめたい気持ちを抑えつつ、ゆっくりとそこに近づいた。

もうちょっとで、先程の手が出ていた場所に差しかかろうとしたその時、突然腕をつかまれ、体育館裏へと引き込まれた。

「うお、ちよつと、な……」

白河だった……。

よりもよって、一番会いたくない奴に！

「な、ななな何だよ。」

しまった！激しく噛んでしまった。

動揺していると、彼女は一所懸命に「し~~~~、し~~~~。」と人差し指を口に当てている。

「もぉ、声がでかい！」小声で叫ぶ白河。

か、顔が近すぎるっ！

一体これはどういう事だ？

「な、なにが……。」

俺が動揺しながら言いかけると、

「だから、静かにしてって言ってるでしょ！」

彼女はそう言いながら、俺の右腕にしがみつき、体育館の奥へと引っ張る。

ぎゃあああああああ！！！

う、腕が、腕が、か、彼女のむ、胸にジャストミートなんですけど！

「ちょ、ちよつとまつ・・・」

「いいから早く！ ここじゃ見えちゃうの！ あの倉庫辺りまで。」

さらに引つ張られる。俺が硬直してるもんだから、体重をかけて、んしょんしょと彼女がする度に、腕にプニプニした弾力を感じてしまう・・・。

け、結構あるんだな・・・。

いやいや、そういう状況じゃないだろ？

しかし、全神経が、腕のその部分に集中していた。

ま、まずい！

俺の砲台が、戦闘態勢にいいいい！！

腕が名残惜しいが、是が非には代えられない。

俺はその場にひざまずき、うづくまった。

「えっ？ どうしたの、神崎君！ お腹痛いの？」

大丈夫？と、背中をさすってくる白河。

だから、何でそんなに近いんだよ……。

「ねえほんとに大丈夫？」と、うずくまり、下を向いている俺の顔の、さらに下から覗いてくる彼女の。

心配顔の上目使い……。

だああああ！！ おさまらねえだろうが！！

「あのさ、ちょっと今、俺の身体の中で、愛を叫んでる奴がいるみたいなんで、離れてくれない。」

「ええ！？ なに意味不明なこと口走ってるの！？」

ほんとにまずいんじゃない？と、立ち上がって、キョロキョロと辺りを見廻すと、

「とりあえず、保健室いこっ」

ほらあ、と、彼女は俺の腕の下に頭を入れ、ちょうど肩を貸す感じで立ち上がらせようとする。

「ば、ばか、やめっ……」

必死に俺は抵抗するが、逆効果だったみたいで、

「もお、何なのよ！ほらあっ立って、お願い！！」
(立ってるんですけど……))

と、その状態から俺の身体を、その彼女の両腕で鷲掴みにされる……。

もはや、きつく抱きつかれている状態。

彼女の柔らかい感触が、さらには、急接近している顔と顔……。

はあ、はあ、と、彼女の吐息が……。

もうダメだ……。

俺の中の何かが切れて、プツンと音がしたようだった。

いや、本当に血管が切れたらしい、おびただしい量の鼻血が、ボタ

ボタと地面に落ちていた。

「キヤア~~~~、なに!? 血が出てるじゃない!?!」

どおしよ、どおしよと、おろおろする彼女を横目に、俺は自爆を覚悟し立ち上がるうとした。

「だ、大丈夫だか・・・ら、こ・・・れは・・・せいりげん・・・しよ・・・う」

大量の鼻血で貧血状態の俺は、激しい立ちくらみに襲われ、そのまま後ろに倒れこんだ・・・。

ゴツツという音が聞こえた・・・。激しい後頭部の痛み。

や、やばい・・・気絶する・・・。

薄れ行く意識の中で、

「夏ズボンって、生地が薄くて目立つんだよな・・・。」と思った・・・。

.....

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。。

「う、う・・・・うう」

「あ、神崎君、起きた！？ 大丈夫！？」

かすかに声が聞こえる・・・・。

ああ、俺、倒れたんだっけ・・・・。

神崎君、神崎君、と声が聞こえる・・・・。

なんだ？ 天使の声か？

おれは死んだのか。

なんだろう、顔をさつきから何かが擦ってるな・・・・。

だんだん意識が戻ってきた。

ああ、顔を拭いてくれるのか。

鼻血吹いちゃったからなあ。

優しいんだな、白河。

でも俺カッコ悪いなあ。

あ、目が開きそうだな。

意を決して目を開けると、目の前に彼女の顔があった。

「あ！ 神崎君！」

「おう。」

「もう大丈夫!？」

「お、おう。」

「よ、良かったあ〜、はあ〜。」

安堵の溜息をつく彼女は、涙目だった。

そして溜息が、俺の顔全体にかかり、くすぐったいやら、恥ずかしいやら……。

痛みと共に感じる、後頭部の温もり……。

「で、なんで膝枕？」

思った事が口に出た。

「え！ キヤア~~~~！！」
「~~~~ごめんなさい~~~~。」

.....。

「あ、あのさあ、ごめんね」

体育館裏、倉庫の中、二人はそこにあつたパイプ椅子で休んでいた。

「だ、だからごめんって。」

なにやら本当に悪いと思つたらしく、両手でもじもじとしながら、こちらを見ている。

仕草が、妙に子供っぽい。

「ああ、もう大丈夫だ、ちょっとズキズキするけど問題無いだろ。」
頭を手でさすりながら応える。

「あ、いやあ、そうじゃなくて、そのう.....。」

顔を赤くしながら、俺の下半身に視線を向ける白河.....。

え？

「NOおおおおおおお！！！！！」

やっぱり見られたかあああああああ！！！！！！

頭を抱え、悶絶していると、

「あ、あのね、男の子の事、私まだよく知らないから・・・だから・・・。」

て、天然なのか、この子・・・？

そんなストレートに、私まだ未経験です。みたいな事。

「ああ、まあその件については、とりあえず置いておこう。」
「パントマイム風で、置いておここのポーズをとる。」

「で、なんで俺を呼んだんだ？」

「あ、えくとね、じゃ、じゃあ、これを見て！」

と彼女は言つと、鞆をゴソゴソ・・・、何やら白い封筒を取り出し、俺に差し出した。

ん？ 手紙？ 受け取ると、

「中を見てもいいよ。」

いいのか？と、俺は便箋を取り出し読み上げる。

なにになに・・・

「白川真琴さんへ」

「君に惚れました。今日の放課後、プール場前まで来て下さい。待ってます。」

なんだ、この直球ド真ん中のラブレター！？

「ね？　ということなの。」

「はい？　ということなのって、言われても・・・なんだ？　これについて、俺に相談ってこと？」

「ち、ちがうわよっ、さっき見たら、その人本当に待ってたみたいだから、居なくなるまで待とうかなって・・・で、ちょうど君が来たから、見張り頼めるかなって・・・。」

あー、やっと分かった。

そういうこと。

「だったら、直接会って断ればいいじゃないか。」

普通にそう思った。

「う、うん。それは、そうなんだけど……。」

「お前、今朝だって、あんなに物事はつきり言ってたじゃねーか、普通に断れよ。」

でもお……と、またもじもじする白河。

あれ？ おかしいな、この子こんなキャラだったか？

「こ、怖いのっ。」

へ？

「男の子、怖いのっ。」

「だって、断つてもし怒ったら、怖いし……。」

……なるほど、そんな事考えてたのか。

「だ、だって私、小学校も中学校も女子校だったから、男の子ってよく分からないし、その……。」

「あーあーあー、いいっていいって。そんなに説明しなくても。」

「分かった。まだその人待ってるか、見てくるよ。」

そう言っつて、俺はプールへと走りだした。

「えっ、あ、ちょ、ちよつと待ってよ！」

呼び止める声が聞こえるが、とりあえず無視。

.....

プール前へ到着。

なるほど、ごついのが一人いる。

いかにも体育会系の兄ちゃん。

先輩かな？

.....よし分かった。

踵を返し、倉庫へと走る。

時間ももつたいないので走る走る。

.....

すぐに倉庫が見えてきた。

中には、アイドル白河真琴さん。

遠目には、何だか、しょんぼりしながら座っている。

全く、とんだ面倒に巻き込まれたもんだ・・・。

ここからは、巻きでお送りいたします。

やっぱり会って断れと、なんとか彼女を説得した俺は、立会い人兼ボディーガードとして同行。

見事、彼が振られるのを確認させていただきました。

これにて解決。

そして、かわいそうな、あの男にアーメン。(男泣きしてたぞ。)

やっと開放され、俺は駅に向かって歩いていく。

「な、すっきりしただろ？」

「う、うん、そうだね。」

「だろ？」

「あの、えっと、ありがとね。」

「へ？」

「だ、だからあー！、ありがとうって……。」

「おう、良かったな。じゃあまた、困ったら声かけてくれてもいいぞ。じゃあな。」

うんうん、白河に貸しが出来たな、これは。

しかも、なんだか今日は、アイドル白河真琴が身近に感じられて、なかなか楽しかったぞ。

思い出すのは、柔らかい、あの感触……。

あの吐息……。

膝枕……。

だああああああー！！

いかんいかん！

これじゃ、坂崎と一緒にじゃないかー！！

二度とあいつを馬鹿に出来なくなってしまう……。

坂崎っちゃんダメだ。

女子にモテなくなる。

「ねえ、坂崎君。さつきから、なにニヤニヤしたり、怒った顔したりしてるの?」

え?

ハッと横を見ると白河……。

しかも、今、名前、間違えましたよね?

「お、お前、まだいたのかっ!!」

「ひ、ひどい! さつきからずっといるじゃないっ! なんでいなことになってるのよお!」

「信じらんないっ」と、おかんむりのご様子。

「いやだって、話の流れで、別れた感じだっただろうっ!?!」

なぜにそのまま着いて来る？

「ち、違うのっ、今日は、マネージャーが迎えに来れないって言うから……。」

「え、お前、毎日送り迎えしてもらってんのか？」

「だ、だって、最近怖い人たちに……ってそうだ！」

彼女は手をポンスツと合わせると、俺に向き合って、

「昨日は、助けていただきありがとうございます。重ね重ね、お礼申し上げます。」

言いながら、深ぶかと頭を下げた。

「急にどうしたの、お前？」

……。

あれ？

返事がない、ただのしかば……

バシッ

痛てっ！

プルプルと肩を震わせていたもんだから、気になって触ろうとした

ら、払いのけられました。

で、そのまま下を向いて、プルプル継続中ですが、大丈夫かな？
白河さん。

「き、君ねえ、人が真剣にお礼をしたというのに・・・、な、なん
なのその態度！しかも今日ずっと、お前お前って、いいかげん、名
前で呼んでくれてもいいじゃないっ！！」

「じゃあ、真琴。」

「えっ？」

すぐに下を向く白河。

・・・・・・・・・・・・・・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・・。

あれ？また静かになつたな。

「・・・・・・・・・・でいい。」

「え、聞こえない、なんだって？」

「白河って呼んで！」

「お、おう分かった、白河。」

何だか、よく分からないので、素直にしたがっておこう。

「で、さっきの意味分かったの？」

え？ さっきの意味？ プルプルした感じの？

プルプルって言えば、プリン？

まさか、おっ〇い？

いや、違うだろう。

「ごめん、分かん。教えて下さい、このとーり。」

お参りに来たかのように、手を合わせる。

「まあ、昨日、この先の路地で、助けてくれたじゃない。」

全く、と腕組みをする彼女。

.....

思い返す。てことは、あの絡まれてた美少女は、

「白河だったのか！」

気づいてなかったの！？と首をかしげる白河。

「そうよっ、だから、お礼したんでしょあ。でも、無事で安心したよ。」

心配したんだからね、と怒りは大分収まったご様子。

そうか……そうだよな……思い返すと確かに昨日の子は白河だ。

こいつ、殆ど学校来ないから顔覚えてなかったぜ。

まあ 有名人だからテレビで良く見るんだが……俺、アイドルとか興味ねーしな。

「まあ、あの時はさ、俺、かなりテンパッテたし、暗がりだったしな。でも、かなり可愛い子が囲まれたってのは分かったから。」

し、しまった、可愛い子は余計だったか……。

「あ、ありがと……。」

目をパチクリしてお礼を言う白河。

「そ、それで、これからどこに行くの？ 帰るの？」

「バイトだけど。」

「バイト？」

突然、目を輝かせる彼女。

バイトに興味があるのか？

「いいなあ、私、バイトしてたことなくて、一度してみたいと思
ってたんだあ。」

いやいや、お前はアイドルって仕事があるでしょと、突っ込みたか
つたが、話がこじれると面倒なので、ここは黙っておこう。

「バイトといっても、たぶん、白河が考えてるのは、かなり・・・
と言っか、全然違うと思うぞ。」

「じゃあ、私も一緒に行ってもいい？」

人の話し聞けよっ！

「どうでもいいよ。好きにしな。」

「やったあ~~~~~！」

なにも万歳しながら、喜ばなくても。

如月さんがなんて言うか、分からんけどな。

あの人、今日もきつと意味不明だろうし・・・。

ま、断られたら、帰ってもらっか・・・。

3 話へ続く
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.
.

第2話 アイドル白河真琴！（後書き）

引き続き、お読みいただきありがとうございます。

2話目にして、いまだ身体は改造されておりません（笑）

この回で、そこまでたどり着く予定でしたが、申し訳ありません。
白河真琴さんが、執筆していて楽しくて、つい……。

次回こそ！

第3話 白河真琴と筋肉で科学する人

昨日約束したとおり、この後、研究所に向かうはずだった。

しかし、

俺は今、一人で駅前のショッピングビルの中にいる。

行けるわけないだろ。

白河と一緒にだぜ？

研究所（というよりは、ただの地下室）は、駅を違って反対側。

だから、この駅前のショッピング街を抜けて、さらに駅の人通りを抜けなきゃならん。

自殺行為でしょ。

彼女は、ここ数ヶ月で一躍トップアイドルになった、白河真琴だぜ。

それこそ、敵陣営に単騎で乗り込むようなもんだ。

もちろん、一般の方々に注目を集めてしまうのもまずいが、ここは学園の最寄り駅、最も警戒すべきことは、顔見知り。

学園で噂にでもなってみろ、大変なことになるぞ。

.....。

まあだから、彼女の変装グッズをだな、探しに来たってわけ。

当然、彼女は一緒にきていない。

近くのしなびた、人気の無い喫茶店に置いてきている。

あそこなら客もこないし、落ち着けるだろ。

しかし…なぜ俺が買い出しせにゃならん？

そもそもあいつは、何で俺に着いて来る…。

解せない気持ちで心がいつぱいなんだが……まあいいか。

あいつ可愛いし。

・・・さて、どうするか。

とりあえず、定番の帽子とメガネってところだろう。

ええと、売り場は5階か。

エスカレーターに乗る。

周りを見渡すと、うちの制服を着た女子がいっぱい・・・。

き、危険だ・・・。

5階で降り、辺りをキョロキョロとしてみると、ふとCD屋の店先から、最近、よく聞くメロディーが流れてきた。

今まではそんなに気にもしなかったが、やけに気になる・・・。

俺は立ち止まり、店頭を覗くと、デモ用の大型モニターが見える。

「画面には、本日発売!!!」のテロップが流れ、女の子が映し出される。

白河真琴だ。

さっきまで一緒にいた、あいつだ。

どうやら、新曲のPVらしい。

パステルピンクの衣装をまとい、軽快でポップなリズムに合わせて、踊り、歌う。

アイドルとは思えない、激しく、大胆な踊り。

ただ、そのアクションの一つ一つがとても可愛い動作で、時折見せるカメラ目線の笑顔に、恐ろしい破壊力を感じる。

.....。

か、可愛い.....。

完成度も、相当高い。

なるほど、人気が出るわけだ。

・・・俺はしばらく釘付けになった。

俺は、彼女が歌うのを見るのは初めてだったのだ。

というのも、曲自体は耳にするものの、アイドルなんかに興味は無かったからだ。

そのまま動けないでいると、Aメロ→Bメロが終わり、間奏部分へ。

リズムが増し、踊りも激しくなる。

連続スピントーン、片手の側転……え？ 側転？

その側転に違和感を感じていたが、さらに彼女が動く動く。

そしてさらに後方へ華麗に舞う。

嘘だろ・・・？

彼女が高く舞い上がったそのとき、一瞬、時間が止まったようだった。

ふわりとポーズを決めながら着地する。

再び、歌い始める・・・。

なんだっただ、今の？

CGなのか？

そう思わせるほど、滞空時間の長い舞いだっただ。

いや、そんな事もちっばけに感じる位の大きな謎がある。

男として、大事な話した。

心して聞いてくれ。

なぜ、あんなに激しく動いているのに、スカートの中が見えない!?

今なら分かる、側転の時にも感じた違和感。

.....。

だって、ひらひらのミニスカートだぜ？

可笑しいだろ？

教えてください、どんな仕掛け何ですか？

.....。

結局CD買ってしまった.....。

PV付きの初回盤。

……言うておくが、決してファンになったからじゃないからな。

さっさと用事を済ませるべく、店内をさまよっていると、程なくして望みの店が見つかった。

さて、どんな帽子がいいんだ？

品揃えは、これからの季節を意識してか、夏物のキャップタイプが多く展示してある。

俺が被るならこれだが……。

ブラックに、スケルトンデザインのキャップを手に取り、鏡の前で被る。

うむ、カッコイイ。

……いやいやそうじゃない。

ったく、女の子はどんな帽子を被るんだ？

周りを見渡す……。

女子が多い。

帽子被ってる子を探してみる……。

いた。

お、黒いキャップじゃん。

どれどれ……、さりげなく前を通り過ぎ確認すると、ジャイアンツのマーク……。

なぜに……？

結構可愛い子なのに……。

まさか、流行ってるのか？

……は！

つくづく何やってんだ俺。

どうせ変装用だ、プレゼントじゃねえんだ、とりあえず被れればよ

しだ。

突然面倒になった俺は、女性の店員に話しかけ、直球勝負にでた。

「すみません、可愛い系の女の子が、変装をするのに最適な帽子、ありますか？」

「あ、はい。いらっしやいませ。・・・変装です・・・か？ え〜と、お年頃はおいくつ位でしょうか？」

直球すぎたかと思ったが、思いのほか店員さんは落ち着いて答えてくれた。

「高校生です」と伝えると、

店員さんは、「変装用、変装用」と、何やら真面目に探してくれている様子。

無理言って申し訳ない。

結局、なかなか決まらないので、とりあえず店員さんの個人的なおすすめを聞いてみると、

「夏場の基本はこれですよ」と、赤いリボンの着いた麦わら帽子を取り出した。

なるほど、定番だな・・・。

しかも、普通のUFO型じゃなく、カウボーイハットのような形をしている。

なんとなく彼女に似合う気がして、俺はそれを買っことにした。

「6800円です。」

は？

た、高い！

・・・ま、まあいいか、どうせバイト代入るしな。

とりあえず購入し、さっさと店を出る。

・・・しまった、メガネも買わなきゃ。

余計な買い物をしたのもあるが、財布の中身は500円。

.....すまん、白河。

俺は迷わず100円ショップに飛び込むと、メガネを物色・・・。

そこでいい物を見つけた。

牛乳瓶の底のようなグルグルメガネ。しかも伊達。

見た目最悪だが、でかいしい感じかも。

「どうせ100円だし」速攻買って喫茶店へ向かう。

だいぶ一人にしちまったから、ご機嫌斜めじゃなきゃいいが・・・。

.....。

大通りから2本入った人気の少ない通りに出ると、「喫茶 青春の味」の看板が見えた。

甘酸っぱいコーヒーをイメージしつつ、店内にはいると、なにやら

上機嫌の白河が待っていた。

「おつかえり〜」

楽しそうにフォークを持ちながら手を振る彼女の前には、様々なケーキやらパフェやら紅茶やら、店のスイーツを全て頼んだらこうなる、といった感じで埋め尽くされている。

「・・・お前、何やってんの？」

「へ、へ〜、凄いでしょおー。あ、店長さん、この苺のミルフィーユとっても美味しいですー!!」

「ああ？そうだろそうだろー。なんたって、全部わしの手作りだからな。味わって食えよ。」

白河の隣に立ち、仁王立ちで「がはははあ」と笑う、豪快な店長さん。

なんだ、この活きのいいおっさん。

「今度はこれ、食ってみる。」

「キヤア〜、これもたままない！もう最高お〜」

「だろう？分かってんじゃないか嬢ちゃん。」

可愛いねえ、よしよしと、頭を撫でる店長さん。

なにやら意気投合している様子。

非常に楽しそうだが、俺の脳裏に一抹の不安がよぎった。

「お前、こんなに頼んで、金持ってるのか？」

「え？持ってるけど。」

ガクッ

どうすんだよ、これ。

俺ががつつりうなだれていると、「野暮なこと言っんじゃないねえ、兄ちゃん。」と、活きのいい店長さんが俺の背中をバシッと叩いた。

「うわっ」

「今をときめくスーパーアイドルの真琴ちゃんから、金なんか取るわけねえだろうってんだ！」

「がはははあ」とまた豪快に笑う店長さん。

ああ、なるほどそういう事ねと、既に飾ってある「青春の味さん」と書かれた白河のサインを横目で確認した。

「真琴ちゃんが来てくれるなんてなー、こりゃ自慢しないとなあ。」

「がははあ」と奥に引っ込む店長さん。

芸能人の威力を感じた瞬間だった。。。

.....

「ほれ、買ってきたから、これで頼む。」

と、ぶっきらぼうに紙袋を渡す。

「何買ってきたの〜」と、白河は紙袋を受け取ると、早速ガサガサと物色を始めた。

「へ〜、麦わら帽子かあ。夏っぽいねっ」

「被ってみるよ。」

「うん。形が変わってて、なんかいいかも。」

似合うかなーと、ちょっと嬉しそうに被る姿が可愛らしい。

「ちょっと大きいかな？」

確かに大きめだが、目深に被れてちょうど良いだろう。

「私、麦わら帽子って、初めて被ったよ。あ〜麦の香りがするっ。」

「似合う、似合う?」「変じゃない?」「どっなのよっ!」「としつこく聞いてくる。」

すげー似合ってます。

正直、可愛いと思った。しかし、そう素直に言うのも照れくさい。

だから「いいんじゃないか。」と無難に答えておく。

しかし、さすがに制服にはミスマッチかと思ってたんだが、美形には何でもありって感じた。

しかも、ボーイッシュな雰囲気が出て、彼女のイメージに合っている。

なんて言うの、カワカッコイイって言えばいいかな。

「じゃ、それ貰ってくれ？」

「え？ いいの？ だってこれ、結構高そうだし・・・。」と、値札を見ながら、たかっ！とつぶやく。

「貰っちゃっていいの？」

「ああ、構わない。似合ってるしな。」

「ほんと？ 嬉しいかも。」

鏡ありますか〜と、店内をつろつろする白河。

最初の趣旨とは違うが、彼女が喜んでくれて、俺もまんざらではなかった。

なるほど、世の男性が、必死になって女にみつぐ気持ちがちよっとだけ分かった気がした。

.....。

「後は、何が入ってるの?」と、ガサゴソするのを横目に、「百元メガネですけど、何か?」と心の中で突っ込む俺。

そして、ブルーのビニールで包装された物を、興味深く取り出す白河。

え?

「あ、バ、バカ、それは!」

慌てて手を伸ばすが、時既に遅し。

「あ、私のCD。」

「そっか、今日発売日だもんね。買ってくれたんだ、ありがと。」

ぎゃあああああああ!!

NOoooooooooooo!!

しまった!

こんな展開、簡単に予想出来たのに!

しかも、ビニールで包装されてたはずなのに、なに開けてまで確認してんだよ!!

俺の動揺など知らず、
ふうんと、人差し指を口元にあて、疑問系でこちらを見る白河さん。
。

え〜と、なんででしょうかその目は？

まづつた〜〜。

動揺せず、妹がファンでとか、誤魔化しようがあったらどう・・・。

なんなんだ？このこっぱずかしい感じ・・・。

いや、まだ間に合う！ こいつは、微妙に天然系のはず。

「ああー、なんつうの？ 妹がファンでさ、頼まれたんだよね〜。

」

ふっ、このさりげなさ、神だなっ。

「へー、神崎君って、私のファンだったんだ。」

だから人の話しを聞けよっ！！

「私には、てつきり興味ないのかと思ってた。」

な、なんですかその、実は私に気があるのね、的な言い回しは……。

「ば、馬鹿じゃねーの？ お前なんかに興味ねーし。まあ、クラスメートだし、歌つてるとこ見たことねーからだな、義理で買ってやったんだよ、義理っ。」

「な、なによ、そんな、言い方しなくつてもいいじゃない。」

ひどおーいと、むくれてそっぱを向く白河。

ああ、機嫌悪くしちゃった。

まあとりあえずは良しとする。俺の中の男気を守る為には仕方がない。

「あと、メガネ入ってっから、頼むな。」

「メガネ？」と、取り出したるは、ぐるぐるメガネ。

案の定、

「な、なによこれ！気持ち悪いメガネ！」

汚いものを触るように、つまみ上げつつ「見えるの？」とレンズを覗きこむ。

「文句を言うな、変装だって言っただろうが。いいからかけてみ、伊達だから。」

「ええ、なんでこんなのないとダメなのー？」

と文句たらたら。でも、一応メガネをかけて、「絶対変だよ」としかめっ面の彼女。

「ぷっ」

さすがに似合わねえ。

「ああっ、笑ったな！しかも、普通に笑えばいいのに、ぷってなによ、ぷって！」

「ごめんごめん。さすがのお前でも似合わねーな。でもバツチシだよ、全然別人に見えるよ。それしてれば白河だって、誰も気づかないだろ。」

「そっなの？」

さすがに気が乗らないご様子。

しょうがない。

「ま、お前一人に恥ずかしいメガネかけさせるつもりはねーよ。ほら、もう一個入ってるだろ？ 俺もかけっから。貸して。」

「あ、ほんとだ」と、メガネを取り出し、それを受け取る。

「どうだっ」

迷いなく装着し、胸を張る。

「ぶっ」

「な、そうなるだろう？」

笑いを堪える感じが、俺と全く一緒だった。

「ぶっ、く・・・う、ダ、ダメ・・・くっ」

そんな、口を押さえてまで我慢しなくても・・・。

「普通に笑えばいいさ。別に笑ったって怒りゃしないし。」

気づかれるんじゃないかと、ドキドキしたが、問題無かった。

逆に人が多くて、カモフラージュされたのかも知れないな。

そんな事を思いつつ、目的地に到着。

「え？ここなの？バイトって、パチンコ屋さん？」

「今の、パを抜いて、もっかい言ってくれろ？」

「？・・・パ・・・パ・・・？」

キョトンとした顔で、なに？と聞いてくる。

「いや、何でもなし。ここの地下に研究所があるんだ。」

「ふん。」

聞きたかっただろ？

アイドルの「パ」抜きのパチンコ。

階段を下りて、その先を進むと、壁にぶつかる。

俺は手を振って、何かにアピールする。

しばらくすると、壁がスライドし、中の部屋に入れるようになる。

どういう仕組みかは知らんが、この壁（ドア？）には、ノブもなければ鍵も無い。

如月さんいわく、防犯の為だとか。

中に入ると、ジメツとした空気が肌にまとわりつく。

「如月さん、来ましたよー。」

「待ってたぞ。」

ごつい顕微鏡を覗きながら、こちらを見ずに話しかける如月さん。

「すみません、遅くなって。で、俺、なにやればいいんですか？」

ねえねえと、なにやら横から裾を引っ張られているが、無視する。

「ふむ、君に出来ることなど何も無い。」

じゃあどうしたらと、困惑していると、

「すまんが、少し待ってってくれるか、今は、間が悪くてな。」

「分かりました待ってます」入り口付近のソファに腰掛ける。

「ねえ、ねえってば。」

袖を引つ張られる。

「ちよつと、なんで無視するのよ。」

だって、説明が難しいんだよ。

「まあ白河も座れよ。」

ポンポンと、隣を叩く。

「座るけど、なんで私が空気みたいになってんの？ とりあえず、紹介ぐらいしてくれっただっていいじゃない。」

「なによっ」と、隣に腰掛ける。

はあー、しょうがない。

「分かった、説明しよう。えーと、彼女は如月さん。マッドサイエ
ンティストだ。」

「まっどさいえん？」

首をかしげて頭の上に？マークが見える。

こういう時の仕草は、妙に子供っぽい。

妹がよくやる仕草に似ている感じた。

どうせ待ち時間だ。

暇だし、こいつでも、いじってやるか。

「サイエンティストは、分かるだろ？」

「え、あ〜。ど、ど忘れかな…でも聞いた事ある単語だよね」

あははーと頭をかく。

「ああ、あれでしょ？ セラフィストやピアニストみたいな感じでえ……」

おお、近づいたじゃないか。

「サイエンスは、科学って意味だ。」

「そうそう、そうだよねっ。だから、科学する人ってことでしょ？」

「すばらしい、正解です。」

「でマッドだからあ、ん〜とマッド、マッド……マッドマッドマッド」

「分かったっ、筋肉で科学する人。」

ブ、ブー不正解です。
勝手に造語しないで下さい。

それ、マッドじゃなくてマッチョだろ。

てか、マッチョって英語か？

坂崎が言ってたっけ…アイドルはおバカが多いんだと。

でもそこが可愛いんだとか何とか。

ま、どうでもいいけど…。

少し回想に浸っていると、当の本人白河も大して興味なさげに呟いた。

「筋肉で科学するなんて、ざんしんだね〜聞いたことないよ。」

確かに斬新だ、お前がな。

「……お前もしかして、頭弱い？」

「よ、弱いつてなによ！弱いつて！そこはせめて悪い？でしょっ！」

「悪いの？」

「わ、悪くないわよ！失礼ね。成績だって、今回は赤点ないんだからねっ！」

なるほど、今回はか・・・。

だいたい分かった。

「若干悪いってことか・・・。」

「聞こえてるんですけどっ。」

しまった、口に出てしまったようだ。

「あのねー、今は忙しくってあんまり学校来れないの！だからしようがないじゃない！！言っておくけど、小学校の時は成績良かったんだからね！」

自信ありげに過去の栄光を熱く語る白河さん。

こんな言い訳する人多いよね、勉強についていけなくなった時に。

「だいたい、なんで君はさあ、私に対して上から目線なのかな！」

腕と足を組みながら、睨んでくる。

大きな目が、結構怖い。

「ああ、そっか、そうだったかもなー。何て言うの？俺、妹いるからさ、同年代以下の女の子って、妹みたいな感じなんだ。別にお前が子供っぽいとか、そういうんじゃないからねえから、気にするな」

「私が気にするんですけどっ」

へーへーそうですか…。

「そりゃ悪かった」

「あ…なによそれ。全然悪く思っていないよね、その態度」

つい面倒臭そうに答えた俺に対して、すぐさまツッコミを入れてくる白河。

そして続けざまに、

「坂崎君ってさー、女の子にモテないでしょ？」

ん？ 坂崎？

確かにあいつはモテるわけないが…。

「あ〜っつと…俺…」

話しの流れる的に、『俺、神崎なんだけど』って訂正しようかと思っ
たがやめる。

あ〜あ…所詮、名前間違えて呼んじゃう位の印象なのかい…。

ちえっ、なんだか面白く無くなってきた。

「あれ…怒った？ ね、ねえ神崎君…」

普通にムツツリとして、機嫌悪そうな俺に対して若干心配顔の白河。

意外と心弱いらしい。

そして名前が元に戻った。

何となく面白いんで、しばし黙っていると、

「ちょ…ちょっとゴメンって…ねえ聞いているの？」

ねえねえと、執拗に俺の腕を掴んで引つ張る白河。

あゝなんか妹を思い出すぜ。

そんな感じで白河をからかっていると、奥から如月さんが近づいてきて一言。

「全く、さわがしいな、君達は。」

はあー、と溜息をつきながら、如月さんがタバコに火を点け、対面のソファーに腰掛けた。

研究の邪魔しちゃったかな、申し訳ない。

「で、どうして君が白河真琴を連れている。」

「え、彼女のこと、知ってるんですか？」

「ああ、娘が君のファンだね。」

如月だ宜しくと、白河と握手をする。

娘がいたのか、意外だな。

この人から、家庭の匂いがするなんて。

「なるほど、その制服、三坂だな。同級生って訳か。」

「は、はい、そうなんです。神崎君とは、同じクラスメートで……」

「ほう、好きなのか？」

「はい？ え、あの、えっと……か、神崎君っ。」

な、何を赤くなって俺に助け求めてんだ。

「白河とは、そんな関係じゃないです。こいつはアイドルだし、俺のことなんか、好きじゃないですよ。」

「アイドルは、関係ないでしょっ。」キッと睨む。

なぜそこで、突っ込む。

「ふっ、仲が良いな。」

ふっつと煙を吐く。

仲が良く見えるのか？ 昨日までは、まともに話もしてなかったのに？。

「如月さんは、何のお仕事されてらっしゃるんですか？」

お、それは俺の聞きたかったこと、ナンバー1の質問じゃないか。

「仕事か、私は科学者だが、医療に関しても精通している。それらにおける、実験や研究をするのが、私の仕事……、いや趣味みたいなものだな。」

「へー凄いですねえ」と、白河は関心して、

「てことは、神崎君は助手なの？」

「すごい」羨望のまなざしを俺に向ける。

そんなわけないだろ……。

「そうじゃない。彼には、被験体のバイトを頼んである。」

「ひけんたい？」

「ああ。私の研究の成果を、彼に実践してもらおう。」

その後も、「どうやってするんですか?」「痛くないんですか?」「基本的に身体に負担を与えるような事はしない」など、話しがすすんでいる。

ふと、携帯を見る。

着信2件、メール8件。

彩乃か……。

「ちょっと俺、電話してきます。」

話が盛り上がってるみたいで、「いつてらっしゃい」と素っ気ない態度で返される。

結構、意気投合してるなこの二人。

と思いつつ、一旦地下から地上に出て、携帯を操作する。

プルルル・

「兄さん?」

「おう、ごめんな、出れなくて。」

「兄さん、今日も遅いんですかあ?」

「ああ、バイトでな。」

「はあ、なんのですかあ？」

「えくとだなー。」

なんて説明すりゃいいんだ？

「俺も今日初めてだから、良く分かってないんだよ。」

「でもお、実験がなんとかって・・・。」

「あー、ちよつと知り合いに、たぶん偉大な科学者がいてな、その人の実験を手伝うんだよ。」

よし。嘘はついてないな。

「ふ〜ん。危ない事、しちやダメですよ。でもなんで、急にバイトなんか始めたんですかあ？」

「ん？まあ事情があつてな。詳しい事は帰ってから話すから、また後でな。」

「あ、ちよつと待って、終わったら電話・・・。」

ピット。

ま、こんなもんだろ。

地下に戻ると、なにやら如月さんが、端末を操作している。

白河がないな……。

帰ったのか？

「白河、帰ったんですか？」

「その装置の中にいるぞ。」

端末の横にある、日焼けマシンのような装置を指差す。

は？

いったいどうして？

「是非とも実験の手伝いをしたいと言っからな、とりあえず、身体データを取っているところだ。」

「えっ、本当ですか？」

無理強いしたんじゃないかと、疑念の目を向けると、

「本当だ。私の天才ぶりに感服したみたいだな。まあ、本心は、神崎君、君がいるからじゃないか？」

え？ 俺がいるから？

「なんでそうなるんですか？」

「さあ、なんでかな。」

確かに、バイトしたいと言っていたような気がするが、よりによってここは、まずいだろ。

「でもこいつ、アイドルの仕事、あるじゃないですか。」

「ああ、だから週に1回しか来れないと言っていたが、問題ない。」

まあ、本人が良いならいいか。

「君だって、嬉しいのだろう？ 彼女と一緒に居たくはないのか？」

はあ、そうですねと、曖昧に応えはしたが、確かにちょっと嬉しいのが本音。

あいつは可愛いし、いじると面白いしなっ。

その後、俺の身体データ取りも済ませると、筋肉のチェックをした
いと言い出し、白河をベッドに寝かせると、なにやら俺に耳打ちし、
「君のおかげで、貴重な被験者が手に入った。お礼と個人的な趣味
も兼ねて、少しサービスタimeだ。」
ニヤッと不適に笑う、マッドサイエンティスト。

な、何をする気だ……？

「ちょっとじっとしていてくれ。」

「は、はい。」

「まずは足だ」と両手でマッサージのような事を始める。

「ふむ、ヒラメ筋が引き締まっているな、下腿三頭筋はどつだ。」

さわさわ、すりすり……。

な、何をしてるんだ……。

「素晴らしい。何か運動をしているか？」

「あ、はい、毎日ダンスの稽古を。あと、中学では、機械体操を
していました。」

「なるほど、そうか、それで大腿筋膜張筋がこんなに張っているのか……。」

太ももをすりすり、さわさわ……。

「やんっ、あ、ちょっと、くすぐりたいです。」

うお！

そ、そんなところを……。

既に手は、スカートの中に入ったり、出たりしている。

「大腿二頭筋も充分だな。人の筋肉は、普段あまり使われないものもある、バランス良く鍛えないと、偏った筋肉が形成されてしまう。では内側はどうか、伸筋をみてやろう……。」

内ももをモミモミ……さわさわ……すりすり……

「ひゃんっ、あ、きゃ、ははは、くすぐりたい！ あ、あははははは」

我慢できなくなり、身体をくねらせる白河。

その度に、スカートの中がちらちらと……。

うおおおおおおおおお！……！

（口に出せない叫び）

し、白い、白い、ぬ、布地があああああああああああ！……！

「ふむ、ちょっと硬いな。ほぐしておくぞ。」

片足を少し上げ、内ももをモミモミ……

……

基本、制服のスカートって、短いじゃないですか。

この角度からは既に、丸見えです……

しかも、薄いピンクの花柄が入っていたのか……

って、ちがつっ！……！……！

さすがにこれはまずいと思い、目を逸らす。

でも気になって、ちらちら横目で見てしまっ。

ああ、男って……。

と、とりあえず、後ろを向いておこっ……。

「白河君、大胸筋は鍛えてるか？」

え、大胸筋？

「あ、はい。腕立て伏せしてます。」

「成程、効果があるか確認してやろう。単に腕立てといっても、その角度、沈み込み量によって、鍛えられる筋肉が変わってしまう。適切な方法で鍛えなければ、効果は無いのだよ。」

「え、ちょっと、そこはダメ、ダメですっ!!」

モミモミ……さわさわ……

「あ、いや、ダメ……や、あんっ……ハア」

「ふむ。大きくて張りがある。弾力も中々だ。」

そして、白河は「やっぱり、筋肉で科学する人だったんじゃない」と呟いていた。

.....

「では、今日はこの液体を注入させてもらう。」

取り出したのは、フラスコに入った緑色の液体。

不適な笑みの如月さん。

「はいっ質問です！」

「なんだね、白河君。」

「それは、どんな効果がありますか？」

「良い質問だ、白河君。これには、細胞を活性化させる効果があつてだな、細胞分裂の速度を爆発的に上げるちからがある。簡単に説明すると、治癒力が極端に増す。とを考えてくれれば良い。」

物凄く胡散臭い。

「ほんとですか！凄いです！」

素直に受け止めるやつがいるし……。

「では、始めたいと思うが、神崎君、うつ伏せになってくれ。」

「こうですかと、ベッドに寝る。」

「すまんが、ベルトを緩めてくれ。これは直接血管からは流せないのだ。」

バツとズボンとパンツを同時にずらされる。

お、おい……ちよつと……。

半ケツ状態、というより、全ケツ状態なんですけど。

しかも、白河見てるし！

なに真剣な顔で見てんだよっ。

「筋肉注射だ、痛いぞ。」

ケツが痛い。

白河、大丈夫かな。

如月さんいわく、女の子の方が筋肉が柔らかいので、そんなに痛くないそうだ。

.....

いかんいかん。

どうしても、白河が注射されるところを想像してしまう.....

なんか俺、発情期なのかな？

俺、変態だよな。

昨日までの自分は、もっとまともだったはず.....

しかし、なんだかんだ言っても、今日は役得だったよつな気がする。

一日、あいつに振り回されてたなあ。

色々思い出し、ついニヤけてしまう。

「なにニヤニヤしてんの？ 気持ち悪い。」

「おわっ！！何でいるんだよっ 白河！！」

「えー？終わったから呼びに来たんじゃない。」

「早くもどろっ」と腕をひかれる。

.....

「では、神崎君。宜しく頼む。」

「分かりました。」

ナイフを腕に軽くさす。

皮膚が裂け、血が・・・流れない。

嘘だろ？

「よし、効果は出ているな。」

「毛細血管程度なら、切ったと同時に治癒が進み、血も流れる事はあるまい。」

傷口が既に塞ぎかけている。

マジかよ……。

白河も俺と同様、血は流れず、あつという間に傷口が塞がった。

「効果の持続は、1週間だ。白河君は、来週来てくれ。神崎君、君はまた明日、来てくれるか？」

「ああ、補足だが、細胞が活性化される影響で、テロメアが急速に減少する。まあ、そのうち補充してやるから安心しろ。以上だ。」

思いっきり後遺症、残るじゃねーか……。

.....

やっと生体実験バイトが終わり、帰路の途中・・・。

しかし、あのマッドサイエンティスト、本物なんだな。

腕を見る。

傷は無く、痕も何も残っていない。

もしかして、ピッコロなみの再生能力があつたりして。

腕が無くなっても、ニユルンとかいって、すぐに生えてきたり・・・。

.....

うげ、何だか、気持ち悪い光景が脳裏に浮かんでしまった・・・。

しかし、あいつも変な事に巻き込まれた。

「白河のやつ、大丈夫かなあ。」

「え？ 私ならなんともないけどあ？」

.....

そっだ、バイト代、貰ったんだっけ。

どうすっか。

胸ポケットから封筒を取り出し、中を見る。

「絶対、100万以上はあるよ。これ。」

「うん。ありそう。私も、来週くれるって言ってたけど、ほんとに貰っていいのかなあ。」

.....

そっいえば、あいつ、小学校も中学も女子校だって話したよな。

小学校で女子校って、そんなのある？

普通じゃないよね。

「白河って、お嬢様なのか？」

「え？私？ちがうちがう、そんなんじゃないって、お嬢様とかやめ

てよお
「

.....
.....

「ね、ねえ、なんで無視するのよお。」

はい？

振り返り、目が合う.....。

「またお前かつ！！！！」

「な、なによっ！？ い、いちゃいけないっていうのっ！！！」

「さっき、またねっって、手え振って別れたじゃねーかお前とはっ
！！！」

「おまえって言うのやめてって言ったでしょっ！！！！なんで分かんないのっ！！？」

.....

「で、どっどっして着いてくるんだよ。」

「わ、私も、こっちなだけよっ。」

「本当か？」

「ほんとですっ。」

足早に歩くと、「ちよ、ちよっと待ってよお」と追いかけてくる。

「な、なんで逃げるのよお？」

「だってお前、メガネかけてねーじゃん。」

「もう夜だから、平気よっ」

.....

「あ、俺んちここだから。」

「そ、そうなんだ.....」

「じゃ、気をつけて帰れよ。じゃあな。」

.....

あれ？ あいつ一歩も動いてないな。

家の前で固まられてもなあ。

「……………ぐすっ……………う」

え？

「……………う……………え……………ぐすっ……………」

お、お、お……………。

「……………ぐすっ……………う……………ぐ……………ぐ……………」

本当に泣いてんのか!?

「お、お、お……………う……………う……………」

どうしていいか分からず、手を差し延べると、バシッと払いのけられた。

「さわんないでっ……………ぐすっ……………」

いや、触るなっというけどさ……。

とりあえず、家の前で泣かれちゃたまんねーぞ。

俺は意を決して、彼女を家に引っ張り込もうとした。

「頼むからこっち来てくれ」

「さわるなって、言ってんでしょっ!!」

全然言う事を聞いてくれない彼女に、それでもしつこくせまる。

彼女の手を引っ張る俺。

踏ん張る彼女。

引いては返され、引いては返されの繰り返し。

どうすりゃいいんだっ!!

もう我慢出来ないっ!!!!

最終手段!!とばかりに強引に彼女を抱え、玄関へ向かう。

途中、「降ろしてっ」「やだやだっ」「だいつきらい」とジタバタされる。

構わず、玄関の前まで来ると、勝手にドアが開いた。

「兄さん、帰ってきたんですかあ~~~~?」

げっ彩乃!

「に、兄さん、なにやって……」

彩乃の前で、白河をお姫様だっこする俺……。

最初は驚いたのが、キョトンとする彩乃だったが、だんだん雲行きが怪しくなっ、

「に~~~~さ~~~~んっ!! 誰なんですかつ、その女の子はっ!!」

4話へ続く……。

第3話 白河真琴と筋肉で科学する人（後書き）

第3話、いかがだったでしょうか。

ちよつと、微妙な表現を多用しましたので、感想などいただけると嬉しいです。

さて、本題には程遠いのですが、遂に実験が始まりました。

白河真琴編が長引かなければ、次回、急展開！

のはず……。笑

第4話 妹覚醒と俺の悲劇

なんだこの状況は。

場所は自宅の居間。

「白河さん、煮物も食べて下さい。特にこの新じゃが、美味しいですよ〜」

「あ、ほんとだ、美味しい〜。彩乃ちゃんって、料理じょうずなんだねえ」

色々あって、3人で夕ご飯を食べている。

あの後、大変だったんだよ。

嫌がる白河をとりあえず家に上げ、妹に事情を説明。

納得はしてくれたものの、

「女の子を泣かすなんて、兄さんは、女の子の敵です!」

だの、

「反省してくださいっ」

「だいたい兄さんは、女の子に対する態度がなってませんっ」

「しばらく優しくしてあげませんかっ」

だとか、妹様ご立腹状態。

確かに、泣かせたのは事実だし、未だにその訳も不明だ。

「冷たくしたからに決まってるじゃないですかっ」

と妹に言われたんだが・・・若干心当たりはあるかな。

しかし、女心は分かんねーよ。

付き合った事無いし・・・。

で、結局、「兄さんが泣かせた責任とお詫びです」ってことで、白河をもてなしてるわけ。

二人がこんな短時間で仲良くなったのも、泣いてた白河が既に元気なもの、謎だけどね。

さて、無事食事が終わり、のんびりとくつろいでいる。

食後のお茶ってやつだ。

うちのリビングはそこそこ広い。

大きめのソファアがテーブルを囲み、その先には40インチのテレビがある。

そこで俺と白河は、少し離れて座っている。

彼女はうちに上がってからすぐに泣き止み、妹が色々話しかけたのもあって、いつもの元気は取り戻している。

でも、なんていうのかな。

俺とはあまり口を聞いてくれない。

微妙な空気……。

今はブログを更新するとかで、携帯をカチカチ操作している。

足を組みながら無言で携帯をいじるその姿は、なんとなく、俺を遠ざけている気がして話しかけにくい。

だが、ここは話しかけ、謝っておくべきだろう。

とは、思っただけど……。

「なあ、白河」

「……なあに」

う……、テンション低いな。

「さつきは、ごめんな」

「うん……」

一応返事はしてくれる白河だが、俺を一瞥いちぺつしただけで、すぐさま携帯をカチカチいじり始める。

き、気まずい……。

まいったな。

……そういえば、妹の機嫌が悪くなった時も、こんな感じなんだよな。

薄い反応、寄せ付けない空気、無表情。

ただあいつの場合、翌朝には普通に帰って「兄さんは、彩乃がいないと何も出来ないんですからっ」と言う展開になるから、何も心配はいらない。

じゃあ、妹以外の女の子って、どうなの？って考えても、ぶっちゃけ女友達ごゆうだちすらいない俺は、何かを閃ひらく事も無い。

つくづく、自分の経験値の無さが恨いらいめしい。

こいつの事は嫌いじゃない。

ここまま距離が遠くなるのは避けたい。

どうしたら……色々考えたあげく俺は、

「だあああああああ！」
面倒くせええええええ！！

急に叫んだもんだから、白河は「キヤッ」と小さい悲鳴を上げることが、気にしない。

そして俺は一息で、こう言い切った。

「頼むから機嫌なおしてくれよっ！、俺が悪いのは分かってるから！だからなんで泣いちゃったのか教えてくれよ！！いやむしろ、今度は俺が泣くぞっ！！」

身体を振り乱し懇願こんがんし叫ぶ、必死な俺。

手を広げ、口を大きく開けたまま固まっていると、「ぶっ……なにその顔」とクスクス笑い出す白河。

え？なんで？とさらに固まり動けないでいると、

「フフ・・その顔、鏡で見せてあげよつか。芸人さんがすべって大ケガしたみたいな顔してるよ」

ふと手で顔をあおぎ、パタンと携帯を閉じると、「暑いね」と言いながら制服のベストを脱ぐ。

携帯を仕舞おうとしているのが、一旦鞆に手をかけ、結局胸ポケットに入れる。

大きい胸と相俟^{あいま}って、そのポケットはパツンパツンに張っている。

そんなちよつとした動作に、つい目が奪われる。

薄っすらと、シャツから透けるブラジャー・・・。

こんな時に何考えてんだ、俺。

ふと、こちらを向き、不敵な笑みを浮かべる白河。

ドクン。と心臓が跳ねる。

「君はそんなに私と仲直りしたいのかな？」

「んんー？どうなのさー」と、顔を近づけてくる。

俺は急に恥ずかしくなって、

「バ、バカそ、そんなんじゃねー・・・し・・・」とつい、否定してしまふ。

そんな引き気味の俺を無視し、「ふうん、なるほどねえ」と近寄って来る。

「まあそうだよねえ、CD発売日に買っぐらいだもんねえ」さらさら接近。

そ、それは誤解だあああ！と心の中で叫ぶ俺は、自分が赤面してないか心配になる。

いや、恐らく顔赤いだろ・・・。

しょうがないだろっ、こいつの顔、すげー可愛いんだよ・・・しかも何か良い匂いするし・・・。

「君ってさあ、実は好きな女の子にいじわるするタイプでしょ」と俺の胸をつんつんしゃがる。

思わずギョツとし、たじろいでしまふ。

見透かされたみたいでこの場から立ち去りたい気分だ。

しかも心臓がドキドキいつてやがる・・・。

予想外の展開に、どう言っていいか困惑していると、

急に俺から離れ、尊大な態度で言い放った。

「じゃじゃーん。実は私、少女漫画とかすごい読んでるんだからっ。恋愛には詳しいのよ！ フッフッフ、ずばり君はツンデレってやつねっ！」

ビシッと指差される。

ふふふんと、得意顔の少女漫画オタク。

がーーーーーん。

脳内で鐘が響いた。

こ、こいつは・・・。

超ダメな情報源で、こんなに自信満々って。

こいつのカテゴリーが天然系に固定された瞬間だった・・・。

その後も、「アイドルだから恋愛は出来ないのっ」とか「一人のファンとして応援してね」など、噛み合わない会話が続き続いたが、落ち着いた頃、やっと白河はここ数日の事を話し始めた・・・。

それは、俺が想像も出来ない世界での深刻な話しだった

「私が最初に襲われそうになったのは先週で・・・、その時は事務所の人は何人か来てくれて、大丈夫だったんだけど・・・」

どうやら、白河の周りではなにやら不穏な影があり、大事を取って今日からしばらくの間、仕事をキャンセルしたらしい。

要約すると、こういう事だ。

先月、ファンレターの中に「死にたくなかったら引退しろ」という内容の手紙が混ざっていて、それから度々嫌がらせのような事が、所属事務所宛てにされてきたとの事だ。

事務所には、「アイドルを辞めさせろ」「誰か怪我しなきゃ分かんねえか」「事務所燃やすぞ」など何度も電話があり、ガラスが割られたり、入り口で大量の新聞紙が燃やされていたりと散々らしい。

ここ数日は、自宅のマンションや所属事務所付近に、ヤクザ風の男達がうろつろつしていたって事だから、たまたま一人だった昨日、襲われたのだろう。

しかも今日は、送り迎えしてくれるマネージャーもいない。

そんな事があつたら、確かに一人じゃ帰れない。

気付けなかった俺の責任だ。

くそっ、なんなんだ、そいつらっ。

自分の鈍感さに嫌気がさして頭を抱えていると、申し訳なさそうに白河は、

「じゃあ、私、タクシー呼んで帰るね。ごめんね、迷惑な話し・しちやって」

と言って携帯で電話をかけた。

俺は慌てて携帯を奪って、

「ごめん、今日はうちに泊まってくれっ」と頼みこんだ。

だってさ、タクシーで帰るといっても心配だよ。

しかも、聞いたら一人暮らしだって言うわ、ここからさらに3つ先の駅近えきちかのマンションだって話だし・・。

決めた絶対帰さない

俺は白河を見つめ、わざと冗談っぽく言った。

「折角、アイドル白河真琴がうちにいるんだ。このまま帰すと思っ
てたのかっ」

「で、でも」

「でもじゃない！いいから、いいから、泊まってけって」

時計は10時半になるうとしていた、そろそろ深夜と言っている。もしこれで帰して、なにかあったら俺の責任だ。

「妹もいるから安心だぞ」と言っても、白河はなかなか首を立てに振らない。

どうしたもんかと悩んでいると、キッチンで洗い物を終えたばかりの妹が、割り込んできた。

「そうですねっ、こんな時間に、白河さんのような可愛い女の子が歩いてはダメですっ。ここはおとなしく、泊まっちゃって下さい！」

は？こいつ、絶対反対すると思ってたんだが……。

「で、でも」と、返答に困っている白河に、お構いなしと、妹は矢継ぎ早に話しかける。

「女子とは無縁だった兄さんが、こんな可愛い人を連れて来るなんていいチャンス……じゃなかった、今日は泊まっていって、なんでしたら今後もどんどん泊まって、兄さんの素晴らしさにぜひ、気付けてくださいっ！」

「は、はいそのう……。」

意味が分からないといった顔の白河。

俺も分けわからんねえ。

普通の仲の良い兄妹で、兄に彼氏が出来たりすると、寂しさや軽い嫉妬で反発したりしねーか？

しかも、たぶんこいつブラコンじゃねーかって、正直思ってたんだが。。。

「シスコンの兄さんにとって、これはいい機会なんです。」

「お、お前が言うかつ！」

「これは、彩乃と兄さんが将来、幸せな家庭を築くのに必要なイベントなのです！ 経験不足な兄さん。でも、恋愛を経て、経験値を積み、イケメン優男へと成長する素敵な兄さん。そして、真実の愛に気付き、彩乃を抱きしめる兄さん・・・ああ。」

うつとりと、まるでキリストに祈りを捧げるシスターのように神々（じょうじょう）しく遠くを見つめる妹。

「お、おいお前・・・、そんなキャラだったか？」

おーい、帰ってこーいと、目の前で手をヒラヒラしてやるが、微動だにしない。

白河は呆氣あつけに取られ、二人が話す度に、ハトのような動きで首をうごかし、こっち向いたり、あっち向いたりしている。

「そして、兄さんの愛に応え、二人は結婚するのですっ！」

「しねええよっ!!！」

「俺達兄妹だろーが！馬鹿なことやってんじゃねええっ！」

決定的な一言を投げかけたつもりだったが、妹は動揺するそぶりも見せず、

「何を言ってるんですかあ兄さん。わたしたち、血は繋がってないんですよ」

「お前っ、知ってたのかっ！」

「知ってるもなにも、戸籍上もほんとの家族じゃないんですよ？」

こ、こいつ……何言って……

「しかも、彩乃と兄さんは、お母さんが決めた、許婚なのですっ！！」

エッヘンと無い胸を張る、我が血の繋がっていない妹。

「馬鹿言つな！そんな事があるか！！」

「あるんですっ！物心ついた頃から彩乃は、将来は兄さんと結婚するのよって、ずっとお母さんに言われ続けてきたんです」

な、なんですと！？

「その為には、多少の浮気も成長過程。多めに見てあげなさいって」

あのババアーーーー、自分の妹に変な教育してんじゃねえっ！！！！

今度帰って来たら、徹夜で朝まで生トークだからなっ！！

もちろんお前も一緒になっ！！！！

「あのお、お二人は仲が大変宜しいですね」

空気だった白河が、久しぶりに姿を現す。

しかも、思いっきりドン引きの敬語で。

.....。

とりあえず、この問題は据え置きとしておこう。

真犯人である、母さんがいない事にはどうにもならん。

まあ妹の超怪電波のおかげで、そのまま流された白河は、結局泊まる事になった。

良しとしよう。

ちなみに今は、遠慮する白河を強引に風呂に入れ、妹とテレビを見ている。

歌番組。

偶然にも、白河真琴が登場し、これから歌うところ。

あの衣装だ。

PVで見た、あのひらひらパステルピンク。

スカートから伸びた、緩やかなX脚。

そのラインが、ロリな感じを強調せずにはいられない。

しかし、きりっとした目元と全く媚びない雰囲気は、一般向けの良さを感じる。

しかも彼女は普通のアイドルでは当たり前前の、スマイルをこころざという時にしか出さない。

意図してかは不明だが、メディアでの彼女は、アイドルながらアイドルスマイルを滅多にしないアイドルなのだ。

そして女性ファンも多い。

不思議だ……。

そんな事を考えていると、妹が突然ボケた事を言い出した。

「兄さん、白河さんって、白河真琴になんとか似てると思いませんか?」

ぶっ、何言ってるんだこいつ。

思わず、飲んでた茶を少し吹いてしまった。

「何言ってるの、お前?」

んん〜と、テレビに近寄り、確認する妹。

もしかしてこいつ、本当に分かってないのか？

妹は、極度の近視なのだ。

しかも、俺の前では、絶対にメガネをかけない。

そのせいで、度々危ない目に合い、何度もひやひやさせられた。

一番焦ったのは、昨年、階段を踏み外し、左手を骨折した時。

せめて、コンタクトにしろと一緒に買いに行ったのだが、気持ち悪いと言ってガンとして着けようとしなない。

今日の一件でもあるように、こいつは筋金入りの頑固者なのだ。

「やっぱり似てますねえ。兄さんも白河真琴似の彼女が出来たら、鼻高々じゃないですかあ」

「あ、今度カラオケで歌ってもらいましょう」とルンルンの我が義妹。

本物とカラオケって、どんな贅沢だったっの。

でも、それは是非頼みたいなと思っていると、我が義妹が衝撃的なミSSIONを発動された。

「兄さん、白河さんの、パジャマと下着、今すぐ買ってきてくれま

すか？」

なにっ？

「もう一度、お願いできますか、彩乃さん。」

「ですからあ、白河さんの着替えです。彩乃のじゃ、サイズ合わないじゃないですか。」

「な、なんでだよ、適当になんかあるだろ？」

「兄さんは、綾乃のパンツを自分の彼女に履かせる、ヘンタイさんなんですかあ？」

何かのプレイ的な言い方はやめる。

「それとも、汚れた下着をそのまま履かせる方が、萌えるんですかあ？」

「あ、あのなあ、お前、中一のくせに変な性癖に目覚めたりするなよっ。」

「え、はい、それは大丈夫です。お母さんにちゃんと性教育してもらってますからっ。」

「だって、彩乃はもう、性行為も出来る大人なんですよ〜」。
大人ですっというものように胸を張る。

あの、くそババアあああ！！

原因はまたあいつかっ！

今すぐ電話してやろうか。まったくっ。

それはそうと、下着もか・・・確かに妹の言う事も一理ある。

恥を忍んで買いに行くか。

幸い、こいつに頼まれて、女性下着を買った経験もあるしな、大丈
夫だろ。

「分かった、すぐに行ってくるから、白河にゆっくり浸かるよう言
っておいてくれ」

「了解です。兄さんのために、すみずみまで洗ってくださいと、伝
えておきますね」

「宜しく頼む」

我が妹の変態発言はスルーして玄関へ。

外にとめてある自転車で目的地へと急ぐ。

確か、近くのショッピングスーパーが一部24時間だったはず。
衣料コーナーは1階だったから、開いているだろう。

しかし、ふと気になったのは、

「サイズ分かんねえ」

パジャマはフリーサイズもあるし、問題無いとして、下着？

下は大丈夫だろ？ 上？

いやいや、風呂から上がったら、後は寝るだけだぞ。

うむ。

寝る時って、どうなの？

.....。

知らんわっ!!!

あ、でも着けない方が.....。

パジャマが、たわわに揺れるさまを想像してニヤニヤする。

はっ！ いかんいかん。

俺が男である為に、絶対買わないといけない！

でも困ったぞ。

あれは、アンダーがいくつだのって、結構難しいんだぜ？

見た目で何とかなるか？と、悩みながら自転車を走らせていると、研究所での出来事を思い出した。

確か、身体データを取るって言ってたよな……。

如月さん、まだいるかな。

携帯を取り出し、ブラインドタッチで操作。

最後に画面を確認して、通話をプッシュする。

いないかな……。

1・・・2・・・3・・・4コール

あきらめて切ろうとした瞬間、繋がった。

「こんな時間に誰だ」

良かったまだいた。

「誰だと聞いている」

「すみません、俺です」

「ああ、君か。どうした、急用か？」

「ええと、今日はお世話になりました」

「そんな事はいい。私に用事なのだろうか？　言ってみろ」

「あの、白河のサイズが知りたいんですが・・・えと、ブラ・・・」

「ああ、取得したデータは、全て覚えている。身長154.5センチ、体重46キロ、バスト90、ウエスト57、ヒップ88、足のサイズは23センチ、股下78センチ、右手人差し指57ミリ、中指65ミリ・・・」

「ちょ、ちょっと待って下さい!!」

「なんだ、身体のサイズじゃないのか？」

「ま、まあそうですねですけど・・・」

「ん？ ああそうか記憶出来ないか。すまん、メールで送ってやる
うか？私は携帯を持っていないが、パソコンで・・・」

「いえっ、大丈夫です。一つだけ分かれば・・・」

「ふむ、そうか。何が知りたい」

「ああ、ええと、・・・ブ、ブラのサイズを」

「Eの70だ」

「分かりました。Eの70ですね」

「もういいのか？」

「はい、もう大丈夫です。助かりました・・・あ、もしかして、
俺のサイズも・・・」

「君のは知らん」

「あ、そうですか」

「ふむ。何か面白い話してもあるなら、次の機会に教える」

「あ、はい分かりました」

それでは、と電話を切る。

は、助かった！

すげーな、あの人。

しかも、特に理由も聞かないところが清々（すがすが）しいという
か。。。。。

何にしても助かった。

。。。。。。。。。

お、あったあった。

俺は衣料品コーナーの下着売り場を見つけ、人気の無さに安堵して
溜息をつくと早速、物色を始めた。

えーと、Eの70、Eの70と。。。。。

これかつ！

手に取る。

。。。。。。。

。。。。。。。

.....。

で、でかいつー!!!

マ、マジで・・・？

これにご飯入れて牛肉乗せたら、特盛りが食えるんじゃないの!?

すげーなあいつ。

・・・しかし、どれも妖艶な感じで、あいつのイメージに合わないな。

うむ。

悩んでうろつろしている、ティーン向けっぽいコーナーを発見。

お、ここなら可愛いのがありそうだ。

基本、白に柄の入った、清純な感じのものが多い。

脳内であいつの裸をイメージし（しょうがないだろっ）本来の目的を忘れ、真剣に選ぶ。

これなんか、パステル系の色が程よく入ってて、いいかなあ。

生来ナツメの妥協出来ない性格が災いし、悩む・・・。

そこで俺は、ある模様を見つけ、立ち止まり、その一点に視線が注ぐ。

花柄だ・・・。

研究所での出来事を思い出す・・・。

さらに、先程の透けたシャツを思い出す・・・。

たぶん、上もピンクの花柄だった。

よしOK。

これを買えば間違いない。

俺のエロ目線も、役に立つもんだ。

とりあえず、それを取り上げ、タグを見る。

なになに、リフトアップパネルで上向きバストに！美胸キープのお
買い得ブラ！（ワイヤー入り）

.....。

何だか分らん。いいだろ。

なんとかサイズを見つけると、上下セットじゃないのに気付く。

とりあえず下も、似たような物を捜し任務完了。

じゃなかった、パジャマか。

あぶねえ、あぶねえ。

パジャマは、ほぼノータイムでゲッツ。

白河真琴と言えば、パステルピンクでしょ。

しかも、結構胸元開いてるやつな。

ふっ、ミッションコンプリート！

よし、とっとと会計を済ませると、ダッシュで帰宅する。

考える事も、もうない。

立ち漕ぎだコノヤロー。

俺は妙にハイテンションで、全力疾走した為、おかげで汗だくに。

帰宅してすぐ、「汗臭ーい」と妹に言われたが気にしない。

とりあえず「俺が買ったって、言うなよ」とだけ告げ、自室にこもる。

「疲れたー」

バフツと、ベッドに身体を投げ出す。

今日は、昨日より盛り沢山だったなー。

あ。

やられた。

何がつて？

うちには、スピード乾燥機があるじゃないか。

風呂入ってる間に洗濯終わるだろ。

ハメやがったな、我が妹よ。

.....。

ま、いつか。

明日の事を考える。

.....とりあえず、一緒に学校行くだろ？

で、あいつ仕事キャンセルしたって言ってたな。

どうすんだ？

放課後、研究所に連れてくか？

で、その後は？

一人暮らしのマンションって、やばくないか。

うゝむ。

.....。

バンッ！！

突然、ドアが爆音とともに開いた。

音と同時に目覚める。

おっと、寝てしまったか。

何やら気配を感じ確認すると、すぐ横に白河が立っていた。

パステルピンクのパジャマ。

その胸元を片手で押さえつつ、開いた手にはモップが握られている。

思ったとおり、ピンクが似合う。

でもなんだ？掃除でもしてたのか？

目と目が合う。

哀れむような視線で見下ろす彼女。

そして歯を食いしばり、その後ニコツと満面の笑顔になり、

「パジャマありがとう」と、アイドルスマイル。

お、パジャマ気に入ってくれたのか、良かった良かった。

俺も笑顔に・・・

・・・なる前に、白河の笑みが消え、鬼の形相に変わる。

な、なんだよ、どうしたんだ、そんな怖い顔して。

こ、怖い顔もなかなか愛嬌あるぞ？と、心の中で強がっていると、

「君に聞きたい事あるんだけど」

今まで、聞いた事もないテンションの低い声。

「下着も君が買ってくれたんだってね」

げっ、彩乃め、裏切ったなっ

「よくサイズ知ってたね。妹さんが、洗濯してくれた時に見てくれたのかと思ったんだけど、違うんだってね」

「え、え〜と、それはだな・・・」

な、何このバッドエンディング的な感じ・・・。

「しかも、今日は合っていないサイズ着けてきたのに、このブラ、ジャストサイズなのよねっ」

「なんでかしら」と、モップの柄を俺の身体にトントンする鬼河さん。

「へえ、ぐ、偶然もあるもんだな。今ここに、神が降臨した。な、なんて・・・ははは」

「しかも、どうして上下とも花柄を選んでくれたのかしらね」

「まるで私の趣味を知ってるみたいね」と、モップの柄を俺の身体にグイグイする大鬼河さん。

チャララチャツチャツチャーン

モップのレベルが上がった。

攻撃力が25上がった。

大鬼河のちからが8上がった。

神崎の体力が30減った。

もはや現実逃避の俺・・・。

「は、はははは」乾いた笑いしか出ない。

いくら樹脂製のモップといえど、たぶん殴ったら痛いよ？

「正直に答えたら許して上げる。・・・見た？」屈んだ態勢で、覗き込んでくる。

拍子に、押さえていた胸元が開放され、大きく開く。

中のブラが丸見えになる。

じーーーーーーー。

「見てない見てない」
今見てるけど、見てない。

「ほんと？嘘ついたら、本気で死刑よ」

しかし、すごいな。あんなに大きかった物が、すっぽり包まれてるよ。

なんたるポリウム感。

「ちよっ、ちよっと聞いているのっ！どこ見て・・・えっ」

じーーーーーーー。

「微妙に揺れてる感じがいいな」

.....。

ドアが閉じられ、バッドエンド。

どうやら、分岐はなかったらしい。

「GAME OVER」の文字が、頭に浮かぶ。

ふっ、もう痛くないぜ。

.....

.....

ふっ、心が痛いぜ。

嫌われちゃったかな・・・俺。

普通に入こむ。

しかし、「貴重な脳内映像をゲットしたぜっ！」

犠牲は大きかった.....

そうだ！

こんな時に、文明の力。

メールで謝っておこう！

よしつと拳を握り、携帯をスライドさせる。

.....

メアド知らねえし.....

いや、俺は男だよ？

直接謝ればいいじゃないかっ。

たしか、妹と一緒に寝るって言ってたよな。

「いざっ！ 妹の部屋へ！」

バンッ

突然ドアが開き、再び現れる、勇者白河。

「うるさいわねー！！ 静かにしてー！！ もう寝るとこなんだからっ
ー！！」

「は、はい・・・」

「あと、貴重な脳内映像ってなんのこと？ 思い出したらもっかい死刑だからねっ！！！」

「す、すみませんでした」

「隣の部屋で寝るけど、絶対こないでよね……………じゃあね」

「あ、ちょ、ちょっと待ってくれ」

「なに？」

「携帯のメアド教えて？」

「やだ……………死ぬまで教えない」

ボタン

死ぬまで教えないって…………。

長いね…………。

・
・
・
・
・
第5話へ続く

第4話 妹覚醒と俺の悲劇（後書き）

第4話 いかがでしたか？

今回は、2話3話にも増して、エロコメになってしまいました。
修羅場を期待された方、すみません。

そしてしばらく、白河真琴編が続きそうです。

あと、妹の電波ぶりはどうだったですか？

普通に妹とのラブコメを期待していた方、重ねてすみません。

白河との三角関係にはしたくなかったので。。

ただ、この先まだ分かりません。

そして今後、新たなヒロインが登場しますので、それまでお待ちを
。。

では次回をお楽しみに〜って、なかなか話し進まないけどね^^;

第4・5話 白河真琴ファンディスク朝の悲劇

「ん・・・あ・・・さ？」

カーテンの隙間から入る日差しにあてられ、私は目を覚ます。

「眩しい・・・」

目の前には、すーすー寝息を立てる、彩乃ちゃんの顔。

鼻先がつんつん触れ合う程に、近い距離。

寝息が顔にかかる度、くすぐったくなる。

彩乃ちゃんの甘い息の匂い・・・。

なんだかとても、愛おしくて、母性本能が湧き上がる。

しかも長く一人暮らしだったので、寝起きで人の温もりを感じられて嬉しい。

「うーん・・・むにゃむにゃ・・・ん」

身体をぎゅっつとされる。

良く見ると、私を抱き枕の代わりにしているようだ。

手を背中にまわし、足は私の股の間に挟み、絡めている。

うふ、赤ちゃんみたいで可愛い……。

初夏の朝日が指すなか、二人は抱き合い、汗でびっしょり濡れていた。

なんだかちよつと汗臭い……。

起きたらシャワー貸してもらわなきゃ。

まだ、目覚ましが鳴るまで、時間がある。

「お、おにい……ちや……」

あ、起きたかな。

……ちがう、寝言みたい。

「おにいちや……ん……すき」

みづらにぎゅっつとされる。

そんなにお兄ちゃんが好きなんだ……。

ちよつと微笑ましい。

「ん、じょよ、じょよ、おかさくん……おっぱい」

ゴソゴソ……

え、……ちよつと

開いたパジャマの胸元に顔を埋められ、どうしたものかと考える。

寝る時は、ブラは外している為、直接吐息が肌にかかる。

うふふ、まだ子供だね。

「ひゃっ！」

鼻先で敏感な部分をつんつんされ、刺激にビクツとした。

兄妹揃って、エッチなんだから……。

「ん……もつと……たべるう……」

敏感な部分を、はむはむと甘噛みされる。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

(う、うそでしょ!?)

や、やだ、ちよっと……!!声がでちゃう……。

「ハ・ハア・ハア・あん……」

さすがに起こそうかと思ったけど、幸せそうな寝顔を見てためらう。

「おいしい……の……これ……」

はむはむ……もぞもぞ……。

ま、また!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「やん……あ……ハア……ダメ……」

甘噛みの刺激と、股の間をグイグイしてくる足で、えくと、そのっ、すりすりされて……。
変な気分になってしまう。

まあ、この子は……。

もう時間だしそろそろ起こそうと思っっていたら、

「気持ち良くなってきたかい？」

ドキッ。

思わず赤面。

周りを見渡しても誰もいない。

「こっつするの、好きだろ？」

な、ななななに!?

「ああ、いいわとつても。」

「じゃあもつとしてあげるよ。」

「あつ、そこ、そこもつと強く!」

「まったく君つて欲張りだね。」

「もつと激しく揉んで!」

「こっつかい?」

え?え? やだあ。

「だいぶこってるねえ」

「ええ、仕事が忙しくて」

は？

声の方を捜すと、目覚まし時計が赤く点滅している。

「これね・・・」腕を伸ばし手に取ると、

「そんな疲れた君も好きさ」

「ええ！わたしもよ！」

ピツと、アラーム？を止める。

「はあ。いったいなんなの、この目覚まし」

裏面を見ると、「二人の愛の形」肩揉み編」にセットされている・・・。

私はガクツとうなだれた。

「彩乃ちゃんって、変わった趣味してるのね」と思いつつ、身体を揺さぶる。

「起きて、彩乃ちゃん。朝だよお」

「う、むにゃ？」

「ほらっ、朝よ」

「う、うん・・・おはやおございはう・・・むにゃ」

あくびだか、あいさつだか分からない返事をして、もぞもぞする彩乃ちゃん。

「おはよう、彩乃ちゃん。起きた？」

「おはようございまふう、しらかわさん」

目をすりすりしながら起き上がり、女の子座りをする彩乃ちゃん。

上目使いが可愛い。

「ハア〜ハフウ、すみません、もう起きましたあ」

大あくびしながら両手を広げ、伸びをしている。

「彩乃ちゃん、私に抱きついて寝てたんだよ。可愛かった〜」

頭をさすってあげる。

「えっ！ うそっ、ほんとですか」

「フフ、ほんと」

「う、ごめんなさいっ、彩乃いつも抱き枕、抱いてるから・・・」

「でね、お母さんって、私のおっぱい吸ってたよ」

と、冗談っぽく言ってみる。

「!？ し、しししてないですう、うそですう、そんなのっ」

フフフフ、可愛い。

さらに頭をなでなで。

「や、やめてください、恥ずかしいですよ」

その後もジタバタする彩乃ちゃんをからかいつつ、二人で朝の準備を始めた

キッチンで、仲良くご飯を作る二人。

「いいの彩乃ちゃん？ 私の分もお弁当作っちゃって」

「もちろんですよ、こっちは朝食の準備をしますからあ、白河さんはおにぎり握ってくださいね」

「う、うん、まかせてっ」

とは言つもの、形がいびつに・・・。

お料理はあんまり・・・いえ、全くしないの・・・。

でも、こういうのは、気持ちよ！ 料理は愛情って言うでしょ。

気持ちをこめるべく、二人の兄妹を思い浮かべ・・・

ニヤけた変態の顔を思い出す。

あいつのは適当でいいわっ。ふんっ。

怒りがこみ上げ、握る手に力が入る。

「もぉっ、あの変態っ！」と言いながら、ギュッギュとおにぎりを握る。

中の具を入れ忘れたので、その辺の食材を手に取り、「これでいいわよね、エコだし。」ふふーんと鼻で笑い、硬くなったおにぎりにねじ込む。

後は定番のウィンナーやら卵焼きやら、簡単なものを仕上げる。

「うん、初めてのお弁当にしてはまあまあね。さすが私。」

いつもはコンビニで済ませてしまうので、こういう朝の風景が楽しい。

やっぱり家族っていいよね。

「そうだ」「折角初めて作ったお弁当。ブログに乗せておこう。携帯を取り出し、写メる。

「後で電車でUPしよつと」

ふふ〜ん

「白河さん、そろそろ兄さんを起こしてきてくれますか?」

「え、あいつう?」

「そろそろ起こさないと。兄さんは、いつも彩乃が起こさないと起きないんですよ」

「あ、じゃあ、私がこつちを代わりに・・・」

そう言つて綾乃ちゃんが掴んでいたフライパンを取ろうとし、逃げられ、

「ああ、ダメです。今、大事なところなんです。大丈夫ですから、お願いします」

「あっそう・・・分かった。じゃ、行ってくるね」

隠れてニヤリとする彩乃

強引に頼まれた感があるけど、結局ここまで来ちゃった・・・。

あいつの部屋の前。

できれば男の子の部屋へは、あまり入りたくない。

エッチだし・・・。

ちょっと優しいところもあったんだけどな・・・。

昨日の事を思い出す。

思い出すけど、脳裏に浮かぶのは、結局いじわるな事ばかり。

「ふんっ、やっぱり嫌いっ」

言い放ち、ドアをこんこんとノックする。

「起きてるー。朝ごはん出来るよぉー」

・・・。。。。。

返事が無い。

「しょうがないよね」とドアを開け入ると、案の定まだ爆睡みたい。

近寄り、頭まで被った夏用の薄い布団をふわりとめくって、

「もぉ、早く起きなさ・・・キャッ!」

な、なんでパンツ一枚で寝てるのよ~~~~~。

その場へたり込む。

なんてもの見せるのっ!

もぉ〜やだぁ〜。

そろそろ顔を上げ、ちらちら見る。

「早く起きてよぉ~~~~~」

直接触りたくないから、布団をたぐり寄せ、それこしに揺する。

そして、彼の下半身のある部分の違和感ある膨らみ・・・に気付く。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

(声にならない叫び)

「な、ななななな、なんで!?!」

じーーーーーと、つい見てしまっ。

あ、やだ私……。

下を向き赤面してしまっ。

なんで寝てるのにああなるの？

ちら。

キヤア！

自分で見たのに驚いて下を向いてしまっ。

昨日は分からなかったけど、あんなに……。

じーーーーー。

エッチな夢でも見てるのかなあ。

あいつ変態だし。

「危なかつたな」

「助かつたぜ、相棒」

「敵は5人、こっちは二人だ。油断するな」

「分かつてるさ」

ぽかんとする私。

「ったく、うるせーなこの目覚まし」

ピツとアラーム？を彼が止めると、

「ええと、なになに朝日のガンマン？ これもいまいちな」

おもむろに時計を投げ捨てる。

「で、何やってんの、お前？」

カア〜と顔が赤くなるのが分かる。

「べ、別になんでもないわよっ！！ バ、バカじゃないのっ！？」

「は？ 意味分かんねーし」

「は、はは早く、下、降りてきなさいよねっ！ー！」

ボタン

逃げるようにドアを閉め部屋を出る。

そして、ドアにもたれつつ「はあ〜」と溜息。

その場へたり込む。

もうほんとにやだ・・・。

そして急にドアが開いたもんだから、

ガンッ

と頭を打たれる。

「痛ったあ〜〜」頭をさする。

「お、わりい。いたの?ごめん」

「なにすんのよっ! おもいつきり頭ぶつけたじゃないっ!」

「知らねえよ、開けたらお前がいたんだし」

もお最悪っ!!

.....。

そして、彩乃ちゃんを見つけて、

「彩乃ちゃん！ シャワー借りるねっ！！」

シャワーを浴びて、やっと自分を取り戻した私……。

はあく、朝から疲れちゃったよ

第4・5話 完

第4・5話 白河真琴ファンディスク朝の悲劇（後書き）

第4・5話 いかがでしたか。

まあ、なんていうか。やっちゃんいました！

エロコメ凝縮。

この幅がいつぱいっぴいです。

ああ〜白河かわいそう・・・。

第5話 日常と非日常

三坂学園を目指して歩く。

隣には白河と妹。

妹の目的地も同じ三坂学園だ。

但し、「三坂学園中等部」。

中高一貫ってやつだ。

楽でいいだろ？

ただ、試験は受けたけどな。

一定の学力がなければ、当然、高等部へは進めない。

そういうシステムだ。

まあご存知だろうけど。

で、白河とは中等部からの知り合いかって？

いや、こいつは普通に受験してきたんだよ。

なんでかは特に聞いてないけど。

しかも、もう聞けないかもね。

嫌われちゃったみたいだし……

朝も怒ってたしなあ。

試しに話しかけようか？

「なあ白河、何でそんなに離れて歩いてるんだ？」

「変態が移るとやだから」

……。

な？

昨日からの最悪な状況からは脱出したものの、俺に対しては汚物を見る目のような視線を送ってくる。

超可愛いアイドルからの冷たい視線。

今流行のドMが開発されたら、どうしてくれるんだ。

あーあ、数々の戦利品は脳内保管されているけどさ、対価としてはこんなもんなのか？

言いかえれば『自業自得』。

ふっ……、でも俺には妹がいるぜ！

「な、彩乃？」

「ん？なあに、兄さん？」

「呼んでみただけだ」

「！・・・も、もお、兄さんったらあ」

嬉しそうに微笑む我が義妹。

可愛いなあ、こいつ。うんうん。

しかし、こいつの言ってた事もあながち当たってるかもな。

俺はシスコンか？ ちくしょー！

振り返り、白河を見つめてみる・・・。

なに？と冷たい視線がささる。

・・・。。。。。

い、いいんだもん。あんな状態の白河はほっとくんだもん。

そして再び妹に逃げる。

「そついえばお前さ、せめて今はメガネかけろよ」

「い、いやですよ、かけません。慣れてるし大丈夫です」

「学校いったらかけるよ」

「分かってますよ。さすがにかけますっ」

この極度の近視のせいで、未だに後ろを歩く白河が本物だと認識していない。

その事を聞かれる事もないし、面白いので言うつもりもない。

ま、白河本人も、自分から言うつもりないみたいだし。

いや・・・気付かれてないとはさすがに思っていないか。

ま、どうでもいいし。

その後も妹とくだらない事や、昨日の歌番組の話が続いて、

「白河真琴可愛かったですねえ、あ、でも珍しく歌詞間違えてましたね」

なんて本人の目の前で言うもんだから、後ろが気になってしょうがない。

ちらつと振り向く。

・・・とぼとぼ下向いて歩いてるよ。

ったく、話しかけたら怒るし、話しかけなきゃ・・・そんな感じだし・・・。

そんな俺の雰囲気気付いてか、妹が白河に話しかけた。

「白河さん、さっきから気になってたんですけど、その麦わら帽子可愛いですねっ!」

あちゃ〜、また微妙なネタ振りやがった。

「ああ、これ?」

とやっぱりそっけない答えが返ってくる。

しゃーない。

「いやあ、それ本当似合ってるよね〜。ちょっとデザインが変わっていいよ、うん。しかも可愛いけど、ちょっとワイルドな感じが出てさ、そんな個性を引き出せるのは、白河ぐらいの魅力がなきゃだめだろ。なっ彩乃?」

「えっ? あ、うん。そうそう、そうですよ」

慌てて相槌を合わせる妹。

俺の全力の持ち上げをポカンと聞いていたいた白河は、やっと少し笑顔で、

「いいよ、そんなあからさまに言わなくてもさ。だいたい、これ君が買ってくれたんじゃない」

げっ、妹の前でそんな事を言ったら・・・

「ええ！！ 兄さんが！？ ず、ずるいですよあ、兄さん」

ほら始まった。

「彩乃には買ってくれないんですかあ？ 彩乃には誕生日とクリスマスしかくれないの・・・」

ずるいですう、さべつですう、とシャツの袖をがんがん引つ張られる。

「分かった分かった。今度似たようなの買ってやるから。なっ？」

「ぶうっ、ほんとですよ？」

「本当だつて約束する」

金はあるしな。

「やったあ じゃあじゃあ、白河さんとお揃いがいいですっ」

「え、なあに、これが気に入ったの？　なら、もともとお兄さんに買ったものだし、あげよっか？」

簡単にあげるとかいつてんじゃねーよ！

俺が苦勞して買った品をっ！

ジト目で睨んでやる。

「あ、ご、ごめん。．．そ、そんな目で見なくてもいいじゃない」

「そ、そうですよっ、それは兄さんの愛の形なんですから、受け取れませんか」

大事にしてくださいっつと拳を握る、我が妹。

でもお前。

あげるって言った時、目、輝いてたじゃねーか。

「それに、彩乃は白河さんとおそろがいいんですっ」

「お、なんだお前、白河のこと好きなのか？」

「大好きですっ！　しかも彩乃と白河さんは、すでに一夜をともにしたんですよ？」

そっか、そうだったけ。それで仲良くなったか。

そりゃ良かったと感心していると、妹は「しかも！」と続け、

「実はですねえ、なんと！二人は抱き合い、おっぱいを吸いあつた百合でエッチな関係なのですっ！」

へへー興味あるでしょおーと、俺を覗き込む妹。

「お、お前、おっぱいって……」

条件反射で白河のおっぱいを凝視する俺。

歩きながら、微妙に立て揺れしているのを確認し、いや、する必要はなかったが、すぐに白河の顔に視線を合わせると、微妙に頬を赤く染めているのが分かる。

「ま、まじなのか!？」

「ち、違うわよっ！そ、そそ、そんなこと……ないないない」

赤い顔のまま手を振り、全力で否定している。

あからさまに怪しいじゃないか……。

い、妹が、白河のあれを……？

再度、揺れる特盛り牛丼に熱視線を送る俺。

じーーーーーーー。

き、気になる。気になる気になる。

立て揺れ牛井が気になる。

しかもだんだん大きくなって・・・

バシッ！！

「いつて〜、お前、何すんだよっ！ 鞆で叩くなっ！」

しかも角でっ！！

すると白河は、さらに近寄ってくる。

バ、バカ、近すぎるって・・・。

さらに睨みながら、じりじりと。

だあああああああ！！！！

だから、何でお前はいつも、そんなに近いんだよっ！！！！

動揺する俺を、見上げるような体勢で、

「君が変なところ見てるからでしょっ。このど変態っ!!」

と、ほぼ零距离で言い放った。

!!!!!!!!!!!!!!

ふんつとそっぽを向き、なびかせた髪を俺にビシッと当てると、そのままずんずん歩き出す白河。

お、お前、ちょ、ちよっと……。

今、なじられた事よりも、衝撃的なイベントが俺的にあっただんですけど。

呆ける俺。

そして「兄さん冗談ですよ」と、顔の前で手をふりふりする妹。

何があったか聞きたい？

あいつが怒鳴った時に、あいつの唾が飛んでさ、そのまま俺の口の中に入ったんだよ。

しかも、そこそこの量が……。

なんとなくモグモグしちゃう俺。

でもさ。

こ、こんな事で間接キスって……。

喜べないだろ……。

変態か……俺？

はあ〜と溜息をついてみた

……。

その後電車に乗って「三坂駅」まで来た俺達。

そして俺は今、ストーカー行為に勤しんでいる。

誰をかって？

妹と白河とその他大勢。

電車に乗る前に、俺達は別行動を取った。

なぜなら、白河と一緒にいるところを、同じ学園の生徒に見られたくないからだ。

アイドル的に白河に迷惑がかかるし、俺も学園で敵を作りたくない。で、二人を女性車両に乗せた。

しかし、そこで乗っていた大量の女生徒達に白河真琴だつてばれて、一躍人気者に。

結局、そいつら全員引き連れて、現在学園に向かっているって訳。

普段は車通学だから、珍しかったんだろうよ。

但し、忘れちゃいけないー。

あいつは一度襲われてるんだぜ？

またいつその時がくるか分からない。

分からない以上、注意を払わないと。

だからこうして、ボディガードよろしく状態でストーカー中なんです。

お分かり？

ま、俺がいたところで、大した事は出来ないけど・・・。

でも、一度助けた実績があるからな。

男だろ、俺。

それにだ、今までなら気にもしなかったと思うが、駅周辺に、この時間にはあまり見かけた事がない、チンピラ風情の兄ちゃん達が、うろつろつしていた。

俺は一人緊張し、注意を払っていたが、その場は何も起きなかった。もしかすると、白河の周りに取り巻きが大勢いたせいで、助かったのかも知れない。

だが、そろそろ学園も近いし、大丈夫そうだな。

そう安堵していると、例の奴が現れた。

「オッス、神崎。昨日の歌番見たか？」

坂崎登場。

俺の数少ない友人である。

「おう。見たよ、白河んどこだけな」

「お、いいねー。あいつ可愛かったなー」

「まあな」

「なんだ、そっけねーなー」

「そりゃそーだろ、いつもクラスであつてんじゃねえか」

「だからだよ。クラスメートの女子が人気アイドルなんだぞ、応援してやるっぜ」

お、坂崎にしてはいい事言っじゃねえか。

「だったら、俺は応援してるぞ。昨日CD買ったし」

「まじで！俺も買ったぜ、PV付きだろっ？」

「ああ」

「あれすげえよなー」と遠い目をする坂崎。

「なにがすげーんだよ」

ふんふ、ふんふんふーと、メロディーを口ずさみ、踊りだす変態。

「キモイって！ だからなんだよ」

「え？ いやさ、彼女の踊り、良くね？」

「ああ、いいな」

「だろっ、で、何が凄いつて、あんなに激しいダンスなのに、スカ
ートの中が全く見えないんだよ」

「……………」

「あれって、絶対CG入ってるって思わないか？」

「……………」

「俺さ、買う気なかったんだけど、どうしても確認したくてさ」

「……………」

「とうとう買ったよ、家でコマ送りしたんだけど、やっぱり見えなかったよ」

「……………」

「ん？どうした神崎、おまえは見たのか？」

「いや、見えなかった」

……………。

俺、こいつと全く思考パターン一緒じゃねーか。

切ねえ……………。

しかも俺、コマ送りしたらどうかなって、ちょっと考えてました。

坂崎った……………。

……………。

何事も無く学園に辿り着いた俺達は、その後、いつもどおりの授業を受ける。

休み時間には、色々気になって何度も白河を見てしまう俺。

だが、ここは学園内。

これといって、特に何も起こりはしない。

ある意味、ここが彼女にとっては、現状一番安全な場所なのかも知れない。

そのままぼくと眺める。

数人の女子に囲まれ、なにやら質問攻めにあっている。

「真琴、今週さ、ドラマ最終回じゃん？みーくんとしーちゃんってさ、先週別れちゃったけど、結局最後、またより戻るんでしょ？」

「あー、それ私も気になってしょうがないのよ」

「撮影終わってるんでしょお、教える、この、この、」

「あ、あははは……。そういうのは言っちゃダメってことになってるから、ごめん」

「ええ〜？ いいじゃん友達でしょお」

「う、うん……でも……」

「あ、じゃあさじゃあさ、みーくんのサイン貰ってきてよ、このとーり」

「あ……まあ、それぐらいなら、大丈夫……かな？」

……

あいつも色々大変だな……。

そんな事を考えていると、一緒に呆けてた坂崎が、

「お前、白河の事ばかり見てんな。好きなの？」

と、唐突に聞いてきた。

面倒なので、適当に答えてやる。

「あ？ 可愛いから見てるだけだろうが、文句あんのか？」

「いや、そういうのが一般的に好きってことだろうよ」

高嶺の花だ、あきらめると、ポンポン肩を叩かれる。

「うるせー、ほっとけ。俺は眠い、適当に寝る。次の数学、盾役よろしくな」

そう言って、俺はまどろんだ……。

……………。

昼休み

そういえば今日は、妹から弁当を買ってなかったな。

しゃーねー、混むけど学食でも行くか。

立ち上がり、廊下に出る途中、ふと白河の視線に気付く。

ん？

何やらジェスチャーを交え、口をパクパクしている。

何かを伝えようとしているのか？

俺は空気を読み、軽く首を傾^{かし}げ、分かんねーよのポーズを返す。

すると、何だか機嫌が悪くなり、きつい目つきで俺を睨む。

「まったく、怒ってんじゃねーよ。」

再度、何やらサインを送ってくる。

上を指差し、口パク。

そして、着いて来いと言わんばかりに手を振り振りしている。

「しゃーねーな、着いてってやるか。」

そのまま廊下に出たので後を追う。

スタスタと階段を登って行く。

すると、当然行き止まり。

そこで、ガチャガチャとドアノブをいじっている白河。

「何やってんだよ。」

「開かないのよっ、このっ。」

「開くわけねーだろ。」

「何でよっ。」

「今時、屋上なんて開いてねえよ。飛び降りとかあったら問題だろ？」

「そんなの知らないわよっ」

なんで開かないのと、あきらめの悪い白河を落ち着かせ、とりあえず用件を聞く。

「で、どうした、何かあったのか？」

と真面目に聞くと、なにやら首を傾げ、口に指を当て考えている。

無駄に可愛い仕草してんじゃねーと思いつつ、時間もないので、

「用が無いなら俺行くぞ。早くしないと定食売り切れんだろ」

と言つて踵を返す。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！　せつかく私と一緒にいるのに、なんなのよその態度っ」

「あ？　何言つてんだ。こんな誰も居ない所で人に見られたら、お前が困るだろーが」

「ま、まあ・・・そうね、そうかな・・・」

「じゃ、っ、そう言つ事で」

「だ、ただ大丈夫っ！」

と、急いで駆け寄る白河。

そして真横にしゃがんで心配そうに、

「うそ・・・やだ・・・わ、私、ごめんなさい・・・」

と見つめている。

俺は首だけ向けて、返事をしようとしたが・・・。

・・・

返事はしない・・・。

なぜなら、ナイスな角度で見えているからっ！！

・・・しかも近い。

内股で、足を閉じているが、短いスカートだ。

その下には、むちっとした裏もと、男なら誰もが気になって仕方

ない、秘密の部分を隠す「花柄の布」。

こ、こんなモロ見えイベントがあるとは……。

じーーーーー。

丸みを帯びたそのライン。

不思議だな。

昨日買った時は、ただの布切れだったのに。

こいつが履くと、こんなに魅力的になるなんて……。

……。

「ね、ねえ……気はたしか?……ねえってばっ

いかんいかん、バレたら殺される。

同じ轍は踏まないっ！！

むくりと立ち上がる。

が、ある理由ですぐに座る。

「わっ……へ、平気なの？」

「ああ、問題無い。」

「でもすぐに座っちゃったし……まだ痛むう？」

「いや、単に座りたくなっただ」

お前のせいで、立てない理由があるんだよっ。

「はああく、でも良かった……ほんと、死んじゃうのかと思った……」

こんな情けない死に方してたまるかっ。

ふと、白河が手に持つ、紙袋に気付く。

「で、その紙袋、朝から持ってたけど、なんだ？」

「へ？ これ？ これはお弁当……だけど、ほんとに大丈夫なの？」

「ゴロンッてすごい音したよ」

「ん？ 大丈夫だって、昨日のあれが効いてるみたいでさ」

若干涙目みたいなんで、明るく振舞う。

「・・・あーあれねえ。そっか、よかったっ」

「で、早く俺の分くれよ。あるんだろ」

「あ、あるわよっうるさいわね。ちょっと待って・・・」

どっちだっけ・・・とゴソゴソする白河。

どっちだっていいじゃねーかと思いつつ、こいつの行動を思い出す。。。

弁当持って屋上目指すなんて、あれしかないよな？

「もしかしてお前さ、俺と一緒に屋上で食べよう、とか考えてた？」

「バ、バカじゃないのっ！ わ、私はただ、屋上で食べたら美味し
いかなって・・・」

「で、天気もいいし・・・だ、だから、君は関係ないのっ！！」

そんな赤くなって全力で否定されたら、期待しちゃうじゃねーか。。。

「分かったからっ、早くしてくれ」

「君が変なこと言っからじゃないっ」

もお、といつものちよい機嫌悪い感じに戻り、「はいこれ」と弁当を差し出してくる。

「私が作ったんだから、味わって食べてよねっ」

「ええっ！！マジでっ！！！！」

「そっ、そんなに驚くことなの!？」

「いやまあ、だってさ、一応・・・その・・・なんだ」

照れくさいぞっ、なんなんだこれは!？

「て、照れないですよ！！ 私も恥ずかしくなっちゃったじゃない・・・もお」

「それに、残念だけど、愛はこもってないから」

え？ さんざん人のテンション上げといて、なんて事言いますかこの人。

カシヤ

「なんだ？」
「なに？」

振り向くと、一人の女子生徒が、携帯を片手に立っている。

「真琴の恥ずかしい写メ、ゲット~~~~」
「わっ、やめてよ、美月ちゃん」

「やっだよお~~~~、これをネタにたっぷりいじめちゃうもんねえ
」
「キヤア~~~~、ダメ、ほんとにかんべんして、お願いっ」

キヤアキヤアと、写メった携帯を奪い合う二人。

この美月という女生徒は、来栖美月^{くるすみつき}。

2年生だから、来栖先輩だ。

俺でも知ってる、超有名人。

白河とは仲が良く、クラスにも度々遊びに来る。

後から聞いたが、中学時代には同じ事務所に所属していたこともあ
るらしい。

そう、先輩もアイドルなのだ。

しかも人気なら、まだまだ白河より上だろう。

先輩は、超ロリロリ元気っ子アイドルとして、全国のオタク達から絶大な指示を受けているのだ。

数々のアニメソングを歌い、トークでは怪電波を発し、ライブでは客席に飛び込むなど、超破天荒娘。

そんな先輩にこんなところ、見られちゃうなんて。

まちがいなく、誤解されたな。

「ふっふっふ〜ん、叫び声につられて来てみれば、なんとも恥ずかしい真琴ちゃん〜」

片足で器用にくるくる回っている。

腰まである長い髪と、大きな頭のリボンが回る度にゆらゆらなびく。

「もお、そんなんじゃないんだってばあ〜」

必死に追いつがる白河だが、くるくるピョンピョンとかわさされている。

さすが先輩。

「じゃあさじゃあさ、紹介してよん〜、かわいい」

「彼氏じゃないんだよあ〜、美月い〜」

そろそろ助け舟、出してやるか。

「来栖先輩、俺は1年で、白河とは同じクラスの神埼です」

どうも、と挨拶する。

それはご丁寧にと、ピョコピョコ頭を下げる先輩。

「残念ながら、俺はただのクラスメイトです。白河は、俺の妹と仲が良くて、この弁当も妹経由なんですよ」

落ち着いて、もっともらしい事を言ってみる。

「ふう〜ん、じゃあさ、もうチュウしちゃったの？チュツチュツし
ちゃった？」

人の話し聞けよっ!!!

アイドルってみんな人の話し聞かない系なの!?

面倒くせーもー。

「残念ながら、まだ間接チュウぐらいです」

逆に乗っとく事にした。

「バ！・・・バカッ、なにいつてんのよっ君はっ！！」

慌てて俺の前に立ちふさがり、「そんなことないない」と全力否定の白河。

でも、

「きゃあ~~~~~、間接チユウだって~~~~、あまらずぱあ~~~~い」

いやんいやんと、両手を胸に置き、身体全体を振り振りする先輩。

さすが話し聞かない系。

「じゃ、そう言う事なんで、俺、弁当食うんで教室戻ります。それじゃ」

さっさと、この場所を去る。

「えっ、うそ、まってよ、神崎君っ！！」

「真琴は逃がさないのだった！どんな間接チユウしたのか言うのだった！さあさあさあ」

「ちよっと！！ 戻ってこないと、あとで死刑だからねっ！！」

.....

何か聞こえるが気にしない。

教室に戻ると時間がないので、とっとと弁当を食べることにする。

さあて中身はどんなかな？

パカッと蓋を開ける。

おゝ、すげえ普通……。

飾りつけねーなーあいつ。

確かに愛は感じないかも。

まあ、妹の弁当がちよつと異常なのかも。

いろんな食材でハートマーク作るからな。

毎回、坂崎にからかわれる。

んゝ、もぐもぐ……。

味は、まあまあだぞ。

卵焼きが焦げて苦いけどな。

.....

あいつの俺に対する思いがこもってるな.....

気が付くと、白河も戻ってきたみたいだ。

目があったので、美味いぞと、親指を立ててやる。

すると、白河も親指を.....下に向け、殺すその合図。

なぜに!?

やべえ、まじ怒ってる。

震える心のまま、おにぎりを取り口に運ぶ。

か、硬い.....。

どんなものかって、3日ぐらい経った時のダンゴを食ってるみたいだ。

どんな握力で!?

いやいや、我慢我慢。

なんたって、みんなのアイドル白河真琴様の手で握ったものだぞ。

よし！

あいつの数少ない、俺に向ける可愛い笑顔を浮かべ、

トライアゲインー！！

もぐもぐ……ボリボリ……。

ボリボリ？

なにやら、苦甘い味が口の中に広がる。

なんだろ、具かなあ。

食いかけのおにぎりを確認してみる。

に、人参じゃねえか……。

しかも生。

なんだよおにぎりの具に生野菜って!!!

しかも良く見ると、ヘタの部分じゃねえかああああ!!!!

あのヤロー。

おにぎりを指差しながら、なんだよ、これっ、と白河を睨みつける。

すると、「バ~~~~カ」と口パクが返ってきた。

ち、ちくしよ~~~~。

あいつ、あんなキャラだったか!?

またパンツ見ちゃうからなっ!!!

覚えてろっ!!!

.....。

そして放課後、俺はまたストーカー行為に勤しんでいる。

あえて、一斉に下校するタイミングで、他の生徒と紛れる白河を追跡中。

で、このまま、如月さんの研究所まで行く予定。

研究所までは駅を挟んで反対口。

歩いて15分つてところかな。

そしてしばらくすると、だんだん生徒が散り、閑散としてくる。

交差点

信号が赤になり立ち止まる。

この隙に、何気なく近くまで接近する。

白河も俺の方をちらっと振り向く。

すると、俺達のすぐ横の路肩に、幅寄せしてくる一台の黒いワゴン車。

なんだ？あの車。

横断歩道のど真ん中に、車止めようとして……。

すげー迷惑だな。

中から人が降りてくる。

なんだ……？

こんなところで降車か？

不審に感じた俺は注意を払っていると、

「お嬢さん、すまないが、ちょっと道を教えてほしいんだが」

初老のおじさんだった。

人のいい白河は、いいですよと近づいて行く。

まあ、道ぐらいなら俺がと思い、

割って入ろうと、近づいたその時

ワゴンから別の男が飛び出した。

でかい図体、大男。

男は黒いマスクを被り、顔を隠している。

明らかに不審人物だ。

のしと歩いて近づいてくる……。

危険を感じた俺は、白河の腕を掴み、

「白河っ！ 逃げるぞっ！！」

反転、俺は走りだそうとするが、急に引っ張ったもんだから、白河は躓つまずいてしまう。

「え！ キヤアッ！！」

掴んだ手が離れる。

同時に、俺の背中はドンッ突き飛ばされ、地面に転がされる。

うおっ 危ねええ！

「神崎君！」と声が聞こえる中、反動で車道に飛び出しそうになる。

「やだっ！ やめてっ、放して！！……ん……むぐっ……」

男は無理やり、白河の口を塞ぎ、車に押し込めようとしている。

「大人しくしろっ、殴られてえのか!」

「んーんー」

威嚇する男、ジタバタする白河。

正直、俺は足が竦んでいた。

一瞬呆けていると、白河が車の中に投げ入れられた。

「キヤアアアアアアアア!」

その悲鳴に俺はハッと我に返り、猛然と車にダッシュした。

「て、てめええらあああ!!!」

.....。

.....。

俺は仰向けのまま、空を見上げている。

ワゴン車は、白河を乗せて行っちゃった。

あの後、さらに別の男が出てきて、俺はボコボコにされた。

数秒、気絶していたかも知れないが、俺はすぐに覚醒した。

だが既に、車はそこには無かった。

なんなんだ、これは

第6話に続く

第5話 日常と非日常（後書き）

またまたお読みいただき、ありがとうございます。

今回はいかがでしたか？

場面は遂に、シリアスマードに突入するのか？

折角登場した来栖美月の出番は？

作者自身にも不明・・・（笑）

第6話 そして現実から非現実へ

俺はまさにへこんでいる。

なぜかって？

いや……、この件くだりをする元気もない……。

白河が拉致されたという事実。

役に立たなかった俺……。

一応、警察に連絡はしたし、目撃者も他に居たから……。

とは思っただけど。

白河、どこに連れて行かれたんだ……。

あいつら、白河を拉致して、いったいどうするってんだ？

まさか殺す？

いやいや、仮にも有名人だ。

身代金か・・・？

それとも、可愛いあいつにあんな事やこんな事を・・・！？

「だああああああああああああああああ！！！！」

「うるさいっ！ 静かにしてられんのか、お前はっ！！！！」

「は、はい、すみません・・・」

如月さんだ。

もう自分の力じゃどうにも出来ないと思った俺は、如月さんを頼って来た。

これ以上、頼もしい人はいないと思ったからだ。

如月さんには、ここに来て、すぐに事情を説明した。

すると、

「ちょっと待っている」

と、さつきからずっと端末を操作している。

タバコをスパスパと、もう何本も吸っている。

如月さんでも、さすがにどうにも出来ないよな……。

警察でも探偵でもないんだし……。

ニュースでもやってるかなと、テレビのリモコンに手を伸ばし、スイッチを入れた。

ガヤガヤと流れるCM。

チャンネルを変えても、ドラマの再放送や、料理番組しかやってない。

さすがに、まだニュースにはならねえか……。

「くそっ!!!」

行き場の無い切なさど苛立ちで、言葉を吐き捨て、テレビを切った。

すると、如月さんは操作の手を止め、椅子をクルリと回転させ俺に向き合った。

「まったくうるさいな君は。そんな泣きそつな顔をするな、白河君

の居場所が分かったぞ」

「えっ！！ マジすかつ！？」

俺は身を乗り出した。

「ああ。三坂学園のすぐ近くだ」

「え・・・そんな近くに」

良かった・・・。

まだなんとかなるのか？

でもなんで学園のすぐ近くに？

いったい誰が・・・？

「でも、どうして居場所が分かったんですか？」

最初に浮かんだ疑問を聞いてみる。

「ん？ ああ、簡単だ。彼女は私のツボ・・・んっ、いや有名人の彼女が心配だな。昨日あった時に、盗聴器内臓の携帯・・・んっ、いやGPS内臓の携帯を渡しておいたのだよ。教えてないが、あれは色々特殊機能が着いていてな、スタンガンにもなるし、護身

用としても役に立つ」

なるほど・・・さすが如月さんっておいしいっす!!

教えとけよっ!!その機能っ!!

しかも、ダメでしょ、盗聴しちゃ!!

犯罪ですよ?

それから、是非、今度俺にもその盗聴を・・・

って、おいしいっす!!

まともな思考に戻せっ俺っ。

「ま、まあ深くは突っ込まないっす。。で、どうしたら・・・」
「質問はするな、ちゃんと説明してやる」

「君から聞いた情報で分析した場合、恐らく彼女を拉致したのは、
拉致屋だろう」

「拉致屋……ですか？」

「ああ、さらい屋とも言っな……まあよつするにヤクザが絡んで
いる訳だが、そついった商売を生業とするもの達もいる」

やっぱりヤクザか……。

事務所にも嫌がらせがあつたつて言っ話しだし、

昨日も襲われてたしな……。

「てことは、身代金目的の誘拐つて感じですかっ!？」

「いや、十中八九違うだろう」

きっぱりと言ひ切る如月さん。

え……じゃあどうしてと、困惑する俺。

「実は、今いる場所に心辺りがあつてな……」

「そつなんですか!？」

「まあな。ここには私設だが、研究所がある」

そう言つて、モニターを指差す。

三坂学園の、2つ隣の区画でカーソルが光っている。

結構大きい区画だ。

そこには、以前、如月さんがいたことのある研究所で一緒に研究をしていた、元同僚……いや、研究者仲間と言つた方がいいか、いわゆる顔見知りがが住んでいるらしい。

如月さんと同じ研究所で……。

てことは、やっぱりその人もかなり変わってるんだらうな……。

まてよ……てことは……

「まさか、白河を実験体にするつもりじゃ!？」

「それも違うな」

「じゃ、じゃあなんで……」

如月さんは、いつもの癖なのか、頭をボサボサとかきむしり、タバ

口を持った指で、

「教えてやる」と俺を指差した。

「彼は、私と同じ趣味を持つ、いわゆる少女愛好家だ。美少女をこよなく愛している」

なにサラツと自分の恥ずかしい趣味暴露してんだ、この人。

いやしかし・・・

「じゃあ、今のあいつ、やばくないですか!？」

「なにがだ？」

「だって、そいつロリコンなんですよ？ そんな変態野郎が少女拉致してすることって言ったら・・・」

「性奴隷か？」

「ぜ、絶対そうだろ」

「ふむ。君の心配も、もつともだが、それは無いだろう」

「私が保証する」と言い切る如月さん。

ま、この人がそう言うなら間違いないんだろう……。

……。

場所は変わって、ここはとある研究所の一室

私は眠らされ、気が付いたらここにいた。

そしてなぜか、可愛いらしい女の子と遊んでいる。

「真琴真琴……、次はなににして遊ぶ？ ん……プレスタはもうあきたしい……、携帯ゲーム機でえ、あ、それとも、カードゲームで対戦でもするう？」

「う、うん……ねえ、七星^{ななほし}ちゃん。それもいいけど、私、ここから出たいなあ……って」

「え……無理だよ。だってこの部屋、出口も入り口もないんだよ
お」

「そ、そうみたいだけど、七星ちゃんもずっとこのままじゃいやで

「しょ？」

「うん……でもお、この部屋、面白いものいっぱいあるんだもん」

この見た目、中学生位の女の子は、七星^{ななほし}ちゃん。

幼い感じがとっても可愛らしい。

ちよつと、雰囲気があいつの妹、彩乃ちゃんに似てるかな。

私はこの子に起こされた。

きつとこの子も、連れ去られたに違いない。

「七星ちゃんは、どこから連れてこられたの？」

「え？ えくとねえ、分かんないかなあ」

「分からない？ 覚えてないの？」

「ん、そうかも」

「遊ぼうよ」と、スカートを引っ張る七星ちゃんを横目に、この部屋を見渡す。

部屋には、普通に家具が据え付けられており、可愛いぬいぐるみや

ら、たくさんさんのゲーム機やら、占いのグッズやら、漫画本やら……
とにかく遊べるもので埋め尽くされている。

おまけにテレビ、ベッド、ソファ、まであり、冷蔵庫には食料も
たっぷり入っていた。

唯一ある扉は、開けるとユニットバス。

何度も確かめてみたが、他に扉は無かった。

完全に閉じ込められてしまっている。

「どじしよ……」

こんなところで、いつまでも居られるわけがない。

あゝ、携帯があればな。

持っていた鞆と携帯が無くなっていた。

万事休す……と思っていたら、

そういえば！

これがあったんじゃない！

如月さんから貰ったぬいぐるみを思い出す。

スカートの腰にぶら下げた、クマの可愛いぬいぐるみ。

取り外して、「どうやるんだっけ・・・」と考える。

横で、七星ちゃんが、「ああ、クマのぬいぐるみだ」を見せて見せてくと騒ぐ。

「ごめんね、ちょっと、向こう行ってて」

むう、つまらないと寂しそうにする七星ちゃんだけど、今はそれどころじゃない。

改めて、クマを見つめ直すと、

「こ、こうかな」と、そのお尻をむにいっと押した。

すると、モアモアの毛を掻き分け、にゅっと100円ライターのような物が出てきた。

ボタンが三つ付いている。

「確か、この青いボタンを押して・・・。」

カチッと押すと、テュルルルルと電子音が鳴り始める。

やった！

そう、これは、如月さん直通の小型携帯だった。

ありがとう！ 如月さん！！

すぐに電話は繋がった。

「白河か」

「如月さん！！」

「現状を説明出きるか？」

さすが、如月さん、もう事情が分かってるのね。

「え〜とですね、今、部屋に閉じ込められて・・・」

プシュ~~~~~

「あ……………れ……………わ……………た……………し……………？……………」

突然、霧のようなものに当てられ、気が遠くなる私。

携帯からは、「おいどうした、白河」「聞こえないのか?」「返事をしろ」

と、声が聞こえている。

が、その時、

グシャッ!という音とともに、携帯は足で踏み潰された。

そこには、ニヤリと不敵な笑みを作る女の子。

「ダメでしょ真琴、お痛しちゃ。もう少し、楽しもうかと思っていましたのに」

声が聞こえるが、良く聞き取れない……。

私は膝から崩れ落ち、倒れる瞬間

彼女の顔を見た。

幼い顔で、大人っぽい表情の女の子、彼女は

.....。

「ここが、その坂爪研究所なんですか？」

俺と如月さんは、白河が幽閉されている研究所へ来ている。

何しに来たかって？

もちろん助けに来たに決まってる。

しかも、

「あいつは私の顔見知りだ。一緒に行こう」

と、如月さんも来てくれたので、とても心強い。

目の前には、研究所というより、でかい屋敷。

てつきり、どこかの金持ちが住んでいるのかと思ったら、研究所だったとは。

「わざわざ、研究所らしくしても仕方がない。例えば、君の家のすぐ近くに何の実験をしているか分からない研究所があれば、どう思う？恐らく不気味に感じることだろう」

というのが如月さんの話し。

確かに、如月さんの研究所も見た目さっぱり、というか、その存在すら分からないようになってるけど。

しかし、屋敷の周りは、高い塀に囲まれているし、入り口も馬鹿でかい鉄格子の門になっている。

いったいどうやって中に入るっていうんだ？

どうしたもんかと、考え込んでいると、

「じゃ、行くぞ」

と如月さんは、門の端にある、インターホンを押した。

「ピンポン」

「ええ！？普通にピンポン！？」

「何が可笑しい？他人の家に来たというのに、この方法以外に何がある」

あ、いや、そうかも知れないけど、如月さんの事だ、きつとまたとんでも装備でドカーンと行くとばかり……。

「はい。どちら様ですかあ〜」

しかも普通に出了た!？

「お久しぶりです。如月です」

「あ〜、みくるちゃん、おひさ〜」

「今日は遊びに来ました」

ぶっ、なんですか！

その友達来ました見たいな感じは!？

「いいよ〜ん、入って〜」

しかもいいのかよっ!!

ゴゴゴゴゴゴと鉄格子が開く。

「その、坂爪さんとは、良く会ってるんですか?」

坂爪さんとは、坂爪博士。

その彼が、如月さんの元研究者仲間だ。

「ん？ ああ昔はな。ああなつてからは、一度しか会ってはいないが」

「ああなつて？」

「まあ、行けば分かる」

ふん、まあいいか。

如月さんが謎なのは、毎度の事だ。

しかし、「みくるちゃん」ってなんだ……？

突っ込みどころが多すぎる……。

門を抜け、庭を進む。

進む進む。

歩く歩く。

ひ、広い……。

門まで軽く100メートルはありそうだ。

しかし、庭？といっても、花や木のような植物は無く、閑散として
いる。

ただ広い。

本館は、趣おもむきのある洋館風。

だが、周りは無機質なコンクリートの建造物だ。

遠くには、別館のような建物がいくつかあり、さらには左右に見え
るプール場……。

これが私設だなんて、本当かよ……。

やっと玄関……大きな木製の扉の間まで来ると、

ギギイイとドアが開き、中から少女が現れた。

「ようこそいらっしやいました、どうぞ中へお入り下さい」

「へ？ 来栖先輩？」

黒いメイド服を着たその少女は 今日、屋上で会ったアイドルの来栖先輩だった。

いつもの怪電波は無いものの、まちがいない。

「先輩？こんなところで何やってんですか？ ひよっとしてメイド修行とか？」

先輩が居るなら白河も無事かなと、安堵した俺は、笑顔で聞いた。

「……………」

あれ？ 反応が無い。

ひよっとして機嫌悪いとか？

「俺の事忘れちゃったか？今日昼間、階段で一緒に居た……………」

「……………」

来栖先輩は、表情を全く変えず、俺を見つめている。

若干、首を傾けているのは、疑問系の意志だろうか。

可笑的い……。

何かが可笑的い。

疑念が渦巻く中、俺が一番聞きたい事を聞いた。

「話したくないなら別にいいです。ただ、白河は無事なんですよね？」

「……………」

白河の名前にも一切無表情だ。

これじゃ、埒らちが明かない。

こうなったら力技と、つい彼女に手を差し延べた時、

「やめておけ」

その間、沈黙していた如月さんが俺を制した。

「彼女はクローンだ。恐らく何も知らないし、何も分からない」

「クローン？クローンってあの、クローン牛だのクローン羊の、あれですか」

「ああ。一つの細胞から細胞分裂を起こさせ、全く同一の固体を作り上げる技術だ。当然、髪の毛1本あれば事足りる」

こ、この先輩がクローン……？

そ、そんな事って……マジか？

見た目全く一緒だぞ？……って、だからクローンなのか。

いやしかし、人間だぜ？

そんな馬鹿な。牛じゃあるまいし……。

俺が訝しがっていると、「現実を見る」と説明の続きが始まった。

「……だが、それぞれ遺伝子が全く同じでも、その固体の成長過程によって、見た目や外見は変化する。一卵性双生児、いわゆる双子が良い例だろう。彼らは、全く同一の遺伝子を持ちながら、互いに違う経験を得て内面や外見を変えていく。つまり……。

しまった！

例の病気が始まった！

確かに知りたい情報だが、何を言ってるのか、さっぱり分からん。

何とか話しの隙間に入らなければ、日が暮れてしまう！

「あ、あのー、もう少し分かり易く、短くお願いします。」

「ふむ。精一杯簡単に話したつもりだが・・・そうだな。要するに、この子はクローンだが、君の知っている先輩とは違って、経験を積んでいない。すると当然、筋肉の付き方や骨格も変わってくるはずだ」

ああ、なるほど。

つまり、運動すれば筋肉が付くし、牛乳を多く飲めば、骨も太くなるって事だろ？

「君が間違える程だ、この固体の完成度は相当なものだと言えるだろう」

なるほど・・・。

「話しかけても無駄なのは、経験・・・つまり、彼女は特定の会話しか、学習していない為だろう」

長い説明で、どっと疲れた・・・。

ようは、この子は見た目だけ、来栖先輩って事だな。

ややこしいので、こいつは先輩と呼ぶ事にしよう。

「案内してくれ」と、如月さんが告げると、「こちらへ」と、手招きして歩き出す先輩。

玄関から入ってすぐの広間から、目の前でかい階段を登って行く。

登る登る・・・。

どんどん登る。

しかし・・・百歩譲ってだ。

先輩がクローンなのは理解したが、どうして先輩なんだ？

如月さんの言葉を思い出す・・・。

『彼は美少女愛好家だからな』

……。

確かに、来栖先輩はアイドルだし美少女だけど……うゝむ……。

まいつか。

悩んでも分からん！

科学って凄いね！

などと考えつつ、階段をまだまだ登る。

だあああああ！！

どこまで登るんだよっ！

エレベーターは無いのかここはっ！

鍛える為に、一段飛ばしで行った方がいいですかね？

息が上がって、一人置いてけぼりをくらっている、階段が無くなり、突き当たりを曲がる二人。

最上階かよっ！

どんだけ客に失礼なんだよと思っていると、どうやら着いたらしい。

扉を開け、部屋へと入る二人に慌てて続く。

すると、可愛い女の子が出迎えてくれた。

「あ〜ん、みくるちゃん、会いたかった〜」

「お久しぶりです。坂爪博士」

え？ 坂爪博士って・・・。

こいつどう見たって、女子中学生だろ。

「あ〜、みくるちゃん、少し老けたんじゃない？いいの？そのまま
までえ」

「構いません。私は特に若返ることなど、望んでいない」

げ、若返るだって!？」

ま、まあそれはこの際スルーしてだ。

気になるのは、坂爪博士と呼ばれている、その女の子。

確かに、如月さんの話しじゃ、男だって……。

「そういえば、悠里ちゃんは元気?」

「はい。問題はありません」

性転換でもしたのか……?

「それで、今日は、何の用かしら?」

「はい、実は……」

「ちょっと、待って下さい!」

気になってしょうがない俺は、空気も読まず、その疑問を投げかけた。

「如月さんっ、ちょっと聞いていいですか？」

やれやれ、なんだ？と面倒くさそうにする如月さん。

「あー、その、如月さんの話しじゃ、坂爪さんって男だって・・・」

「ああそうだが」

何か？ と不思議な顔で見つめる。

「え？ だから、この人普通に中学生ぐらいの女の子じゃないですか」

ちっと舌打ちする如月さん。

はい？ なぜそこで、不機嫌に？

「面倒だ。後で説明してやる」

それでいいな？と俺を見る。

すると、黙っていた、その坂爪博士？が割って入ってきた。

「構わないわよ、説明なさいな、みくる。無知は恐れ、知識は力。分からないというのは、とても残酷な事ね」

「続けなさい」と、両腕を組み、後ろの木製デスクへと寄りかかる。

すると、如月さんは、ガシガシ頭を掻きながら、

「少しは自分で考えろ」と言いながら、「いいか？」と説明を始めた。

「彼は男だ。だが、正真正銘の女性でもある」

そんなのありえないだろ。

「てことは、性転換ですか？」

「そうではない。正真正銘と言っただろう。この坂爪という男は、少女を愛するあまりに、自らを女性に変えた。いや、変えたと言うよりだな・・・」

「もう、私の事は、七星ちゃんって呼んでよね。いいわ、私が説明して上げる、じれったい」

向こうで寄りかかっていた坂爪博士？が近づいてくる。

「私はね、自分の脳の一部を、この身体に移植したのよ」

「そしてこの身体を手に入れた私は、女の子に生まれ変わった」

お分かり？と手を広げて俺に問う。

脳を移植だって・・・？

バカな・・・、ありえないだろ？

信じられないといった顔をする俺に対して、如月さんは、

「信じられないか？だがこれが現実だ。その信じない、常識じゃないといった概念が、人の進歩を遅らせる。彼、いや彼女は間違いなく坂爪博士だ」

そう告げられる、二人から注目を浴びる俺。

さらには、何で分からないのお前、的な空気。

一瞬、場が沈黙する。

何でもありなんだな・・・。

この人達って・・・。

そして、沈黙を破ったのは坂爪博士。

「はいはい。おしゃべりタイムはそこまで」

如月さんへ向き直った坂爪博士は、パチンツと指を鳴らした。

すると天井が、ガバツと開き、無数の剣が落ちてきて、床へとザクザク突き刺さる。

な、何を・・・。

「さて、私のそんな過去を知っている貴方達には、消えてもらいましょうか？」

サツと博士が手を上げると、一斉に、ふわりと宙に浮く無数の剣。

ど、どうなってんだ・・・。

状況が理解できない。

しかも、なぜ剣が浮いているのか分からない。

きよろきよろと、必死に仕掛けをさがす俺。

「私を殺すのか？」

未だに落ち着いている如月さん。

「そうですね。フフフ・・・」

幼い顔で、妖艶に笑う博士。

そして、

「死んでくれる？」

とささやき、上げた手を振り下ろした。

と、同時に如月さんは、俺の身体を引き寄せると、

「すまん死んでくれ」と言い、俺を前方に突き飛ばした。

そして、宙を漂っていた剣がヒュンヒュンと飛んでくる。

無数の剣が次々に俺の身体に突き刺さる。

痛みを感じる間もなく、気が遠くなり、目の前が暗くなる、その僅かな瞬間、

横をすり抜け、電撃を放つ如月さんが見えた

そして俺は絶命した……。

と思っただが……。

目が覚める。

血の匂い……。

口の中に広がる鉄の味。

お、俺は……？

「ふっ、実験の成果が出ているな」

手を指し伸ばしてくる如月さん。

「俺、生きてますか？」

「ああ、そのようだ」

身体を確認する。

剣は抜いてくれたのか、刺さっていない。

傷口も塞がり、血は止まっているようだが、身体の内側が燃えるように熱い。

如月さんの手につかまり、起き上がる。

が、ふらふらと足がおぼつかない。

「これを飲め」

目の前には、ドス黒い液体の入った小瓶。

「なんですか、これ？」

「特殊な栄養剤だ。今の君はかなりの貧血状態だが、気休め程度にはなる」

俺は素直に受け取ると、

「それじゃいただきます」と、一気に飲み干す。

少し楽になった気がする。

そして栄養剤の効果なのか、頭の中が徐々に鮮明になってくる。

目の前には、乱雑に散らばる剣。

そして、シュ〜シュ〜と黒い煙を漂わせる、坂爪博士。

「死んだんですか？」

「まだだ。こんなものでは、こいつは死にはしない」

現実感のなさに目眩がする。

頭の中に、先程の光景がよみがえる……………。

……………ハツとし、叫ぶ。

「如月さん!! 酷いじゃないですか!! 俺を盾にするなんて
っ!!」

俺を見捨てるつもりだったんですか!!と詰め寄る。

「何を言うのだ? 私のおかげで二人共助かったのではないか」

全く悪びれる素振りも無い、如月さん。

はあ。

ま、いいか、生きてるし。。。

この人といると、俺まで大雑把になっていく気がする。。。

.....。

そして俺達は、白河を捜すべく、部屋を出た。

如月さんいわく、白河はこの階にいる可能性が高いらしい。

「博士は、大事な物は最上階に隠す癖がある」との事。

通りを見渡すと、部屋の数は結構ある。

「君はそつちを頼む」

手分けをし、部屋を次々に開ける。

以外にも鍵はかかっていない。

しかし、どの部屋も怪しげな装置が沢山並んでいる。

そうかと思えば、可愛い服ばかりの衣装部屋があったり、

お菓子で埋め尽くされた部屋や、来栖美月グッズ満載の部屋があったりする。

天才の考える事は、良く分からん……。

そして、何ヶ所かさらに調べたその次の部屋に、あいつは居た。

パンツ！

勢い良くドアを開けると、目の前にはいつもの制服を着た、白河。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

「白河っ!!!!!!!!!!」

思わず叫び、俺は走り寄る。

しかし、「?」「とした感じで、

きょとんと、女の子座りをしながらこっちを見上げている。

「おい、大丈夫かっ? 何か、されなかったか?」

「.....」

反応がない。

な、なんだこいつ.....。

その異様な笑い方に呆気にとられる。

嘘……だろ……。

そして、口からよだれを垂らしながら、

「あーあー」と楽しげに床をポンポン叩いては笑い、叩いては笑いを繰り返す。

「お、おい……な、なんだ……それ？」

「よ、幼児ごっこ……かな？ あははは、面白いなお前……よ、よし……そんな事してたら、またスカートの中見ちゃっぞぞ」

ほれほれと、スカートをひらひらしてやる。

しかし……

白河は俺の腕を掴むと、自分の口の前に手繰り寄せ、

いつも、気が強くて……

俺を殴ったり……

お……お前……

嘘………だろ

第7話へ続く

第6話 そして現実から非現実へ（後書き）

第6話 お読みいただき、ありがとうございます。

あ~~~~書いててしんどかった。

基本バカっぽいのか書けないんで、ちょっとシリアスになると辛い。

そして、今までと、少し路線が違うので心配だ・・・。

みはさんは、どう感じましたか？

だつてよお、見るよ今の白河。

俺がこうやって走る度に、「キャハハハハ」って嬉しそうに……。

お……おれ……う……グスッ

こゝんな白河じゃ、エッチな事も出来ねえじゃねーか……。

い、今ならそりゃ、触りたい放題さ……。

でも、そんな事できるか？ こんな白河に……グスッ

俺はもう、我慢できずに叫んだっ……！！

「白河にっ、白河にっ……！俺は、俺はああああああああああ
あああああああ……！！」

「正々堂々と……！エッチな事したいんだよおおおおおおおお
おおおおおおお……！！」

ゲシッゲシッガシッガシッ……

何か急に凶暴化してきたなーこいつ。

あーでも、元に戻ったんだ……良かった。

一所懸命、蹴ってるけど、大して痛くないし、可愛いぜこいつ。

ああ、蹴られて嬉しい。

これがドMってやつか……。

蹴られながら、俺はそんな事を思った……。

……

「君は信じられますか？」

「目の前に、白河が二人居ます。」

「さて、どうしますか？」

「？ どちらかが本物だ」

「？ セクハラして怒った方が本物だ」

「？ いやいや二人ともいただく」

「さあ！ どうするっ！！！！」

ガシッ

「痛ええええ！！」

「さあどうするっ？ じゃないわよっ！！ 君ってさー、バカなの！？
そっついっことはさあ、口に出して言わないでほしいんだけどっ」

はっ！ しまった！ そんなバカな！？

また口に出してしまったのか！？

まさか、テンパルと口に出てしまうシステムなのか!?

.....

はあ、そんな事を言ってる場合じゃないんですよ。

二人の白河を見る。

そう、目の前には白河と白河。

ただ、俺をボコった凶暴な方は、間違いなく本物だろう。

側には如月さんが無言で立っている。

どうやら如月さんが、本物を助けてくれたんだな。

だが、分からないのは俺の連れてきた、見た目白河にそっくりなこの子。

中身は全然違うけど。

もしかして.....またクローンなのか？

こんな時の如月先生。

「如月先生！！ 質問があります！！」

威勢良く、且つ優等生のように手を挙げる。

俺の惨劇を、生温かく見守っていた如月さん。

「全く、急に・・・楽しそうだな、君達は」

そう言って、白河救出劇を語り始めた・・・。

なんて事は無い。

どの部屋にもいない白河を、不審に思った如月さんは、部屋の間取りを確認。

すると計算の合わない場所を見つけたので、調べた（破壊した）ら、白河が居たと。

しかし、その時白河は、装置にかけられ、脳.....を弄.....られた.....らしい。

らしいと言つのは、そういう装置にかけられていたって話し。

だからって幼児化したわけじゃないぞ。

この子供っぽい方は別人。

白河本人には、まだ何も変化は見られないし目的も不明。

今の内はだ。

もしかするとその影響で、今後脳に何かしらの副作用が出る可能性もあるらしい。

脳だけに心配だが、「私にまかせろ」と如月さんが言うので、俺も白河も安心している。

ていうか、まかせるしかないし。

とは言うものの、気になって白河を見るが、

当の白河は、表情には全く曇りが無く、如月さんに完全な信頼を寄せているようだ。

呑気に自分そっくりな子が不思議で堪らないのか、その子の身体や顔をペタペタ触ったり、さすったりして自分と比べているようだ。

つて、胸まで揉んでるし……。

その子の後ろから、両手でサワサワする白河。

「あ、あつう……キャッキヤ……い……あ〜」

「あ……ちょっと私の方がおつきいかなあ……。」

自分と違う部分を見つけて嬉しいのか、胸対決で勝利した事の優越感なのか、なにやら得意気な表情を浮かべる白河。

なに張合ってんだよ……。

確かにそこは俺も興味あるけどさ。

ま、何をされたか知らんが、こいつは如月さんのツボらしいからな、最悪の状況にはならんだろ。

しかし、この子はクローンって事でいいのか？

如月さんは何も言わないが……。

考えるのも面倒なので、素直に聞く事にした。

俺 「じゃあ、こいつは何なんですかね？」

白河「こいつとか言わないでよ！ 仮にも、見た目は私なんだからねっ。」

2号「あううう……キャハハハ」

「君、この子大人しいからって、変なことしてないでしょうね？」

「し、してねえーしっ！！！」

俺達がぎゃーぎゃー騒いでいると、さすがに如月さんも呆れ顔。

「痴話げんかはやめてくれ。そろそろ真面目な話しなんだが」

痴話げんかと言われ、目を合わせ、「あ、あははは」と乾いた笑い
の出る俺と白河。

「白河君2号は、クローンで間違いない」

当然の如く、淡々と話し始める如月さん。

なんで科学者ってのは、そんな平然としてられるんだ？

人が一人作られてんだぜ。

しかも、こんな会話も出来ない状態に……。

そんな俺の悲しむ空気は全く無視され、クローンとは？の説明が、
白河の為にまた始まってしまふ。

そして予想通り、何度も同じ説明が繰り返される。

なんでこいつ、こんなに理解力ないの？

とは、言わない。

むきになりそうだから。

「クローンだとして、さっきの来栖先輩とは明らかに違うのは、どうしてですかね。」

「ねえ、来栖先輩って?」

「ねえねえ、ってなに?」

「ねえってば~~~~~」

服を引っ張るねえねえ魔人は無視して、如月さんの説明が始まる。

「来栖君は、クローンとして誕生後、ある程度の教育を受けている。それに対して、白河君2号は、まだ誕生したばかり、端的に言えば、そういう事だ。」

白河が、「教育ってなに?」と、小声で聞いてくるが、当然面倒なのでスルー。

「来栖君も含め、彼女達は、ここまでの成長を培養液の中で過ごしている。身体は大人になっても、経験が蓄積されていない脳は、赤ん坊のまま。という事だ」

くそっ、培養液の中だった!?

じゃあ、この子は子供の頃の記憶も無ければ、親の事も知らないってことだろ。

何となく考えてはいたが、あまりに可哀相だ。

しかも、生まれてきたらいきなり高校生の身体って……。

そんなのってないだろ。

隣で、ねえねえ魔人がまたうるさいが、無視。

戦場で立ち止まる奴には、死あるのみ！

「些細な事だが、補足で説明すると、当然、普通の子供がするであろう体験を、彼女はしていない。例えば、子供はおねしょをするが、大人はしない。それは脳が覚えると、寝ている間の分泌量が減り、体内調整を自動的に行えるようになるからだ。あくまで予測だが、確信でもある…彼女は白河君の姿をした赤ん坊だ。起こり得る事象に対して彼女は何の対策もされていない」

分かるか？と俺達を見る如月さん。

嫌がらせのように難しい言い回しだったが、俺は大体分かった。

その直面してはいけない危機に。

対する白河は、完全に頭がポカんとオーバーヒート状態。

ねえねえ言う気力も無いようだ。

困るのは、たぶんお前なのに。

「要するに……俺、言ってもいいですかね」

「構わん。続けてくれ」

「白河2号機が、恐らく、おしっこ漏らすし、おねしょもするって事ですよね?」

「そつだ」

ようやく、ことの重大さが理解出来たのか、「うそ……」と徐々に赤面していく白河。

「や、やだ……じゃあ、この子、その……お漏らし……」

まあ、確かに困ったな。

そんな状態の白河を俺も見たくない。

本人じゃないとしても。

かといって、このままこの屋敷に残せるか?

見ちまった以上無理だ。

たとえクローンで作られた物だとしても、一人の人間なんだ。

こんな所で、実験扱いされてたまるかってんだ。

隣で、白河が「我慢してね」と2号に抱きついてる。

この光景だけ見ると、可愛い白河が二人に増えて、見た目かなり癒されるんだが。

「まあ、理由を先に把握しておけば、慌てない。そう言うことだ」と、如月さんがその話題に終止符を打つと、俺達は立ち上がった。

.....。

ええ、座っていたんですよ。

2号が立っていられないんで。

で、俺が2号をおんぶしようとするのだが.....

触ろうとすると、バシッと手を払われる。

もちろん1号に。

どうしろってんだ……。

「おんぶなんかさせる訳ないでしょ。いやらしいわね」

「あのな、こいつはお前とは違うんだぜ？見た目は同じでも、中身がお前じゃなきゃ、エッチな気分なんかには、ならないんだよ」

「ふん。そ、そう……そうなんだ」

どうしてそこで、赤くなる？

わけ分からん。

2号を背負う。

基本、素直で大人しい。

それが唯一の救い。

胸を押し付け、頬を俺の後頭部にすりすりしてくる。

「うん」とたまに漏れる声が可愛い。

ふっふっふ。

俺がお前に本音を言うとしても、思ったか。

ぶわ〜〜か。

こいつは、こいつで可愛いんだよう。

じーーーーーーー。

と、俺をジト目で1号が睨んでいるが動揺を見せてはいけない。

今は、大事なイベント中なんだからな。

男だからって、損な役割だぜ。

的な表情を崩さない俺。

完璧だな。

よし、じゃあ、どこに向かえばいいんだ？

「如月さん、どうしますか？ このまま研究所に行きますか？」

「私は博士に用事が出来た。お前達は3人で、先に研究所に戻れ」

返事も待たず、スタスタ一人で行ってしまっ、如月さん。

.....

ちょっと悩んだが、俺達は帰るか。

女子二人もいる事だし。

あと、こいつ事だろ？

如月さんが、変態博士を相手している間に、白河達を連れて行けと。

了解す。

まかせとけ。

あーしかし、こいつ抱えたまま、また階段下りるのかよ.....

階段を下りながら白河と話す。

「でも、結局、私を誘拐した人って誰なんだろうね」

はい？ ああ、こいつ何も聞いてないのか。

「坂爪博士って言う、如月さんの元研究者仲間だよ」

「そ、そうなんだ・・・私をどうする気だったのかなあ」

「ん〜、分かんねえな。・・・お前と会う前に、その人には会ったけど」

如月さんなら、事情を知ってるかもな。

「そっか・・・その坂爪博士って、女の人なの？」

「いんや、男。たぶんおっさんだ。ただ、見た目は女」

「おかまっつてこと？」

「本物の女。科学力だか医学力だか知らねえが、自分を女に変えちまった。しかも、若くて可愛い女の子にな。キモイだろ？」

ま、脳移植だとか、細かい部分はいいだろ。

聞かれても説明出来ねーし。

白河は、そんなことが出来るの？と、不思議な顔だったが、やがて信じられないだの、キモイだのぶつぶつ言っている。

そう言えばたしか・・・

「自分の事、七星ちゃんって呼んでね。とか言って、超キモかったぞ」

そう言つと、七星ちゃんて・・・と考え込む白河。

やがて、顔を両手で押さえると、立ち止まり悲痛な声を上げた。

「!?!? う、うそぉ〜!.....げろげろ〜〜あの子があ?..
・超やだぁ〜」

思わず白河を見つめてしまつ、俺。

『げろげろ〜』、じゃねえよ。

アイドルだろお前。

しかも俺の中でお前は、たまにパンツ見せてくれる、エロ天使様なんだらなつ。

イメージを大切にしろ。

パンツの為に。

.....。

くだらない会話をしつつ、足早で階段を下り、やっと地上に辿り着く。

玄関はすぐそこ、大広間。

「無事、出られそうだな。」

と、安堵していると、俺達の前に女の子が現れた。

「七星様のご命令です。あなた達を殺します」

「み、美月……ちゃん？」

現れたのは、メイド服の女の子。

先輩 だった。

無表情のその顔は、相変わらず何を考えているのか読み取れない。

「殺します」と言われても、殺意のようなものは感じられなかった。

感情はないんだろうか。

白河2号とは違って、その雰囲気は機械的なものを思わせる。

「み、美月ちゃん、なにしてるの？ 美月ちゃんも、誘拐されたの？」

困惑する白河。無理もない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当然、白河の問いには全く答えず、パチンと指を鳴らす先輩。

すると、上から無数の剣が落ちてきて、次々と床に刺さる。

ま、マジかよ!? またあれか!?

博士と対峙した時の惨劇が、頭によぎる。

この場に、如月さんはいない。

俺がなんとかしなきゃいけない。

俺に出来るのか!?

「あいつもクローンなんだよっ!下がってるっ白河」

俺は瞬時に叫び、「こいつを頼む」と2号を白河にまかせると、どこか二人を安全な場所へと・・・・

待つてはくれなかった。

先輩 が、手を挙げ、剣が浮遊する。

そして素早く、その無数の剣の切っ先がこちらを捉える。

一体どんな仕掛けなんだよ!?

などと、考える余裕はない。

俺は焦り、彼女に向かって猛然とダッシュした。

どうせ俺は死なねえし!!

「同じ技は通用しないんだよっ!!」

振り下ろされる彼女の手。

腕で顔を守りながら突き進む。

剣が飛んでくる!!

後ろで「キヤアアアアア!」と叫び声上がる。

「くそっ!!」

「ぐあっ!! あだっ!!」

腕と肩に剣が刺さり、さらには、足や身体をかすめ、傷がどんどん増える。

しかも、剣はまだまだある。

第2射、第3射と次々に放たれる剣の銃。

白河をやらせねえっ!!

「!!!!!!ぐおっ!!!!!!」

太ももに一本刺さり、ズザザザーと見事にコケる。

が、すぐに自分で抜き、立ち上がる。

この時、極限状態の俺は、あまり痛みを感じていなかった。

先輩 が手を挙げ、第4射が打たれようとしている。

距離はもう近い。

恐らく、あれが打たれたら、全身を貫かれるかも知れない……。

動かない片足を恨めしく思い、俺は前方に飛んだ。

剣がヒュンヒュンと、耳元を通過する。

床を前転でゴロゴロ転がりながら、その場を微動だにしない先輩へと接近。

そして遂にその腕をつかんだ。

「……………」

何の反応も無い、先輩。

俺は「ごめん」と言って、腹に全力の一撃を叩き込んだ。

先輩 は、うずくまり、動かなくなる。

助かった……。

腕と肩の剣を一気に抜く。

「……………ぐっ……………」

骨をゴリつとした感触！

刺さった時より痛い……！

たまらずその場で無様にのたうちまわる。

しかし、すぐに回復。

前回と違って、腹や胸にダメージが無い分、だいぶ楽だ。

はっ！

そういえば白河は…！

慌てて振り向くと、遠くで2号を守るように抱き包んでいる。

ほっと、安心したのも束の間。

瞬時に俺の顔は青ざめる。

良く見ると、背中に何本もの剣が刺さっている。

信じたくない現実に、ただ呆然とし佇たたずんでしまっ…。

「白河あああああああ…！！」

我に返った俺は叫び、走った。

まさか、死んじまったなんて事…。ないよな。

最悪な光景を予想し、頭が混乱する。

「あつ？」「とこちらをきよとんと見つめる2号。

「白河っ！！大丈夫か！！」

近寄り、急いでそつと肩に触れる。

瞬間、力無く崩れ落ちる白河を抱きとめると、

い、息をしてない……。

う、嘘だろ……

ど、どうしたら……

「まさか、本当に死んだ……のか……お前……。」

彼女の背中を見る。

絶対に死んだとしか思えない量の剣が刺さっている。

でも待て。

白河も注射を打ったんだ。

坂爪博士にやられた俺は、これよりも酷かったはず……。

俺は落ち着け落ち着けと、自分に言い聞かせ、彼女に刺さった剣を抜き始めた。

1本、また1本と。

なんでこんなに刺さってたんだ、ちくしょー……

涙目になる。

そして最後の1本。

それを見た瞬間、俺の口から嗚咽がこぼれた。

「う……うう……な、何なんだよ、これ……グスツ……何で、心臓……に……グスツ……うう……心臓じゃねえ……かよ……」

まさに心臓のど真ん中を、それは貫いていた。

さすがに治癒能力が高まっても、即死……じゃ……ねえか……。

絶望的だと思った。

でも、あきらめきれなかった。

ゆっくりと引き抜く……。

大量の血が、ジワッと滲む。

そっと、彼女の胸に耳を当てる……。

心臓は動いていない

そのころ、如月は、坂爪博士と対峙していた。

二人の間に火花……は散っていない。

落ち着いている。

いや、お互いソファーに腰かけ、むしろ親しい間がらのようだ。

「さすがだな。もう復活したのか」

「もう、みくるちゃんったら、本気だすんだからあ。死ぬかと思
ったわ。あ、ごめんね、お茶でもいかが？」

「ふむ。それもいいな」

ちよつと待ってねえと、側にあったティーセットで紅茶の準備を
する博士。

やがて二人は無言でお茶を始める。

そんな、和やかな雰囲気の中、会話を始めたのは坂爪博士だった。

「もういいわ。私の負けで。今回は手を引くわ」

「そうですね」

「もう手は打ってあるんでしょ？」

「ああ。私が戻らなければ、この研究所で貴方がしている事が、公
になる手筈です」

「そう。ま、そんなのはいくらでも揉み消せるけど、面倒だわね」

「白河君になるつもりでしたか？」

「まあね。この身体にも飽きてきたし。それよりも、クローンを連れて帰ってもすぐ死ぬわよ？あれは失敗作だし」

「そんな事は構わない。それより、白河君の脳に何をしたんです…？」

・・・・・・・・・・・・・・・・。。。

白河のシャツのボタンを一つ、また一つと外す…………。

あらわになる、花柄の下着。

「…………グスツ…………」

泣きながら見つめる俺。

何してるかって・・・？

心臓マッサージしようと思ってな・・・グスッ・

胸の谷間に重ねた両手をあわせる。

「よしっ！」

パンパンと自分の顔を叩き、涙を止めると、

俺は力強く、体重を乗せ押し込んだ。

「ふんっ」

・・・。。。

ダメだ。

ブラのせいで、若干心臓の位置とは違う。

カップの部分に手をかける・・・。

こんな事で裸を見たくなかった・・・。

正直、思う。

震える手で、少しずつ上げる。

たわわな膨らみが少しずつ現れ、その先端が顔を出そうと・・・

する瞬間。

パシン

顔を軽くぶたれた。

「や・・・め・・・て・・・よ・・・へんた・・・い・・・」

弱々しく囁いた声。

白河が目を開けていた。

「し、白河~~~~~」

無抵抗の彼女を強く抱きしめ、大泣きしてしまった。

.....。

俺って、こんなに涙もろかったっけ.....。

しばらくして、彼女は大分回復した。

「あ〜ん、でもダメ・・・まだ頭がクラクラするよう」

まだ立ち上がれないご様子。

無理もない、結構出血したしな・・・。

でも良かった、マジで.....。

今日は本当に、如月さんに感謝してもしきれない。

あの注射がなければ、確実に死んでいたんだ。

もうこんな危険な所はこりこりだ、早く出よう。

しかし、こんな血まみれの状態では帰れない。

俺も白河も、服はボロボロ、血でべったり。

「服をなんとかしなきゃ・・・」

どうする・・・？

しばらく考えて、思い出す。

たしか、最上階に衣装部屋があった。

着れそうなやつ、いただいちゃうか。

そう、思い、白河に告げる。

「着替え、持ってくるから、待っていてくれ」

どこに行くの？と不安そうな白河に後ろ髪引かれつつ、走り出す。

階段に向かう……と、その前に、

念の為、先輩　の手を縛っとくか……。

復活すると面倒だ。

ズボンのベルトで手をきつく縛り、

「こんなもんだろ」と、階段を登り始める。

ぜーはー言いながら最上階に辿り着き、部屋を探す。

たしか……。

バンッ

勢い良くドアを開け、ビンゴ！　衣装がぎっしり衣裳部屋発見！

すぐに物色を開始する。

しかし………。

どれも微妙。

だって、全部見た感じコスプレ用だもん。

一つずつ手に取る。

ナース、警官、スチュワーデス、どっかのゲームで見た女の子の制服……。

水着……当然却下。

プラグインスーツ……ありえねえ。

……あつた!!

奇跡だ！三坂学園の制服!!

しかも男女揃って！

さすが変態博士。

.....

しかし俺は、男子用だけ手に取り、女子用は元に戻す。

ふっ、バカな俺としたことが。

普通に制服着せてどうする？

まあ、あれも可愛いけど・・・。

今日はどれにすっかな〜。

ルンルンで物色する俺。

白河が無事復活しテンションがかなり高い、今の俺。

お、ラムちゃんの水着。

古典的だねえ〜。

ふと思い出す。

先輩の黒いメイド服。

フリフリひらひらのミニスカート&白いニーソックス。

あれだ・・・あれないかな？。

メイド服で、「ご主人様なんでもご命令下さい」「とおじぎりする白河を思い浮かべる。

ニヤリとする俺。

しかも・・・あった。ありましたよ。

オーケーもう用は済んだ。

服を片手に抱え、戻る。

3段飛ばしで階段を下りる。

戻って来た俺は、

「すまん、着れそうな服はこれだけだった」

と、真顔でメイド服を手渡した。

「あ、ありがと・・・」と、素直に受け取る白河だが、服を広げて文句たらたら。

いつもの元気は無いけど、もう大丈夫みたいだな・・・しかし、

「んん、メイド服って、前から興味あったけどお。今着るの？この状況で・・・これ着て帰るのかあ。やだなあ、恥ずかしいかも・・・」

なかなか踏ん切りをつけてくれない。

そんな白河に対して、俺は先輩 を指差し、

「先輩、すげえ似合ってたじゃねえか。それに白河の可愛いメイド姿、俺見たいし、この状況で着替えがあるだけマシなんだって。」

そう諭すと、「分かったわよ・・・」と小さく返事をして、お手洗いへ向かう白河。

都合良く、近くにはデパートにあるような見事なお手洗いがあり、俺もそこに行く。

急いで血を洗い流し、いただいた制服に着替える。

そして大広間に戻り、まだかな々と待つ。

「あー、あー」と剣に近寄ろうとする2号を見つけ、慌てて側に座る。

しかし遅いな……。

なんかあつたかな。

覗いてみるか？

いやいや殺されるだろ。

うむ。

お！来ましたよ。

ちゃんと着てますメイド服。

OK。一緒に持ってきた、ヒールの付いた黒い靴も履いてるな。

近づいてくる。

「な、なによ・・・そ、そんなに見るなっ！」

サイズが合わないのか、パツンパツンに張った胸の辺りを、恥ずかしそうに押さえている。

ふ、やはりな。

このメイド服は、あのロリ博士用。

サイズが合う訳がない。

もじもじと、短いスカートの裾を押さえる感じがたまらない。

新鮮だ・・・。

今日中に「ご主人様」と言わせてやる・・・。

.....。

その後、タクシーで帰った俺達3人は、研究所で如月さんを待っていた。

やっと落ち着き、テレビを見てみると、「白河真琴拉致される」のテロップ。

ニュースになっていた。

途中、警察も見かけたし、騒ぎになっているらしい。

ま、通報したしな。

横では、白河がマネージャーに無事を報告しているようだ。

その後もまったりしていると、ある事を思い出した。

2号におむつでも買わないとダメか……？

しょうがないよな。

だって、あの子漏らしちゃうんだし。

白河の隣で、大人しくソファに座っている2号。

現状、解決策は他に思いつかなかった。

「じゃあ、俺、この子用に、おむつ買ってくるから」

そう言っつて、ここを出ようとする俺は後ろからガシッと掴まれる。

「ま、待ってよ、ちょ、ちょっと神崎君。何さらつとそんなこと言うかなあ」

「だって・・・しょうがねえじゃん」

「そ、そうだけどさ・・・」

なにやら、つま先で床をトントンして考え込む白河。

「私が行く」

「いいよ、俺行くから」

「いい。私が行く」

女の子にはいろいろ必要なの！とその後も食い下がるが、その格好で行けないだろ？と説得し、買出しに出る。

たしか、近くにドラッグストアがあったはず。

適当に見つけ物色する。

子供用じゃないな・・・大人用と。

すぐに見つけ考える・・・。

他に女の子って、何がいるんだ？

あいつ、いろいろ必要なんだからって言ってたよなあ。

あーあれだろ、あれか・・・。

店内を探し周り、ようやくそのコーナーを見つける。

そう、今俺は、生理用品売り場にいる。

しかし……

こゝれはきつい！

さすがに無理っ……でも買ったほうがいいよな？

「女の子の事、分かってないんだから」とか言われるのも癪じゃくだし……。

どれがいいんだ？

とりあえず、普通の布っぱいのを買っ。

あとは……なんだか棒状の箱に入った物があるぞ。

んん~~~~~なんか、CMとかで見たことあるなあ。

あいつ、どっち使うんだ？

同じ白河なんだから、あいつが使う方でいいんだろ？

面倒くせ、両方買ってあいつに聞けばいいか。

よしっと、とりあえず何個か手に取り、レジへ向かう。

レジには…………。

強敵が待っていた。

それは…………

なんで、クラスの女子がいるんだよ…………。

バイトですかねえ…………。

へこんで他のレジを見ても店員がない。

手には、大人用おむつと生理用品がいっぱい…………。

どうやって乗り切る？

しかし、いい案は思いつかなかった・・・。

ば、バカってんじゃねえよ、店の商品買ってなにが悪いってんだ。

俺は開き直り、堂々とレジへ向かった。

そして、

「ああ、神崎じゃん。どったの？やだあ、こんなところで奇遇だねえ」

と、速攻でバレる俺。

可愛く微笑む彼女の顔を見て、つい商品を隠してしまう。

しかし！

「ああ、ちよつと妹に頼まれてな」

と、何食わぬ顔で商品突き出してみる。

「う・・・うん」

「どうした？」

「え？あ・・・まあ、自分におむつ履かせるって思うとなんだかなあって」

「元気なくうなだれる白河。」

「じゃあ、俺がやるか？」

「！！！！！！ バカ言ってるじゃないわよっ！変態っ！！わ・・・私
がやるわよ」

まあ、今それが出来るの、お前しかいないし。

あーあれも聞いて渡しておくか。

必要だろ？

俺は生理用品を袋から取り出した。

「えっ、ちょ、ちょっとなに買ってきたの・・・」

そして、ビニールで包装された物と、箱に入った物を手に取り聞い

た。

「お前、これとこれ、どっちつかってんの？」

「!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

一瞬見つめ合い、時間が止まる・・・。

しかし、急激に真っ赤に顔を染める白河。

そして、プルプル肩を震わせて、

「じ、じじじじじじ」

「じっ」

「じじ、こんなの使わないわよ私はああっっっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

コンッー!!

手近にあった灰皿（中身入り）を投げられる。

「ぶ、ぶはああ！灰が、灰が目につ！！！！め、目が死ぬ、た、助けて！」

「なんで君はいつもいつもセクハラするのよっ！！！」

「くっ！！目がザラザラする！！　だって、お前、生理の時、どうしてんだよっ！！！」

「うるさいっ！！　ちや、ちゃんと着けるし……って、……もお
~~~~変態っ！！！」

その後も戦闘が続いた事は言うまでもないが、

なぜあんな苦勞して、こんな酷い目に……。

程なくして、如月さんが戻ってきたが、既に俺はボロ雑巾と化していた。

そして今は、白河の身体チェック中。

カプセルに入れられ、如月さんが端末を操作している。

幸い、例の注射のおかげで、傷は既に皆無。

軽い貧血なだけだ。

しかし、心配なのは、脳への作用。

今のところ、なにも感じられないが……。

そしてチェックが終わり、如月さんは、結果を話し始めた。

坂爪研究所にて、脳を弄られた。というより、干渉を受けたらしいんだが、

白河の脳には、変化があり、特に前頭葉に大きな発達が見られるらしい。

ただ、それは悪性のものではなく、脳がさらに成長を遂げようと変化を起こしているという事だ。

だからどうした？

としか思えないんだが、現状問題はないので、このまま如月さんが

調べていくそうさ。

「しかし、問題は他にもある。二人共、身体に重症を負った。だが、細胞活性のおかげで、すぐに回復している」

「そうですね。俺達、結局あれのおかげで助かりました」

「そうそう、私も死んだと思っちゃったしい…剣が刺さった時の感覚がまだ身体に残っててえ…思い出しただけでも死にそう」

死にかけてというのに、あっけらかんとしている白河。

案外タフだな。

しかし…あの効果がなければ、たぶん死んでいた。

俺も白河も。

「ああ、だがそのおかげで、テロメアが減りすぎているようだ」

へ？それって結構大事な物だったような…。

「そうさ。君達の寿命はもってあと1年」

な、なんだって!?

「しかし、これを飲めば回復する」

食後に飲めよと渡された物は、普通のカプセル剤だった。

そんな簡単に!?

「但し、副作用がある」

.....。

俺は今、研究所を出て帰り道だ。

白河はマネージャーが迎えに来てくれるらしい。

あいつ、今日の事、周りになんて説明するんだろ？

まあいいか。

2号は如月さんに預けてある。

如月さんいわく、「この子は心臓や内臓が極端に弱い」との事で、現状は通常の生活が出来ないらしい。

そして、白河の脳の変化。

全く、いろいろあったな今日は。

そう言えば、結局副作用って、何なんだ？

明日になれば分かるって言ってたけど……。

気になるけど、飲まなきゃ死ぬって言われたらなあ。

そんな事を考えつつ、その夜、カプセルを飲んだ俺だった……。

そして翌朝

妙に寝起きが良かった俺は、鳴る前に目覚ましを止めた。

着替え、リビングへ下りる。

そして、朝食の用意をする妹に、「おはよう」と朝の一言。

時間があるので、新聞を読みながら朝食が出来上がるのを待つ。

「兄さん兄さん、ジャムとバターどっちがいいですかあ？」

パタパタと準備をしながら妹が聞いてきた。

「バターで頼む。」

即答すると、はいと返事が聞こえる。

そして、新聞のある記事で目が止まる。

白河真琴誘拐事件

ただ、記事には、白河が途中で逃げ出した為、未遂・・・となっている。

なるほど。

そうしていると、妹が朝食を運んできた。

「兄さん兄さん〜〜、出来ましたよお」

いつものように、楽しそうに近づく妹だったが、俺の顔を見るなり、ちよっといいですか？と、間近で覗き込む。

じいじいじいじいじい。

見つめられる事、数十秒。

何か付いてるかなと、頬を触ったその時、

妹が、ガシャンと持っていた皿を落とした。

「に、兄さん……か、顔が、顔が……あわわ……」

俺の顔がどうした。

なにやら驚いて妹が絶句しているので、俺は洗面台へと向かった。

鏡を見た俺は、

「なんじゃこりゃあああああああ……!!」

鏡に写る自分は、とても幼い顔をしていた



第7話 白河と2号と副作用（後書き）

第7話 こんなに読んでいただき、ありがとうございます。

しかし、今回もしんどかった〜。

キャラが増えるときつい・・・。

ああ、こんなんで面白いんだろうか・・・。

## 第8話 カラダの変化ってなに？

俺は教室の中で、極力目立たないようにしていた。

だってさ、俺の見た目、中一ぐらいに若返ってるんだもん。

そりゃもう、朝見た時はびっくりさ。

こんな非常識、心当たりは一つしかない。

如月さん……。

例のカプセル剤の副作用。

まあ、後で説明してもらおうさ。

彩乃には、「バイトの成果だ」とだけ言っておいたが、自分と同一年位の見た目になった俺が嬉しいらしく、「同級生みたいですよ」と言ってるルンルンで腕組みしながら登校してきた始末。

なんだかなあ。

受け入れるの早すぎだろ。

普通、心配しない？

兄が若返ったら。

しかも、クラスのやつら、誰一人その事に気付いてないし……。

その方が都合がいいけどさ。

そんなに俺って影薄いのか？

しかも、前の席で大あくびをしているこの男。

坂崎慎太郎君。

「お、神崎、イメチエンか？」

イメチエンか？じゃねえよ！

そんな一言で片付けやがって！

背が10センチも縮んだ友人を見て、言う台詞がこの野郎。

馬鹿はほつといて、俺は気になる席を見る

斜め前方をチラチラ見る。

白河は来ていない。

今日はこのまま、来ないんだろうか？

いつも遅れて来たり、早退したりと、忙しいあいつ。

アイドルの仕事、再開したのかな？

いやいや、絶対あいつも俺と同じような目にあってるはず。

同じ薬、飲んだはずだし。

さては、恥ずかしくて学校来れないんだろ。

ふっ、青いな。

.....。

授業中、担任の先生が、「お、神崎」と話しかけてきて、注目を浴びた時はドキッとしたが、

「なんだか、今日は可愛らしいな、お前。イメチェンか？」

と、またしても瞬殺された俺。

けっ、いじけてやる。

そんなこんなで昼休み、俺は食堂に来ていた。

当然、食堂はいつもの如く生徒で溢れ、数量限定の定食にありつこうと食券売り場が戦場と化している。

俺は戦う元気も無く、きつねうどんを購入。

そして食堂の隅っこで、一人ずると食べていた。

すると、「ご一緒しても構わないかい？」と、奇特な奴が現れた。

目の前に座ったこいつ・・・いや先輩は、たしか・・・さいがしゅつごち齊賀秀一。

「一人寂しく、昼飯かい？」

「ほつといて下さい。来栖先輩は一緒じゃないんですか？」

馴れ馴れしい雰囲気で話しかけてはいるが、はっきりいって初対面。

何の用なんだ。

「ああ、彼女は事務所で食事中さ。会いたかったかい」

「いえ別に」

そっけなく返す。

人を見下すような態度で話すこいつに、俺は嫌悪感を抱いていた。

ちなみに俺は知っている。

こいつは、来栖美月先輩が所属する事務所の社長、兼マネージャー

だ。

なぜ高校生が？って思うだろ？

こいつはとんでもない金持ちってことで有名で、ほとんど金の力で来栖先輩をアイドルデビューさせたって噂だ。

しかも、学園内に仮事務所まで建造しちゃった。

な？聞いただけでも気分悪いだろ？

「そんな邪険にしないでくれ。仮にも僕は先輩なのだから」

そう言って、髪を掻きあげるその仕草が、ナルシストな感じで気持ち悪い。

女子には人気あるみたいだけどな。

関わりたくないと思った俺は、さっさと切り上げるべく、

「用がないなら、失礼します」

と、食べかけのうどんを持って立ち上がった。

すると先輩は、「ちょっと待っててくれないか」と言って、

「君は最近、白河真琴と仲が良いらしいじゃないか」

ニヤリとする齊賀先輩。

その言葉にピクツと反応して立ち止まる俺。

「まあ、同じクラスですし、多少は仲良いと思いますけど」

当たり障り無く返すと、「そうですね」と携帯を弄りだす先輩。

「成程。多少仲が良いと、彼女はこんな事もしてくれるんですねえ」と、携帯の画面を見つめる。

「見たいですか？」

ニヤけ顔のまま俺に問う。

気になるがムカツクので、「結構です」と断る。

しかし、ふふふと気持ち悪い笑みを浮かべ、

「見た方が君の為ですよ、神崎君？でしたよね。写真より、幼い感じがします」

そう言つと、携帯の画面をこちらへと向けた。

そこに写っていたのは……。

「な!?!?!?!?!」

俺は言葉が出なかった。

予想出来なかったとはいえ、それは人に見られたくないものだった。

携帯には、恥ずかしそうに、俺に弁当を渡す白河の写真。

そう。

これはたぶん、来栖先輩がふざけて撮った、あの時の写真だ。

なぜ、こいつが持つてる。

いや、こいつは来栖先輩のマネージャーだ。

接点はいくらでもあるか。

俺がどう言い訳しようか考えていると、ニヤけ顔の斉賀先輩が話しを続け、

「どう見ても付き合ってる感じですね、二人は。おめでどうい  
ます」

と馬鹿にした態度。

こ、こいつ……。

何をしたいんだ。

「いえ別に二人の愛を邪魔するつもりではないですよ。むしろ応援  
しようかと」

「どういう意味ですか」

「このまま付き合って、彼女に言ってほしいんですよ」

「何をです?」

「アイドルをやめて、自分だけのものになってくれと」

ふふふ……と、不敵に笑う。

アイドルをやめろだって?

馬鹿言っつてんじゃねえ。

大体、俺達はそんな仲じゃねーし。

「俺が言っても無駄ですよ。ぶっちゃけ俺嫌われてるし」

「成程、白を切ると。まあ、僕は構いませんよ。それならこの写真をネットに流すだけですし」

「楽しいですね」とニヤけ顔をキープしている。

こ、こいつ。

白河を潰す気なのか……？

「ま、どうしようと貴方の自由ですよ。思わぬ収穫について嬉しくなつて、貴方に声をかけてしまった。僕も心配してるんですよ。何でも、白河さんの事務所には色々嫌がらせがあるとか。しかも誘拐未遂まで起きてしまつて。いやはや、アイドルって大変なんですねえ」

「て、てめえ……」

「それでは、彼女には気を付けて下さいとお伝え下さい」

そう言い残すと、「ふふふふ」と含み笑いをしながら、この場を去る斉賀先輩。

奴が見えなくなるまで、背中を睨み続けた俺だった……。

.....。

放課後

俺は、如月さんの研究所を目指していた。

まあ最近の、いつものパターンではある。

斉賀の野郎も気になるが、身体の事も知りたい。

しかも、俺は既にバイト代を貰っている。

何も無くても、顔は出さないといけない。

さらに、いろいろ考えながら研究所まで辿り着く。

目の前には壁。

いつものように手をかざす。

すると、ウィーンと予想もつかない音を立てて壁がスライドする。

部屋が現れ、中に入った瞬間、

「あ、神崎く……ぷっ、アハハハなにそれえ〜。」

白河に笑われた。

口を押さえ指を指しながら、俺を見て笑ってやがる。

「お前だって人の事、笑えねえぞっ。」

そう。白河も幼くなっていた。

見た目中学生の俺に対して、こいつ……。

「ぷっ、クククククク……。」

「わ、笑うなあ〜。しょ、しょうがないでしょう……しばらくこのままだっというしい……。」

「ぷっ」ダメだ。

こいつ、見た目小学生だよ……ぷっ。

しかも、こ、声まで……ぷっ……クク……妙に高くなって、声変

わり前じゃね〜か。

面白すぎる。

「な、ななな・・・なによっ！ その、哀れむような馬鹿にしたような目線はっ！！ そ、そんなに見ないでよう〜もあ〜っ」

俺の突き刺さる目線を気にして、手で必死に身体を隠す白河。

そんなんで隠れるわけねえだろっ。

超うける。

まあしかし、さすが白河だな。

こんなチビっ子なのに、きりっとした猫目だけが妙に大人っぽいし、そこがさらに美少女さを強調している。

恐らく、全国のロリ大好き男が見たら、たまらんなこりゃ。

という事で、真実は告げてやらねばならん。

「お前、どう見ても、小学生だぞ」

「!!!! し、失礼ねっ、さっき身長測ったけど、中一の時位はあつたんだからっ!!!」

嘘付け・・・どんだけチビッ子なんだよ。

「だからなんなのよ~~~~、その疑いの目はあつ。仕方ないでしょ、私、中学の時から長期だつたんだからあつ」

「もぉー」とむくれながら腕を組んで、そっぽを向く白河。

その仕草は、まさに小学生。

「しかも何だ？そのセーラー服」

なんだか子供が背伸びして、お姉ちゃんの学校の制服着て見ました、みたいな感じになっている。

「ええ~~~~？これえ？こ、これは・・・そのう・・・中学の制服よ・・・悪い？」

ぷっ、「悪い？」だつて・・・。

親に反抗する子供みたいな顔で・・・ぷっ。

笑いを堪えつつ、横目でちら見してやると、

「だって・・・私のせいじゃないしいく〜」と小さくなって、自分の太ももをつんつんしている。

ふふんだ。俺を笑った罪を3倍返しでお見舞いしてやったぜ。

しかし、勝ち誇ったのも束の間。

俺の目は、ある一点に注がれた。

「お、おい白河・・・。手をどけてみる」

胸に当てた手をどかせる。

そこに現れた、おぞましい光景!!!

「ペタンコ」

「お、俺の・・・俺の、Eの70がああああああ!?!?!?!」

ゲシッイイイイイイイッツツ!?!?!?!?!

瞬間、額に拳の強打を受ける、俺。

ナ、ナイスストレート……。

「ペタンコって言うなっ！！ しかも、Eの70って……もおおお〜〜だから何で君が知ってるのよっ！！」

「お、俺のEの70……」

ガクツとその場になだれる。

「そ……そんなの、お前じゃねえ……」

「あ、あのねえ〜、私の胸は君のものじゃないしい、しかも、なんでそんなにへこむのかなあ〜。君ってさあ、私の胸にしか興味ないわけえ？」

「バカ言ってるじゃねえよ、俺がそんなくだらない男に見えるか！？」

俺は真顔で言っちゃったさ……。

こいつこそ、くだらない事言いやがって。

「えっ……そ、そんな急に怒らなくてもいいじゃない……」

ちよつと強気に出ると、すぐに小さくなる白河。

それ以上、小さくなるなよ。

そして俺は言っちゃったさ、真の男というものを！

「俺は、お前の牛井のような胸と、たまに見せてくれるパンツに興味があるんだああああ！！！！」

ポカーンとする白河。

どうだ。

分かったか？男という生き物がっ！

「ふうん。君って、私をそういう目で見てたんだ。へえ。しかも、いつ私が見せたって……？」

「ほら、言ってみなさいよ」と指ポキポキで近づくと、ロリ河。

俺は知っている。

この指ポキは、なぜか蹴り百烈券の合図なのだ。

この後、どのような惨劇が繰り広げられたかは、後日語られる」白河真琴の暴虐」で話す事としよう。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そうしてぎゃーぎゃー騒いでる俺達の横で、如月さんが何をしていたかと言つと・・・・・・・・

ビデオ撮影をしていた。

「あの一、如月さん。俺達の横でなにしてるんですか？」

「撮影中だ話しかけるな」

「話しかけるなって・・・・。俺、聞きたい事あるし」

「話しかけるなと言っている。こんな貴重な白河君を見れるのは今だけなんだぞ。一週間もすれば、君達は元に戻ってしまうのだからな」

は、はあ。

俺の聞きたかった事、さらつと言ってくれたよ、この人。

一週間で戻るのか・・・・。

そりゃ良かった

.....

如月さんに「後は頼む」と言われ、俺は今、ビデオ撮影をしている。

もちろん、ロリ河の.....

なんでも如月さんは、奥の部屋で2号（白河クローン）の体内調整だの、言葉を学習させたりだの、忙しいらしい。

「私は忙しい。白河君のクローンを、早く日常生活が出来るようにしないといけない。後、私の妹という設定にするから宜しく」

そう言っつて、ビデオを手渡されてしまい、今に至るっつてわけ。

特にその設定については、突っ込んではいない。

なんだか、物凄い張り切ってるみたいだしさ。

じーーーーーーーーーーーーーーーー。

「いいね、もつと笑って？」

「そんな簡単に笑えないし」

「じゃ、はにかんでみて」

「に、似たようなものでしょっ」

ただ、撮影するのは難しい。

「しかもこいつ、ロリの癖に言う事聞かないし」

「聞こえてるんですけどっ」

全く、面倒な事引き受けちゃった。

そういえばこいつ、アイドルの仕事とかどうしてんだ？

まあ、こんな姿、他人に見せられないだろうけど……。

「お前、仕事大丈夫なのか？」

「あ、うん。いろいろあつたし、しばらく休暇をもらって。まあ、元々仕事キャンセルしてたから問題ないんだけど……」

と言って俄然元気が無くなる白河。もといロリ河。

「再来週には、ファーストライブがあるから、ちょっとね……心配かって」

どうやら、ライブへ向けてのレッスンが受けれなくて、不安らしい。

しかも、一発目で武道館だって話したから、そりゃ大変だ。

「あくでも、自宅で振り付けの練習とかしてるから・・・たぶん大丈夫う・・・かな？」

くっ、センチメンタルな雰囲気出しやがって。

そういう表情に男は弱いだよ。

ロリなのに反応してしまう、ダメな俺。

.....。

しかし、振り付けっていうと、妹を思い出してしまう。

テレビ見ながら、良くアイドルの踊りを真似してたっけ。

.....。

白河を見る。

こいつ、彩乃よりチビっこいぞ。

「お前、彩乃より、ちっこかったんだな」

思わず、話しの流れに関係ない台詞が出てしまう。

「え、うそっ、ほんと！？ 彩乃ちゃんより……」

ん？ そんなに意外だったか？

「妹もロリっちゃロリだが、今のお前程じゃないぞ？」

「ええ〜、そうなお。ん〜、そうかなあ〜。彩乃ちゃん、彩乃ちゃん……」

なにやら、考え込んで妄想中のご様子。

別にいいじゃねえか、またすぐ元に戻るんだし。

「彩乃ちゃんかあ〜」

シュッ

あれ？

ビデオカメラに写る白河が消えた。

そして、リアルも居ない。

へ？

辺りを見渡すが、本当に居ない。

俺、今あいつと話してたよな。

普通、話しの途中で消えるか？

いやいや、そういう問題じゃない。

消えた事自体が不自然だろ。

まさか透明になったとか？

「おい、白河~~~~出ておいで~~~~」

むなしく響く、俺の声。

どうなってんだ？

可笑しくね？

気配も無い。

念の為、奥の部屋をノックして如月さんに確認するが、居ない。

なにがなんだか、さっぱり分からない

所変わって、中等部、家庭科室。

彩乃は、料理していた。

彼女は家庭科部。

そして今日は煮物を研究中。

彼女自身の料理の腕は、既にその辺の主婦に引けを取らないものを持つてはいるが、同じ部員である日向葵ひなたあおいの為に、ちよくちよく得意料理を披露している。

そう、彼女は、煮物や魚料理といった、古風なものが実は得意であったし、自分も好きであった。

大根、ジャガイモ、人参などを切る。

切った野菜はフライパンで炒める。

そして炒めた野菜を鍋に移して、水、みりん、めんつゆを適量入れる。

煮物だが、先に炒める事によって火が通り、時間が短縮出来るのだ。

最後にシーチキンを缶から出し、ほぐさずそのまま投下。

これは、彩乃の得意なスピード料理。ブリ大根ならぬ、シーチキン大根のアレンジバージョン。

「うわあ、言い匂いしてきたあ。」

隣で見ていた葵が、感嘆の声を出す。

「うん。後はあ、しばらく煮込むだけですう。向こうで座ってましょ、葵ちゃん。」

二人は炊事場から離れ、椅子に腰掛る。

そして葵がお茶を入れて、なにやら雑談を始めた。

「そういえば、部長こないねえ。」

「そうなんです。来てくれないと困りますう。」

うーんと、考え込む二人。

家庭科部の部長は、もう一ヶ月以上、顔を出していなかった。

加えて、元々少なかった他の部員達も、ほとんど来ない。

結果、ここ家庭科部は、幽霊部員だらけと化し、将来廃部濃厚とな

っていた。

「なんだか、毎日私の為にお料理してもらって、ごめんね？」

「え？いいよいよよう、彩乃はお料理好きだし」

「でも、来年は廃部になるかもねえ」

「うん。困ったよう。新しい人、入ってくれないかなあ」

そんな事を話していた、その時

入り口の前に、一人の女の子が立ちすくんでいるのが目に入った。

そしてその女の子は、「え？ここどこ？うそ、なんなのお〜」

となにやら、うろたえている。

白河は思った。

私どっしてここにいるの

第9話に続く。

## 第8話 カラダの変化ってなに？（後書き）

第8話でした〜。またまたありがとうございます。

今回は嫌な男を登場させてしまいました。

書いててつまらん。きっと読まれてもそらでしよう。

しかも、話しが訳分らない方向に・・・。

大丈夫なのか！？ この小説（笑）

## 第9話 もう何でもありませんね。

だから私、なんで料理なんてしてるの？

白河は料理を教わっていた。

しかも中等部の家庭科室で。

「結構器用じゃないですかあ。包丁の使い方もなかなかですよ」

隣で、親身に手解きしているのは彩乃ちゃん。

なに？ この状況……。

気が付いたらここに居た。

そして、彩乃ちゃんと……葵ちゃん？ だっけ？ に見つかって、なにやら家庭科部へ勧誘されている。

二人は、私を転校生だと信じて疑わない。

しかも、「是非とも家庭科部へ！」「きっと貴方は救世主ですう」だの、妙な方向で歓迎状態。

「だ、だから彩乃ちゃん。私は白河だってば！ ね？ よろしく顔を見て？」

「え？ あ、はい、顔ですかあ？」

じいじいじいじいじい。

白河を、間近で覗き込む彩乃。

「あゝ、分かった！この子、白河真琴に結構似てるよ。うんうん。なんだゝ、自慢かよゝゝ」

この、この、と肘で葵ちゃんに小突かれる。

「あゝゝ、ほんとですう、似てますねえ。しかも、良く見るとすごい可愛いですう」

「可愛いですう」と抱きつき、すりすりしてくる彩乃ちゃん。

「あゝんもお、なんで分かってくれないのよゝゝ」

ちゃんと話せば分かってくれそうなものだが、白河は、説明があまり上手ではなかった。

しかも、女の子は男の子のように、理屈を並べて話しを進めるような事はあまりしない。

深く考えず、感受性豊かなのが女の子の特徴であり、男性はそういう部分に惹かれることが多い。

そしてここにいる3人は、典型的な女の子タイプだった。

埒が明かないとは、まさにこの事。

白河は焦っていた。

なぜ自分はここに居るのか、その理由が分からない。

「早く研究所に戻って、如月さんに相談しなきゃ……」

当然、「こんな意味不明な時は、如月さんだよ」と白河は如月さんに会わなきゃと、強く思った。

「あれ、この子黙っちゃったよ？どうしたのかなあ？」

突然黙り込む白河を不審に思い、心配そうに覗き込む、彩乃と葵。

沈黙が続くなか、二人にちょうど挟まれるように立っていた白河だったが、何の前触れもなく「シュツ」と風を切るような音をたて消えた。

「ええええっ！！！！」

「うそぉ~~~~！！！」

突然消えた白河に、驚きの声を上げる二人。

まさに、今見ていた人が消えたのだ。

いや、人でなくても目の前の物が消えたら、逆に自分の目を疑う事だろう。

しかし、今は二人で見ている。

二人は見つめ合い、今の現象について話し合ったが、結局答えはみつからず、

「もしかして・・・幽霊？」

という結論に至り、ぞっとするのであった。

そして場所は戻って研究所

「早いな、もう発動したのか・・・」

煙を吐きながら、如月さんが咳いた。

「何が発動したって言うんですか？」

「能力・・・とでも言えば良いか」

そう、俺は白河が消えた事実を、如月さんに相談中だ。

しかし、それについて特に驚いた様子もなく、むしろ予想していた口ぶり。

しかも能力ってどういうことだ。

特殊能力？超能力ですか？

とことん非常識なこの人にはついて行けない。

もう勘弁してください。

そんな事より、白河が心配だ。

そんな俺に対して、またまたありえない事を言い出す如月さん。

「ふむ、案ずる事はない。単なる空間転移だろう」

と、今度こそ信じられない話した。

「普通の女の子のあいつに、いきなりそんなSFみたいな事、出切る訳ないじゃないですか？」

「前にも話したとおり、出来る出来ないの話ではない。結果が全てなのだ。それに、彼女が能力を得る為の、伏線もあった」

そう言っただけで如月さんは、白河がなぜそんな事が出来たのか、説明を始めた。

「簡単に言えば、能力者である坂爪博士の脳波を受け、彼とシンクロしたせいで彼女の脳が進化した。という事だ」

「昨日、研究所で脳を弄られたって、やつですか？」

「そうだ。君は第6感というものを信じるか？」

「は、はあ」

「第6感とは、予知夢であったり、虫の知らせであったり、靈感であったりと、殆どの人間が多少なりとも持っている感覚だ。しかし、その感覚が大きくなれば、それは能力と言っても良いだろう。実際に海外では、超能力という職業が存在する国もあるのだ。その位は君も知っているだろう？」

「あの、ええつまり、超能力は存在するって話ですよね」

「そうだ。これを見る」

如月さんは、昨日見せてくれた、白河の脳のスキャンデータをモニターに写した。

「前頭葉が発達していると言ったが、この部分の半分は、どのような働きがあるか医学で解明されていない。しかも、怪我や病気で前半分が失われたとしても、一切後遺症等の影響は無い。しかも、データによれば、能力者の殆どが、前頭葉に大きく発達した痕跡がある。そして、私と研究をしていた頃から、坂爪博士はその部分に着目していてな……」

ダメだ。分からなくなってきた。

つまり、その白河の発達した脳に秘密があるって事か？



あのちょいおバカ天然水の、脳が成長したのは分かった。

だからといって、なんで消えたりするわけ？

「今の白河君は、数キロ離れた場所をも把握出来るだろう。さらにそこに何かがあるか、誰がいるかも。そして、そこに自信を転移させる事も彼女には可能だという事だ。ヨーロッパで起きた事故を知っているか？生き埋めになったはずの男が、数日後、遠く離れた山奥で発見されたのを。空間転移と呼ばれる事象は何も白河君が……」

長い説明はまだ続いているが、もういいでしょ。

何となく理解出来たけど、さらに続く如月さんの話しを聞く集中力はもう無い。

いいじえねえか、悟空みたいに、どっかの星のなんとか星人に教えて貰ったでさ。

要するに、白河が空間転移能力を身に付けたってことだろ。

世界初の超能力アイドル誕生ってか。

もう何でもありって感じじゃん。

最近の非現実的な毎日のおかげで、すっかり順応してしまう俺。

そうして難しい説明で、ぐったりとしていると、「シュッ」という音とともに、白河が現れた。

「ぬおっ!!--」

「わっ!!--」

突然、目の前に現れてお互いびっくりする。

「あはははあく、た、ただいまあく、なんてね・・・」

苦笑いの白河。

「お、おかえり・・・」

とりあえず、挨拶してみる。

特にさっきまでの白河と、何も変わらないみたいだ。

もしかしたら身体に負担とか・・・って、ちょっと心配だった。

ま、ロリな状態もそのままだけどな。

「な、なんていうのかなあ? 気が付いたら、学園の中等部にいたの・・・よねえ。あはは・・・」

頭を掻きながら、照れと恥ずかしさでなんともいえない表情の白河。

その後、如月さんの説明が、改めて白河に始まる。

だが、こいつの理解力には、さすがの如月さんも困難を極めた。

二度目で、如月さんの言いたい事は大体理解した俺は、既にソファ  
ーでくつろいでいる。

しかし、白河が全く理解出来ておらず、説明が3週目に突入した頃、  
「俺、帰ります」と先に研究所を出てきてしまった。

果たしてあいつに理解出来るのだろうか。

と、思いつつ帰路に着く俺であった。

.....。

自宅に戻りまったりテレビを見ていると、やがて妹が帰ってきた。

そしてドタドタと、リビングに走って来るなり、

「兄さん兄さんっ！ 今日学園で幽霊を見たんですよ〜」

と慌てた様子。

「へ〜、そりゃ良かったな」

既に何事も動じない程の体験をしている俺は、素で返す。

すると妹は隣に腰掛、「その幽霊が、その幽霊があ」と俺の服を引っ張る。

「幽霊がどうした」

「その幽霊はなんと！ 白河さんに雰囲気こそっくりで、しかも可愛かったんですよ」

「全然怖くなかったんですう」と自分の太ももをバシバシ叩いて興奮気味の我が妹。

だが、その一言で何が起きたのか全て理解した俺。

面倒なんで、そいつは白河の妹で超能力者だと、説明しておいた。

すると妹は、またもや柔軟な対応力を見せる。

「はえ〜〜あんな可愛い妹さんがいたなんて・・・」

「しかも超能力者だなんて、実際に会ったのは初めてですよ〜」

なんだよそれ。

超能力者が既にありきの考え方。

アニメや漫画の見すぎだろっ。

ま、いいか、こいつはこいついう奴だし。

その後、いつものように飯食って風呂浴びて、部屋でまったりする俺。

久しぶりにゲームでもすっかなと、愛用のX箱を立ち上げる。

しかし、ふと目に付く白河真琴のCD。

俺はおもむろにケースを開けると、PV入りDVDを取り出しセッ  
トした。

その時、後ろで風を切る音がしたが、気にしない。

ここは、俺の部屋。

誰も居ないぞ。

曲が始まり、白河が踊りだす。

肩の出た、パステルピンクの衣装。

踊って体温が上昇しているのか、赤く染まった鎖骨付近の肌質がたまらない。

「やっぱり可愛いなあ」

「へえ、可愛いんだ？」

「まあな」

・・・・・・・・。。。

「ロリなあいつもいいけど、やっぱり白河はこれだよな。このボリユーム感」

踊る度に揺れる胸を見る。

「大きいのが好みなの？」

「ん、どうだろ。特別そうじゃなかったんだけど、こいつのは・  
・なんていうのかな、形が良さそうっていうか、きやしゃ華奢な身体の割りに  
でかくてギャップがっていうか・・・」

・・・・・・・・。。。

「しかし、こっぴやってアイドルしてると、さらに可愛く見えるな」

「ふ〜ん、そっかあ〜。で、君はその子が好きなの？」

「大好きだな。今すぐにでも抱きたいぐらいだ。そして明日には、告白しようかと思ってる」

.....。

いる。

やつは後ろに絶対いる。

そう何度も同じ攻撃を食らうと思ったのか、このワンパターン娘。

「ああ、ダメだ。こいつ見てたらもう我慢できねえつ。興奮してきたああー!!」

そしておもむろにズボンを脱ぐ俺。

ざまあみろっ、このカウンターに、お前が耐えられるわけがあるまい。

ふっふっふ。

.....。

.....

.....

あれ？

止めてくれないんですか？

止めてくれないと、俺恥ずかしいんですけど。

後ろを見る。

すると白河は、俺に背中を向け、しゃがみ込んでぶつぶつと呟いている。

「や、やだ……か、神崎君、私に告白するって……べっぴんさん  
うしよ……」

.....

ズボンを下げたまま、放置プレイされる俺。

気付かれないって、恥ずかしいね。



「お、おい……。」

「ち、近寄らないでっ!」

後ずさりする白河。

「バ、バカ、誤解だつて!」

「彩乃ちゃ~~~~ん!」

妹の名前を叫びながら、部屋を飛び出す白河。

一瞬固まりかけ、俺も慌てて追いかける。

パンツだが、気にはいられない。

そして、リビングに辿り着くと、妹が腕を組んで仁王立ちしていた。

「にいっさんっ! こんな、年端も行かない子供にっ、なんてことするんですっ!」

お、お前が言うか、その台詞……。

その後、妹の説教をたっぷり喰らい、今度は白河が放置プレイされてた。

そして、その日は、「ロリ兄さん」と呼ばれる俺だった……。

第10話に続く

**第9話 もう何でもありませんね。（後書き）**

第9話 読了ありがとうございます。

途中、如月さんの説明が長く、げんなりされた方もいらっしゃるでしょう。

しかし、ストーリー上必要なのでご勘弁して下さい。

でわでわ〜

第9・5話 休日はデート 前夜 白河真琴編

白河は悩んでいた。

『明日の日曜日、なにしようかなあ〜』

『勉強もやりたい・・・』

踊りの練習も一人するのは限界がある。

今、この身体では仕事も出来ないし、友達にも会えない。

中学に入ってから芸能事務所に入った彼女は、ここ数年間、暇な日曜日などなかった。

しかし色々あって、急に仕事がキャンセルになり、何も予定は立って居ない。

一瞬、『こんな時こそ遅れている勉強をするのが一番！』

とも考えたが、ノートも写していないし、かといって教科書を開くのも面倒だ。

結局、事情はあるが折角の連休を満喫しようという結論に至った。

『部屋の掃除でもしようかなあ〜』

そう考えて、思い留まる。

掃除といっても、狭い部屋だ。

何も明日しなくても良い。

今のうちにしてしまえば終わってしまうだろう。

『如月さんの所に行っても、美琴ちゃんの世話で忙しいよねえ』

美琴と言うのは、先日連れ帰った自身のクローンである。

名前が無いのは可哀相だし、真琴とも呼べない。

だから、白河が勝手に呼んでいる名前なのだ。

本人としては、可愛いから気に入っていて、この名前を浸透させようとしている。

『あ、久しぶりに、お洋服買いに行きたい!』

最近では、マネージャーさんをお願いしたり、ネットで購入したりと、なんとも味気ない買い物ばかりしていた。

これは名案！とばかりに浮かれていたが、突然、力無くうなだれる。

『だ、ダメだった・・・今の私じゃ、試着できないよねえ・・・』

中学生サイズの自分に、服を買ってどうする・・・。

結局、特に考えるのはやめにして『本屋さんにでも行こうかな』という結論に達して、冷蔵庫から飲み物を取り出し、テレビをつけた。

既に時間は土曜の夜。

そろそろ2時間ドラマが始まる。

連ドラは平日だから殆ど観れないし、かといって録画しても観る時間がない。

自分の出演した番組のオンエアは、移動中にチェックしてしまうので、録画したスペシャルや、2時間ドラマを観る事が、彼女の数少ない楽しみであった。

『そつだ！ お菓子買ったんだっけ・・・』

思い出し、ドラマ用に大量のお菓子をテーブルに並べる。

別に全部食べるわけではないが、いっぱい並べるのが楽しいのだ。

「うふ」

白河は嬉しそうに微笑むと、チョコレート箱を開けた。

開けたが、まだ食べない。

ドラマが始まってから食べる。

『今日はなにかな。サスペンスかなあ』

テーブルの前にペタンと女の子座りをして、始まるのを待つ。

彼女の部屋は狭かった。

無論、高校生の一人暮らしである。広い必要もない。

彼女の寝室兼リビングには、ベッドや本棚とテーブル、そしてテレビにコンポ。

その程度で、もはやスペースは残されていなかった。

さすがに1Kは狭い。

大きいテレビも置けないし、未だにアナログだった。

『いいかげん新しいテレビ欲しいな』

なんて考えるのは、贅沢じゃないよね。

如月さんに貰って、実はお金なら充分ある。

ただ、買いに行く時間とタイミングが無いだけだ。

『明日、電器屋さんに行ってみようかなあ……』

思いつくが、やっぱりやめた。

そもそも、こんな子供の姿一人でテレビを買いに行くのは変だし、電器屋さんになんかあまり行った事もない。

どれを買えばいいか、分からないだろうし、地デジ?の事も良く解ってない。

おろおろするのがオチだ。

恨めしい目でテレビを見る。

すると、定刻になり番組がスタートする。

画面には、なにやら絶叫マシンに乗り「キャア〜」と叫ぶ女の子達の映像。

あれ? いつもと違う……。

不審に思っていると、『夏のデートスポット大研究スペシャル!!』というテロップが流れる。

「ええ~~~~~うそお~~~~~」

一気にテンションが下がった。

『あゝああ、サスペンスでハラハラドキドキしたかったのに……』

仕方がないので、お風呂でも入ろう。

さっぱりして気分を高めて……本でも読んで寝よ。

下がったテンションのまま立ち上がる。

そしてテレビを消そうかとリモコンに手を触れるが、消すと寂しくなるからやめる。

そのままバスルーム……というか、ユニットバスへ向かう。

入る前に服を脱がなきゃ。

彼女は、今日も中学時代のセーラーを着ていた。

他の服は、あらかじめ整理してしまっていて、出すのがおっくうなのだ。

上着を脱ぎ、スカートのホックを外す。

ファスナーを下ろすと、ファサッとスカートが床に落ちる。

現れたのは、上下とも真っ白な無地の下着。

いつもは出来るだけ可愛いのを選んでいるが、今は選べない。

「はぁあゝゝ」

自分の胸を見て溜息をつく。

後ろ手でホックを外し、ただ当てているだけのブラを外す。

すると、申し訳程度の膨らんだ胸が現れる。

小さくなって、肩が楽なのはいいけれど、また大きくなるのかなあ。

ちょっと不安になる。

この頃は、お決まりの牛乳を毎日飲んだ。

周りの女の子がどんどん成長する姿にあおられて、マッサージもしたし、腕立て伏せもかかさなかった。

その成果かどうかは分からないが、自分の予想していた以上にぐんぐん膨らんでいったのを覚えている。

友達からは「大きくていいなあゝ」と羨ましがられ、恥ずかしかったけど、ほんとは自慢の胸だった。

でもそれが、夢だったように思えてくる。

鏡に自分を映す……。

胸をマッサージしてみる。

当然、変化は無い。

先端をつまんで引っ張ってみるが、大きくなったのはそこだけ。

『なにやってんだろ……私……』

誰も見ていないのに急に恥ずかしくなって、さっさとパンツを下ろす。

そしてまた固まる。

薄っすらとしたそこを眺め、子供を再認識させられる。

『ま、ここはどつせそのうち……』

パンツを脱いで洗濯機に入れる。

最後に白い靴下を脱ぐ。

そして周りに人がいたら絶対しないが、つい無意識で匂いを嗅いでしまう……。

女の子だからアイドルだから匂わない、というわけではない。

誰しもすると思うが、自分の匂いを確かめるといふ本能的なものだ。もちろん彼女は臭いわけではないが。

裸になったので、ドアを開けてユニットへ入る。

相変わらず狭い。

浴槽へ身体を移し、カーテンを閉める。

シャワーを出して温度を確認する。

面倒なので、つついシャワーだけになってしまつ。

全身にシャワーを浴びる。

「ああ~~~~気持ちいい~~~~」

しばらくそのまま浴びていたが、やがて顔を洗い、髪をシャンプーする。

今日は汗を掻いたので、髪は二度洗いし、リンスを付ける。

そのまま、今度はスポンジにボディソープをたっぷり染み込ませて、身体を洗う。

左手、脇、お腹、胸、首、右手と洗ったら、一旦スポンジを置いた。

そして、お尻と股の間は手で擦って洗う。

スポンジをまた手に取り、今度は足を擦る。

内股に片足を上げて、ふくらはぎから、足の裏までしっかりと。

最後に、柄の付いたスポンジで背中を擦って終了。

身体の泡とリンスを流す。

「ふうふうさっぱりい〜」

手を伸ばして歯ブラシを取る。

浴槽からは出ず、そこに体育座りをし、足を抱えたまま歯を磨く。

彼女は、全身を綺麗にしないと気がすまない子なのだ。

コップでうがいを済ませ身体を軽く拭く。

そして、バスタオルを巻いてユニットから出る。

狭い廊下で身体を拭こうとバスタオルをはだけて……また巻く。

『やだ……カーテン開いてた……』

慌ててベッドの向こうへ行き、窓についたカーテンを閉める。

もつとも、ここは3階。

覗かれる事もないだろうが。

丁寧に身体を拭くと、パンツを履いてピンクのパジャマに袖を通す。

あいつに貰ったパジャマ……。

『べ、別に、嬉しくて着てるわけじゃない……』

『結構可愛いから……き、着てるだけだからねっ』

心の中でなぜか言い訳をして、ズボンを履く。

長いので、手足を折り折り……。

「テレビ見よつと〜〜」

ベッドに飛び込んで、お気に入りのでっかいケア・ベアのぬいぐるみに抱きつく。

そのまま横向きでテレビを見る。

「さっきの、まだやってるんだあ・・・」

画面には、有名な遊園地の絶叫マシンが紹介されている。

キヤーキヤー言いながら、そのスピードに耐えている女の子・・・  
美月ちゃんだ。

「へえ〜、いろいろ出てるんだねえ」

実際、白河よりもさらに人気があるし、テレビ出演も圧倒的だ。

学校も結構来てるのに、いったい、いつロケに行ったんだろう・・・。

しかし、そんな事より気になったのが。。。。

『美月ちゃん、楽しそう・・・』

マシンに乗るその姿がほんとに楽しそうで、羨ましい。。。

いいなあ。

いいな、いいな、いいな、いいなあ〜。

私も行きたい。

行きたい。

行きたい、行きたい、行きたい、行きたいい〜い〜。

それでえ。

乗りたい。

乗りたい乗りたい乗りたい乗りたい乗りたい乗りたいい〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜。

ぬいぐるみをむぎゅっと抱きしめ、ゴロゴロとベッドを転がる彼女。

そしてそのままドサツと落ちた。

「痛っ!!」

.....

考える.....

.....

閃いた!!

明日は遊園地に行こうっ!!

身体も子供だし、見た目は白河真琴じゃない。

注目される事もないし、なんてラッキーなの!

「やったあー」とぬいぐるみを投げ、そしてキャッチ。

と、そこで固まる。

誰と行けばいいの……？

当然、学校の友達には会えない。

じゃあ誰を誘えば……。

高まったテンションが急激に下がる。

「あゝああ、ダメかあゝ」

と思ったが、ふと頭に浮かぶあいつの顔。

『……………神崎君かあ』

「ダメダメ」と頭をぶんぶん振る。

あんな変態……さ、誘えるわけ……ないじゃない……。

なぜか顔が火照る。

きつと、お風呂上りだからだ。

あ…………。

また閃いた。

彩乃ちゃんはどうか。

この姿で、既に会ってるし…………。

でもなあ、最近知り合ったばかりだし…………。

自分の胸に口を付けられた、あの光景を思い出す。

『可愛いんだよねえ、彩乃ちゃん』

確か、彩乃ちゃん私のこと大好きって言ってくれてたし…………。

時計を見る。

もうだいぶ遅い時間。

『まだ起きてるよね』

意を決して携帯に電話する。

1コール…………。

2コール・・・・・・・・。。。

3コール・・・・・・・・。。。

ドキドキ・・・・・・・・。

・・・・・・・・。。。

「こんばんわあ〜白河さんっ」

出た！！ 嬉しい！

「もしもしい？」

「ああ〜ごめんっ、彩乃ちゃんまだ起きてたあ？」

「起きてますよあ〜。もお大人ですからっ」

元気な彩乃ちゃんの顔が浮かぶ。

うふっ、可愛い。

「初めてじゃないですかあ〜、電話くれたの。かかってくるの待ってたんですよあ〜」

「あ・・・そうだっけ、ごめんごめん」

「あゝあゝ、謝らないでくださいよお。勝手に待ってただけですからあ」

「う、うん・・・」

「でも、ちょうど良かったですう〜、白河さん明日お暇ですかあ？」

え？ 逆に誘われる？

予想外の展開に声が詰まる。

「うんうん暇なのっ、実は彩乃ちゃんを誘おうと思って・・・」

「ほんとですかあ！ 嬉しいですう〜。じゃあ明日、遊園地に行きましょう」

え！ ほんとに!？

嬉しい展開に思わず笑みがこぼれる。

「行く行く行く行く、絶対行くう〜〜!!!」

「えっ、いいんですかっ! こんな突然なのに!？」

「いいの、いいのよ! 私も遊園地に誘おうと思ってたからあ」

「うわあ〜、気が合いますね〜」

.....。

その後、盛り上がって30分も話しちゃった・・・。

もお～～～彩乃ちゃん大好きっ！！

集合場所とかは、後でメールくれるって言ってた。

楽しみだなあ～～～。

第9・5話 完

第9・5話 休日はデート 前夜 白河真琴編（後書き）

第9・5話 お読みいただき、ありがとうございます。

今回は白河真琴スペシャル第2弾でした〜。

白河「ええ〜と作者って君い？人の部屋散々覗いてくれたわねっ！  
この変態っ！」

ゲシイイツッ！！

ええと、僕は決してロリではありません！  
高校生ぐらいが好きなんです！！

え？ だからロリコンだろって？・・・すみません。

第9・75話 休日はデート 前夜 彩乃スペシャル

土曜の午後。

彩乃は、同級生の日向葵ちゃんひなたあおいの家で料理を作っていました。

「あ、葵ちゃん、まだメレンゲ出来てないですう」

「え〜〜こんなに泡立ってるのにい〜〜?」

「ダメですう、あと10分は掻き混ぜないとお」

なんとつ、今日は葵ちゃんのお誕生日なんですっ!!

そして今は、お祝いのケーキを二人で作っちゃってるわけですよ  
〜。

んん〜当の本人が、どうしてお料理してるかって言うんですねえ。

な、なんと!

クラスの男子を誘ったからなんですっ!!

実は葵ちゃん、心を寄せている男の子がいるんですっ。

その子の名前は、しまねりゅうへい島崎龍平君。

一年生で、既にサッカー部のレギュラー。

スポーツ万能でお勉強も出来る、クラスの女子にモテモテの男の子。  
葵ちゃんも、彼のことが好きなんだって！

キヤア~~~~。

ですからあ、今日はお誕生日を口実に、『島崎君とお近づきになる』  
という作戦なのですっ！

ああ~~~~なんだか彩乃までドキドキしてきましたあ。

よしっ！ 張り切ってお料理しちゃうのですっ。

彩乃は、から揚げやサラダやパスタとかあ、摘めるものを作ってえ  
。。。

メインのケーキは、葵ちゃんが製作するという段取りなのです。

ふっふっふう〜、もちろんお料理は任せてくださいなのですよあ〜。

兄さんの為に培ったこの腕前で、島崎君なんて一こらですう。

ああ〜じゃなかった。

彩乃が狙っているわけじゃなかったんですう。

いいんですっ、葵ちゃんが作ったことにすれば、問題はないのです！

でも、葵ちゃんのケーキはちょっと心配ですねえ〜……………。  
レシピは教えてあるんですけど……………。

既にメレンゲを二度失敗。

ただ泡立ってるだけなのに、どうして失敗するのかなあ？

手伝おうとしても、

「だ、大丈夫！　ちゃんと出来るからっ。」

と言って、意地になってるというか一所懸命というか。

そんなに島崎君のことが好きなんですね！

うふっ　　葵ちゃん、とっても可愛いですよ。

お料理も一段落し、ケーキも問題無く焼き上がった頃、玄関からチヤムが聞こえてきました。

「し、島崎君かなあ。」

顔を見合わせる二人。

「わ、わたし行ってくるね。」

あきらかに緊張している葵ちゃんは、手にしていた生クリームをそのまま持って、行ってしまいました。

程なくして、聞こえてくる声。

「ええ〜〜!! なんだあんたがいるのお〜〜!!」

島崎君の声は良く聞こえなかったけど、葵ちゃんの叫び声が耳に届く。

どうしたんでしょうか？

他にも誰か来たんですかねえ。

うんまあ〜、お料理は多めに作ってありますから大丈夫なんですけどお。。。。

そして、パタパタドタドタとリビングへと近づく足音。

葵ちゃんがなにやらムツツリと、ご機嫌斜めで入ってくると、その後ろから現れた島崎君。

「よ、よう神崎、げ、元気か？」

「は、はい、元気ですよ。」

腰が引き気味の島崎君。

しかも、さつき学校であつたのに、元気かって意味が分かりません。

島崎君つていつもこうなんですよ。

彩乃に対してだけ、なんだか遠慮がちというかあ……。

「おつす彩乃。ケーキ出来たか？」

島崎君の後ろから現れる、慣れなれしい男子。

彼は、やましたけいすけ山下圭介君。

葵ちゃんとは幼馴染で、学校でも良く話しかけてくる。

おかげで、彩乃も山下君とは結構親しいんですけどあ……。

呼んでなかったですよねえ、葵ちゃん。

変だなと思って葵ちゃんを見ると、「こっちを見て」「このバカ」って口パクしながら山下君に目配せする。

やっぱりそうだよねえ。

ん〜ちよっと考えて、葵ちゃんが聞きづらいことを聞いてあげる

ことにしました。

「山下君、どうして今日は来たんですか？」

彩乃の問いかけに、一瞬「……う……」と声を詰まらせた山下君。そんな彼を制して、島崎君が変わりに答えました。

「あーいや、そのさ、僕一人で女の子の家に来るのってなんだか緊張しちゃって……山下に頼んで一緒に来てもらったんだよ。うん」  
取って付けた様な言い方ですねえ。

なんだか怪しいです。

葵ちゃんを見ると、物凄い目で山下君を睨んでいる。

「圭くんっ、いるのはいいけど、わたしの邪魔しないでね！」

「な、なんだよ邪魔って……俺だって、ちゃんとお前の誕生日を祝いに来たんだぞ」

彩乃には、葵ちゃんの言ってる意味が分かるけどお、山下君には分からないよね。

なんだか山下君が、ちょっとぴり可哀相。

そう思い、彼のお相手は自分がしなきゃと気合を入れるのでした。

そしてお料理を並べて、後はケーキの飾り付けです。

男の子達は、携帯ゲーム機で対戦しているみたい。

好きですよねえ、男子ってゲームが。

そうだ！

せっかくだから・・・

「葵ちゃん、ケーキの飾り付けは彩乃がやりますからあ、島崎君とゲームでもしてて下さい」

「え？・・・あ、うんでもお・・・」

「いいですよね？島崎君」

「お、おう日向とか・・・」

むう・・・なんで微妙に嫌そうなんですか、島崎君。

ジト目で睨んでやるのです。

じいじいじいじいじい。

「おわつと〜、日向とゲーム出来るなんて嬉しいぜ！早くやる  
うぜ」

睨みが利いたのか、突然態度が変わる島崎君。

葵ちゃんは、「……うん……」とちよつと照れながら近寄って行く。

う〜ん、あんな葵ちゃんは滅多に見れないですよ、初々しいですねえ。

さて、ケーキに苺を乗せて……それから溶かしたチョコで文字を……。

『葵ちゃん お誕生日おめでと〜』

よしっ書けた。

後は、いっぱいハートマークを書いちゃう。

うふ 可愛くできましたっ！

「ちよつとお〜、島崎君強すぎい〜。もっとハンデちよつだいっ」

「ええ、マジかよ。もうハンデマックスじゃねーか」

「でもお・・・んじゃ、もっかいいくよ!」

「おついいぜ」

横目で見ると、なんだか楽しそうだ。

もうちょっと様子を見て、ケーキを持って行こう。うん。

島崎君はゲームに夢中みただけど、葵ちゃんは彼の顔ばかり見る。

うふっ、頑張つてえ!

そんな二人を、山下君は寂しそうに見てますねえ。

しょうがないですねえ、後で彩乃が遊んであげますよお。

頃合をみてケーキを運ぶ。

男子から、「おお、すげえ」と感嘆の声が上がる。

当然そこで、「このケーキは、葵ちゃんが作ったんですよお」と紹介するのを忘れません。

みんなでローソクを立てる。

もちろん、13本ですよ。

点火は、島崎君に頼みました。

なんとって、今日の影の主演ですからあ。

ローソクを倒さないよう、緊張してライターを持つ島崎君。

みんなが息を呑む。

外はまだ明るいけど、気にしません。

そして火が灯り、ケーキが急に賑やかになる。

「はっぴばーすで〜とぅ〜ゆ〜 はっぴばーすで〜・・・

」

彩乃が歌いだすと、照れながら、渋々歌い始める男子。

嬉しそうな葵ちゃん。

良かったですねえ。

そして「ふ〜〜〜」つと葵ちゃんに火が消されてパチパチパチ・・・。

一瞬静寂が訪れる……。

ここで一言！

「プレゼント贈呈タイムなのですっ！！」

持ってきましたかあ〜と、二人を見廻す。

「おう持ってきたぜ」

「当然持ってるさ」

と、準備を始める男子。

なにやら紙袋をガサガサしてますね。

葵ちゃんは、もじもじとその時を待っているみたいです。

「それじゃ、彩乃からいきますっ！ 葵ちゃんおめでとあ〜〜〜」

持ってきていたプレゼントを渡す。

続いて、やっぱり照れながら渡す、男子二人。

彩乃からは、可愛いエプロン。

なんと、彩乃のお手製なんですっ！！

えっへん。

早速着けて、喜んでくれる葵ちゃん。

島崎君からは、・・・・・・・・・・なんだか変なぬいぐるみ。

犬だか猫だか良く分からない、お世辞にも可愛いとは言えないものでした・・・。

フォローの言葉がみつかりません。

でも、それを見て一瞬固まる葵ちゃんだったけど、健気に大喜びしている。

そうですね！好きな人からのプレゼントですからっ。

そして山下君。

なんだか、小さな箱・・・。

変な物じゃなきゃいいんですけど・・・。

学校では、いつも葵ちゃんをからかう山下君。

ちょっと心配ですう。

ゆっくりと、箱を開ける葵ちゃん。

すると、そんな心配はどこ吹く風。

パアッと彼女の顔は明るくなり、立ち上がった。

「可愛いいつ!! なにこれえ~~~~!!」

星の形をしたペンダントでした。

葵ちゃんは星の形をしたものが大好きで、いろんな型のグッズを最近集めていたんですよ。

もちろん、彩乃製のエプロンも星が入ってます。

しかもあのペンダント、銀製ですね。

結構高そうです。。。

「こんなにいい物、貰っちゃっていいのっ!?!」

本気の大喜びで、山下君を見つめる葵ちゃん。

「あ?・・・まあ、お前・・・喜ぶと思ってよ・・・」

ぶっきらぼうに、そっぽを向いて話す山下君。

鼻の下を指でゴシゴシとしている。

照れてるのかな。

「ありがとぉ〜圭くぅ〜ん」

さっきまで、冷たい目で山下君を見てたのに、満面の笑みですねえ。

良かったですね。

持つべきは、幼馴染ですよお。

そんなこんなで盛り上がって、楽しくお食事が始まりました。

でも、大問題発生ですう。

なぜか、彩乃の隣から離れない島崎君。

そして、間に割って座っている山下君。

これじゃ、葵ちゃんが島崎君とおしゃべり出来ません。

しかも島崎君は、さっきから彩乃にいつぱい質問してきます。

「な、なあ神崎ってさ、お兄さんいるんだっけ。年、いくつ離れてるんだ？」

そんなのどうだっていいですう。

「あ、神崎って、嫌いな食べ物とかあるの？」

もっとどうでもいいですう。

葵ちゃんが、恨めしそうに見てますよお。

うう、怖いですう。

向こうもなんだか、山下君が一所懸命に話しているみたいですけど、そんな状態の葵ちゃん。

会話が発展するわけがありません。

困った顔の山下君。

一瞬、彼と目が合う……。

と、ちょうどそのタイミングで鳴り出す彩乃の携帯。

兄さんからです。

島崎君が話しかけてくるけど、ためらわず携帯に出ちやいます。

「兄さん？」

「おう」

「どうしました？」

「ああ、今日葵ちゃんの誕生日なんだろう？ メール見たぞ」

「はい、そうなんです。ですから今日は・・・」

と言い掛けて、閃く。

「おう、ゆっくりして来いよ。俺は適当になんか食うし」

「ええ！！ それは大変ですう！！」

大きな声で叫んだ。

みんなが注目している。

よしよし、いいですよ。

「は？ お前突然・・・」

「分かりました。残念ですが、今すぐ帰ります」

「お、おい、彩乃・・・」

ピッ

強制的に切りました。

ごめんなさい、兄さん。

当然、みんなが何事かと見てます。

「ごめんなさい、彩乃は急用が出来て帰るのです」

心底申し訳なさそうに言う。

「え、大丈夫なの？ なにかあった？」

「か、神崎、どうしたんだ？」

「おう、気をつけて帰れよ」

それぞれ、一様に声をかけてきます。

ごめんね、葵ちゃん。

片付け、手伝えなくて。

でも、こうするしか道は残されていなかったのですっ！！

……後で電話で説明しますから、葵ちゃん。

急用ですから、さっさと帰り支度を整えます。

「葵ちゃん、後で電話するから心配しないで下さいね。まずい様なことじゃないんですう」

とだけ告げて、すぐに家を出ちゃいました。

これでいいんです。

彩乃はお邪魔虫さんですからあ。

ふふ、旨くいきませんねえ。

結局、島崎君は葵ちゃんのこと、どっぴろ思っているんでしょっか……？

そんなことを考えていたら、

「神崎っ!!」

呼ばれて振り向くと、島崎君。

ぜ〜は〜と、走ってきたみたい。

スポーツマンの彼が、息を切らしている。

どうしたんでしょうか？

「島崎君、何かご用ですかあ？」

つい、事務的にお応えしてしまう。

「いや、はあ〜はあ〜・・・その・・・ほら、もう暗いだろう、送るよ  
」

そう言ってニコツと笑顔の島崎君。

空を見上げてみました。

確かに、夕暮れ時。

でも、まだ暗くありません。

「大丈夫です。彩乃の家はここからすぐですから、戻って下さい」「  
「・・・あ・・・でも・・・その・・・もう帰るって出てきちゃったし・・・  
はは」

照れくさそうに頭をかく島崎君。

なんだか可愛いですう。

その姿を見て、もう戻れって言えなくなりました。

しかも、送ってもらいたいなって・・・。

なんででしょうか、この気持ち・・・。

兄さん意外の男の子って、良く解りません。

結局、そのまま自宅まで送ってもらい、兄さんに見つかりませんように  
うにっと思う彩乃でした。

場所は戻って、 葵宅

「何で圭くんがまだ居るのっ!」

「はあ? いちゃいけないのかよっ!」

葵と圭くん。

二人は微妙な空気だった。

「まだ料理あるし、お前が作ったケーキ食べてねえんだよっ」

「あ・・・そ・・・そうだね。じゃあ食べたら帰って」

「やだね。食べたら片付けるからな」

「しょ、しょうがないわね、じゃあ早く食べなさいよお」

「そんな事より、俺が渡したペンダント、着けて見せてくれよ」

「ええ?今?」

「今」

仕方ないわね・・・と照れながら、でも嬉しそうにペンダントを出す葵。

「ちょっと貸してみ。俺が着けてやるよ」

「え・・・やだ、自分で着けるしい・・・」

「いいからいいから、ほら」

ペンダントを受け取ると、そつと葵の首に回す圭くん。

恥ずかしい気持ちになって、顔が赤くなる葵。

「よしっOK、立ってみ」

「う・・・うん」

立ち上がり、くるりと一回転して「どうかな？」って聞く葵。

そしてニコツと笑顔。

その一連の動作と最後の笑顔にドキツとし、思わず赤面してしまう圭くん。

つい動揺してしまい、「すっげえ似合うよーマジ可愛いってー!」と本当は心の中で思っていたが、

「あ、あ〜いいんじゃないね」

結局、ぶっきら棒に返してしまっ。

当然葵はムクれてしまい、

「な、なにそれ、その素っ気ない態度！ 似合っていないって言うの？」

「へっ、バカ。お前に似合うもんなんか、中々見つかるわけねえって」

「ひ、ひどおっい！！ 圭くんのバカあっ！！」

折角良い雰囲気だったのに、

やっぱり、幼馴染な感じに戻ってしまう二人なのだった

そして場所は神崎家。

彩乃は戻ってきました。

島崎君のこと、兄さんにバレなくてなぜかほっとします。

はあ〜。

なんだか溜息。

よしっ！と拳を握り、

「ただいまあ～～～兄さん！」

いつも通り、元気に挨拶。

「おう、お帰り～～」と奥から声がする。

そして彩乃は、愛する兄さんの下へ走りだしました・・・。

その後、やっぱり自分で食事の用意が出来ない兄さんの為に、夕飯を作ったのです。

「お前の料理はやっぱりうめーな」といっぱい食べてくれる兄さん。

彩乃は幸せです。

ごめんなさい、兄さん。

もう、他の男の子と並んで歩いたりしません。

男は甲斐性。

女は一途が武器なのです！

そしてこうやって、食後まったりと二人でテレビを見てるのが、とっても楽しいんです。

テレビでは、なにやら特集の番組……。

ふんふん……今年の夏は絶叫マシーンが熱い……ですかあ。

兄さんに行けたら楽しいですねえ。

ちらっと、兄さんを見る。

期待を込めた瞳でっ。

すると、なにやら言いたげな兄さん。

わわわ、きつと誘ってくれるんですよ！

早く早く……。。

「そついえばお前さ。電話で変だったけど、どうしたっ。」

ずるじ

「も、まあ、そのことはもう済んだんですっ！ 何もありません」

「あ、そう。そりゃ良かった」

話しが終わってしまったじゃないですかあ。

兄さんのいけず……。

その後も続く、絶叫マシンの紹介。

あ、来栖美月だ。

か、可愛い……。美月ちゃん可愛い……。

兄さんを見る。

全く興味ないご様子。

はて？ 女の子に興味がないんでしょうか？

いえ、彩乃が側にいるんです。

きつと、他の女性が色褪せて見えるんですね。

罪な女ってやつなのですか。

ふふふふ……。。

「お前、何ニヤけてんだ？ 気持ち悪い」

「に、ニヤけてたわけではありません！ 彩乃と兄さんの愛について考えていたんですっ！」

「ああ、その件については、母さんが帰ってきたらじっくりするから待ってる」

ええ！？ 兄さんまさか……。

脳裏に浮かぶ、あのシーン。

「母さん、彩乃を俺に下さいっ」

「いいわよ、幸せにしてあげるんだよ」

キヤア~~~~~。

「だから、ニヤけてんじやねえよ、気持ち悪い」

兄さんの声なんて聞こえませんかよ~~~~だっ。

~~~~~

携帯が鳴り出す。

「あれ？ 誰ですかこんな時間に」

液晶を見る。

。。。。。。

白河さんだっ！！

やっとかかってきましたあ！

「こんばんわあ〜白河さんっ」

元気に出ました！

。。。。。。

あれ？

「もしもしい？」

「ああ〜ごめんっ、彩乃ちゃんまだ起きてたあ？」

もちろんですっ！

「起きてますよぉ〜。もお大人ですからっ」

「初めてじゃないですかぁ〜、電話くれたの。かかってくるの待ってたんですよぉ〜」

やっぱり、年上の人に電話するのって気が引けちゃいますよね。

「あ・・そうだったけ、ごめんごめん」

「あ〜あ〜、謝らないでくださいよぉ。勝手に待ってただけですからぁ」

「う、うん・・」

その時、ちょうど目に映ったテレビを見て、閃きました。

「でも、ちょうど良かったですう〜、白河さん明日お暇ですかぁ」
「？」

ふっふっふ。

「うんうん暇なのっ、実は彩乃ちゃんを誘おうと思って・・・」

「ほんとですかあ！ 嬉しいですううう。じゃあ明日、遊園地に行きましょう」

「行く行く行く行く、絶対行くうううう！！」

「えっ、いいんですかっ！ こんな突然なのに!？」

「いいの、いいのよ！ 私も遊園地に誘おうと思ってたからあ」

「うわあうう、気が合いますねえうう」

・・・・・・・・・・。

その後、盛り上がってつい長話ししちゃいましたあうう。

でも・・・ふつぶ。

兄さんを見る。

「お前、やっぱり白河と仲いいんだなあ」

「兄さん。明日白河さんが、兄さんとデートしたいって電話でしたっ！」

「ぶっーーーー」

わっ！ お茶が飛んできました！

ふふふふふ……。

明日、ついに完成させるのです。

「お、おいお前、今のマジか!？」

恋愛にはなくてはならない方程式。

「本当に白河が、デートしたいって!？」

その名は!！ 『三角関係』!！!！!

「で、おいっ！ どこに行くって!？」

始まるのですっ！ どろどろの恋愛関係がっ!！!！!

「お〜い、彩乃〜〜帰ってこ〜〜い。」

そして今日が終わった……。

第10話に続く。

第9・75話 休日はデート 前夜 彩乃スペシャル (後書き)

第9・75話 お読みいただき、ありがとうございました。

今回は、彩乃の謎に迫るべく、彩乃視点でお送りいたしました。

いかがだったでしょうか？

彼女の考えている事は、僕にも解りません(笑)

次はやっと10話の予定です。

お楽しみに！

第10話 休日はデート その？

日曜日 朝

俺は今、猛烈に反省している。

朝起きたばかりだが、反省している。

何をかって？

最近の自分の変態っぷりにだ。

自分でも思う。

どうしても、白河を見るとやらしい気持ちになってしまっ。

白河ただぞ。

他の女には、そこまでじゃない。

どうしてあいつだけ……。

これって恋ですか？

いやいや、あいつが天然でイベントを発生させるのが悪いんだ。

そもそも、俺が率先してセクハラしたわけじゃ……若干あるか……。

でもな、こんな俺をあいつはデートに誘ってくれたんだよ。

こんな変態の俺をだぞ。

マジで嬉しいんだよっ！！

そして、普通に男として見てくれてた事に驚いてる。

だから、今日は絶対にあいつを楽しませてやるんだっ！！

アイドルからの、お誘いだぞ。

たまんね〜な、全く。

まあ、ロリなのがちょっとな・・・残念だけどさ。

それでも充分可愛いしなっ！！

「兄さ〜ん、朝ご飯ですよ〜」。

下の階から、妹の呼ぶ声。

ん？ なんだあいつ、こんな早くに起きてんだ？

彩乃も出かけるのかなと思いつつ、寝巻きのままリビングへ。

妹は、いつもの朝の如く朝食を準備している。

「なんだお前、出かけるのか？」

「はいっ！！ 兄さんと一緒ですよ〜」

目玉焼きをジュージューやりながら、元気良く返事をする妹。

朝からテンション高いなこいつ・・・。

じゃなくて、突っ込むところはそこじゃないだろ。

俺と一緒にってどういう意味？

まさか俺と白河の、甘〜いデートに着いて来る気か？

いや、さすがにそれはないだろ。

じゃあ、あれか。 あいつも今日デートってことか。

「彩乃、お前も今日デートなのか？」

「もちろんですっ！」

そうかそうか・・・。

あいつもやっとな、真実の愛に目覚めたんだな。

俺も応援してやらねば。

とか言いつつ、だんだんイライラしてくる……。

あいつ、誰とデートなんだ？

いや、素直に応援したいという一般的な気持ちもある。

けど……誰だっ!!

人様の妹に手え出す奴はあああ!!

むむむむう~~~~。

ダ、ダメだろっ、折角あいつが普通の女の子として、羽ばたこうと
しているのに。

む、しかし『あいつは俺のもんだ』って気持ちもある。

「あ、彩乃さん？ 今日誰とデートなのかなあ？」

「兄さんですけど？」

ホワツツ？ 俺？

「お前と俺がデート？」

「そうですね。昨日の電話、聞いてなかったんですかあ？」

.....

聞いてませんでした。

ん〜てことは・・・。

「もしかして、今日って三人で行くわけ？」

「いまさらなに言ってるんですかあ。彩乃を置いていくつもりだったんですかあ？」

あ、あははははは・・・。

そうだよ〜。

白河が俺と二人でデートなんて・・・。

可笑しいと思えよ、俺。

どう考えても、好感度下げまくりだもんな。

いやでも・・・。

一応誘ってくれてるわけだし・・・う〜む。

既に妹の心配なんて、すっかり忘れている俺だった。

しかし・・・こいつの格好・・・。

もう家を出て、駅へと向かう道中。

彩乃のやつ、めっちゃオシャレしてる。

普段はツインテールの髪も下ろしているし、こいつにしては珍しい
ヒラヒラのミニスカート。

ちょっとヒールの付いた靴に、白いニーソックス。

そして、フリフリでいっぱいのもうすリーブシャツ・・・。

しかも化粧してやがんな、こいつ。

マセてんじゃねえよ。

いや可愛いよ。

新鮮だしな。

だけどな、こんな気合の入った妹と、兄と一緒に歩いていたらどう
よ？

世間的に。

しかも、俺なんか普通にTシャツにジーンズだし……。

一応、お気に入りにチョイスだけどさ。

ま、いいか。

結局そうなる。

で、いつもの如く手を繋いでくる妹。

いい加減やめろって何度も言ってるんだが、言う事を聞かない。

まあ別に嫌じゃないよ？

いつまでも兄さん兄さんって、甘えてくる妹を嫌いな兄貴なんていないだろ？

だけどさ、これまた世間体ってやつ？

こんなところ、坂崎にでも見られたりしたら……別にいつかあいつなら。

いやそれよりも、クラスの女子に見られた時の方がやっかいだろ。

シスコンの烙印を押され、影口叩かれるのは目に見える。

今以上にモテなくなるのは辛い。

なんとか知人に見つからないよう、祈るばかりだ。

「兄さん兄さん、今日はいっぱい絶叫マシンに乗るんですよっ！」

楽しそうに、繋いだ手をぶんぶん振る妹。

あれ？

こいつ絶叫マシン苦手じゃなかったっけ。

確か、だいぶ前に行った時は『やだやだ乗らないですう』とか言うて、怯えてなかったか？

「お前も乗るのか？」

「頑張ってみますっ！！・・・ああ〜でもお〜白河さんと楽しんで下さいねえ〜」

俺を覗き込み、その後「ふふふ」とこっそり笑みを浮かべる、我が義妹。

何か企んでやがるな、こいつ・・・。

そんな影でニヤリとされたらバレバレなんだよ。

まあどうせ、大した事じゃないだろ。

程なくして駅に着いた俺達は、電車に乗って、白河との待ち合わせ場所を目指す。

合流ポイントは、3つ先の駅。

白河のマンションからの、最寄駅だ。

電車を降りて、ホームで待つ。

白河はまだ来ていないみたいだ。

まあ、約束の時間まで15分あるからな、そろそろだろ。

5分程、ボくつと佇んでいたら、妹に電話がかかってきた。

「はい、彩乃ですっ！ おはようございますっ
いつ・・・えっ？ そうなんですか？・・・」

は

恐らく電話は白河だな。

ちよつと遅れるとか？

「えくでもおく……はい……ほんとに先行っちゃっていいんですか？」

先行けってかつ。

どんだけ遅れるんだよ、あいつ。

「兄さん兄さん」と、妹が困った顔で俺の手を引っ張る。

「先行けってんだろ？」

「はい……そうなんですう」

まあ妹が心配するのも当然だな。

遠出で遊びに行くのに、先行けってんだから。

でも、実は問題無いんだよ。

あいつは例の能力があるからな。

たぶん、連絡無ししのピンポイントで、俺らの前に現れるだろう。

心配顔の妹に、面倒なので大した説明もせず、とりあえず現地を指した。

少し時間は戻り、白河の自宅

私は悩んでいた。

今日、なに着て行こうかと。

昨日、あらかた中学時代の服は出しておいた。

こうして、部屋にいっぱい並べて、どれにしようか考えているところ。

だってね、絶対彩乃ちゃん、オシャレしてくるもん。

彩乃ちゃんって、凄く可愛いしモテると思うのよね。

だから、一緒にいると注目されちゃうし……。

あ、別に対抗してって訳じゃないんだけど……。

い、一応……私の方がお姉さんなんだし、負けたくないっていうか、そのう……。

並べた服を見返す。

どれも、なんだか子供っぽい感じがする。

「彩乃ちゃん、どんな服でくるのかなあ」

想像してみる。

脳裏に浮かぶ、彩乃ちゃんの可愛い姿。

うん、きっと可愛い系でくるに違いない。

そう思ったのには、理由がある。

実は私も、可愛い系しか持っていないんだよね……。

「い、今はちょっと大人っぽいのだってあるんだからっ」

誰に言い訳するでもなく、つい呟いてしまう。

どれがいつかなあ〜

黒いミニスカートを手に取る。

3段カットのフリル。

これなら、ポリユーマーでいい感じかも。

ちょっと子供っぽいかなあ〜。

とりあえず履いてみる。

そして鏡の前で、飛んだり跳ねたりクルっと回ったり……。

うふっ　可愛いい〜。

ミニだけ動いても殆どめくれないし、これにしよう。

と思ったけど、こっちのパニエもいいなあ〜。

これだったら、上は……。

一時間経過

よしっ、完璧っ！　絶対可愛い。

鏡に向かってアイドルポーズ。

うん、満足。

結局、下はシフォンの黒いパニエ。

で、銀の花柄ラメのキャミとおく、白いニーソックス。

ニーソックスはピンクのフリル付きだけど、網状だから大人っぽい。

もう一度鏡を見る。

や~~~~やっぱりダメえ~~~~。

。なんだか、キャミから露出してる、ブラの肩ヒモが子供っぽい・・・

う~~~~このサイズだと、大人っぽいのないのよねえ~~~~。

恨めしく自分の胸をさする。

これかあ、どうしょ・・・。

光沢のある、ピンクのブラを取り出す。

着けてみるけど、やっぱりサイズが大きくてパカパカする。

でもこれにしよう。

しょうがないんだもん。

ちょっと大きいけど、我慢する。

どうせ当ててるだけなんだし・・・。

ふと時計を見る。

「やっぱ~~~~いつ!! 時間ないじゃないっ!!」

急いでお化粧する。

日焼けが気になるから、ファンデして。

リップは薄めで。

うっっん、幼い……。

当然だけど……。

目元を弄りだす。

ラインを入れて、ちょっと吊り上げる感じで大人っぽくして……。

……。

はっ！！！

今何時！？

キャア~~~~~

もうすぐ待ち合わせの時間じゃない！！

急いでバックを片手にかけ玄関に。

そして振り向く。

もう一度、鏡の中の自分を見る。

「あ〜ん、リボン着けてなあ〜〜いい」

中学の時、よく着けてた黒いリボン。

あれがないと決まらないのよっ。

探す。 探す探す探す・・・。

でも・・・見つからない。

「あ〜〜んどうしようお〜〜」

どうしよう、どうしよう、どうしよう。

どうしても、あきらめきれない自分の性格を呪いつつ、

「電話しよう」

という結論に至る。

ダメだ、彩乃ちゃんに先行っててもらおう。

ちよつとずるいけど、例のあれですぐ追い着けるし……。

彩乃ちゃんに電話して、その旨を伝える。

ごめんね、彩乃ちゃん……。

結局、準備が整ったのは30分も後だった。

よしっ！　いくよっ。

気持ちを集中させ、周りの気配を感じ取る……。

すると、ドアの向こう、そして駅、大勢の人達の気配を感じる事が出来る。

「もつと遠く……」

彩乃ちゃんを探す……。

いたっ！

やっぱり電車の中。

あれ？ 見つけたけど、もう一人知っている人の気配を感じる……。

「ええー！ なんてあいつがいるのー!?」

一緒にいるのは、あの変態。

うそおーーーどうしよおーー。

でも、今更行きたくないなんて言えないし……。

………。

ちょっと考えて、下着を履きかえる。

見られてもいいように、もう少し大人っぽいにした。

「ち、違っただからっ。べ、別に見せる為じゃなくて……」

だって、あいつ覗くかもしないし……。

変態だから。

あ、やばっ！

気配を見失っちゃっ！！

もう一度集中し、ポイントを定め……

そこにジャンプするイメージを頭に強く浮かべる。

自分の気配が、彩乃ちゃんの隣に現れるのが分かる。

すると「シュッ」という音を残して姿が消える

電車の中、俺は妹と、ドア付近で向かい合っている。

あいにく混んでいて、座る事は出来ない。

ま、別に疲れてねーし。

妹は、携帯を弄くっている。

「白河さん、今どの辺ですかねえ……メールしてみますっ」と言っ
て、現在操作中だ。

しかしこいつって、ほんとメール打つの遅いな。

料理や裁縫とか凄い器用なのに、機械的なものが絡むとからっきし

ダメだ。

未だにテレビの録画失敗して、ぎゃーぎゃー言ってるもんな。
良く解らん。

「ふう〜、送信つと・・・」

大した長文送ったわけでもないのに、酷くお疲れの我が義妹。

「ん〜返事きませんねえ」

今送ったばかりだろ。

暇なので、心の中で突っ込みをしていると、俺と妹の間に風が起きる。

ん？ 変だな、窓開いてねーのに・・・。

「うおっ！！！」

突然何かに弾かれて飛ばされる俺。

そのままゴロゴロと反対側の壁に「ゴンッ」と衝突する。

「痛え〜〜、何だよ……」

壁にもたれるような体勢で元の場所を確認すると、俺がいた場所には白河がいる。

なんだあいつかよ……。

酷くね？俺ふっ飛ばして登場って。

しかも、俺がんな無視で妹と話してるし……。

「彩乃ちゃん〜ん、ごめんねえ。ちょっと用意に手間取っちゃって・

」

「あ、はい……って、ええ！？どうして白河さんの妹さんが……

」

「え？妹？なんのこと？」

あ〜〜しまった。

俺のついた嘘で、会話が噛み合っていないな。

白河にバレるとやっかいだ。

面倒だったが、二人に割って入るか。

「おう、白河。遅かったな」

「あれ？ いたの、君？」

おや？

予想以上に冷たい対応なんですけど……。

可笑しくね？ 一応誘ってくれたんですよ？

「いたの？って、なに言っちゃってるかなー、俺がいたらまずいのか？」

「まずくはないけどお、良くもないわね」

う……冷たい視線を投げつける白河。

ああ、まだあの時の事怒ってるのかなー！。

先日の、ブリーフ見せつけ事件。

あれは確かにやりすぎだった。

事実、あれから殆ど口を聞いてなかったもんな……。

「で？ どうして君がいるわけ？」

「ひゃい!？」

思わず声が裏返っただろっ！

なぜに、誘ってないのにいるの的な……

考えて、原因に辿りつく。

お前だろっ！

彩乃をジト目で見る……。

じーーーーー。

対する彩乃は、そっぽを向いて、鳴らない口笛を吹いている。

「あ~~~~や~~~~の~~~~」

「てへっ」

てへっじゃねえよ！

可愛くはにかんで、舌出してんじゃねえっ！！

「はあく〜。 彩乃ちゃんが誘ったんだ・・」

「・・あ・・はい。 嫌でしたかあ？」

思いつきり甘えた口調で、白河に問い返す妹。

自分の武器を最大限に生かしているな。

なかなか腹黒い。

さすが我が義妹。

そんな調子で妹と白河のやりとりが続き、やっと存在が認められる俺。

そこまでしないと、同行出来ないのかよ・・・。

しかし、ふと気付く。

「白河、お前って無賃乗車だろ」

「・・・あ・・・」

今気付きましたとばかりに、ビクツとする白河。

しかも、実はさっきからずっと注目の的なんですよ、俺達。

そりゃそうだろ、突然女の子が現れたんだ。

まあ、吹っ飛んだ俺が目立ったから、気付いてる人少ないみたいだ
けど。

でも対面にいる女の子グループは、ひそひそこつちを見ながら、ず
っと何か話してるし……。

「あ、あはははあ〜。じゃあ私、先に行ってるね」

ヒラヒラと手を振る白河。

ん？ その右手でヒラヒラさせてるのって……まさか……。

「お、お前……その手に持ってる物って……」

「え？……」

白河が、慌てて持っていた物を広げた。

そしてそれが何なのか、はっきりと分かる。

ピンクの布地に、黒い水玉模様。

間違いなくそれは、『パンティー』

一瞬場が固まる……。

もうそれは、対面の女の子達をも巻き込む静寂……。

そして目が合う俺と白河……。

「キャ……キャア——————!!!!」

本気で叫びやがったっ!!

「バ、バカお前っ、こんなところで叫んでんじゃねえっ!!」

「し、知らないわよっ!! この変態っ!!」

ゲシイイイイイイツッ!!!!!!!!

パンツ握り締めた手でグーパンチされる俺。

そして勢い余って後ろによるめき、ちょうど開いたドアのせいでホームに投げ出される。

なんてタイミング。

「痛ててて……」

そしてドアが閉まり、行ってしまつ電車……。

何度も言うけどさ、酷くね？

朝も言ったよな、俺。

案の定、早速イベント発生ですよ。

今の見ただろ？

絶対、俺のせいじゃないよな。

普通さ、パンツ手に持ち歩いてる美少女なんているか？

いたら会いたいよな？

ここにいるぜ。

.....。

置いてかれちゃったな・・・。

それでも、俺はへこみつつ次の電車に乗って目的の駅まで着いた。

そこには、ホームでボツンと待つ妹の姿。

「あ、兄さ〜ん」

こっちですよ〜と手を振る我が可愛い妹。

はあ〜癒されるぜ〜。

妹と合流した俺は、目的地まで歩く。

白河は、電車が着いたと同時に、消えてったらしい。

先に行って待ってるんだとさ。

便利なやつ。

駅の前で待つてりゃいいのにな。

「兄さんっ、白河さんに妹さんなんて、いないじゃないですかあ」

そっういえば、そんな事もあつたっけ。

「あつはっはっ、ジョークジョーク、気にするなあ」

「もおっ、彩乃に嘘ばかりつくんですからあ」

ちよっとムクれているが、怒ってはいない我が妹。

さすが彩乃さん、お前のそっういう所が好きだぜ。

「でも不思議ですね、白河さんも幼くなってるなんて」

ボソッと呟く彩乃。

だよなー。

説明が面倒くさかったが、俺と同じで『実験の効果』だと伝えると、

「へえ〜そうなんですか」

と、相変わらず動じない我が妹。

もう少し驚いてくれないと、こっちが拍子抜けなんですけど。

そのまま二人で、だべりながら歩くこと15分。

目的地付近に到着。

遠目に白河を見つけると、向こうも気付いたらしく、次の瞬間には目の前に「シュッ」と現れる。

使いまくってんな、そのスキル。

俺はつい周りを気にしてしまう。

「遅かったじゃないのお〜」

いやお前が早いんだし・・・とは言わず、「おう」と挨拶してやると、後は妹にまかせる。

まだ微妙に怒ってるからな、妹のほんわかパワーで柔らかくしてもらわねば。

前を歩く二人を眺める。

既に電車の中から気になってたけど、白河の私服がめっちゃ可愛い。いや、白河が着るから可愛いのか・・・。

しかも化粧してるみたいで、幼いくせに妙に色っぽくなりやがって。ロリなのに、俺をドキッとさせるなよ・・・。

そのままボケくと、白河ロックオンで歩いていたら、なにやら二人が立ち止まる。

「あん？ どうした？」

「兄さん、はいっ」

手を出されたので、そのまま手を繋いでやる。

「ほらあ、白河さんもですよあ〜」

「ええ〜無理だよあ〜、勘弁してよ彩乃ちゃん〜ん」

空いてる手で、白河を引っ張る妹。

全身が身震いしてしまう俺。

「ちょっ・ちょつとお！変な動きしないでよぉ〜」

「・・・は・・・はい・・・すみません・・・」

な、なんですかこのシュチュエーション。

左手に我が義妹。

そして右手には、ロリ化したアイドル。

なぜかそのまま進む俺達。

妹は、鼻歌まじりで手をぶんぶん振って楽しそうだ。

白河は、俯いて表情が分からない。

しかし、やばいのは手だ。

何がやばいって、妹は普通に手を繋いでるだけだけど・・・

白河は、なぜか恋人握りなんですよっ！！！！！！

俺からじゃないからなっ！

こいつが自然にそう握ってきたんだよっ!!

指と指の間に感じる、柔らかい感触……。

初夏の暑さで、薄っすらにじむ汗……。

や、やべええ~~~~~

ドキドキしてきたあ~~~~

たかが、手を握ってるだけでなんでこんなに……。

ま、まあ妹以外とこんな状態になるのは、初めてだけどさ。

あ……さらにやばい……。

イベントでもないのに、俺の砲台がマックスパワーに……。

どどどじするどじする……。

頼むっ!!

俺のジーパンよっ!その姿を覆い隠してくれたまえっ!!

天に祈りを捧げ、前屈みで歩く俺。

「神崎君？ 大丈夫う？ お腹でも痛いのか？」

普通に心配して、横から見上げる白河。

大きな猫目が、俺を見つめる。

ダ、ダメだ・・・今のお前は、可愛さ10倍界王券だ。

ロリなのに、ロリなのに・・・

めっちゃ可愛いんですけどっ！！！！

こ、これ以上は、身体がもたんつ。

きっと第三者から見たら、小学生に反応している変態にしか見えな
いぞ。

でもな、中身は白河なんだよ~~~~。

心を落ち着かせようと、妹を見る。

妹は、俺の股間を見つめて顔を赤くしている。

え、ええと・・・彩乃さん？

ダメですよ、そんなところ見てちゃ・・・。

すると、ふいに俺を見上げて、ニヤッとする我が妹。

げっ!!!

妹に、そんな目で見つめられる兄って・・・。

お、お前でこうなったんじゃないからなっ!

誤解しないでくれっ!!!

その後入場するまで、一言もしゃべれない俺だった・・・。

その?へ続く・・・。

第10話 休日はデート その？（後書き）

第10話 休日はデート その？ いかがだったでしょうか。

数少ないであろう、本作品をお読みいただいている女子の方へ補足です。

男の子は、何もHな事だけで反応するわけではありません。

相手を本当に思い、好きであるなら、触れただけでも反応してしまう時があるのです。

まあ10代の時位までですが・・・。

なかなか可愛いでしょ、男って。

女性読者に嫌われてると怯えつつ、媚を売る作者なものでした！

^^；

第11話 休日はデート その？

俺達3人は遊園地にいる。

ぶつちやげ、妹以外の女の子と来たのなんか初めてだ。

だから俺は、未知の経験に期待を馳せていた。

要するに、楽しみだっただけ。

しかし今は、休憩所で3人ともムツツリとしている。

それはなぜか。

見上げれば、一面の雲。

そして土砂降りの雨……。

可笑しいと思っただよ、めちゃくちゃ空いてるんだもん。

「彩乃、お前さ、天気ぐらい調べとけよ」

「ちょっと、彩乃ちゃんのせいにしないでよ！ 男らしくないんだからっ」

「まーまーまー、当然そんなのは調査済みなのですよお」

ふっふっふと含み笑いの我が妹。

横では白河が、普通にへこんで頼杖ついている。

「天気予報では、このまま一日降り続くと言ってましたけどお、午後には小雨になるとも言っていましたあ！」

絶望的な報告に、俺と白河はさらにへこんで、顔を見合わせる。

「しかあし！！ 彩乃の勘では、午後にはきつと晴れるのですっ！！」

へーへーそりゃ良かったね。

そうだといいね〜。

お前の勘と、天気予報のどっちを信用するってんだよ。

あきれる俺。

いじけてジュースを飲んでいる白河。

そしてボソッと呟く。

「うっ……絶叫マシン……乗りたいかったなあ」

そ、そんなにしょげんなよ〜。

可愛いこいつが悲しい顔していると、なんとかしてやりたくて堪らない気持ちになる。

「大丈夫ですよ！ 彩乃はちゃんと準備してきたんですっ！！」

一人元気な我が妹は、バッグから折りたたみ傘を取り出して「見てくださいっ」と空に掲げた。

成程・・・少しは準備してきたんだな。

えらいえらい。

しかし、それで絶叫マシンが乗れるわけじゃない。

当然、この雨で動いている乗り物なんかなかった。

「あゝあ、今日乗れなかったら、もう次いつ来れるか分かんないよ
お・・・」

そうか・・・白河は忙しいもんな。

しかも有名人だし、今日はいいいチャンスだったんだな。

改めて、可哀相になってくる。

「おみやげ屋さんにも行くのかなぁ……」

もう帰る気なのかよっ！

やべっ、本当になんとかしてやりてえな。

「チツチツチ、甘いのですよみなさん。なぜ、結構遠いここを選んだのか、それには理由があるのですっ」

あいかわらず、テンション持続中の妹。

しかし、なんかあるのかこじ。

「乗り物には乗れませんが、当遊園地には屋内アミューズメントがいっぱいあるんです！！」

へーそうなんだ。

じゃあ一応遊べるんだな。

「これを見て下さいっ」と広げる情報誌。

そこには、この遊園地の特集ページが。

まだ重い空気のまま、目を通す。

なになに・・・『屋内のアトラクションも充実!』・・・ふむふむ。

『君が勇者だ!』『宇宙空間が体験できるスターパラダイス』『最怖との噂でもちきり!サチコの家』などなど・・・。

確かに、屋内系のアトラクションが結構あるな・・・。

しかも紹介用のカットだけで、なんだか興味をそそられる。

どれも参加型のもので、3人で楽しめそうだしいいかもなあ・・・。

横では、白河がなにやら神妙な顔で、雑誌を食い入るように見ている。

すると記事を読む度に、「あゝなにこれっ」「ええゝこれなにいゝ」「うわっ!すごっ!」と段々テンションが上がってくる。

ほぼ元気を取り戻したな、彩乃ナイス。

そしておもむろに立ち上がると、目をキラキラさせる白河。

「わはっ　面白そうゝ行ってみたい、行ってみたいっ!」

「そつでしょっ、そつでしょっ。」

えっへんといつも通り胸を張る妹。

白河も嬉しそつで、良かった良かった。

「良くやった！」頭を撫でてやると、嬉しそつに目を細める妹。

それじゃ午前中はインドア巡りで、後はこいつの勘を信じて午後を待つか……。

妹の準備した傘を受け取ると、まずはここから近い『君が勇者だ！』を指すべく、第一歩を……

と思つたら、無言で俺の傘に入ってくる白河。

「……………」

嬉しいやら緊張やらで俺も無言。

「…………だつてえ……彩乃ちゃんが入れてくれないんだもん……

」

聞いてもないのに、言い訳してくる白河。

どうやら傘は2本しかないらしい。

そして俺を見て、親指をこっそり立ててみせる我が妹。

う・・・微妙に嬉しいじゃねえか、妹よ。

しかし、白河を雨に晒したくなかった為、身体の半分以上が濡れになる俺。

「ああ〜神崎君、ずぶ濡れじゃないのお〜、もっと近くに寄りなさいよお」

「お、おう・・・」

白河に一瞬腕を組まれ、引っ張られる。

その反動でぴったりくっついてしまう俺達・・・。

「ちよ、ちよっと・・・ち、近すぎっ!」

「お、おう・・・」

さっきから』おう』しか言えない、しょぼい俺。

近づいた時のあいつの匂い……。

なんだか今日は、めちゃくちゃ良い匂いがするんだよ、マジで。

ああ、俺このままロリに目覚めたら、どうしてくれんだよ。

落ち着こうと、辺りを見廻す。

人が少なく、閑散としている。

そして数々の絶叫マシンがあるが、どれも稼動していない。

ま、当然だよな。

そんな中、一際賑わうスペースがある。

「あ、あれじゃないですかあ」

妹が指差すそこには、『君が勇者だ！完全版』とでかでかと看板が建っている。

お、あれか、何が完全版か知らんが行ってみよう。

列に並び、順番を待つ。

幸い、列といっても大した事はない。

立て札には、ここから10分と書いてある。

なんだか、得した感じだな。

入り口には、悪の大魔王みたいな超でかいフィギアがあつて、挑戦者求むとある。

なんか面白そうだ。

「うわあ〜〜なにをするのかなあ、ここ。ねえねえ神崎君、なにか見えるう?」

わくわくマックスな感じで、楽しそうに俺の服を引っ張る白河。

かっ・・・可愛すぎる・・・!!

来て良かった・・・マジで・・・。

違う意味でドキドキしながら、順番を待つ。

おっと彩乃はどうした。

後ろで呆けている妹を側に寄せ、手を繋ぐ。

ニコッと嬉しそうな彩乃。

俺は妹思いの兄だからな、こいつにも楽しんでもらわないと。

順番になり、ゲートを潜る。

で、係りの人からの説明が始まる。

内容的にはこうだ。

パーティーごとに、悪の大魔王を倒しに行く…そういうシステムらしい。

一つのパーティーは、最大4人まで。

だから、俺達は3人で遊べる。

そして、最初になりたい職業を決めるらしい。

で、職業とやらは結構種類があっただな…

戦士、魔法剣士、魔法使い、僧侶、科学者、風水士、召喚士……
など様々だ。

俺は迷わず戦士を選ぶ。

すると、剣の柄つかのようなものを出されて受け取ると、使い方の説明をしてくれた。

「それは勇者の剣です。その剣でタイミングよく、モンスターを切つて下さい。」

はあ、これが・・・。

どう見ても刃の部分がない、ただの柄なんですけど。

二人はって言うと、どれにしようか迷っているみたいだ。

「兄さん、この僧侶ってなんですかあ？」

その質問には、係員の人が答えてくれた。

僧侶は多少攻撃も出来るが、基本はお祈りを捧げてパーティーの体力を回復をする、といった職業らしい。

「じゃあそれにしますう。」

うむ、癒し系のお前にぴったりだ。

なにやら水晶のような、大きな玉が付いたロッド？を渡される妹。

白河はというと、どうやら魔法使いらしい。

頭にはとんがり帽子。

手には、長い樹脂製の杖。

木に模したデザインだ。

「似合う〜これ？」と、帽子を指差す白河。

はいはいお前は美形だから、なんでも似合うよ。

実際、普通に似合ってるし。

係員の人に案内され、広いスペースに到着する。

その先には沢山のドアがあり、幾つもの部屋があるようだ。

そして、「助けてえ〜〜勇者様あ〜〜!!」どこからか聞こえる叫び声。

『魔王に囚われたお姫様を救い出す』という設定らしい。

なかなかベタな感じでいいじゃないか。

部屋に入ると、中は円形状になっていた。

何が円形かって言うと、360度黒い円形状の壁に囲まれているのだ。

何でかは知らねえ。

床は前面ゴム張りで、ちょっとふわふわする感じだ。

そして突然明かりが消され、真っ暗になった

「キヤツ！ や・・・やだ・・・神崎くん、どこにいるのよぉ〜」

「・・・に・・・兄さん、なにも見えません・・・に、兄さんいますかあ？」

演出だろうか。

暗闇が続く中、怯える二人が面白いので、俺は黙っている。

周りでは彩乃と白河が、うろつろつと彷徨っている気配がする。

「兄さんっ!」

俺を見つけて、ガバツと身体にダイブしてくる妹。

「・・・彩乃ちゃん・・・どっお・・・」

「同じですよぉ〜。」

俺に抱きついている白河と目が合う。

「な、なんかそろそろ始まるみたいだ・・・ぞ」

「う・・・うん・・・そ、そだね・・・」

ぎこちなく離れる白河。

そして室内にアナウンスの音が流れる。

「は、早く助けに来てください！ 勇者様！！」

お姫様の叫び声と共に、床が動き出す。

「うおっ！ なんだ？」

「わわわ！」

「キャッ、な、なに！？」

床の動きに合わせて映像が進んでいく。

成程、歩けつて事か・・・。

俺達も、その速度に合わせて歩く。

なんだろ。

空港とかにある動く床を、逆走している感じだ。

そのまま草原を進んでいると、遠くから徐々に近づく物体が・・・。

段々とそれが何か分かる。

スライムだ。

「キヤア〜、なにあれ可愛い〜」。

「わあ、ぴよんぴよん跳ねてますう、可愛いですう。」

女性陣には、その愛くるしさが人気のようだ。

まずは程よく、あれを倒せって事だろう。

「シャキーン！」

機械的な効果音と共に、俺の持っていた剣の柄に見事な刃が出現した。

す、すげ〜。

持っていたそれは、今や完全に勇者の剣と言っていい格好良さだった。

ただ、重さは感じない。

手で触ろうとしても、刃の部分は触れられない。

立体映像なのかな？ 不思議だ……。

そうこうしていると、スライムが目の前まで来て飛び掛ってくる。

3Dなのか、画面から本当に飛び出してきた。

やべえっ、ぶつかる！！

その瞬間　　バシッと効果音が鳴り、揺れる床。

で、今気付いたけど、神崎駿と書かれた、左上に表示されている俺のHPが少し減った。

おおっシステムが解ったぞ。

要するにHPが無くなると、ゲームオーバーなんだろう？

オーケーオーケー。

俺は剣を構える。

スライムがまた飛び跳ねてくる……。

目の前に来たその時、タイミング良く剣を振った

「ジャシュッ！」

真っ二つになるスライム。

き、気持ちいいじゃねえか……。

そのまま落ちて、徐々に消えていくスライム。

ふっふっふ、もう解ったぜっ！

しかしその後も剣を振り続けるが、なかなかスライムに当たらず、無駄に体力を減らす俺達。

彩乃も、「やあ！」「とあっ！」「はにゃ……」と掛け声付きで口ツドを振り回すが、空振りのご様子。

意外と難しいぞ……これ。

横では白河が、さつきから全然戦闘には参加せず、なにやら冊子のようなものを見ている。

「白河……お前、何やってんの？」

「え？ 説明書読んでるんだけどお……」

そんなものが在ったのかよっ!!

「彩乃も見たいですっ、見せて下さいい〜」

彩乃が白河に駆け寄り、熟読を始める二人。

俺も見たいんですけど・・・。

そうこうしているうちに、仲間を呼んでどんどん増えていくスライムの群れ。

まずいぞ、このままゲームオーバーな予感が激しくする。

そんな俺達の事情は無視で、一斉に飛び掛ってくるスライムたち。

もうダメだ

と思った瞬間。

「ファイヤー」

突然、大きな炎が噴き出し、スライムの群れを包み込んだ。

白河の魔法だった。

構えた杖から、軽快に噴き出す炎。

一瞬で塵ちりと化すスライム。

チャララチャツチャチャ~~~~ン

効果音が鳴り響き、メッセージが流れる。

勇者白河はレベルが上がった！

ファイヤーウォールを覚えた！

アイテム『女の子の秘密』を手に入れた！

「やったあ！　なんかレベル上がった！　うっふふ〜ん」

「ファイヤーウォールは・・・」とぶつぶつ呟きながら、嬉しそうに説明書をパラパラめくる白河。

「ああ〜いいですねえ白河さん。どんな魔法なんですかあ？」

妹が食いつき、二人できゃ〜きゃ〜騒いでいる。

楽しそうだな・・・。

俺も仲間に入れてくれよ。

しかし、『女の子の秘密』ってなんだ・・・？

その後はバシバシと、雑魚モンスターを倒しまくる俺達。

スライムの他に、ゴブリン、ミニ悪魔？、ゾンビなどなど・・・良
く知っている、可愛くデフォルメされたモンスター達が登場する。

女子二人にも「や〜ん可愛い〜」と、大好評だ。

あいかわらず派手な魔法で敵を一網打尽にする、破壊力バツグンの
白河。

そして倒し損ねた雑魚を処理する、俺と彩乃。

戦う度に体力が減るが、彩乃がお祈りを捧げて回復してくれる。

ナイスなバランスのパーティーだ。

そして映像は進み、モンスターがぱったりと出現しなくなる。

今の内にと、俺も説明書を見せてもらおう。

げ！　なんだよ、必殺の剣だって・・・。

俺にもカツコイイ技があるんじゃないか。

「いよいよ魔王の城が近づいて来たぞ！　気を付けるんだっ勇者達
！！」

またアナウンスが流れる。

と同時に周りが暗くなり、ダダんだッダン、ダダんだッダダダと
ンとターミネーターのようなBGMが流れて、魔王城が登場する。

で・・・でかい・・・。

ギギギイイイイと扉が開かれ、中に入る。

すると、大量のゾンビが現れた！！

しかし、さっきまでのゾンビとは違って、デフォルメされていない
気持ち悪い姿。

「いやあ～～気持ち悪い～～、神崎君お願い～～」

「キヤア～～気持ち悪いです～～」

後ろの方に隠れてしまう二人。

マジかよ〜、こいつら斬っても斬っても復活すんだよな〜。

さっきは白河の魔法連発でなんとかなっただけ……。

白河のMPを見る。

残量が殆ど無い。

仕方ない、あいつが回復するまでなんとかするか。

わらわらと、かなりの数のゾンビに囲まれる俺。

それを次々斬り捨て、真っ二つにする。

気持ちいい〜。

しかし切ったゾンビはそこから再生し、逆に数が増えていく……。

マ・マジでえ!?

くそっ、埒があかねえ。

俺は剣を後ろに構え、溜め攻撃の準備をする。

わらわら集まるゾンビ……。

ぎりぎりまで待つ……。

よしっ！ 今だ！！

「ハイパースラッシュオオウウドツ！！」

掛け声と共に、剣で思い切り横斬りをする。

刃から広範囲に衝撃波が発生し、ゾンビを全て切る！

爽快！！

ふっ、どうだ見たか、俺の必殺剣。

しかし飛び散る破片から、次々に再生を始めるゾンビども。

げっ嘘だろ！？

さ、さすがにこれは終わった……。

俺がゲームオーバーを確信したその時、

「チツチツチ、甘いのですよ兄さん。そう、それは昨日食べたケーキよりも・・・ふふふ・・・」

何だか、キャラチエンジして再登場する我が妹。

「ここは彩乃におまかせですう～～」

そう言い放つと、お祈りのポーズを取る僧侶彩乃。

「奇跡！ 浄化の祈りっ！！」

ですう～～とロッドを掲げると、眩い光りが辺りを照らし始める。

そして跡形もなく消えるゾンビ・・・。

「ふっふっふっ、どうですか兄さんっ」

見ましたかっ胸を張る妹。

すげえな・・・演出も凄かった。

ただ・・・最初からそれやっつけよ。

心の中で突っ込みつつ、先を進む。

広い階段を登ると、『謁見の間』と呼ばばいいのか、両サイドの柱が何本も立つ広間に出た。

真ん中にはレッドカーペットが敷かれている。

そのだいぶ先に、恐ろしくでかい魔物が触手をウネウネさせて待っている。

たぶんあれが、魔王に違いない。

「ううううまた気持ち悪いのがいるじゃないくう」

「兄さんっ、ボスですよボスっ！！ あれを倒せばきっとクリアですっ」

引き気味の白河と、先程の活躍でテンションの高い彩乃。

目の前に現れる魔王。

でかくて気持ち悪い。

爬虫類のような顔をしていて腕は無く、その代わり何本もの触手が生えている。

「お前達が勇者か・・・全員皆殺しだあああー!!」

魔王の地響きを起こすような声と共に、触手が伸びてくる。

「いやあゝゝこないでえゝゝ」

「あわわわ・・・こ、これはダメですう・・・」

またもや逃げてしまう二人。

「お、おい、俺一人じゃやばいつて!」

触手を斬り刻むが、本数が圧倒的に多い。

斬り残しにやられ、どんどん体力が減っていく・・・。

しかし身体が光り、一瞬で回復するHPゲージ。

妹の後方支援だ。

だけど、このままじゃ時間の問題だ。

彩乃のMPが無くなったら終わり。

「白河っ、魔法頼む！」

「ええ〜仕方ないなあ〜」

「うわっキモっ」と言いつつ、近寄り杖をかざす。

「ファイヤーウォール！」

声と同時に、目の前に炎の柱が立ち上がる。

これで、しばらく攻撃が防げるみたいだ。

ふ〜どうすっか。

白河のMPは、今のでほぼゼロ。

俺の必殺剣は、触手が邪魔で本体に当たるか分からない。

しかも、一回の戦闘で一度しか使えない。

まさに最後の砦。

どうしたら・・・

すると、魔王が大きく口を開けて空気を吸い込んでいく。

響き渡る地鳴り……。

な、何かやばい攻撃がくる感じ……。

まだファイヤーウォールはある。

防げるか？

そして魔王が口を閉じた刹那
間、冷たい豪風が吹き荒れる！

場が静まり返り、次の瞬

「キャアアアア寒~~~~い!!」

「か、顔が痛いですう~~~~」

演出なのか、若干氷の粒が混じって風が吹いている。

こりゃ堪らん!!

しかも、ファイヤーウォールは消え、HPが凄い勢いで減っていく。

風が収まった頃には、全員ゲージが赤く点滅していた。

まずい……彩乃もMP切れだ。

ああ、ここまできて終わりかよ~~~~。

「分かったっ、あれを使ってみる」

ここまで逃げ腰だった、勇者白河が立ち上がった。

「ネーミングが嫌で使わなかったけど・・・しょうがないわね」

そう言って、杖を置き両手をかざす。

「アイテム、女の子の秘密っ!!」

がくっ

それかいっ!!

どうせヘッポコなアイテムだろ。

しかし、予想を覆す演出が始まった。

部屋がまた真っ暗になり、床が揺れ始める・・・。

そして映像が現れると、魔王は電撃のようなものに縛られて動けない様子。

なんだか凄い事が起きそうな前触れ・・・。

すると突然、床から物凄い風圧で風が吹き上がる!!

シューウウウウウウウウウウウウウウウウ!!……!!

一体どの隙間から吹き上がっているか知らないが、身体が浮きそう
なぐらいの風圧だ。

「いやぁ~~~~!!…… ちょ、ちょっと止めてえ~~~~」

「ダメですううう!!…… め、めくれちゃいますよー!!……!!」

!!……!!……!!……!!

声に反応して、すぐに白河へロックオン!!

ぐっ!!…… しかし遅かった……

何とか手で押さえちまってる。

俺とした事が……

そのネーミングで気付くべきだった……

魔王を見る。

風でどんどん切り刻まれ、ボロボロになっていくのが分かる。

よし・・・この後がチャンスとみた！

俺は剣を後ろに構え、必殺技の体勢に入る・・・。

そして風が止んだ瞬間

「ラストハイパースラッシュオオオウウウウドツ!!」

立体映像に向かってジャンプ!!

そして斬るっ!!!

バシユツツツツ!!!!!!

と豪快な音が響き、魔王から体液が激しく飛び散る。

き、気持ち良すぎるぜ〜〜。

「ぐわあああ!! お、おのれ勇者どもめええええ・・・」

魔王の肉体が崩れ落ちる……。

チャララチャツチャチャチャーーン

軽快な音楽と共に映し出される、『クリアー!!』の文字。

そして『監修 如月研究所』と流れるテロップ。

成程……どうも可笑的と思ったんだよ。

このオーバーテクノロジーと変なアイテム。

その全てに納得する俺だった。

しかし如月さん、こんなところで仕事してたんだな。

さらに謎は深まった……。

達成感と動き回った疲労で、俺達は室内のベンチでぐったりしていた。

手にはクリアの賞品『勇者の証』がある。

なんて事はない、ただの腕輪だ。

銅か何かで出来ているのか、ずっしりと重い。

そして何故か「重いから持ってたよぉ〜」と、三人分が俺の手に。

いや俺も充分重いし・・・。

仕方ないので、全部腕にはめてやる。

ずしっ

鉄アレイを持つてるかのような重み。

けっ・・・こうなったら鍛えてやる。

これを次に外した時、俺の本気が出るぜ!!

下らない事を考えている隣では、白河がジュースをゴクゴク・・・。

その向こうで、彩乃もお茶を飲んでいる。

「ふう〜暑いね〜」と手でフリフリ顔を仰ぐ白河。

女って、なんで手で仰ぐんだろ？

不思議だなあ〜と横目で観察する。

すると、キャミソールの胸元をパタパタし始め、身体に風を送ろうとしている。

「そんなに汗掻いたの・・・か・・・」

「え？ うんうん結構ねえ」

さらりと答える白河なんてどつでもいい。

驚愕の光景に、俺は言葉が出ない。

教えてほしい？

実はさ、キャミをパタパタする度に、ピンクのブラが丸見えなんだよ。

し……しかも……しかもおおおおお！！！！！！

あきらかにサイズの合わないブラがカパカパして……

カパカパして……

その……

先端が……

チラチラ、チラチラと……

た・・・立ってるのかな・・・。

い、いやいや・・・何でもない時に立つもんなの？

分かんねえ・・・。

しかし・・・あの先端が、完全体の白河にあると想像すると・・・

あああ・・・た、堪んねえ〜〜。

ダ、ダメだ・・・興奮してきた・・・。

み、見ちゃダメだ、見ちゃダメだ、見ちゃダメだ。

そつだよ、覗き見なんて卑怯すぎる。

そんな俺を知ったら、絶対白河に嫌われちゃうだろ。

でも、脳裏に浮かぶ先端突起・・・。

やばいぞ、白河の過去最大イベント発生で、しばらく立てそうもない。
い。

しかもこの熱いたぎりは、尋常じゃない。

妹だけでなく、白河にもバレるかも知れない。

そして俺は、一生ロリの烙印を押されてしまう・・・。

どうすれば……

辺りを見廻す……。

白河とは逆方向にお手洗いを発見！

俺は迷ったが、現状復帰する為に手段を選んでなどいられない。

「ちょっとトイレな」

と軽く告げた俺は、お手洗いに駆け込む。

……

そして数分後、何とか落ち着きを取り戻し現状復帰を果たした。

なんて情けない俺……。

「大丈夫う？ またお腹痛いのお？」

心配する白河を、まともに見れない俺だった……。

お手洗いの中で何があったかは、男子諸君にはご理解いただけると
思う。

なんでデート中にこんな事態になってしまつのか。

教えて下さい。

みんなもそうなんですか？

その後は白河と距離を置きつつ、幾つかのアトラクションを楽しんだ。

最初に入ったお化け屋敷『サチコの家』はまだ良かった。

ガチで怖くて、あいつは我慢できず、すぐにスキルを発動。

目の前から消えた。

そして、怯えて動けない妹を抱えたまま、最後まで耐え抜いた俺。

いや、だからそんな事は大した事じゃなかったんだよ。

あいつがパタパタしまくりだから、並んでる時とか周りの男共の視線が気になって気になって……。

なんとか他に見えないよう、死角を作るのに必死だった。

しかも、そんな俺に気付いたのか、彩乃がニヤニヤしてるしよ〜。

はあ〜、溜息でちゃうぜ。

で、問題はその後の『スペースパラダイス』だ。

如月研究所監修と書かれたそのアトラクションとは、なんと無重力空間を3分も体験出来るのだ。

普通の部屋だぞっ。

オーバーテクノロジーにも程がある。

まあ、すげえ楽しかったけどな……。

じゃなくて、その無重力で白河の胸元がそれはもう……

全開なわけだったんですよ。

大喜びのあいつは、「神崎く〜ん、ほらほらあ〜」と無邪気に宙を漂ってくるもんだから……

どうしろってんだよ!!

可愛いやら、Hやらで……そりゃもう先端祭りですよ……。

本人に言った方がいいんだろうか……。

言えないでしょ、「先端見えてるよ」なんて……。

しかし、このままでは他の男にまで見られてしまう。

それだけは、絶対にさせねえ!

ロリ状態だからといって、甘くみてはいけない。

ちっこい白河は普通に可愛いし、実際すれちがう男性どもの注目を集めているのが分かる。

ロリだろうがおばさんだろうが、取り敢えずチェックする。

それが男の性さがだー!!

しゃーない、事情がバレてそうな妹に頼むか……。

はあく、俺はもうげっそりなんですよ。

何度、お手洗いにいった事か……。

恐らく、一日での過去最高回数を超えたかも知れない。

これが悪いんだろうか……。

下っ腹に貼り付けた円盤のような装置。

何でも、内臓器官を活発にする装置で、2号の為に開発中だとか……。

如月さんの作った装置だ、副作用があっても不思議じゃない。

「次わあゝゝこれかなあ。これも屋内のやつじゃない？」

無邪気に次のアトラクションを検討中の白河。

ああゝゝ本当に、毎度毎度ドキドキさせられるぜ……マジで。

第12話へ続く……

第11話 休日はデート その? (後書き)

第11話でした〜。 いかがだったでしょうか。

もう完全に、この話で女性読者を失った気がします・・・。

しかし! 負けるもんか!!

どんなに陰口叩かれても、この路線に変更無し!!

まあ今更だし・・・

そんなこんなで今後も宜しくお願いします。

え? 何をつて? さあ・・・^^;

第12話 休日はデート その？

「全く……遅いなあいつら」

俺は今、ベンチで一人黄昏ている。

何でかって言うとき、思い切って彩乃に相談したんだよ、白河の事ももちろん先端の件で。

恥ずかしかつたぜ……ほんと。

だってさ、俺が白河の胸元覗きましたって自白したようなもんだぜ。

そりゃもう、相当な決意と覚悟で話したわけよ。

そしたら彩乃のやつ、ニヤニヤニタニタしやがってよ……。

「ふふふ……兄さん何度も見てましたねえ……。しかも、トイレでなにしてたんですかあ？ しょうがないですねえ兄さんったら」

とか言いやがってよ……！！

トイレに駆け込んだ事情も、ほぼバレてるみたいだし……。

ぎゃああああああ、兄の尊厳がああああああ！！

くそぉー、妹がこんな鋭いのも母さんのせいかな？

まさか自室でこっそりしてる事もバレバレなんじゃ……。

ま…まあこの調子だと、隠してるエログッズはまず見つかったる可能性が高いな。

あいつ俺の部屋、三日にいつぺんは掃除してるし……。

しかも…実は…こっそり白河の写真集も買ったんだよね。

いや全然エロくないんだよ？ ちょっと水着があるぐらいで。

まあ…その水着で、俺の砲台はMAXだけだな。

でもさ、エロ本よりアイドルの写真集の方が見つかるの恥ずかしくない？

特に男友達とかには、見られたくないよな。

「お前これで抜いてんだ？」

的な目で絶対見られるだろ？

いや……妹にもそう思われてるって事か……。

ああ…もう死にたい……。

コホン

話しが脱線しちゃったな。

要するに俺の心配　　もちろん他の男に覗き見されないように、彩乃に頼んだってわけで。

んで、「分かりました兄さん、まかせて下さいっ」って張り切って引き受けてくれた妹は、そのまま白河を連れて土産屋さんに入って行ったんだよ。

俺も着いて行こうと思ったんだけどさ、「君は来ないでっ」と白河に突っ張られてしまい、今の黄昏た俺に辿り着くわけ。OK？

しかも聞いて驚け、なんと空は快晴。

「午後は晴れるんですっ」と言っていた妹の勘が大的中！

ちょうど時間はお昼時、おかげで午後はこの超空いている遊園地を存分に楽しめると寸法だ。

いや〜彩乃様様だなこりゃ。

そりゃもう、白河もテンションMAXなわけですよ。

ま、その前に先端対策してもらって飯食わねーとな……………。

店から出てきた白河はTシャツだった。

何だか陽気にキヤアキヤア言いながら出てきた二人は、明るい水色のTシャツを揃って着ていた。

そう、彩乃も全く同じ物を着ていて、いわゆるお揃いってやつ。

でな、俺にはピーンときたんだ。

彩乃の気遣いが。

恐らくこうだ　　直接指摘して白河がシヨゲないように、無理
言ってお揃いの服を着させたんだろう。

大方、「白河さん！ お揃いのシャツ着て午後は遊んじゃいましてよ
う！ー」とか言って強引に着させたんじゃないのか。

あのシャツなら、首元も開いてないし安全だろ。これで俺の気苦労
も無くなる。

しかし、かなり露出が減って残念だけどな。まあしゃーない。

あれ？ とすると、何でたかがTシャツ買うのに俺だけハブにされ
たわけ？ 意味分かんないんですけど。

謎だなあ……。

ま、『女の子には秘密がいっぱいあるの』『系じゃねーか、どうでも
いいわ。』

「兄さん、お昼どこで食べましょうかあ？」

「せっかくだしさあゝ、あの辺の芝生とかあゝ日が当たるとこにしようよ」

今はランチ場所を選定中。

当然、妹が弁当持参だろうから、後は快適に食べれる場所さえあればOK。

んで、白河の主張によると「晴れてるんだからお外で食べよう」という事なんだが……。

このクソ暑いのか？

マジで太陽光線ジンジンなんですけど。

まあ白河が楽しいなら、それでいいか。

てなこと、手頃なベンチが無かった為というか、噴水が気持ち良さそうだったので、その端に3人並んで食べる事にした。

噴水のシャワシャワする音が涼しげで気持ち良い。

「じゃじゃーん！ 今日彩乃スペシャル！ 特製サンドウィッチですっ」

「いっぱいありますよぉ〜」と笑顔で弁当を開ける妹。

成程、みんなで摘めるようにサンドウィッチか。

さすが彩乃、考えてんな〜。

中身というか、具も豪華だ。

豚カツにタマゴやツナ、レタスにトマト。

「兄さんの好きな物いっぱい入れましたあ〜。もちろん、白河さんも食べて下さいねっ」

いつものハイテンションでアピールする妹。

こいつの弁当は毎日食べてるからな。旨いのも知ってるし。

白河はというと、大きな弁当箱を太ももの上に置いて固まっている。

そしてこっちをチラチラ見て、何か言いたげだ。

分かり易いやつだな。

あきらかに一人分とは思えない、そのお弁当。

朝の展開からして、大方彩乃と食べようとも思っただろう。

だけど彩乃から先に3人分のサンドウィッチを出されたもんだから、自分の弁当をアピールしずらくなつたと……。

しかも、彩乃の腕は熟練した主婦レベルだし、

見た目からして豪華で、普通に販売してても可笑しくない位の出来だ。

全く…彩乃が持つてくるって考えなかつたのか？

しょうがない、俺がきっかけ作ってやるか……。

「お、白河も弁当持ってきたのか？俺にもくれよ」

「えっ、やだ勝手に……」

呆けて固まっている白河から、簡単に弁当を奪う。

そしてサッと蓋を開ける。

中を見ると、ぎっしりとおにぎりが詰まっていて、四人分位ありそうな量だ。

元々二人で食べる予定だったんだろうに、あきらかに量がおかしい。

さすが天然、しかも持って来るの結構重かっただろう。

でも一つ一つ丁寧にラッピングしてあるし、シャケやゴマがまぶしてあったりと、見た目は綺麗だぞ。

学園で食べた、あの『古いダンゴ風』みたいな面影は全く無いと言っている。

きつと練習したのかもな。

なんだか普通に食べてみたくなっただし、サンドウィッチだけじゃ腹持ち悪いしな。

「お、旨そうだな……貰うぞ」

「や、やだちょっと勝手に食べないでよっ」

ゴマの奴を取ってパクつといく。

うん旨い、中にも昆布が入っててなかなかだぞ。

「旨いじゃねーか」

「と……当然でしょ私が作ったんだから。べ、別にもっと食べてもいいわよ、いっぱいあるし」

ムクレて言いやがって、素直じゃねえな全く。

ま、その照れて赤い顔が可愛いけどな。

「わっ兄さん、こっちも食べて下さいよぉ。それに彩乃も白河さんのお弁当食べたいですぅ」

「うん、彩乃ちゃんも食べて食べてえ」

結局3人で仲良く弁当を食べ合いつこした。

いや〜旨かった。

彩乃はもちろんだけど、白河のおにぎりが良かった。

妹には悪いけど、家族以外の女の子が作った弁当だぜ？

しかも超可愛い白河の。

俺が旨い旨いって食ってたら、「そ、そんなに美味しい？」とか言っつて心配そうに顔を覗き込んできてさ」。

「マジ旨い」って褒めると照れてモジモジしちゃうし……か〜堪んねえなちくしょー。

でもそんな事してると、彩乃がいじけちゃうだろ？

食べたさ両方。残さず全部。

さすがにきつかったぞ、特に白河のおにぎりが。

しかしエロパワー……じゃなかった、愛でカバーしたね。

おかげでしばらく動けん。

という事で、

「俺、ちょっと寝るから。」

そう言って、近くのベンチへ移動し、背もたれに身体を預けてすぐに俺は落ちた

目が覚めたら、太ももが見えた。

どうやら、横向きで寝ていたらしい。

しかも膝枕してくれたみたいだ。

たぶん彩乃だな。

気が利くな、さすが我が妹。

まだ寝たりなかったが、起きるか。

早く遊ばなきゃな。

「彩乃サンキューな」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あれ？ 返事がないな。

どうした？ 彩乃も寝てんのか？

確認する為、そのまま身体を捻り仰向けになる。

・・・・・・・・あ・・・・・・・・

すぐ目の前には白河の顔。

寝てる・・・・・・・・。。。

「すうすう」と寝息が聞こえる、しかも寝息が顔にかかる程の距離。

コックリコックリとする度に、お互いの鼻がぶつかりそうになる。

でも、不思議とHな気持ちにはならなかった。

その訳は、

こいつが幼くなってるのもあるけど、素直に「可愛い寝顔だな」って思ったから。

しばらくその寝顔から目が放せないでいると、ビクツとなり顔を持ち上げる白河。

起きたのかな？

そう思い、俺も顔を上げた瞬間

コックリ。

「う……………!!」

起きてなかった白河は再度急に顔をもたげ、その額が俺の鼻にジャストミート……。

「い……………痛え……………」

「わ、神崎君……………起きたの？」

俺の声に反応して起き上がる白河。

そして白河が顔を上げたせいで、太陽光線が顔にモロに当たる。

眩しい……。

しかも、なんだか太陽をバツクに、白河の顔が天使に見える。

ちよつとちつちやい天使だけだな。

このまま今日はずっと膝枕でいいかも……なんて思いつつ、白河の顔をひたすら眺める。

「……え？……や……やだ……ちょ、ちよつと違つんだからっ！」

何が違つんだろ？

寝起きでぼろつとしつつ、そのまま見つめっていると、鼻の奥から熱いものが込み上げてくる。

白河がなにやら照れて動揺しているが、頭から血の気が引いて更にぼろつとなる気がする……。

「だからっ、彩乃ちゃんかどっか行つちやって……じゃなくつてえ、変な角度で寝てたから首が痛そうかなって……だ、だからあ……」

や……やばい……鼻の奥というか、喉の奥というか何が……

「ね、ねえ〜聞いているのお〜？」

「ゲフツ！ ゲフツゲフン……」

咳と共に血を吐き出す。

「キヤア~~~~~！！ な、なにがあつたの！？ し、死んじやうの！？ 死なないで、神崎君っ！！」

勝手に人を殺すな……ただの鼻血だし、原因はお前のヘッドバッドだろ……。

ぶっちゃけ、その後大変な騒ぎになった。

血を吐く俺、「死んじやう」と叫ぶ白河。

彩乃まで駆けつけて、大泣きしちゃって。

通りすがりの人は何事かと、どんどん集まりだすし、園内の係員が続々やってくるわで……。

落ち着きを取り戻した頃には、只の鼻血とは言えない雰囲気を出していた。

が、どう転んでも只の鼻血。

無事をアピールして、「なんだよ鼻血位で大騒ぎしやがって」みた

いな空気の中、皆さんには解散してもらった。

「に、兄さん……ぶ、無事で良かったですう……う……ヒッ……グスッ……」

「う、ごめんなさいっ！……ほんとにっ！……その……私のせいで……ねっ？……許して？」

一度泣いた癩癩かんじやくが止まらない妹と、必死に手を合わせて謝る白河。

ま、全く白河には怒ってないんだけどさ。

正直、今日は俺の方が悪い事したし。

いわゆる、視姦しけんってやつ？

謝りたいのは俺だし……。

言ったらもう二度と、口聞いてくれないだろうけどな。

「またこれ乗るのか？」

「うん、乗る」

「やめとけって、お前途中で消えちゃうじゃないか」

「や、やだ乗るのっ。っ、次は最後まで、絶対……」

あの後すぐに復活した俺は、二人で共に絶叫系めぐりに挑戦中。

色々乗ったが、この遊園地最大のスピードとその長さを誇る『ギヤラクシーコースター』で問題発生。

勘の良い皆様には、お気付きの方もいらっしゃるかも知れませんが、白河が始まってそうそうに、スキルを発動させて消えちゃうんですよ、そりゃもう毎度毎度。

毎度っていう位だよ？

まあ既に、5・6回は乗ってるね。

さすがに彩乃はダウン、今はベンチで灰と化している。

俺だってもう限界だって。

今度は血じゃなくて、もっと酸っぱいものが出ちゃうだろうっ。

「本当に次は大丈夫なんだろうな？」

「だ、ただ大丈夫よっ、次は……最後まで乗るんだからあ」

思いつきりどもってんだが……ほんとかよ!?

「分かった、次が最後だかな」

「う、うんまかせて」

俺は渋々白河と共に、列に並ぶ。

恐らくこのジェットコースターは、ここで一番人気のアトラクションだと思う。

だけど、今日はマジで人が少ない。

おかげで待ち時間5分!!

まあ、そのせいでループさせられてんだけど……。

横を見ると白河が、ワクワクしてるのか、緊張してるのか、瞳を大きく開いてパチクリパチクリと瞬きをしている。

ここでの唯一の楽しみと言えば、そんな状態で、こいつが自然に俺の手を握ってくる事。

たぶん本人としては、あんまり意識してないんだろうけどさ。

本当に自然な恋人握り。

この時間は、うっかり恋人かもって錯覚してしまう。

しかし、その甘い時間はすぐに終わりを告げる。

目の前のゲートが開き、奥へと案内される。

そして次々と、そこに待機している車両へ乗り込む人達。

俺と白河も、列の真ん中ぐらいに乗り込む。

すると安全バーが自動で降りてきて、ガチャンとロックされる。

その後係り員が、ロックの確認を一つ一つするわけだが……。

「あ……また来たんですね」

と、引きつった表情の係り員さん。

なぜ引きつっているか、その理由は明白！

今言った「また来たんですね」を解読すると、

「また消えるですか、その少女？」

が正しい意味なのだ。

そりゃそうだろ、戻ってきたら毎度消えてるんだから。

いい加減やばい。

係り員同士なにやら奥でひそひそ話しながら、全員こっちチラ見してるしよ〜。

やばいよやばいよ、騒ぎになるよ。

「お前さ、今度は絶対消えるなよなっ」

「分かってるってえ〜しつこいなあ〜」

軽く逆切れしてるみたいだけど、ほんと頼むぜ？

今度こそ、係り員に何か聞かれそうで怖い。

そんな俺の心配など無関心で、「早く早く〜」と安全バーをバシバシしている白河。

はあ〜お前が楽しいならいいさ……。

ガタン　　という音と共に動き出すコースター。

少しずつ、ゆっくりと昇り始める。

この後頂点に達した時、最大級の垂直落下が、まずは襲ってくるっ

てわけ。

んで、今までその落下すら、こいつは体験してないってんだから、
どんだけヘタレなんだよ。

「や、やだ……いつちゃう……いつちゃうよ神崎君っ、あんっ！
イクっイクうっ」

……。

もうすぐ落下が始まるから、俺もドキドキしてるんだが……一応突
っ込んでく。

今のは、Hな声ではありません。

俺が何度もこいつの我がままを聞く理由、その？。

毎回似たようなセリフを発します、この破廉恥少女。

しかも、本気で「はあはあ」と息切らして言うもんだから、臨場感
たっぷり娘。

最初は俺をからかっているのかと思ったけど、どうやら天然を發揮し
ているらしい。

ぶっちえげ、2回目から携帯で録音させてもらってます……。

ちよっと声が幼い感じだが、充分いけるっ！！

是非、完全体に戻った後に、もう一回乗ってもらいたいつ！！

アイドルだからなんだってんだ！

誘うんだもんっ！

「ってわあああああああああああ！！」
「キヤア~~~~~なにこれ~~~~~！！」

妄想中に落ちた！！

気を抜いてたから超怖い。

そしてMAXパワーの砲台が安全バーに当たって痛い！！

毎度の事だけど、今回はポジションが悪かった！

お、でも奇跡だっ！

白河が生き残ってる。

「キヤア~~~~~楽しいい~~~~~神崎君っ、ね、今の凄かったね！！」
「ねえねえ！！」

流れる髪を押さえながら、大はしゃぎ。

喜ぶ顔、可愛い~~~~!!

と思ったら消えた~~~~!!

がくっ

大はしゃぎ中に、音も無く突然消えましたよ、あいつ。

なんですよっばいコブを通過中に消えるわけ？

しかも喜んでたのに……。

意味分かん。

シュッ

「ただいまあ~~~~」

って現れた~~~~!!

ニッコリVサインで再登場の白河真琴嬢。

「なにやってんだよっ!!」

「ええ〜? 聞こえな〜い」

本当に聞こえてないのか?

おっと! やべえ3連ループがくる!!

「わ!... 凄い... 神崎君... こんなの初... めて... あっ...」

「... あ... やっぱり凄い... が... 我慢... できない... あんっ...」

物凄いGで、下方向に身体が押し付けられるなか、白河の声をなんとか聞き取った俺。

首が上がらないから顔は見えないが、今のは迫真の演技だったぞ、
ナイス!!

「うおっ!!」

「わぁ〜〜〜 きゃはははははあ〜」

直後、最後の落下を通過し、スタートゲートまで戻ってきたコース
ター。

カタカタとゆっくり速度を落とす。

「きゃあ~~~~面白かったね!! 神埼君っ!! ねえねえ~ねえ
~つてばあ~」

「ああ、すげえ良かった」

「うふっ だよねえ~~~~たっのしい~~~~」

ああ、かなり良かった。

お前の演技がな……。

カタカタ……ガッシャンと止まる。

安全バーが上がり、係員が次々と誘導していく。

そんな中、例の係り員と目が合った。

俺は不敵な笑みで、親指を立てる。

それに次いで、係り員も爽やかに親指を立て返してくる。

全く意味不明だが、清々しいやりとりのなか、立ち去る俺達。

もちろん天然の白河は、そんな俺に気付きもしない。

既に俺を振り切って、彩乃がいる場所へダッシュしている。

さすがだな、あいつの行動は理解不能だ。

妹は、呑気にソフトクリームをペロペロしていた。

まあ、こいつは2回しかループしてないからな、だいぶ復活したんだろつ。

「白河さんもどござつ」

「ありがとお〜〜じゃもらつねえ〜〜ペロペロ……あ、美味しいこれえ〜」

仲良いなこいつら……。

なんだか微笑ましくて眺めていると、妹が俺にも突き出してくる。

「兄さんも食べますかあ？」

じゃあ一口……と思いきと止まる。

この角度、あいつ意図的に白河がペロペロした場所を……。

不自然に手首を捻って、ソフトクリームを差し出す彩乃さん。

もちろんその顔はニヤニヤしている。

完全に、妹に翻弄されまくりじゃねーか。

しかし、素直に頂く俺。

うん旨い。

当然、そんな不自然な俺達に白河は気付く事もなく、「次どこへ行こっか?」と既にやる気マンマン状態。

よっぽど楽しいんだな。

「白河さん、遊園地って結構遊びにきたりするんですかあ?」

「え? あ〜うん……じゃなくって、実は初めてなのよねえ〜」

「へえ〜そうなんですかあ、実は彩乃も、2回目だったりするんですよあ〜」

談笑する二人から、少し遅れて歩く俺。

ところどころ、会話が聞こえてくるんだけど……

あいつ……遊園地初めてなのか。

高校生にもなつて？

普通、小学校時代に友達同士で行ったりしないか？

ましてや親に連れてきてもらったりだな。

うん、そういえば、あいつのプライベートな事一切知らないんだよね。

まあ、親しくなったの最近だし、聞いてもないけどさ。

なんか気になるな。

結局、その後も絶叫マシン巡りが続いた俺達。

そして俺はげっそり……。

だつてさ、あいつの元気っぷりたらないぜ？

妹は早々にリタイヤしたからいいものの、俺が付き合わなきゃならん。

相当ビビッてた『ギャラクシーコースター』がなんだったんだって

位、それから絶叫系を乗りまくった俺と白河。

で、最後に締めでギャラクシー乗りたいうもんだから、付き合ったけどさ……。

今日の俺は、あれ出したり、鼻血出したりと精魂尽き果てたのよ。

ようやく帰れるかと思ったら、「観覧車って最後に乗る物なんですよ?」とか言っつて、また歩き出す俺達。

どんだけ元気なんだよ。

まあいいけどさ。

カゴの中で寝ちやうよ、俺。

最後は妹を乗せようかとも思ったんだけど、「いいから兄さん行って来て下さい」と結局俺と白河。

しょうがないから、二人でまた並んでるって状況。

「あれってさあ、回転してる間は何してるのぉ?」

「何って……何もしないけど」

「んんんんもしかして……つまんないの?」

「どうかな? のんびり外の景色を眺めるってのもいいぞ」

「ふうくん、そっかあ〜」

まあ、本当はカップルでイチャつく為に乗る物なんだけど、そうとも言えないよな。

程なく3分待たずして、俺達の番になる。

先頭きつて、中へ乗り込む白河。

「うわあ〜狭〜い」

楽しいのか、狭い事に対する文句なのか、良く分からない。

で、普通に対面に向き合って座る。

はあく座ったとたんに眠いぜ。

白河は興味津々でキョロキョロしている。

後ろを振り返ったり、窓を覗いたり……。

その度に、太ももの間の奥がチラチラ、チラチラとしやがる。

ピンクか……。

イメージにピッタリだ。うむ。

しかし、ロリ河でこれだけ反応出来るんだから、完全体で来たら俺
どうなっちゃうんだ？

是非、また誘いたいもんだが、やっぱり無理だよな〜。

如月さんに頼んで、アイドルが目立たない装置でも作ってもらうか？

ま、冗談はさておき、いい機会だ。

気になってる事を聞いてみるか。

「なあ、聞いていいか？」

「うん？　なあに？」

「お前さー、なんで今まで遊園地こなかったんだ？」

「え、あ〜う〜ん……中学の時は、もう事務所に入ってお稽古
とか、雑誌のモデルの仕事とかあったしい、小学校は……」

「あ〜やっぱいいわ。悪い、今の質問無しな」

「わ、悪くなんてないってえ。そう言う風に、私のこと聞いてくれ
た人、あんまりいないからあ……」

たぶん、俺は聞いちゃいけなかった。

こんな歯切れの悪い白河は初めてだ。

それから何度も断ったんだけど……

「言える時に言わないと話せなくなるから」とか言ってた。

結局、白河は自身の話しを始めた

ぶっちゃけ言い辛いことを淡々と話してくれた。

白河は、その……孤児だったらしい……。

気付いた時には、孤児院にいたって言うんだ。

なんでも、まだ赤ちゃんだった頃に「この子をしばらく預かって欲しい」と父親らしい人が孤児院を訪ねて、白河を預けていったんだそう。

その後も「必ず向かえに来る」って内容の手紙が度々届いたらしいんだが、小学生になってからはパツタリこなくなったらしい。

「でもね、小学校になる少し前に、お父さんから電話があったらしくて、それから毎月お金が振り込まれるようになって……」

その送金は、今も続いているんだそう。

しかも聞いた感じだと、結構な額っぽい。

「だからね、小学校も私立に通わせてもらって……でも、友達あんまり出来なくてさ、あはははは……」

し、白河にそんな過去があつたなんて……知らなかった……。

「あ、そのお父さんって人も、私が勝手に思ってるだけだから、実はただの足長おじさんかも知れないんだよね……」

こ、こない子に対して……俺は……俺は……パンツ見えたとか……くそっ！俺のバカッ！！

「あ、あれ？ や、やだ……引いた？ ごめんね、やっぱり重いよね私の話し……」

う……な、なんだか、目頭が熱くなってきた……う……グスッ

「か、神崎君？ さっきから黙っちゃってさあ、何か言ってるよお」

「うおおおおおおおおお……！！ 白河ああああああ！！

「……！」
「キヤ！ キヤア~~~~~！！！」

思わず、白河を抱きしめる俺。

「うづうづ……グスツ……し、白河ああ〜」

「え？ え？ なに？ なんで泣いてるのよ〜。ちよ、ちよつと離してよ……」

いやだっ！ 離さない！ 俺の思いを伝えるんだ！！

「し、白河ああ、お、俺はお前の事が……グスツ……だ……大好きだからなっ……！」

「はいはい、分かったからさあ〜そろそろ離してよ〜」

「俺は……グスツ……うづ……お前が好きだあああああ……！！！」

「分かったってえ……ありがとね、神崎君。ほらあ、もつ着くよあ」

「うおおおおおおお……！！！」

本気で告白したつもりなのに俺だったが、結局全然相手にしてもらえず、しかも妹から「兄さんはあ、昔っから涙もろいところがあっつてえ…」とか言われる始末。

ああ〜いっただい俺って……

第13話へ続く…

第12話 休日はデート その？（後書き）

第12話 お読みいただき、ありがとうございます。

やっと遊園地編が終わった〜。

結局、最後までエロい神崎君でしたっ。

折角白河に告白したのに可哀相でしたねw

これから二人は熱い関係になれるのか！？

第13話 真琴の逆ハラと地デジ化

小さいテーブルの前で、彼女がお茶を淹れてくるのを待っている。

何だか緊張して硬直状態の俺は、その真っ白い、小さいながらもセンスの良いテーブルを眺める。

丸みのあるデザインで、若い女の子の部屋にピッタリな感じだ。

周りを見渡すと　　まあ見渡す程の広さじゃないが、

白い3段の本棚があり、そこには少女漫画がびっしり　　で、俺の後ろにはベッドがあり、

ピンクのシーツにピンクの掛け布団、そしてピンクの枕とピンクの大きなクマのぬいぐるみ……文字通りピンク一色だった。

「居辛い……」

正座のまんま固まってる俺は、俯いて落ち着きを取り戻そうとするが、ピンク色のカーペットを見てさらに冷や汗まで噴出してしまふ。

安らぎを求め、視線を宙に彷徨わせてみるが、その先　　窓際に掛けてある洗濯物が目に入ってしまい、彼女の無防備さにゲンナリとする。

「まあいい加減慣れてきたげどさ……なんでパンティーが何枚も干してあんだよ……」

迂闊にそっち見れねーだろうが。

奥からは、コポコポとお湯を注ぐ音が聞こえて 「お砂糖入れる人〜？」と彼女が返事を待っている。

「いらねー」

と速攻で硬派ぶって返答する俺だが、こんな女の子っぽい部屋で可愛い彼女と二人きりだなんて、さすがに理性が吹っ飛ばないかそっちの方が心配だ いや深刻だぞ、これは。

「ごめん待ったあ〜？」

お盆に乗せた食器を片手に、ニコニコしながらやってくる 白河。

その身体は、既に完全体へと成長を遂げていた。

まだ口リ河だったら、こんなに焦る必要もなかったんだが……。

そう。俺はなにを隠そう、白河の自宅マンションへと招待されたのだった。

突然の場面で、みなさんも混乱されていると思う。

では……時間を遡さかのぼることにしよう……

遊園地に遊びに行つてから、二日が経つた日の午後

俺は自分の部屋でまったりと　　ていうか引きこもっていた。

あれから…白河には会っていないし、実は俺、学校にすら行つてないんだよ。

て言つのもさ、身体が縮んだ事が結構突っ込まれちまつてだな、苦し紛れに「ちよつとやつかない病気でな」って話して誤魔化しちまつたのが原因。

「そりゃどんな病気なんだ」と色々聞かれたよ？

そういう人の不幸な話しの匂いを嗅ぎつけて、わらわらと集まってくんだよ、女子どもが……。

ちくしょ〜こつという時だけよー。

だけど具体的になんか説明出来ないし、とりあえず「テロメアが関係する珍しい病気」って事でお茶を濁して逃げ出したって訳だ。

だから学校行き辛くってさー。

まあそれは別にいいんだけど、如月さんから電話かかってきてな、

「しばらく来なくても良い。いや、むしろ来るな」

なんて突っぱねられたもんだから、俺が唯一白河と楽しく過ごせる場所にも行けないってわけ。

「あーあ、暇だな。ゲームでもやっかなー」

もちろん彩乃もまだ部活中だろうし、家には誰もいないが、一人眩きX箱の電源を入れる。

机の上にある20インチワイドの　　テレビ兼パソコン用モニター
の電源も当然オン。

いつものソフト、『ファンタシーモンスター』をセットしてゴー。

タイトルが現れ、すぐにオンライン接続する。

画面には、オンライン中のフレンドの名前が、次々に表示される。

「TK…ババ…ケンガイ…」

まだ3時だつてのに、結構いるもんだ。

なにやってんだこいつら……まあネット限定の付き合いだから、お互い学生なのか社会人なのか、それともニートなのか知る由も無いし、知る必要も無い。

ゲームの中で楽しくやれば、それで充分なんだよ。

中には、知り合った同士でオフ会だのコンパだのして、リアルフレになったり、恋人になったりする奴もいるみてーだが、俺はそんなものに興味は無い。

ただ、「ゲームを楽しみたい」だけ。

しかし……立ち上げたものの、いまいち気乗りしない。

と言うか、やる気が出ない。

「はあ、白河に会いてーな……ちくしょー」

この前の一件　ゴンドラでのあいつの生い立ち……そして、軽く流されちゃったが、俺はあいつに告白した。

そりゃもう、白河の事ばかり考えてるんですよ。

ええ、一昨日の晩から……。

俺はおもむろに一番下の引き出しの奥から、さらに色々物が詰まったさらに下　ビニールに包装された物を取り出した。

一応隠してるつもりの写真集……『白河真琴15歳』

なんとこれはだな、あいつがアイドルデビューする前に出版された、貴重なファースト写真集なのだよ……ふっふっふ……。

先日、古本屋で見つけたんだが、実はプレミアがついててな？

なんと8000円もしたんだが、懐ふとろの温かさにものを言わせて大人
買いしちやっただよね〜

ペラ〜と水着のページを開く……ちょっと布の範囲が広いのが
気に入らないけど、ビキニ姿の白河が、可愛く砂浜に座ってニッコ
リと手を振っている写真……。

「堪んね〜。」

今より若干小さいその特盛りは、それでも大盛りサイズ。

俺は思わずニヤケてしまい、砲台に血が注がれるのが分かる……。

どうせ妹もない事だし、この切ない気持ち成形
して発散させちまおうか。 いや液状に

色々と理由をつけつつ、ズボンのチャックを開けたその時
唐
突に背後から声を掛けられた。

「ふ〜ん…男の子ってえ、ほんとにそついつの見てニヤニヤする
んだね」

どっきー……………ん……………!!

突然、女の子に話し掛けられ慌てて振り向くと
そこには白河

が。

そこというよりも、すぐ斜め後ろから写真集を覗きこまれている……。

「あ……あの……そのさ、えっと……これはだな……」

咄嗟に言い訳を考えるが、あまりに突然すぎて何も浮かばない。

対する白河は、呆ける俺を見て「やつほ」とニツコリ手を振っている……。

その姿が、写真集の砂浜でのスナップとフィードバックして、俺はさらに動揺させられた。

「その写真集を持つてるなんて、君ってかなりコアなファンなんだねっ。知人として嬉しいぞ、うん。でもそんなニヤニヤされると、ちょっと恥ずかしいじゃないさあ〜」

両腕を腰に当てて胸を張る、えっへんなポーズを取る白河は、元の姿に戻っていた。

そのパツンパツンに張ったシャツの胸元……ミニスカートから伸びる肉感的な太もも　それはまさに完全体。

つ……遂に戻ってきた……俺のEの70……。

いやいや、そうじゃないだろっ!!

若干トリップ状態だった俺は我に返り、一息に告げる。

「ちょっとまって!! お前……… いったい、いつからここに居たっ!」

「え? うゝゝん確かあゝ『白河に会いてーな………ちくしょー』からだったかな? ……あ………じゃなかった、『ゲームでもやっかなー』のあたりからだよ」

なんだって!?

そんな前からかよっ!!

しかも、なに当たり前みたいな顔で言っただ、このアマっ!!

一番見られたくない奴に写真集の事、バレしまったじゃねーかつ!!

しかも………危ねえゝゝ。もうちょっとで本気^{マジ}でやばい行為を見られるところだったじゃねゝか………。

危機一髪とはまさにこの事………。

呆けて言葉が出ない俺に構わず、白河がしゃべり出す。

「そんなにさあ〜、必死に写真集見ちゃう程、私に会いたかったの？」

「バ　　バカ言ってるじゃねえよっ…………お、おまつ　　コ、コノヤロー…………」

ク、クソ〜さすがに一部始終見られてたら、言い訳出来ねえじゃねーか!!

な、なんなんだ…………この敗北感…………。

「素直じゃないなあ君はあ　　」

つんつんと肩を突かれる。可愛い顔してんじゃねーぞコノヤロー。

「　　そんなに私の事好きだったなんてさあ〜」

うつうつ…………一体なんだよ!?! この辱め!!…　　なんで「いつ、こんなニヤニヤしてるわけ!?!」

しかも、「私が出て嬉しい?」とか言って「うりうり〜」って肘で小突いてくんだけど…………。

「神崎君、そんな事より」

そんな事で片付けてんじゃねーよ!!! この不法侵入者!!!

「早くそのゲームやってよぉ〜」

「へ?」

「ん〜なんか面白そう〜ねえねえ〜」

人差し指を口元に当てながら、空いた手で俺の服を「ねえねえ」引っ張る白河。

栗色のサラサラヘアからは、甘い柑橘系の匂いが漂ってくる程の至近距離。

想像してみてください……この破壊力バツグンのおねだりポーズ……。

大体だな、顔が近いんだって……近視の彩乃じゃあるまいし……なんなのこいつ?

こうやってさ、大概の男が誘惑されそうな仕草を普通に素でやるんですよ、この子は。

ゲームどころじゃねーよ、その姿に釘付けだったちゅーの……俺は……。

「ねえ〜聞いてるっ?」

いかんいかん、トリップするところだった。

「おういいぜ、やるから見てろ」

とりあえず、ドッキドキハートを隠しつつ、ぶっきら棒に答えゲームを始める。

どうすっかな……とりあえず、フレンドのステージにでも乱入してみっか……。

俺はフレンド『ケンガイ』のステージを選ぶと、既に何人かでプレイしてるようで、その他にもキャラ名が表示される……。

「知らねー奴いるけど、まいつか」

そいつらに混じって戦闘に参加、モンスターをバシバシと倒しまくる。

横では白河が、興味津々のご様子。

「うわあゝあのキャラ可愛い〜。わっ！ 痛そう…死んだの？ キャッ！ なに今の爆発!？」

んで、攻撃や魔法を打つ度に説明を求めてくるもんだから、一度手を止めて説明タイムとしよう。

着けていないヘッドセットの奥から、なにやらフレの声 「なんかしゃべれよお前〜」的なが聞こえるが、まあいいだろ。

みなさんは知ってると思うが、一応説明しておく。

このゲームはオンラインRPGだ。

ネット上の友達と協力して、モンスターを倒していくゲーム。

当然、仲間のキャラはネットの向こう側の人　　いわゆるリアル
な人間同士で操作してるってこと。

だから、一人用のRPGよりも臨場感たっぷりだし、色々話し合っ
て作戦も練られる。

そりゃもう奥が深くて止められない　　。

てなわけで、世の中の廃人を増やしてしまう、ダメな遊びなのです。

「　　ってゲームなんだけど、解った？」

「う、うん……ってことはあ、あの人も、あっちの人も、誰かが動か
してるんですよ……」

「凄いなネットゲームって」と感心顔で画面に張り付いているアイ
ドル白河。

そんな彼女にコントローラーを手渡し

「やってみれば？」

と興味本位で進めてみる。

たぶん、ゲームでも天然っぷりを発揮して笑わしてくれるに違いない。

「え？ いいの？」と言いつつ、すんなりコントローラーを受け取り、「ど、どうじゃ」と固まる白河。

俺はヘッドセットをもう一個取り出し、ハブを繋いでセットする。

簡単に操作を教えて、白河にもヘッドセットを着けさせると

「わっ！　なんか声が聞こえるう〜な、なに！？　なにこれ、神崎君っ」

おいおい、実名を言うんじゃない。

ネット上で本名言っちゃだめでしょ！

「な、なんだ今の可愛い声！」

「女の子の声だぞっ」

「キングの声じゃねーぞ」

俺の本名暴露は軽くスルーされ、白河の声に過剰に反応する、野郎ども。

あ、ちなみに『キング』って俺の事な。

「わりいわりい」。今ちよっと知り合いの子がやってっからさ、初心者なんでフォロー頼む」

そう告げて、また元の傍観スタイルへと戻る。

初心者でいきなり大丈夫かって？

仲間が居るからたぶん平気だ。

恐らく、絶対死なないと思う。まあ見てな。

白河には必殺技のボタンだけ、教えてあるから。

「え？ え？ どうすればいいの？ や、やだ〜死んじゃう〜！」

「死んじゃう」とか言いつつ、必殺技連発でガンガンとモンスターを倒しまくってる白河。

まあHPとSPの事は教えてないから、常に死と隣り合わせ&超燃費悪い攻撃を繰り返してるけどな。

でも大丈夫！ 女の子の声に騙されて、野郎どもが一所懸命フォロイしてくれるからっ。

この協力プレイこそが、オンラインゲームの一番の魅力 である。

「き、君、ただ大丈夫かい？」

「僕の魔法で回復してあげるからねっ」

「あ……あの……フレンド登録、お…お願いしてもいいですか？」

野郎どもから執拗に声を掛けられているが、操作に夢中で一切ガン無視の白河。ナイスだぞ。

しかも、なんか物凄い真剣な顔で「いけっ、このっ……あ〜んいやあ〜だあ〜」と無駄に可愛い声を発しながら、身体ごと動かしている。無駄な動きの多いやつだな……。

そして

「あ〜んもお〜やりづらいい〜ちょっとどいてっ」

そう言っつて白河は、椅子に座っている俺と机との間に割って入ってくる。

なんだよ、狭いところ入ってきやがって……。

後ろがベッドでつかえてるから、俺がどけば良かったんだが……こいつが前で身体を動かす度に、スカートがヒラヒラしてさ、別に見えるわけじゃないんだけど……その……こいつが足を曲げたりすると、たまに裏ももが俺の膝に当たるんだよ、しかも俺、今短パンだから生で……。

そんなに騒ぐ程の事じゃないんだけどさ、何となく離れたくないって言うの？

スカートの裾が、膝にちょこちょこ当たってなんだかくすぐったいって言うか…。

「ああ〜もおー上手くないい〜」

ドサツ、ムニツ

なっ！！！ なにいいいいいいいつ！？

今の擬音、なんだと思いますか皆さん！？

この現状 どう説明すればいいんだ！？

いやいや説明は簡単だ……こいつ自然に俺の膝の上に座ったんですけど！？

え、え、嘘でしょ！？ 何者！？ こいつ！？

まさに『ムニツ』ですよ、『ムニツ』！！

しかもだな、話したと思うが今は短パンなんですよ。

じ…直に…白河の太ももと、お尻の柔らかい感触が……。

や、ヤバすぎるだろ……。

あと……パンティーの布が擦れる感じが……す、素晴らしい……。

俺が『時を止められた』かの如く固まっていると、再びもぞもぞと動き出す白河。

も、もう勘弁してくれ……いやそう言いつつ、もっと凄いイベントを期待してしまう、ダメな俺。

「あー……死んだー……うそあ……やだあ
くなんでえ あ、生き返った」

もぞもぞ……

うっ……！

あ、ええと……なんか一回死んだみたいなんだけど、仲間がすぐに復活させたみたい。

いやそんな事はどうだっていい。

こいつ、体勢かえて更にどっぷり俺の上に座り直したもんだから……お尻が……その……股間の上なんですけど……。

しかも俺、さっき……チャック開けちゃったじゃん？

なんつーの？ 生で擦られてるってゆーか……これ、バレたら大変な事になるよな？ どお思う！？

え？ 擦られてる感じを楽しめって！？ そんな余裕あるかつポケッ！！

「や〜やだやだやだっ！！ ダメダメこっちこないでっ！！ あ、あんっ……あんっ……いや……」

依然、ボス戦継続中の白河は更に大興奮。時折やばい声を織り交ぜながら、俺の股間を執拗に攻めてくる。

俺、女子高生 いやアイドルになにされてんだ……。

状況打開策として考えたのはさ、無理やり押しつける でも、その瞬間に振り向かれたら俺の先っちょが見られてしまうかも……いや恥ずかしいとかじゃなくてね？ もっと深刻だろ？

でもな、このまま刺激を受け続けるとき、やばい事になりそうなんだよ……。

聡明な皆さんなら、共感していただけますよね！？

……だって俺、チエリーだもん……許してくれよ……。

俺のピンチが続き、なんの解決策も講じれないまま、遂にその時がやってきた。

「やったー！ー！ー！！ キヤア~~~~~ボス死んだよ~~~~」

恐れていたこの瞬間　　この後、正気に戻った真のボス『白河』
と俺の戦いが幕を開け……

シュッ

おわっ！！

消えたよっ！ あいつ消えたっ！！

た……助かった~~~~マジー戦覚悟してたんだけど……おっとそんな事してる場合じゃない。

身なりを整えないとな！ 主に下半身のなっ！

急いでチャックを上げ

「ただいまあ~~~~。ごめんごめんつい、興奮しちゃってどっか飛んじやった……テヘッ」

「ぬわあああああああ……！！！！」

突然目の前に舞戻ってくるからっ！！ 思わず挟んじまったじゃねえかつ！？

「痛ええええええええ……………」

その場につづくまる俺。もちろん、隠す目的もある。しかも…食い込んだしまったじゃねーかよっ！！

「あ、あれ？ どうしたのかなあ？ 大丈夫う？」

「…な…なんでもねえよ……………」

「…あ…そ、じゃあさあ〜もうちょっと遊んでもいい？」

「ああ、好きにしろ」

結局、またゲームを始めて騒ぎだしたから、その隙に部屋を脱出。

なんとか体制を立て直すことに成功した俺は　まあ…トイレにも行ったけど、内緒だぞ？　その後いつもの硬派な俺に戻り、生温かく白河を見守っていた。

んでだな、これは余談になるんだけど…………『白河パワー』は凄まじかった…………。

ケツのパワーじゃねえぞ。その事はもう忘れてくれ。

こいつの可愛い声に騙され　いや、リアルも超可愛いが
野郎どもが寄って集^{たか}ってレアアイテムを次々に買いできてさ、俺の
キャラなのにさ。

いや〜得した得した。

しかも「真琴ちゃんに声そっくりだね!」とか始まつちゃってな、
「え? 私:真琴だけど?」とか本人が言うもんだから、ゲーム内
が大混乱、一同騒然。ぷぷ:マジウケるんですけど。

ま、すぐに俺と交代したけどな、フレにはブーブー文句言われて質
問攻めにあっただけどさ。

面白いからいいだろ。クク。

んでもって、まだ遊び足りない白河嬢には、オフラインでプレイし
てもらってるってわけ。

「さあそろそろゲームは止めて、本題に入りますか」

「なあに、急に改まって本題とかって……?」

楽しそうな白河には悪いが、一旦コントローラーを置いてもらう。

「お前さ、俺になんの用?」

勝手に不法侵入して、俺にセクハラ行為を連発しやがったんだ。い

い加減、その犯罪理由を聞かせてもらおうか。

「ん？ 遊びにきたんだけど？」

へ？ 俺んちに？ お前が？ なぜに！？

大きく口を開けて呆ける俺。恐らく、ハニワみたいな顔になってるかも。

「な、なによ……その顔。お、可笑しいの？ 私が遊びにきたら……」

なんだか、不機嫌だか照れてるんだか分からない顔してるけどさ、可笑しいだろ。こんな可愛い子が無防備にも男の部屋に突然遊びにくるって。

だってさ、俺達って別に恋人でも、エロい関係でもないんだぜ？

ヘタレな俺じゃなかったら、既に食われてるっつーの。

その辺をじっくり説明してやらんといかん。

「あのな〜。だめだろ？ 男子の部屋に若い女の子が遊びにきちゃさ
」

当然とも言える男女関係の『いろは』。それを未経験ながらも、なんとか説明する俺。

ていうかお前、なんで分からないわけ!?

そんな俺の頑張りもいまいち伝わってるんだか、なんだか。

「ん〜言いたい事は解った。でもお〜私がきて嬉しかったんでしょ?」

そりやめちゃくちゃ嬉しいけど、面と向かって言うな。恥ずかしい。

ほんとこいつは、思ったことズバズバ言うんだよね。

「だから、俺が襲ったらどうすんだよ」

「ええ!?! 襲つつもりなの!?! 『襲わねえよっ!?!』 ……じゃあ平気じゃない。」

こいつ、俺が男だって意識あんまねーな。

軽くへこむんですけど……。

その後も、いまいち噛み合わない会話が続き、話しは最初の話題に戻る。

「だからあゝ私身体が戻ったからね、明日からまた忙しくなるの！ 学校もしばらく行けないと思うし……だから遊びにきたのに……」

う……そんなモジモジしながらこっち見んなよ……。

しかし……そっか……芸能活動始まったら、会えなくなるのか……。

そりゃそうだな、俺とは所詮、住む世界が違う。

こいつはアイドル。俺は一般人でただのファンってことか……。

寂しくなるな……あ……でも、こいつも俺に会いたかったって事なのか？

どうなんだ？

白河をじっと見る。

じ……じ……じ……。

「な、なによ急に見つめて……」

うゝむ、分からん。

そんな俺の視線には、既に無関心状態の白河は、なにやらモニターを見て考えているようだ。

またゲームでもしたいのか？

そう思った俺の心とは、全く違う言葉が返ってくる

「あのさあ〜お願いがあるんだけどお

」

とまあ回想が長かったが、そのお願いとやらを聞き入れた俺は、電車に乗って　もちろん俺だけな。3駅離れた白河のマンションまで来た訳。

そして俺は白河の買い物に付き合わされた。

まあその買い物は、そのお願いだったわけだが……。

何を買ったかって？　そのうち分かるよ。

で、買った物を運び込んだ　いや量が多かったもんでな、近くの量販店だったんだが台車で運んでさ。

部屋に運び込んだ俺は、まずはその疲れを癒すべく、白河のお茶を遠慮なく待ってたのさ。

というわけで、冒頭のシーンに繋がるわけだ。いいかな？

「ありがとね。色々してもらっちゃって……。はい、お茶どうぞ」

申し訳なさそうに、お茶を出してくる白河。

なぜか、たかがお茶（酸っぱいレモンの香りがするからレモンティーだろう）を淹れるのに、わざわざエプロンを着けている。しかもこいつの代名詞ともいえる、花柄の可愛いもの。

いちいち無駄な演出で俺のテンションを上げてきやがる。

紅茶をすする。……うん旨い。

しばらく無言で紅茶をすする二人……。

はあー、そろそろやるか……。

「さて、ちょっと元気回復したし、やっかな」

「あ、ほんと？」「うん、めんね……面倒かけて……じゃ私はどうしようかなあ」

「それより、お前はあれを片付けてくれっ」

そう言って、そっちを見もしないで指だけ差してお願いする。

もちろんあれだ。冒頭にもあったあれだよ、洗濯物だって。

あんな物が干してあったんじゃ、俺の理性がもたん。

俺だって男なんだよ？

すぐ横にはベッドだってあんだぜ。たぶん俺じゃなければ、何度も言っが既に食われてるよ？

皆さんだったらどうよ。

とっくに事を進めてるだろ？

「……………あ……………み、見たの？」

「見たのじゃねえよ！ あんなカラフルな物が視界に入らないわけねえだろっ！！」

「な　　なんで君は！！……………いつもいつも…私にセクハラするの！？」

「これはちげえよっ！！　俺のせいじゃねえし！！　しかも今回はどう考えても逆ハラじゃねえか！？」

「……………うう……………へんたいっ……………」

「見ないでっ」と言いつつ、それを片付ける白河。

なにが「見ないで」だコノヤロー。

被害者みたいな顔しやがって。

お前に関わると、常にエロいイベントが盛り沢山なんだよつ。

俺がどれだけ楽しんだ……じゃなくて迷惑だか分かってねーな。

ま…まあいいさ、トラブルの原因は排除されたんで、やりますかね。

俺が買ってきた、数々のダンボールから中の物を取り出す。

テレビに掃除機、I podステーション型コンポと電子レンジ、おまけにゲーム機まである。

そう、こいつの部屋には電化製品と呼べるものは数少なく、あったとしても古い物ばかり。

今日は如月さんからもらったバイト代（大した事はまだしてない気がするが）で一気に電化製品を大人買いしたってわけ。

「嬉しいい〜〜これでやっと、掃除機でお部屋のお掃除ができるよ〜〜」

掃除機に頬をすりすりしている白河。

てか、お前今までどうやって部屋のカーペット掃除してたんだよ。絶対手動じゃ無理だろ。

さて、一タこいつにマジ突っ込みなんかしねえよ。

とりあえず、一番あいつじゃ無理っぽい、テレビの接続をしてやるか。

と言ってもこの部屋、光回線きてんだよね。ぶっちゃけ差すだけ。

それなのにこいつさ、「ううう地デジ分かんない、どのテレビが地デジなのお〜？」とか言ってるテレビコーナーでキヨロキヨロするし……おかげでこっちが恥ずい思いしたわっ！ 全部地デジだっつーの。

あと、コンポが欲しいからってステレオ見てたらな？ 「ラジカセが売ってない」とか珍妙な事口走り出して、店員さんに含み笑いされるしだな……いつの時代の人なんだよ。

「ちょ……ちょっと！ なにニヤニヤしてるのよお〜、さっきの事は忘れて！ お願いだからあ〜」

「だってお前……ラジカセって……ぶぶ……」

「……や……やだあもあ〜。だっしょうがないでしょ！？」 孤児院にはそれしかなかったんだからっ」

真っ赤になって言い訳する白河。

まあ機械の弱い女の子ってちょっと可愛いけどな。こいつの場合、

度が過ぎる。

見てくれ、このテレビ。

すげーぞ、14型アナログブラウン管。しかもリモコン無し。

嘘だろ？ どっから拾ってきたの？

骨董品屋にでも持ってくか、これ。

あーでもな、それ言うと怒るんだよ。

てか怒られた。

入れ替えた電化製品は、孤児院に持って行くんだと。優しいじゃないか。

でもな、もうすぐ放送終了しちゃうんだぞ？ 分かってる？

持ってってやるーか？ って聞いたんだけどさ、「テレポートで持って行くからいい」だったさ。

こいつ、自分以外もテレポート出来んのか？ まあいいけど。

おっと回想してる場合じゃねえな、テレビを出す………液晶20インチ型。

「お前、ほんとにこれで良かったのか？ もうちょっと大きくても

………」

「いってそれで…充分だもん。部屋狭いしい…わぁおっきい
楽しみだなぁテレビ観るの」

へいへい、なかなか安上がりな女ですな〜。金ならもつと持つて
んだらうに。

それよりも、

「『わぁ〜おっきい』ってもつかい言ってくれろ?」

「え? なんで?」

「…や、やつばいい…」

でもな、なんとか言い聞かせてハードディスク内蔵型のテレビにし
たから。

だってさ、もう無理でしょ。VHSビデオデッキ。

はあ〜録画の仕方まで、教えなきゃダメなんだろうか……。

さっさとテレビをセットする。BCASカードとか、絶対説明して
も無駄だから省略。

案の定、スイッチを入れたとたん大喜びの白河。

「うはっ　　凄いきれいい〜〜ありがとお〜神崎君っ!」

こんなんでテンションアゲアゲだかね。

庶民的っーか、なんっーか。これが人気の秘訣だったりして。

んでもって、これな、ゲーム機。

これはさ「神崎君とおなじゲームがしたいっ」って言うからさ、
買ってきたんだけど……。

結構高かったのに、あいつ迷わず買ってたな。

まいつか。セッティングしてやるとすっか。

それから、丁寧に一通りの操作やらなにやら説明してやる。

いや簡単に言っただけど、説明に大体90分かかったからね。

俺の苦勞と努力を良く分かってくれ。

こんな事、下心がなきゃ……ゴホン……え〜と可愛い白河じゃなき
やしねーぞ!?

とりあえずやる事終ってまったりモードの俺に、またお茶を出して
くれる白河。

そして満面の笑みで、

「ほんと助かったあ〜神崎君って、やっぱり優しいよねっ」

ドキッ！

物凄い可愛い笑顔なんですけど。しかも「優しい」とか言われちった……。

もしかしてフラグ立ったんでしょっか……？

こいつは超難敵キャラ『アイドル白河真琴』だぞ！？

もしギャルゲーだったとしても、落とすの難しいよ？

隣に住んでる、幼馴染的なキャラとは訳が違っぜ。

いや実際に、家の隣にそんな子いねーから！ 唯一いるのは義妹だけだかな。

こ…ここはもしかして、雰囲気作ればキスぐらいできっかも……ドキドキ。

女の子に優しい言われて、完全に俺舞い上がってんな。

そっだ…まで、早まるな。

とりあえず、探り入れてみようぜ。

「あのさー白河。ちょっと聞いていい？」

「うん？ なあに？」

「……………目を反らしてたんで気付かなかったけど、こいつを……………
ベッドに腰掛けつつ、片足抱えてやがる。」

そんな事したら、み…見えるでしょ、普通に。」

「一応片手で押さえてるから、本人は見えてないって思ってるだろうけど……………」

「ちょうど見えてんだよ、土手の丸みを帯びた部分が……………」

「みんなの為に説明するが、薄いピンクで淵にフリルの着いた、いかにも可愛い系の女の子が履きそうなパンティーな。」

「ねえ、聞きたい事ってなあに？」

「あ、いやちょっと待て。今、とても大事なところなんだ」

「ん、そうなの？ 意味わかんない」

「そう言っって身体を前後に揺らす白河……………」

「ぬおっ！…こ…これは その土手の部分がなんだかプニプニ」

たしな。

ひよっとして俺いけんじゃね？ 的な？

「あ…あははは。な、なによ突然…わ、私は…その…えと…と…友達？」

……うー！……

い、いやその……こいつ友達って言ってんだけど、物凄い照れてんだよ。

顔真っ赤にして、俯き加減で上目使いして……。

「ね、ねえ……友達でしょ？」

うっ……！！……！ か 可愛い……しかも、遂に両足抱えちまったよ……！！

こ、コノヤロー……そんな照れた表情で、パンツ全開にしゃがって……！！

しかも「友達でしょ？」とか言われたら、手え出せねえだろがっ！！

皆さんならどうしますか？

はあ、しかしなんか言った方がいいな。

うむ。

「あのかな？ 俺は……その……友達以上だから……」

精一杯の告白をしたつもりだった。

白河も、猫目を真ん丸にしてパチクリしている。

「や、やだあ……恥ずかしいなあ君ってえ……いきなり親友だなんて……わ、私も好きだから……彩乃ちゃんも含めて、神崎君のこと……」

「キヤツ」と膝で顔を隠す白河……そんなに照れて言われた関係が親友だなんて……一番恋愛に発展しないパターンのような気がする……。

俺、泣いていいですかね？

そんなこんなで、まだまだピンク的な展開には程遠い俺達だった……

第14話へ続く……

第13話 真琴の逆ハラと地デジ化（後書き）

13話でした〜いかがでしたか？

主人公のヘタレ感、素晴らしいですね〜。

でも、もてない男って所詮あんなもんだよね。

今回はちよつと書き方変えてみました。

変えたっていうかですね、表現や描写の量を増やしてみました。

テンポは悪くなってますけど、どうでしょうか？

ご意見、ご感想などマジでいただければ嬉しいです。

あと、『ある宇宙の小さな星で』も宜しく願います。

まだプロローグですが、ちよつとづつ連載していきますので……

第14話 恋煩いと不穏な影

皆様、大変長らくお待たせいたしました。

遂に私『神崎駿』は、完全体へと戻る事が出来ました。

え？ 別に待ってないし、まだ戻ってなかったのかつて？

そんなヤボな事は言いつこなしですぜ、だんな。

おかげで今日は普通に学校へと登校する事が出来やした。やれやれだ。

ちなみに白河は、昨日言ってた通りやっぱり来なかった。

きっと仕事が忙しいんだろう。

まあなんたって、ファーストライブがあるって話しだからな。

休んだ分、学校なんて来れないだろ。アイドルも大変だぜ。

そう言えば朝のニュースで話題になってたっけ。

確か…『白河真琴芸能活動再開！』とかってな。

なんでも、今日緊急記者会見があるんだと。

面倒だな、芸能人って。

でも仕方ないか。

だってよ、誘拐未遂や事務所に嫌がらせ　世間的にはちょっとした悲劇のヒロインだ。

そりゃファンの皆さんに元気な顔見せないと　だ。

ま、そんな記者会見なんぞ興味ねえから、俺は見ないけどな。

あいつが元気だったのは俺が一番知ってるしな。

それにな、テレビに出演してる白河を見ると、なんだか遙か遠い存在の人に思えて来てだな……なんつーか寂しいってゆーか…世界が違っつてゆーか……あいつに言ったら悲しむだろうけどさ。

しゃーねーよな。

でもな、良く聞け。こんな俺でも、あいつとは…ふっふっふ…『親友』なのだよ……。

あいつの口から出た言葉だかな。

しかも、彩乃込みだが俺の事『好き』だって言ってたしよ。

都合良く解釈しすぎかな。

いやいや嫌われてたと思ってたから、俺はこれで充分満足してんだよ。

んでもって、無事　　と言っか元の身体に戻った俺は、何日かぶり

に堂々と学校に登校してきたって訳。

そして何事も無く　　あんだだけ俺が縮んで騒いでた奴らが、元に戻ったとたん興味全く無しってのは納得出来ねえが……まあ特に何も聞かれず、お昼を向かえたのさ。

別に聞きたかねえだろ？

つまんねえ授業風景や、坂崎とのエロ漫談なんぞ。そんなヤボなことしねえよ。

さて。

なんだか一人で黄昏たい気分なんで、どっか誰も居ない所でお昼にしますかね。

そう思い、俺は白河との淡いエピソードのある場所　（ん？　そうだったか？）あの屋上へと通じる階段へと向かった。

まあ…あそこなら誰も来ないだろ。

と思いきや、既にそこには先客が……一人もくもくと弁当を食べる女の子、学園の　いやオタクのアイドル来栖美月先輩くるすみつきが陣取っていた。

腰まである長い髪と大きな頭のリボンが特徴の先輩は、超ロリロリ元気っ子アイドルとして、全国のおタク達から絶大な指示を受けている。

そして今は、トップアイドルとしての人気が、恐らく絶頂期だろう。

って、上から目線で言ってますまん。どうもな、この人は苦手なんだよ。

今さ、来栖先輩を見ると、先日の『坂爪研究所』での惨劇を思い出してしまう。

あのクローンは本人じゃないにしても、ちょっと嫌な感じがさ……やっぱりするよな？

だけどな、あのクローンもたぶん悪い奴じゃないんだ……ただ、そうするよう仕付けられただけ。

つてのは理解してるんだけど……如月さんにも「クローンに善悪の区別など付かん。それすら教わってないのだからな」って言われたっけ……。

おっと。回想してたら、先輩の大きな瞳が『ギロリ』とこちらに向けられ　漂ういつもの怪電波。

「むっ！？　誰じゃ？　我輩のまつたりお弁当タイムを邪魔する、下衆な輩は？」

は？　こんなキャラだったか？　来栖先輩って……。

俺を見るなり怪訝な顔を浮かべ、意味不明なキャラで語り掛けてくる。

「誰じゃと聞いておる……むむう……さては貴様……」

可愛い見た目とアニメ声で、時代錯誤な言葉使い……なんでやねん。俺もキャラを作った方がいいんだろうか……しゃーない、空気を合わせるか。

「拙者、先日こちらでお会い申した『茂吉』でござる……お忘れでござったか？ 全く……来栖殿は気のないご婦人でござるな。」

「む いや待つのじゃ……貴様……どこかで……」

上手く波長が合ったらしく、先輩は満足げに携帯を取り出しカチカチ操作している。

そして何度も携帯と俺とを交互に見返す……

「ああ……!! 貴様は真琴の彼氏さん!? ここで会ったが百年目 なのだあ……!!」

物凄いハイテンションで思い出してくれたかと思えば、次の瞬間「で、真琴はどうしたの?」と素で聞いてくる先輩。あいかわらず意味不明な人だ。

「あゝ今日はいいつ来てないんですよ。それに、残念ながら俺は彼氏じゃなくて友達っす」

…つぶ、『親友』って呼ばれたけどな……と、心の中でほくそ笑む俺。

「ええ！？ 友達…って…真琴にい！？ 男の子の！？」

目を見開いて驚く先輩。

え、なんで？ 彼氏否定したのに、友達ってとこになぜそんなに食いつく必要がある。

「真琴に…友達？…しかも男の子の…貴様…一体何者ぜよ？」

はい？ まだ続いてんすか、そのノリ。しかも俺の呼び方『貴様』で固定っすか…いやいや一々こんな電波相手にしてらっれか。突っ込むべきは…

「その…白河に友達って、そんなに驚く事なんですか？」

「え？ そおだよ〜。真琴の友達なんて、私以外には居ないと思
ってたのにさあ〜」

やっと普段の先輩に戻ってくれたみたいだ。

きつとあのままノってれば、果てしなく続いたに違いない。

てか、真琴ってそんなに友達少なかったか？

おっと移っちまった……ゴホン……白河なんて、普通にクラスでも
人気者だし、あの性格だ…友達多いんじゃないの？

そんな怪訝な表情を読み取ったのか、先輩が適切な事を話し出す…

「んん〜そうだなあ〜。あたし達ってさ、有名人じゃん？ だか
ら、あんまりみんなとも遊べないし、所詮周りの見る目も『芸能人』
なのだよ」

「はあ……」

「だからさ、友達なんて呼べる人って、同じ芸能界の人じゃないと
中々出来ないのだよ」

「お分かり？」と手を広げて同意を求める先輩。

そして「貴様、理解出来たのか？」とやっぱり貴様呼ばわりな俺。
どうでもいいけど…。

しかし…こういう事か。

俺がたまに感じてる白河との距離は、結局向こうも同じように感じる時がある。って事だ。

だから、友達や親しい仲になれるのは、同じ世界の匂いがする人だけ。きつと先輩はそう言いたいんじゃないかな。

なら俺ってどうなんだ…俺はあいつにとって…

「どうしたのさ、急に黙り込んで。貴様もここにお弁当食べに来たんでしょ？　そこに座って食べればいいじゃん」

「あ　いや貴様じゃなくって…」

なんかいつもテレビで見てる美少女に貴様とか言われると、ちょっとゾクつとかしない？　まあ、そんな事言ったら、お前DMなんじやねえかって思われっかもだけど…。

「あやあ〜ごみんごみん…え〜と諭吉だっけ？」

「神崎ですっ！」

諭吉ってなんだよ…俺は一万円札か。あいかかわらず人の話し聞いてねーなこの人。

「んじゃ神崎とやら、ここに座わんしゃい」

そう言って、自分の隣をパシパシ叩いている。

ま　歓迎してくれるなら……

そう思い、俺は遠慮なく隣に腰掛けると弁当を広げた。

しかし……なんだか奇妙な組み合わせだな。

その後も会話は続いたけど、殆どが先輩の一方的な話しだ。

だってよ、アイドル相手に　てか、電波少女相手に自称光波……じゃない硬派の俺が何話せてんだ。

そんな、やや俺が引き気味な空気の中、気になる話題が出た。

「　知ってる？　来週ファーストライブがあるんだよん……真琴お」

もちろん知ってるさ。その準備やらレッスンやらで、学校来れないのも。

「ま、そんなの知ってて当然　　って顔してんねえ〜このスケベ

「　　」
そう言いつつ、俺の股間を覗き込む先輩。

え？　え？　なに！？　スケベって…なんで分かった？　お、俺の視線か！？

た…確かに、来栖先輩を見つけた時も、階段に座った腰の辺りを見えてないかな〜って確認しちゃったけどさ。

いや…ちょっと白河があまりにもガード緩いんで、女の子発見すると、確認するのが癖になるとゆる〜かなんて〜か……。

「　　」
ま、冗談だけど　　」

冗談なのかよ！？

「　　」
でもその様子じゃ、真琴のパンツとか覗いてんなあー？
ダメなんだよお？　あの子、仕事中は完璧だけど、それ以外は超緩いからっ。だからって視姦をしまくるなんて男として最低なんだぞっ！　分かってるのか！？」

俺……一言も肯定してないのに、覗き魔確定してんすけど、何なんですかね？ この状態。

「さっきもだね、あたしのスカート覗こうとしてたっしょ。ダメでしょ、チエリーボーイ君」

げっ！ やっぱバレてた……鋭いなこの人……たぶん白河の百倍は鋭いんじゃないか！？

しかも…チエリーボーイって……なんで分かったんすか？ は…恥ずかしい……。

てか、来栖先輩ってこんなキャラだったのか。俺もつと妹キャラだとばかり……いや〜テレビだけじゃ分かんないもんだわ。

とりあえず超鈍い白河に、Hな視線&妄想したのは事実。てことだから、大事なあいつの友人には素直に詫びておこう。

「え〜つと……チエリーボーイは反省しております。これからは、覗かないよう善処する所存であります」

「うむ、よからう。…よしなに」

「あ…では…この事は、何卒、白河嬢にはご内密に……」

そうやって俺は、彩乃がデザートで用意してくれた苺を取り出し、
全て先輩に献上した。

「おっほっほっほ……。分かっておるではないかあ。茂吉よ。そなたの申し出、しかと受け留めたのじゃ。」

ふく口封じ成功だ……。でも茂吉じゃねーからっ。ちゃんと聞いてたんじゃないか人の話し。さすがに電波少女の頭ん中は複雑そうだ。

そんな彼女のペースで会話が続いていく中、気付いたんだけどさ。来栖先輩も白河と同じように、思った事を何でも口にするタイプっぽい。なんだか清々しいわ、この人。だから白河とも仲いいんだろ
うな……。

と、人が折角微笑ましい気分だったのに、それを一瞬にして吹き飛ばす奴が現れた。

その痩せ型で、スラっとしたモデルのような体型が、かなり鼻に付く嫌な奴。

「美月、ここに居たのかい？ 早くしないと、番組の打ち合わせに遅れてしまうよ？」

さいがしゅうごう
齊賀秀一だ。

来栖先輩が所属する事務所の社長兼マネージャー。で、超金持ちで噂で頭も良く、女子にモテる 何度も言うが、嫌な奴。

おまけに、来栖先輩が撮った写メをどうやって入手したのか知らないが、それを口実に俺に脅迫まがいな事までしやがる……けっ、胸糞悪いったらねえ。

「……あ……秀ちゃん……。ごみくん、ちょっとゆっくりお昼しちゃったあ……もう行くよん」

「ああ〜いや、構わないよ。まだ少しなら時間はある、最後まで食べてくれ。僕は事務所準備してるから……あれ？ 神埼君じゃないか。どうして君が美月とお昼を共にしてるんだい？」

けっ、最初から気付いてたくせに……感じ悪い……。

「いえ、たまたまこの場所で食べようかと思ってきたら、偶然一緒になっただけです。他に意味はありません」

「そうか、それなら構わない。悪かったね、美月の話し相手になつてくれて。礼を言うよ……それじゃ失礼」

ニコッと軽い笑みを残して立ち去る斉賀先輩。

なんだあいつ？ この前とは全然態度が違うじゃねえか。

あの顔は、裏の顔ってわけか？　　まったく気持ち悪い奴だぜ……来栖先輩なんて、『秀ちゃん』とか言っちゃってさ……。

ふん、どうせ女の前ではイイカッコしいんだろうさ。

「あやあ〜そろそろ行かなきゃだよん。じゃあね、茂吉っちゃん」
「！」

「真琴によるしくん〜」と言い残すと、風のように去って行く来栖先輩。

ピョコピョコ階段を飛ぶように下りて行く来栖先輩を眺め、改めて思った。

「成程……さすがアイドル。可愛いな……」

そして斉賀の事、聞いておけば良かったと若干後悔……ま、いいか。今度白河にでも聞いてみつか。

放課後　　白河の居ない学校なんて、用は無い。

さっさと帰り支度を整えて　坂崎の下らない誘いも断り、帰路に着く。

途中、如月さんの顔が頭をよぎったけど、『今は来るな』とか言っていたもんな。

ぶっちゃけやる事が無い……少し前までの俺って何やってたんだっけ？

なんだか……俺ってダメ人間なような気がしてきた。

なんとなく携帯を確認する　メールが1件。

しかも妹……終ってんな、俺。

白河はライブに向けて頑張ってるのに……急激に自分がちっぽけな男に思えてくる。

かと言ってさ、どうしろってんだ。部活でも始めつか？　でもって、スポーツマンになって、「カッコイイ神崎君！」とかって、白河に言ってもらって……ま……ガラじゃねーよな。

とりあえず、現状維持って事で……。

妹のメールは、夕食の食材を買ってきてくれて内容だった。なんで俺が？　って思うけど、実際家事炊事なんて一切やってねーもんだから、文句なんざ言えない。

逆に、たまには俺が夕飯の支度ぐらい、してやらんといけない立場だ……ま、しねーけど。

俺は素直に方向転換すると、商店街へ向けて歩き出すのだった。

特に食材の買出しなんて面白くもないんで、その光景は割愛させていただきますとしよう。

しかも…結構面倒なんだよ。

彩乃はちゃっかりしてるから、魚屋とか八百屋とか、個人商店ばかり周ってな、毎度おまけしてもらってるからさ。

そりゃ、あいつの可愛い姿と媚びる表情見たら、どんな店の店主だってサービスしちゃうに決まってるだろ？ 彩乃ワールド全開ってわけ。

あいつは絶対いい嫁さんになるぜ、俺が保証する。

だからな、真面目に買わんと怒られちゃうのさこれが。な？ 面倒だろ？

おかげでキャベツ買うのに、3店舗周っちまったぜ。

ちつ……こんなんじゃない、「やだあ素敵」なんて…あいつが言ってくる日は訪れないな。一生。

そんな感じで更にへこみつつ、帰宅した俺であった……。

何もする事が無い俺は、真面目に勉強中だ。

まあ宿題ってやつだ。別に威張る程の事じゃない、やって当たり前。しかし、そんなもの一時間もすりゃ終わってしまう。

時計を見る　既に11時……たまには早く寝るか？　妹の奴もそろそろ寝る頃だ。

そう思いつつも、ヘタレな俺はゲームの電源を入れてしまう。

……でもやらない。

なんでかって？　うん、いまいち気が乗らないんだよね。

こっ胸の辺りがさ、モヤモヤするって感じでだな……これは恋煩いってやつ？　目を閉じると、あいつの顔が浮かんじゃうってゆーの？

結果、我慢できずにあいつの写真集を取り出してしまっ……アホな俺。

だつてさ……会いたいんだもん、見たいんだもん、しょうがないじゃん。

いやでも　この展開、昨日と全く同じじゃねえか。進歩の無い自分。なんだか惨めになつてきた…。

ふいに後ろを振り返る。

「居るわけねーか……。」

もしかしたらつて、期待してしまう……そんなわけねえだろ、あいつ……今日から忙しいんだから。

はあく……と重い溜息をついたとたん、モニターにメール着信のメッセージが浮かぶ。

誰だ……？ フレンドからゲームの誘いかな……。

メールを確認する　相手は……『shirakawa』と表示されている。

おおー！　白河っ！！　あいつ、やり方覚えたのかっ！？

ふふん　実は昨日、既に俺のアカウントだけ登録していたんだよ

ね〜〜。

一瞬にして、惨めな気持ちはどこ吹く風。この文字だけで、俺はかなり高まった！！

本名はダメだって、あれほど言ったのに聞いてもらえなかった事などどうでもいいさっ！！

なんだよあいつ〜、俺に会えなくて寂しいんじゃないかねえのか？なんて妄想までしてしまう。

超ワクワクしながらメールを開く……すると『一緒にゲームしよう？の一言。』

うおおおおおおおおお！！！！！！

『一緒にゲームしよう？ 一緒にゲームしよう？ 一緒にゲームしよう？
一緒にゲーム……………』

たかがその数文字を、脳内で何十回とりぴーとする俺……………もちろん、
ハニカムあいつの笑顔付きでっ！！

いかんっ！ 速攻で変身……………じゃねえ返信せねばっ！！

『もちろんOK！ 今すぐOK！！』

送ってから、自分のキャラじゃなーなと思いつつも、ドキドキしながらレスを待つ……。

……

あれ？ 来ないな。

ど、どどどどうしたんだ！？ 何かトラブルでも？

物凄い不安に晒されていると、再びメール着信のメッセージ。

おお！ 来た来た……どれどれ……

『早く立ち上げてよ～～～待ってるんだけど……』

あ……ああ……そういう事ね。ソフト立ち上げてなかったわ。お、

俺としたことが……。

マッハで立ち上げて、白河を検索す……いたっ……キャラ名『真琴』……。

ぶうっぶうっ……！！！！ 頬張ってたポテチ、吹き出しちまったじやねえか!？

ガチ本名キター……！！！！（・・）！！！！！！！！

それでも、突っ込む前に早く会いたかった……まあゲームの中でだけ。

ドキドキしながら、ロビー（冒険者がたむろする場所）へと招待する。

まだかな、まだかな……待つこと数秒……。

するとヘッドセットから白河の声が……

「やつほ……遊びにきたよお……」

そう言っつて、俺のむさい男キャラの周りをくるくるするチビキャラ。
か　可愛い……。

いや、ネカマキャラ（女の子に成りすます男の子）がいっぱい居るからよくそんなキャラは見かけるけど……。

どんな見た目かって言うと　もちろん女の子キャラで、デフォルメされたチビキャラ。髪はツインテールで、魔法少女のような格好をしている。まあ職業は魔法使いで間違いないでしょ。

なんだろう　白河が動かしてるって考えると、そのキャラがむっちゃ魅力的っつーか可愛いってゆーか……まさにキャラ萌え。

「ねえつてばあ〜。もお〜、さっきから全然しゃべんないじゃんっ！　眠いの？」

うわっ！　眠くないですっ！！　眠くない！！

「お、おう悪い。なんでもねーよ。な…なかなか、か…可愛いぞ、そのキャラ」

「えへへえ〜、でしょ？　これ、彩乃ちゃんをモデルにしたんだよ〜」

「どお？ 似てる？」って聞いてくる白河。

言われてみると……なんだか似てるような……ツインテールな所とか、ちっこい所とか……。

成程……こいつ、彩乃大好きだもんな。良かった、男キャラで来なくて。そんなんじゃないキャラ萌え出来ねえからな。

「ああ、結構似てるぜ。お前センスあんな〜」

「うぶっ でしょでしょ、可愛いこのキャラっ」

いや〜参ったね。マジで俺…今、有頂天だから。こんなにドッキドキでゲームするのなんて始めてだぜ。

そんなもって、話しの流れ一切無視で、つい調子に乗って聞いてしまった。

「あのさー、そろそろ携帯の番号とか、メアドとか教えてくれない？」

「え……やだ……」

ぎゃあああああああああ……！！！！

『……やだ……やだ……やだ……やだ……やだ……やだ……』

本気の『やだ』って……思わずまた木霊したじゃねえか……。

なんで！？ う いかん、目頭に熱いものが……。

「……………」

「あ、あれ？ 神埼君？ ね、ねえ……怒ったの？」

「……………」

「ねえってばあ〜、怒っちゃやだあ……」

「怒ってねーし」

「うう〜怒ってんじや〜ん」

いや 本当に怒ってるわけじゃないよ？

急に無口なのは、涙声がバレたくないだけさ……へへ、俺ってマジでしょぼいな。

さっきまでハイテンションだったのに……激しく下がってきた。そ

りやもう急激に……。

なんつーの？ 完全に、あいつからの甘い気持ちが無くなって、遠まわしに知ってしまったような……。

「ね、ねえ……ごめんね？ だってさ、ほら……いつでも会えるじゃない。今だって、すぐに飛べるんだよ？ だから……ね？」

……う……優しい天使の声が聞こえる……でも切ねえ……し、親友って言われたのに、メアドすら教えてもらえないなんて……。

しかも、いつでも会えるって、あいつからの一方通行じゃねえか……。

「俺が会いたい時！ どうすんだよっ！！」

思わずヘッドセット越しにシャウトしてしまう俺。

「キヤッ」と軽い悲鳴がイヤホンから漏れた。

一瞬 お互い沈黙しちゃって、微妙な空気になる。

やっちゃった……折角、こいつ楽しそうだったのに……台無しじゃねえか……俺のバカ。

嫌がってんのに、無理やり聞いたって……どうせ……。

どうしていいか分からないまま沈黙が続き、どんどん白河に声が掛
け辛くなる。

いい加減、何か話さないと そう思ったその時

「うい~~~~っす」

「邪魔しま~~~~す」

「ばんわ~~~~」

「真琴ちゃ~~~~ん」

突然のフレの乱入。

一瞬ウザイって気持ちだったけど、正直助かった……と思ったのは
束の間。やっぱりウザかった。

皆、昨日の件 『ガチ白河真琴』が現れた事を知っているメン
ツ。

もちろん俺には一言も触れず、白河の話題でもちきりだ。

しかも、白河本人も楽しそうだった 質問攻めに合い、さすがに
嫌がってもう次は無いかなくなって思ったんだけど……もうそりゃ凄
いよ？ 仲間から、次々もらうアイテムの数々……ゲーム内マネー！。

そんでもって戦闘フィールドに出たら、白河を護衛のように囲むフ
レ達……。

さながら、お姫様を守る騎士団のような光景だった。

そんな状態に白河は大喜びだ。

聞こえてくるのは、今まで聞いた事もない大きな笑い声……。

ちよつと嫉妬しちゃうけど、楽しそうで何よりだな。

そしてボス戦では、昨日聞いた、あの　喘ぎ声に酷似した危険な叫び　　というか呟き……。

その時ばかりは一同シィー……ンとして、誰もが耳を傾ける……
…聞いてんじゃねーぞコノヤロー！

誰が聞かせるか！　突然マシンガントークを始める俺　　当然ブ
ーイングの嵐。

そして一戦終わり、再びロビーへ　　すると、予想していた通り
例のお願いが始まる。

例のお願いって何かって？　分かるだろ？　こついう事だ

「真琴ちゃん、真琴ちゃん、フレンド登録して？」

「あ、ずるいぞテメー。俺もフレ登よろ〜」

「なんだよお前ら、抜け駆けは許さねえ。真琴ちゃん、俺CD買ったよ？」

ちゅーこった。『フレンド登録』ってやつな。念の為、説明しておくぞ。

これをしておくと、その人同士がオンラインになった瞬間分かるようになる。

んで、ゲームに招待したり、もちろんメールを送ったりする事も出来るようになる。

まあとにかくだ 別に登録しなくてもゲームは遊べるんだけど、フレンド登録しておくとか、毎回同じ人とパーティーを組むことが可能になるわけだから、仲良く楽しく遊べるのさ。

だから、気に入った人とフレ登録するのは当然お奨めだ。ま、白河と登録したいやつなんて山ほど居るだろうけどな。

ピロリン

お、白河からメールがきた。

『神崎君、どうしたらいいかな?』

もちろん、フレンド登録をしたほうが良いかって事。

俺は迷わず送り返す。

『とりあえず、今回は断つとけ』

これはさ、男同士のノリならいいんだけど、女の子はストーカーさ

れるかも知れないんだよ。

リアルじゃないけど、自分のステージに毎回乱入してきたりさ……どこまでも追いかけてくる。

ネットでもそういうの、あるんだよね。

「ご、ごめんね、みんな。良くしてもらったし……その……楽しくかつただけど……神崎君がダメって言うから……ホントごめん!」

がくっ

そこで俺の名前出す!? しかも本名!? いやいや、わざわざメールで俺に確認してきた意図は!?

「ふざけんなよ、キング!」

「テムエー人占めかよ!」

「神崎コノヤロー」

「あ、あはははは……ごめん、ほん　とごめん。また明日来れたら来るからね? また遊ぼうね? じゃあね、神崎君」

「あ……ちょっと待って白河。ほんとにまた来るのか?」

「うん　来るよ。でも……たぶん30分くらいしか遊べないけど……」

…」

「みんなあ~~~~また遊んでねえ~~~~バイバイ~~~~」

そう言い残すと、いつものテレポートのよつに、シュッと消える真琴キャラ。

その場 俺も含めて…しばらく放心状態だった事は、言うまでも無い……。

そして、その後すぐに送られてきたメールには

『ゲームってほんと楽しいね！ でも、明日は神崎君と二人で遊びたい…かな？ えへっ 』

そのメールで、俺のテンションは再びMAX!!

超ドキドキで……堪らず写真集を開き いや…トイレに持ち込みしばらく出てこなかったのは、言うまでも無い……。

次の日　　特に学校では、皆さんに報告するような事は特になかった。

ただ…気になったのは、如月さんからの電話。

しかも授業中にかかってきて、思わず教室からダッシュで出て通話しちまった。

ふだん、如月さんからの電話はあまり無いからさ、緊急かと思っ
たさ……。

んで、その内容とは　「今日は必ず来てくれ」の一言。

だからさ、気になってしょうがないんだよ　。

結局、放課後速やかに下校して、研究所へとやってきた俺　。

そんな俺を笑顔で迎えてくれたのは　2号だった。

「おか……え……り……なさ……い……」「しゅじん……たま」

たどたどしい言葉で、何とか言い切った2号　　白河のクローンは……可愛かった……。

意味不明だけど、メイド服を着せられ（たぶん如月さんに）甲斐甲斐しく微笑む2号はなんと……保護欲をそそられると言うか……別次元の可愛さだった。

「如月さん！」

「おお君か……」

「君か？　じゃないですよ！？　2号になにさせてんですか！？」

俺は素直に疑問点を問いただしてみた。全くもって、個人的な趣味としか思えないそのメイドっぷりは、さすがにどうかと思ったからさ。

しかし如月さんは動ぜず、やれやれといった感じで分厚いメガネを外し、いつもの如くタバコに火を点ける。

「2号ではない、美琴みことだ」

なんでも……この子は美琴と言う名前で、如月さんの妹にするらしい。

まあ確かに、いつまでも2号じゃ可哀相だったからな。名前については賛成なんだけど……本当に妹って設定なんだな。

ってな事を如月さんに言ったら、戸籍上も妹にするらしい……。もしかして、三坂学園に通わせたりしないだろうな……。そんな事したら大混乱だぞ。…しかし、この人ならやりかねんから怖い。

そうやって、やり取りをしている間も、テーブルを拭いたりお茶を出したりと、せっせと働く美琴。

よろよろした歩き方…たどたどしい言葉…危なっかしい手つき…その全てが可愛い。

きつと、ここまで育てるのに大変だったんだろう。

まだ殆ど口は聞けないみたいだけど、その表情や仕草で、こっちの言ってる事は伝わっているみたいだし……。ここに来てまだ一週間位だつてのに、凄まじい成長と言えよう。

如月さんの執念　いや、少女趣味パワーの成せる技か!?

俺が感心して見ていると、如月さんは少し険しい顔で俺を呼んだ。

「神崎君、こっちへ来てモニターをみてくれるか」

はて？　今日は美琴のお披露目って事じゃないのか？

そう思つて、俺は凄く微笑ましく彼女を見ていたんだが……どうやら違つみたいだ。

で、そのモニターには、例のあの写真が移っていた

「げっ！ こ…これって……なんで如月さんがこの写真」

「慌てるな、これはネットだ」

そう　その写真は、あの屋上手前で来栖先輩に撮られた、白河が俺に弁当を手渡す写真……。

マウスをクリックして、画面を戻る……するとそれは　某有名・巨大スレタイのページだった。

しかも良く見ると、『白河真琴に彼氏が出来た件』といったスレが立っているじゃねえか……マジかよ……。

「安心しろ。それは合成だと、私が証明しておいた。騒ぎにはならんよ」

そう言うと如月さんは、スレッドの続きを見せてくれた。

確かに如月さんのコメントの後は、スレも殆ど伸びていない……騒ぎにならず、いたずらとして沈静化されたみたいだ。俺は心から安

堵した。

「迂闊だったな。学園でこんな写真を撮られるなんて……しかし、君達はいったいどこまで進んでるんだ？」

「え？ どこまでって？」

「簡単な事だ… AなのかBなのか……まさかCまで行ったのか？」

「行ってねえしっ！！」

「まったく……まだレールにも乗ってねえんだよ！！」

「しかし……この写真……出所は間違いなくあいつだろ。参ったな……そう言えば」

『それならこの写真をネットに流すだけですし』

「なんて事言っただけだったな……まさか実践したって事なのか……」

結局、「全て話せ」と言う如月さんに、今までの経緯を説明した。まあ、興味半分かも知れないけどさ。他に話せる人いないし……。

恐らく、あの嫌なヤローのことだ。このままじゃ終わらない気がする

…。

どうしたもんかな……やれやれだぜ

第15話へ続く……

第14話 恋煩いと不穏な影（後書き）

第14話でした。お読みいただき、ありがとうございます。

「なんだよ〜今回、エロねえじゃねーかよ」

と言われそうな勢いなんですが^^;

展開上、なかなか白河に会えないもんで……。

す…すみません（笑）

第15話 斉賀の企み

「はあ〜〜」

あれえ？ 変な時間に目が覚めちゃった……。

なにかなあ〜……あ……私……夢を……見ていたような……。

……やだあ……なんだか……下着が……。

変な夢でも見てたのかなあ……

……はあ……朝から……私って……。

つい内ももをすりすりしてしまう……。

そう言えば、神崎君が夢に出てきたような……

手に残る彼のたくましい背中感触……筋肉質な身体と汗の匂い……
……やっぱり男の子なんだなあ。

つて、ええ！？ うそお！？ ど、ど、どづしてこんなに……リア
ルに思い出すわけえ！？

……。

ま……まさかね……。

先日の光景が目には浮かぶ……。

実はね、この前…起きたら彩乃ちゃんのベッドだったのよね。

あははは……たまにね、勝手にレポートしちゃうっていつか……。

そ　それで…また抱き合って寝てたりして……。

でもね、すぐに戻ってきたし……たぶん気付かれてないと思うの。

だ、だからね…今度は…あいつのベッドに飛んじやったりして……。

……う……だ、抱き合うシーン……想像しちゃったじゃない……。

べ、別に　そんな　い、嫌じゃないけどお……って！　なに考

えてんのよ！

……。

そ　そうあれよ！　たぶんあれ。

あいつが　私にHな事でもしたのよ……夢の中で……。

……。

！……！……！

自分で考えておいて急に恥ずかしくなる。

な、なんで私がそんな夢 見なくちゃいけないのよっ!!

や、やだ……やめてよぉ……寝起きで……その……こんな状態なん
て、あいつと一緒にじゃない……。

わ……私はそんな……Hじゃないんだから……。

……。

……ね、寝よつと……

今日も……忙しい……し……

……。

……ZZZZ……スウ〜スウ〜……。

時間は遡り 一時間程前。

これは一体何事なんだ ！？

俺の真横で……白河が寝てるんですけど!?

部屋の中は暗い……恐らくまだ深夜だろう。窓から差す月明かりが、白河の顔をぼんやりと照らしている。

思い出す　寝る時……普通にいつも通りベッドに入って……寝たはずだ。当然ここは俺の部屋。

そして、たった今　目が覚めて　この状況

どういう状態か説明するとだな……二人が横向きに向かい合ってます。超至近距離で。

目の前で寝息を立てる……超可愛い白河の顔。マジ天使。超女神。超激ラブ。

そっちな……一つの枕に二人の頭が納まっている……と言え、その距離感が分かっていただけなのかと……。

もう少し近づけば、キスできちゃうな……。

スウ〜スウ〜と寝息を立てる白河……前にも感じたことあるんだけど、こいつの吐く息ってさ……なんて説明すればいいかな？　なんだか、甘酸っぱいような……不思議な匂いがするんだよ……。ぶっちゃけ大好きだな……この匂い。

あ〜〜なんだかこうしていると……満たされるな〜。

って!　そんな事考えてる状況か!?

段々、頭が冴えてきた。ひよっとしたらまだ夢かもって思ってたんだが、どうやらリアルっぽい。

そして気付く……色々な事に……。

たぶん いや間違いなく こいつは俺に抱きついてる……超マジで。

背中に手が回されてるし、足も俺に乗っけてきてる……しかも生足じゃねえか。

おまけに……密着した身体からムニツとした……あの特盛りの感触が……。超柔らかい。超弾力。超プリン。間違いなくノーブラです。

正直、こいつの身体は全体が柔らかい……これが女の子……。超感動、超感激、秀樹還暦。

!?

ちょっとまって……嘘だろ……いや……間違いない。

え〜とだな、少し時間をくれ。

聞いて驚け、今説明する。

俺の片足がさ、こいつの太ももに蟹バサミ状態で挟まれてるんだけど……その俺の足のさ……膝がな?……白河の……股間に……あ、当たってるんだよね……。もう危険な部位に。

いやいや違うぞっ!! 俺は目覚めてから、指一本動かしちゃいねえからなっ!!

しかもだな……俺って、寝る時はパンツ一丁 いわゆる『パンイチ』なんだよね。

だから分かる……こいつのそこが……じんわり熱をもってるのが。しかもなんだか……。マジで!?

あまりの驚愕的事実に困惑していると、白河がもぞもぞと動き出す……そしてグイグイとそこを押し付けてくる……。

「……………あ……………」

突然漏れる、白河の微かな吐息……。

!!!!!!!!!!!!!!

思わず超ドツキドキ……いろんな意味で……。

こ、こんな状態我慢できつかよ!?

ヤっちゃっう!? ヤっていいよな!? このままだと、俺何もしてないのに発射しちゃうだろ!?

やっぱり　　こんなオチ？

ひ…酷過ぎる……寝てる時まで逆ハラされるなんて……。

あいつ……どんな恨みが俺にあんだよ！

あゝあ……寝よ……

って眠れるかつ！？　ボケッ！！

身体全部がギンギンだっつーの！！

「兄さ〜ん、おはようございまあ〜す。朝ですよあ〜す」

「……………」

「兄さん？　起きて下さあ〜い。……………あ、兄さん、パンツが
らなにか顔出してますよ？」

「ぬおっ！？　見るんじゃないえっ！！！！」

「あ、起きた」

起きたじゃねえし！？　ってしかも何も出てねえじゃねーか！！

「あ、あれ？　兄さん…どうしたんですか？　目の下にクマが出来てますけどお…しかも、なんだかゲツソリしてるような…」

「　な、なんでもねえよっ。着替えっから下行ってろ、下っ！」

「……はあゝい。ちゃんと顔洗って下さいね」

はあゝゝ。超寝起き最悪……。寝不足だし、腰から下が超重い……。

賢明な皆さんなら、その理由はお察しいただけたと思うので、敢えて説明はすまい。

しかし……朝からこの倦怠感……。

超だるい。超眠い。超やる気出ねえ。超プリン……。

ん？

ぬおおおおおおおお！……！　思い出したじゃねえかつ！……！！

いかん！！　これ以上出したら……出したら……血が出るかも！？

この後 錯乱状態の俺は妹になだめられ、リポビーを飲んでなんとか学校へと登校した。

数日後の夜

まったり妹とテレビを観ていたら、気になるニュースが流れた。

『RM芸能プロダクション事務所に相次ぐ嫌がらせ再発。白河真琴復帰に暗雲』

RMプロとは、『レインボー・ミュージック』白河が所属する事務所だ。

しかし……嫌がらせ再発だって!?

坂爪博士の一件で、解決したんじゃないのか!?

やりきれない思いで画面を見つめる……。

「わわ……酷いことする人がいるんですね……」

妹もドン引きのその内容は、以前白河に聞いていた手口とほぼ同じだった。

事務所の様子が映し出されているけど、ガラスが割られたり、入り口でボヤがあったり……継続的に嫌がらせの電話があったりと、アナウンサーが説明している。

詳しくは伝えてないが、電話の内容は、白河への脅迫じみたものかも知れない……。

どうしたらいい？ 俺になにか出来る事は……。

だけど、考えても思い浮かばない……。ただの高校生の俺には出来る事なんてなかった。

ただ、以前と違うところは、今のあいつにはあのスキルがある。襲われてどうにかなる なんて事はないだろう。

だけど……嫌だな……。あいつきつと落ち込んでるよな。

折角掴んだ白河の明るい未来に、ケチつける奴は誰なんだ！？ 許せねえ。

結局、その日の夜 あいつがゲームに現れることはなかった。

ていうのも……ここ数日は、短い時間だけど毎日遊びに来てくれてた

んだ。

何か聞けるかと思ったんだけど……。

あいつ

大丈夫なのかな？ コンサートも近いってのに……。

次の日の学校

「ごめんなさい兄さん、今日は食堂で食べて下さい」

妹の言葉を思い出す。

今日は朝練があるとかで、弁当はないらしい。

ま、毎日妹の弁当食ってたら、マジでシスコンだと思われるからな。適度に学食行くってのは悪くない。

と思ったんだが、激しく後悔する。

その理由とは

「神崎君、食べないのかい？ うどんが冷めてしまつよ。しかし君はうどんが好きなんだね……」

目の前で定食にありついている男 齊賀秀一。

なんでこいつが居るんだ……。しかも そうだ。こいつのせいで写真がネットに流れたんじゃないかねえか。くそ、悩みの種が多いぜ。全く。

見るとムカムカしてきたもんだから、直球で聞いてみたんだ。

「てめえか、写真ネットにUPしたのは？」

俺がそう問うと、ニヤつと気持ち悪く笑みを作り「さて…なんのこつやら」と白々しく手を広げてやがる。予想通り、感じ悪い対応だ。

「大変ですねー、RM事務所も。ニュース、観ましたよ。なんでもヤクザに嫌がらせされているとか……ククク」

不敵に笑ってるぜ……。殺したくなるなこいつ。……。いや…までよ…なんでこいつヤクザが絡んでるって知ってるんだ？ 前回の報道も合わせて、ヤクザが関係してるなんて一言も言われてないぞ。まさかこいつ……。。

「おい…もしかしてお前か？ 嫌がらせにはお前が関係してるのか！？」

「やれやれ…先輩である僕に対して『お前』ですか…困った後輩ですね。僕が関係しているとしてどうするんです？ 君になにか出来るんですか？」

「ご、コノヤロー……」

「全く…稚拙で幼稚ですね、君は…」

まだニヤけてやがる……。なんだよこいつの態度。関係を否定もしないし……。

しかし…ただの高校生が、ヤクザ使って嫌がらせとか出来るのか？ いや…さて、こいつは来栖先輩を金の力でアイドルデビューさせた男だぞ…その気になればなんだって……。

くそー！。やりきれない想いで斉賀を睨みつける。

「なんですか、その挑戦的な態度は……。正直、君程度のゴミに興味なんてありませんが……。まあ…僕としては白河真琴 彼女が芸能界から去ってくれれば、何も問題は無い訳でして…」

「……なんでだよ……なんで、白河に……そんな事……」

「はあー。君って見た目通りの馬鹿なんですわー。白河真琴の実力

は、その人氣が表しているように確かなものです。いずれ美月を超えるでしょう。ですが　僕がそんな事を許すとても？　僕の愛する美月を超えるだなんて……ありえないですよね」

な、なに言つてやがんだこいつ…。

それじゃ只の妬み…嫉妬じゃねえかよ……ふ

「っざけんじゃ

」

齊賀の胸元を掴もうとした瞬間　奴は立ち上がり、俺の手は空を切った。

「ちよつとおしゃべりが過ぎましたか　ま、指でも啜えてその辺で這いずり回って下さい。それでは　」

掴み損ねた手をそのままに、フリーズする俺。

あの野郎……許せねえ。

ちくしょくく　何か俺にも出来ないだろうか……うぐむ……。

ムカついた気持ち治まらず、その場で佇んでいると、ふいに携帯がブルブルした。

電話……？ 誰だ？ 一瞬 白河の顔が浮かぶが、あいつは番号を知らない。まあ彩乃だろ、たぶん。

しかし、液晶画面の表示を見てほくそ笑む俺。

ふっふっふ……斉賀、てめえは死んだ。

俺には何でも頼りになる、ドラえもんみたいな人が居るんだよ。

もちろんその人とは 如月さん。

「はい、俺です」

「私だ。今、話せるか？」

いつもの、ドライな感じの声。

「大丈夫です」

「ならば、今日も必ず来い」

「あ はい、分かりま」

「ツーツー……」

もう切れてるよ。あいかわらず用件短い人だ…。

でも用件ってなんだ？ 昨日の今日だから…たぶん白河の事だと思
うんだけど。

あの人、白河大好きだし……。

まあ 行けば分かるか。

第16話へ続く。

第15話 斉賀の企み（後書き）

第15話でした〜。

今回ちょっと短くてすみません。

続きをどう書いていいのか悩んでしまって…… ^^ ;

本当に書きたいストーリーはもっと先なんです……そこまで辿り着けるかどうか……。

第16話 美琴と真琴

「美琴！ 何やってんだ！ 犬と遊んでんじゃねえ！！」

メイド服お出かけモードで斉賀亭へと侵入した、美琴こと、白河2号機。

なかなか目的地へと辿り着けない美琴に、俺はいらいら、いらいらしていた。

え？ 話しが飛びすぎて分からないだつて!？

まあそうだろうな。

しゃーない、面倒だが説明……いや、ちょっと時間を遡ってくれ。

「助けてえ〜〜ドラえも〜〜ん」

「馬鹿な事言ってるんで、早くこっちへ来い」

ちっ、いつもながら、冗談が通じないぜ。

例の如く、如月さんに助けを求めてやってきた俺。

まあ電話もあつたしな。

そしてすぐに端末の横に座らせられて、説明モードの如月さん。

なんだか、今日はいつも以上にペースが速いぞ。

「昨日のニュースは観たか？」

ああ、あれね。もちろん、『RM事務所嫌がらせ事件』の事だろう。

「観ましたよ」と即答する俺。

「ならば話しは早い。今回の件、全て斉賀秀一という小僧の仕業だ」

え？ ちょっと待って。

いや、ある程度予想はしてたんだけどさ、あまりに急展開すぎるし、この人どこまで知ってるんだ？

「ちょ、ちょっと待って下さい」

「なんだ？」

「ええと、その……どうして斉賀の事知ってるんですか？」

「ちっ……面倒だな……説明が必要か？」

「ええ。出来れば」

「ふむ、仕方のない奴だ……」いつもの如くタバコを吸い出す如月さん。

あいかわらず、俺への説明は面倒らしい。

白河には、言われなくても何度でもするくせに……。

ふん、拗ねちゃうぞ。

しかし、2号　じゃなかった美琴はどうした？　今日は見かけないな。

そんなキョロキョロした俺の挙動をキャッチしたのか、ズバリ心を読まれた。

「美琴なら、奥で学習中だ。後で会わせてやる」

「そっすか」

まあ別に会わなくてもいいけどな。

あいつを見たら、白河を思い出して切なくなるだろ。

「で、斉賀の件だったな」

どうして斉賀の事を如月さんが知っていたかかっていうと、例のネットでUPされた写真を元に、どの端末からデータが送られたのか、調べたらしい。さすが如月さん。

「で、辿り着いたのが斉賀のパソコンだったと」

「そうだ。それで斉賀という名に聞き覚えがあつてな、確認してみたんだが……」

それがなんと、斉賀組の本家だったらしい。

『組』っていうくらいだから、なんとなく分かるだろ？

あいつの家は、本気のヤクザだつてことだ。

どうして、金を持つてるはずだぜ。

「まあそれでだ、君からも嫌がらせの件は聞いていたからな、調べたら斉賀組が関係していた訳だ」

やっぱりあいつだったのか……。

金や権力に物を言わせるなんて、なんて汚い野郎だ。

「しかし、どうしたらいいんすかね？」

「ふむ……。簡単だ。脅してやればいい」

ニヤリとする如月さん。

そして、「これを観ろ」とモニターになにやら映し出す。

な……。なんだ？

それは映像だった。どこかの部屋の中を撮影した物のようだ。

しかし、画質はあまり良くないみたいで、たまにノイズが入る。

でもなんだろう？ なんとなく雰囲気では女の子の部屋のようだ。

部屋全体が明るいブルー調で統一されていて、そこかしこにヌイグルミが置いてある。

恐らく若い女の子だ。

一体何を見せようってんだ？

すると、なにやら画面に可愛らしい女の子が現れる。

なんだか、鼻歌まじりで上機嫌だ。

いや……まで。

この声どこかで　しかも着ている制服、うちの学校のじゃねえか
！？

「知っているだろう？」

う、ううん。もうちよっつで……。

長くて、綺麗な髪。んで、頭には大きなリボン。

ちょっと待てよ……その子が振り返り、正面から顔が映った

間違いない。

来栖美月。来栖先輩だ。

なんで、来栖先輩の部屋の映像が……！？

すると、おもむろに制服を脱ぎ出す先輩。

うわ　マジか！？

そして次第に…下着まで脱ぎ出し…カチッ

「あれ？　なんでいいところで止めるんですか!？」

「ふむ。君はなかなか度胸があるじゃないか？　私の前で、彼女の恥ずかしい映像を見たいと言っただな？」

「あ〜いや…ええ〜〜と」

ちえ、あそこまで盛り上げといてそりゃないぜ……。

「今の映像はな、斉賀秀一のパソコンからハッキングしたものだ」

「なんだって!？」

「しかも、これだけじゃない。こんなものじゃ済まされない。彼女の部屋、バス、トイレ、玄関、全ての場所に隠しカメラが設置してある。しかも、多様なアングルから見れるよう恐ろしい数のカメラが」

マジかよ……。

あの野郎……自分でアイドルデビューさせといて、裏でそんな事してたなんて……。

俺の、遙か数段先に行く変態じゃねえかよ。

「分かりました。その映像をあいつに見せて、脅してやるって事ですよね」

「ふむ、まあそうだな。しかしだ……このままでは証拠不十分だな」「なんでです?」

「これはハッキングして入手した映像だ。相手が知らぬ存ぜぬを貫けば、どうとでも誤魔化せる」

くそ　　そうなのか……じゃあどうすればいいんだ!?

「だがな、この件に関しては私もかなりムカついている。白河君と同様、来栖美月も私は結構好きなのだよ」

「は、はあ……」

「まあ入手した映像は、私が責任を持って保管するが……」

そこは破棄しとけよ!!

「この男は女性の敵だ。社会的に抹殺してやらねばならん」

お、いいね、そのノリ。俺も大賛成。

「で、どうやって証拠をゲットするんですか？」

「美琴にお願いする」

は？ 今なんと？ 美琴だつて！？

あいつに何が出来る訳？ ただ白河にそっくりなだけのあいつだぜ？

「マジで言ってます？」

「ああそうだ」

「ちょっと待ってる」と恐らく美琴を呼びに行った如月さん。

一体どうするんだ？

程なくして、美琴を連れて来る如月さん。

「あは かんざつき！ かんざつき！ 元気した？」

「かんざつきスキ〜」と俺に抱きついてくる美琴。

お……おい。どうなってるんだ、これ？

どうしてこいつが、俺に『スキ〜』とか言っ
て抱きついてくる…
…。

なんだか、めっちゃ可愛いんですけど…！

「ちっ、嬉しそうだな。君は」

「そ　そりゃ嬉しいっすよ。だけど、どうしたんです？ こいつ

「かんぞっきい〜」

すりすりど、俺の身体に頼ずりしてくる。

「ああ、最近、やっと物心ついてきてな。きつと、君が研究所で助けてくれたのを覚えていたんだろう。昨日から、君の事ばかり話すようになってな……」

マジすか！？　俺、こいつのフラグ立てちまったってこと！？

おいおい、どろびるどろびる……ズルズル……。

やっべ、ヨダレ垂れてきた……。

くう~~~~！ オリジナルがこんだけ可愛かったらな~~~~。

.....。

一生ありえないな.....。

よしよしと美琴の頭を撫でてやると、嬉しそうに目を細めて猫みただ。可愛いぞ。

「で.....こいつがどうするんですか？」

「ん？ まあ見てろ。美琴、ちょっと例のやつやって見せてくれ」

「はあ~~~~い」

可愛く返事すると、「シュッ」と消える美琴。

ええ！？ これってまさか.....。

「空間転移だ」

「やっぱりそうすか!..?」

「ああ。白河君の脳とシンクロさせたら、同じような現象が起きた。しかも、白河君の記憶が大量に彼女に流れ込んだみたいでな？ 一般常識も今は充分身についている」

あいつが……あいつが……さっきみたいに俺にすりすり……。……。

考えただけでも興奮してしまう!!

なかなか興奮が冷めない俺に対して、如月さんはこうも言っていた。

「今の美琴は脳が幼稚だが、学習させた知識だけをみれば、君より遙かに頭は良い。まだ口が舌足らずだから、思ったことをなかなか話せないが、こちらが言った事はほぼ理解出来る」

だそうだ。

なかなかやるじゃねえか美琴。

いやさすが如月さん。

「んで、あいつのスキルを使って一体何をする気なんです?」

「まだ分からんのか。これだから君は……彼女には、斉賀亭へ飛んでもらって証拠を持ってきてもらう」

「成程……。でも美琴で大丈夫ですかね?」

「なに、心配は無い。準備は整えてある。それにだ、白河君本人でも良かったんだが、彼女にこんな汚い世界を見てもらいたくなかったんでな」

そっか……そうだよな。その通りだな。

やっぱり如月さん、頼りになるぜ。

この恩は、ほんといつか返さなきゃだな。

「しかし美琴のやつ、帰ってきませんね」

「うむ、そうだな。可笑しいな……」

シュッ

うお！ 帰ってきた。この突然現れる感じ、なんとかならねえのか！？

「たらいまあ〜ん〜レロレロ……おいちい〜」

なにやら、アイスクリームをペロペロしてるんですけど……。

「如月さん……こいつに、金も持たせたんですか？」

「いや、それはない」

って、おいしいい〜〜〜!!!!!!

「お前、どこでそれ盗んできたんだよ!?!」

「?」と頭の上にハテナマークを点灯させ、首を傾げる美琴さん。

「美琴、そのアイス、どうしたんだ?」

「え〜〜っとなって〜…おじさん」

嬉しそうに微笑む美琴。

ダメでしょ、知らないおじさんに着いていたら……。

「あの、如月さん?」

「ああ分かってるよ、ちゃんと教育する」

ならいいんですけど……。

てな感じで、美琴潜入捜査が開始されたわけだ。

でもって、実際に飛んでいったのは美琴だけ。

俺達は、美琴が掛けているカメラ付き伊達メガネからの映像を見ながら、高みの見物だ。

ちなみに、どこを指してるかって言うと、斉賀秀一人の自室。

あらかじめ、如月さんが探りを入れてくれてあるから、間取りもバツチリだ。

しかもだ、斉賀亭ははっきり言ってかなり広い……そりゃもうお屋敷だ。

その代わりな？ 使用人 ようするに、メイドさんチックな人がいっぱい居るのさ。

だから、もちろん美琴には使用人に似たような服を着せてるって訳。ばっちりだろ？

と、ここまではいいんだが……。

屋敷の庭まで潜入したんだが……いかにも番犬って感じの犬に寄ってって、その犬と戯れてるんだよ。

まあ奇跡的にその番犬、全く吠えるどころか、くうくうくうくうと美琴に甘えてきやがる。

そして美琴は大喜び。

本来の目的を既に忘れてしまっている感じた。

「おい！ 美琴！ 早く斉賀の部屋へジャンプしろ！」

必死に叫ぶ。こっちの声は、イヤホンで聞こえてるはずなんだが……。

「ふむ、まずいな……。このままでは恐らく見つかってしまうだろう……。」

やっぱりそう思いますよねえ。

さつきから、画面には犬の映像しか映ってないんだよね……。

そしてその悪い予感は的中する。

その後すぐに恐いお兄さん達が来て、美琴は確保された。

それでも当然の本人は、遊んでくれると思ったのか、なんと大喜びだ。

マジすか!？

全然当初の目的とはかけ離れてるんですけど……。

しかも

「如月さん！ このままじゃ美琴、やばくないですか!？」

「危険だな……だが、もう少し様子を見てみよう」

だ…大丈夫かよ……しかも、如月さんのこの落ち着きよう……信用していいんだろうか。

そのままモニターを監視していると、どんどん屋敷の奥へと連れて行かれている。

そして場所は広い部屋へと辿り着き……

「若、このような女子おなじが庭で見つかりました。いかがいたしましたでしょう?」

恐らく、美琴のすぐ後ろにいるであろう兄ちゃんの声。

そして美琴の目線

モニターに写る先には

斉賀の姿!!

あの野郎……若とか呼ばれてるし……さすが本物は違つぜ。

なぜかドキドキしちゃう。

「ほう……その服……似ているが、当家の使用人のものとは違うな。もう少し、近くへ連れて来い」

何をするつもりだ？ マジで緊張してきた。

されるがまま、素直に言う事を聞いてどんどん斉賀に近づく美琴……。

「おや？ この女……白河真琴にそっくりじゃないか……。おい、そのメガネを外せ」

やばい！ メガネを取るのもやばいし、素顔を見られたら白河本人だと思われる！！

どうしたらいいんだ！？

「如月さん！ こいつに何か装備させてないんですか！？ 電撃が出るやつとか…爆発するやつとか」

「ないな。美琴にはまだ早い」

万事休す……って感じ？

打つ手無しか……ま、いつもの如く俺はなんも役に立ってないし。

そして外されるメガネ……。

モニターの映像が、突然床や天井を写したりと焦点が定まらなくなる。

既に誰かの手にあるって事だ。

「こ　こいつは！？　白河真琴本人じゃないでしょうか!？」

「か、可愛い……」

「俺、ファンなんです！　間違いない。本人ですよ、若!！」

たぶん斉賀の取り巻きというか、若い衆の声が聞こえる。

美琴の素顔を見て驚いているみたいだ。

まあ当然だな。

モニターには足元の映像が映し出されている……メガネは投げ捨てられたようだ。

「そうか……ククク……君が……ふっ……白河真琴本人が現れるとは

ね。やるじゃないか…どうやってここまで忍び込んだのかは知らないが、その度胸は素晴らしいよ」

斉賀の、冷徹でムカツク声が聞こえる。

「そいつを拘束して、僕の部屋へ運んでおけ。それと、お前か…？
白河真琴のファンだと言うのは……」

「は、はい若。自分であります！」

「お前…指詰める……」

グシヤッ

砕かれたような音と共に、映像と音声が途切れた。

踏み潰されたのかも知れない。

ダメだ！ もうあっちの様子は分からない……どうする！？

「如月さん……」

「うむ…まずい展開だ」

さすがの如月さんも、腕を組み、足を組んで考え込んでいる。

「俺、直接行って来ますよ。だから…何か武器ないすか？」

「……危険だが、そうするしか手はないか……いや、待て……」

如月さんは悩んでいるようだけど、早くなんとかしないと……斉賀の奴、美琴に変な事するに決まってるだろ。

俺が行くしかない　ここからなら、走って15分位だからなんとかなるっしょ。

あ……でも相手は本物。チャカとか持ってそうだな……ここ、殺されるかも……。

「ねえねえ、なに二人で神妙な顔してるのお？」

急に女の子の声が聞こえて振り向くと、そこには白河が立っていた。

「なんでお前がいるんだよ!？」

〳〳白河視点〳〳

「ハア〜〜難しいい〜〜。」

「大丈夫よ真琴ちゃん、今のは良い感じだったわ。 さ、夕食にして休憩とつたら、また最初っから踊ってもらっから」

「はあ〜い」

今はライブで歌う曲の、振り付けの確認中。

先生とマンツーマンで、朝からずっと踊ってたから……かなり消耗……。

自分の曲はいいんだけどね？

何曲かカバーするのよ。

えっと〜、美月ちゃんの曲とかあ、某有名アイドルグループの曲とかね。

そうしないと曲が足りないのよ。まだデビューして間もないから。

だからね、ライブオンリーで歌う曲の振り付けをしてもらってるんだけどあ……。

あ〜んもお…時間が無いから焦るう〜。

……まあいいや。お弁当食べてちょっと休もっかなあ。

「真琴、大分良くなってきてるよ。明日は番組の収録があるから、この後は早めに終わらせよう」

そう言って、マネージャーの黒田さんがそつとお弁当を手渡してくれる。

いつも優しい黒田さん。

この人はね、敏腕マネージャーとして有名で、私がここまでになれたのも…たぶんこの人のおかげ。

しかも長髪イケメンで、背も高くって…女子に凄い人気があるんだよねえ。

正直、私もカッコいいな…って思ってた…。

で、でもあれよね。私なんてまだ子供だし…きっと相手にされないって…。

「ほら、身体が冷えるよ……」

そつと自分の上着を脱いで、私の肩にかけてくれる……。

クーラーで冷えた肩に、黒田さんの温もりが伝わってきて心地よい。

「あ、ありがとお……」

「じゃ、僕はちょっと打ち合わせがあるから、悪いけど一人で休んでもらえるかい？」

また後で　と後ろ向きに手を振って行く黒田さん。

いつもながら優しくって素敵……。

あゝああ。神崎君にも彼のようなところが……ほんのちょっとでもあればなあ……。

顔は結構好きなタイプなんだけどなあ……なんとなく、神崎君の顔を思い出す。

……。

思い出すんだけどお……別にカッコいい訳じゃないし……。

別に顔も……好きなタイプじゃないか……。

なんでそんな事考えたんだろう。

「考えるの終わり……」

早くお弁当食べよつと。

そう思い、廊下を歩き出して休憩室の前まで辿り着く。

部屋に入ろうとして一瞬考え、お茶でも買おうかと自販機を見つめる。

でも黒田さんを思い出し、彼のことから飲み物が用意されているはずだと確信しつつ、部屋に入る。

中にはやっぱり飲み物が置いてあり、デザートにスイーツも何個かある。

その横には『全部食べてもいいよ』と、メモが残されていた。

いつもなら飛び跳ねて喜んじゃうんだけど、疲れててなんだか冷静に考えちゃう。

だってね、黒田さん、いつも忙しそうなのに、こんなに気を使ってくれるんだよ？

やっぱり、大人だからなのかなあ……。

ちよつと黄昏つつも、その優しさに浸りながらお弁当を食べる。

疲れて食欲は無かったんだけど、残すのは嫌い……というか孤児院時代に『食べ物を粗末にはいけない』と散々言われてきた事もあって、出された物は絶対食べる習慣がある。

「さすがにこれ全部は食べないけどお」

テーブルの上に並んだスイーツ達に視線を向ける。

プリンにシュークリーム、ショートケーキにワッフル……いっぱいあるけど、全部コンビニで買った物じゃない。

いつも、どこかの美味しい洋菓子屋さんで買ってきてくれる。

その心遣いがとっても嬉しい……。

プリンを手に取り蓋を開ける。

甘いカラメルの匂いがする……。

一口食べる。

疲れた身体に優しい甘さ……。

その一口で手に持ったスプーンの動きが加速し、どんどん食べる。

止まらなくなつて、ワッフルも食べる。

そしてシュークリームに手を伸ばしたところで止める。

「ダ、ダメダメ……太っちゃっ……」

なんとか思い留まり考える。

考えて……また神崎君の事を思い出す。

あいつ　なにしてるのかなあ……。

遠くの気配を感じ始める……大勢の気配を感じる。

ふと、近くの喫茶店で黒田さんを感じた。

言ってた通り、5・6人の人と会ってるから、打ち合わせ中なのかな。

えっと……もっと遠く……神崎君の家は……発見！

あれ？　家には居ない……彩乃ちゃんだけだ。

何処に居るんだろう。

最近はずいぶん、神崎君を探してしまっ。

……。

ち、違っって！　べ、別に彼に会いたい……とかじゃないんだからねっ！

……そ、そう……私って、友達少ないからあ……。

っ、つまりそっという事なのっ！

ハァ……って、私ったら、なんで自分に言い訳してるんだろ。

でも気になるなあ、どこに居るの？

家に居ないってことはたぶん……。

……。

あ……居た、見つけた！ やっぱり如月さんの所だ。

なにしてるんだろ？

でも可笑しいな……美琴の気配を感じない……。

時計を見る。

まだ休憩時間は結構ある。

ちょっと行ってみようかなあ。

……。

クンクン……着ているジャージの匂いを嗅いで確認する。

うん、汗臭くない。

ちょっとだけ……遊びに行っちゃおっと。

「必殺！ 瞬間移動！！……なんちゃってえ〜」

一瞬で身体が消えて、次の瞬間には如月さんの研究所に。

目の前には如月さんと神崎君。

二人して腕を組んで、椅子に腰掛けている。

なんだか重い空気……。

ちょっと入り込めない雰囲気だけど、でも聞いちゃうの。

「ねえねえ、なに二人で神妙な顔してるのお？」

「なんでお前がいるんだよ!？」

あ、あれ？ 二人共、『なんだか秘密がバレちゃったあ』みたい
な顔で驚いてるんだけどお……。

私…お邪魔虫？

「来ちゃまずかったの？」

「…え…あーうん。いやそんなことはないぞ」

明らかにタイミング悪い感じ。

しかも、神崎君がよそよそしい。

な……なんでえ……？ なんなのよお、この扱い……泣いちゃうよ……。

冗談で思ったんだけど……ホントに泣きそう……。

レッスンで疲れてたし、事務所はまた嫌がらせされちゃうし……あ
ゝああ……。

「っておい！？ なんだよ！ そんな泣きそうなの 目つるつるしてんじゃねーよ！？」

「だ だつてえ……グス……」

ただ会いたかっただけなのに……。

「いや、ナイスタイミングだ白河君」

それまで沈黙していた如月さんが、顔を上げた。

「 不本意だが 白河君、力を貸してくれないか 」

そう言って如月さんは、事情を話し出した……。

ここ数日での出来事

神崎君と斉賀さんのやりとり。

全然知らなかった。

あの写メがネットにUPされてたなんて……。

しかも、斉賀さんが……。

いつも美月にとっても優しく、私にも笑顔のあの人が……そんな事するなんて。

美月ちゃんの……その部屋を盗撮って……信じられない。

話しを聞いて、私は段々腹が立ってきた。

「分かりましたっ！　すぐに美琴を助けに行きます！！」

「……お、おい……大丈夫なのか？」

「大丈夫だってえ。私に任せて！」

うん。たぶん平気。

だって、一瞬でテレポート出来るし……。

「じゃあ行ってくるね」

そう私は告げて、すぐにジャンプ！

「バ　バカちょっと待　」

なにか言ってたけど、知らない。

美琴の気配を辿って、既に斉賀さんの家の前。

すごく大きい……神崎君が言ってた通り、お屋敷だね。

さて、美琴に話し掛けてみよつと。

（美琴！　大丈夫？　変なことされてない？）

……………。

心の中で呼びかける。

実はね、美琴が能力を使えるようになってからは、テレパシーって
いうのかな？　近い距離だと、気持ちを通じ合っの。

凄いでしょ？　私達って天才？

しばらくして、美琴の声が届いた。

(……ま……こと?)

(!! そうよ、真琴。大丈夫? 今、どんな状況か教えて?)

(ん〜とね、さいがと遊んでるっ〜。たのしいよ〜)

はいい!? どうして!?! 聞いてた話と違っただけ……。

ま…まあいつか、

(今そっち行くからね)

(はあ〜い)

美琴の気配がする部屋を探す……そしてジャンプするイメージを強く!
く!

シュッ

移動成功。

そしてこの部屋は……なんだか本がいつぱいの棚が目の前にある。

書斎かな？

棚の奥を覗くと 居た。

齊賀さんと美琴が、ベッドの上で向かい合ってる。

って、キヤア~~~~、ベッドの上で何してるのよお~~~~。

と、とりあえず、様子を見てみよう……。

「なんだ君は……ずっと笑ってるじゃないか。僕に襲われるのがそんなに嬉しいのかい？」

「うん、たのちい」

「 つぶ、幼児プレイのつもりか？ 君はみかけによらず変態なんだね」

え？ な、なに？

この展開ってまさか……。

ってあの子、シャツはだけてるじゃない！

しかも…… 齊賀さん、ビデオ撮影中！？

や……やだ……ブラのホックに手をかけられて……ま、まずいじゃない

そ、そだ！ みゃ、脈は……。

慌てて腕を取る……大丈夫……ちゃんと脈打ってるし……息もして
る。

び、びつくりしたあ〜もあ〜。

「まごちよ？」

美琴はキョトンとしている。

可笑しいなあー。

如月さんの話したと…私の記憶を受け継いだから、こういう事がど
ういう事なのかぐらい分かっても……

……あ、あはははあ……。

そう言えば、私経験無いんだっけ……

自分で思ってた、軽くへこんじゃったじゃない。

まあいいわ。

さっさと帰りましょ。

と、その前に……いつも持ってる携帯用スタンガンでビデオカメラ

を破壊　電気当てれば壊れるよね？

よしっ！　これでOK。

と思つたら、その奥にある棚に目があった。

そこには、『来栖美月ROOM』というタイトルが張られたDVD
が大量に……。

あからさまに怪しい……。

そうだった、その如何わしい物を全て処分しなきゃ　。

～～俺様視点～～

遅い。

白河が帰って来ない。

飛んで行って美琴を連れて来るだけだろ？

なにやってんだよ……。

あいかわらず、如月さんは何の心配も無しって顔してるし。

早く帰って来いよ～～～マジで不安で堪らないないだろっ。

「白河真琴生還!!!」

「たたいまあ～～」

と思ったら帰ってきたー！ー！ー！ー！！！！

胸を張って颯爽と登場した、白河嬢。

ジャージの胸の部分がパツンパツンに張っている。

もちろん、美琴も一緒だ。

はあー心配させやがって……。

「おう、無事か!?!」

「ん？ ぜんぜん問題無しね。証拠のブツも回収してきたわ。ふふふん」

そう言って、ビニールに入った大量のDVD-ROMを突き出す。

「良くやった、白河君。押収した品は、私が責任を持って破棄しよう」

そのブツを受け取る如月さん。

って、この人に渡して大丈夫なのか!?

かなりそれに関しては信用出来ないが、面倒なので敢えて突っ込まない俺。

そして斉賀のパソコンを破壊すると言って、端末を操作する如月さん。

ウィルスでも流すんだろうか。

と、そこで美琴の胸がはだけているのに気付く。

ブ、ブラが丸見えじゃねえか……。

って、あれ？ やけにポヨンポヨンしてるな……。

「ああ〜〜たのちかつたあ〜〜」。

なんだか高まつてるらしく、動き回る美琴。

美琴が飛び跳ねる度に大きく揺れて、ブラの下から隠された物が見えそうになる……。

まさかあれは ホックが外れてるってやつじゃ……。

キュピーーン!!

「俺・s eye ロックオン」

バシイイイイツ!!!!!!

瞬間 わざわざ自分の靴を脱ぎ、その凶器で俺を本気殴りの白河。

「痛えええええ!! 何しやがんだお前!？」

「ふんっ、Hなこと考えてるからでしょっ。なにがロックオンよっ
」!

し、しまったああああああ!!

つい嬉しくて声に出してしまったようだ。

不覚っ

次の日　　俺は斉賀を呼び出し、対峙していた。

「これが何だか分かるか？」

「ええ、大体は」

手に持っているのは一枚のDVD。

まあ生ディスクだけだな。

別に、黙ってりゃ分からないだろ。

「通報されたくなければ、白河への手出しは一切止める」

「解りましたよ。そこまでされては引くしかありませんね……イタタタ……」

斉賀の頭には包帯が巻いてある。

白河が何かやったんだらうか。

まあいい、ザマーミロ。

いつもの　不敵で気持ち悪い、薄ら笑みも無い。

ふっ、清々しいぜ。

「今すぐ電話して止めさせる。じゃないと信用出来ない」

俺がそう言つと、「せっかちですねえ」と手を広げてイラつくポーズをしながら電話を掛け始める。

「僕だ 例の件は中止だ そうだ、白河真琴の ああ、もう終わりにする」

電話を切り、「これでいいかい？」と聞いてくる斉賀。

OKOKそれでいい。

ただ続きがあるんだよね〜〜

俺は如月さんから受け取った、5センチ程の球体を手に取る。

その真ん中にあるボタンを強く押すと……「ヨキ」と針が飛び出した。

「斉賀 てめえに話がある……。」

「なんです？改まって」

ゆっくり近づいて、その針を適当に奴の身体へと刺す。

「痛っ　な、何をした……お……お前……は……」

ドサツとその場に倒れる斉賀。

しばらく様子を見る。

そして意識を取り戻す斉賀。

「　う、うーん……ぼ、僕は一体……」

「目が覚めたか？」

「はい」

虚ろな顔で起き上がる。

「こ　ここは？　……あれ？　僕は……誰……だ？」

「お前は斉賀秀一だよ。じゃあな」

確認したから、その場を後にする。

何をしたかって？

もう気付いてるだろ？

記憶を消したってやつ。

通報しないでおいたんだ、粹な計らいだろ。

ま、俺が自慢したって仕方がないけどな。

最後はやっぱり如月さんに、締めてもらわねえとな。

で、その後どうなったかっていうとだ。

斉賀の事務所は解体が決まり、来栖先輩は『RM事務所』への移籍が決定。

なんでも、白河が事務所に頼み込んだらしい。

まあトップアイドルの移籍だ、来栖先輩がいいなら、事務所も断るはずはないよな。

そんで、当然事務所への嫌がらせも無しって訳。

まさに一件落着ってやつ？

そしてその日の夕方

「やつほ〜」

白河が遊びにきた。

いや、気付いたらまた、不法侵入されてた。

「なんだよ、何か用か？」

内心物凄く嬉しいけど、敢えて毒付く俺。

「なによお〜ツレないなあ、君はあ」

仕事の合間なのか、なぜかあのパステルピンクのステージ衣装で登場の、アイドル白河。

ぶっちゃけ超可愛いし、何度もDVDを観ていたせいか内心ドッキドキの俺。

「あん？ 宿題やってんだよ、邪魔すんじゃないねえ」

「またまたあ〜そんなこと言って、どうせこの後、私の写真集で

も見るんでしょ？」

う……行動パターンが読まれている……。

まさかこいつ！？……………ニュータイプなのか！？

って冗談はさておき、たぶん見ますけど……………それがなにか？

「……………でなんだ？ 遊びに来たのか？」

「まあ、なに！？ 折角忙しいなか来たのにさあ、もっと喜んでよねっ」

「へいへい」

ちょっと拗ねた顔がまた可愛い。

俺ってドMかと思ってたんだが、実はSなのか……………？

そんな下らない事を考えていると、白河が2枚の紙を取り出し俺に渡してくる。

「はい、これプレゼント」

ニコニコして渡してくるもんだから、つい期待してしまっ。

ドキドキ……なんだろう……。

「白河真琴ファーストライブ……」

「うふ　嬉しいでしょ。結構いい席なんだからっ」

た、確かに嬉しいかも……。

素直に礼を述べると、「でしょでしょ」と上機嫌でベッドにドカ
っと座り込み、足を組む。

組んだ足というか、そのムチとした太ももの付け根　ヒラヒラ
のスカートに心が奪われる俺。

ライブのチケットよりも今は考えたいことが……。

……。

成程、あのスカート……遂に謎が解けたぜっ!!

見た目は普通に布なんだが、実は布だけじゃない。

繊維の間に、どうやら樹脂が入ってるっぽい。

だから重さがあるし、全体が硬いから捲れないんだ。

そして今、座った状態はだな……傘が風でさ、普通に開いた時よりもっと開く時ってあるじゃん？

そうそう、強風で骨が反対に曲がっちゃうような感じ。

スカートの一部が、あの形になっちゃってるんだよね。

そんな状態だから、足を組んだ横から白いパンツが丸見えなんだよ。いや〜あれだけDVD観てもダメだったものが、こつもあつさり見えてしまうなんて……俺感激！！

そしてさりげなく、白河の前に座り込む俺……うゝむイカス。

「ねえ、聞いてるう？ 土曜日の夕方だからね？」

「お、おう」

もちろん行くに決まってるだろ！

しかしだ……俺の反応が鈍いのが入らないのか、何度も足を組み直してるんだよね。

その度に、いい感じでデルタ地帯が……おおit's a gre
at!!!

ふっ、最近では…俺のチラ見テクも相当レベルが上がったな。

全く気付かれてないし。むふ

「もぉーなんか変だと思ったら……パ、パンツでも見えたの？」

ドッキーーーーー！

「み、みみ見えてないですっ！！ 見てないです！！ な、なにゆえそのような!？」

「だって……さっきからスカートばかり見てるじゃない……」

バ、バレてたああああ！！！！

くっ 天然のくせに生意気な……。

とか言いつつ、

「あ、あの……怒ったりしたのでしょうか……?」

思いつきり謙^{へりくだ}る俺。

「え？ う〜ん……でも……男の子って、みんな見たいんでしょ？ その……女の子のそういうの……。だから……神崎君は普通だっ
て、如月さんが言ってたしい」

な、ナイスフォロー如月さん……でもな、ここはハッキリさせてお
くぞ。

「言っておくけどな、なんでもかんでも見たい訳じゃねえ。お前の
だから見たいんだっ」

「……え……」

「だから！ 好きな女の子のは……その……だな……特に見たいんだ
よ……」

……。

はっ！ しまった！！

俺って奴は……超変態発言じゃねえか！？

白河を見る 俯いていて表情が分からない……。

「と、とにかく！ 彩乃ちゃんと一緒に、ちゃんとライブには来て
よねっ……」

じゃあね　って、そのまま消えちまった……。

俺、嫌われたかな。

いやいや、ライブに来てって言ってたじゃねえか。

たぶん、大丈夫……かな？

ははは……。

………後で彩乃を誘わないとな………

第17話に続く。

第16話 美琴と真琴（後書き）

第16話でした。 お読みいただき感謝。

今回は、テンポをUPして以前の感じに戻しました。

色々試して、自分にあった書き方を模索中です。

嗚呼、難しいっすね〜。

第17話 最終話〜一つの区切り〜

ある日の夜

「え？ え？ 兄さん、このチケット どうやって手に入れたんですか!？」

「あ？ 貰ったんだけど……一緒に行こうぜ」

「貰った!？ あわわ……し、白河真琴のライブチケットって、今超入手困難なんですよっ!？」

そう、白河に貰ったチケット。

『彩乃ちゃんと一緒に』って言ってた白河の言葉を思い出し、彩乃を誘ってるわけだけど……

ぶっちゃけ、妹を誘うのは抵抗があったんだよね。

だって、兄妹でライブだぜ？

思春期の男子が、妹をライブに誘うなんて……とか土壇場で考えちゃってな。

とは言え、アイドルのコンサートなんだけどさ……坂崎と行っても気持ち悪いだけだし。

で、やっぱり彩乃誘うしかねえし、連れて行かないと白河に何言われるか分かったもんじゃないし……。

仕方なく誘ってる訳なんだが……そんなに入手困難なのか？

「わわ！？ し　しかも、プ、ププ……プレミアムシートじゃないですか！？」

「へーそうなのか？　どれどれ……ほうほう……成程なー」

「成程なー……じゃないですよ！　さっきテレビで言っていましたよ！　プレミアムシートは数が少なくて、オークションで10万以上の高値で取引されてるって……！」

げ！？　10万って……そんなに人気あんのかあいつ。

しかも、2枚で20万は固いつて事が……

売っちゃおう？

いやいやそんな事したら、ガチで殺されるぞ。

そんな不埒な考えを巡らせていると、妹がその出所をしつこく聞いてくる。

「誰なんですか！？　そんな……チケットを簡単に渡してしまうつ、奇特な方は　」

「何言ってるんのお前。白河本人に決まってるだろ。折角知り合いなのに、他の人からわざわざ貰うか？」

「ほ 本人って……え？ え？ ……………まさか……………」

その場にペタンと座り込んで目を泳がせている妹。

リビングを見渡しても、答えは見つからないだろ。

とりあえず妹を立たせて、ソファに座らせてやる。

でもなあ……まさか未だに白河の事に気付いてなかったとは……………
…ぷっ、超ウケる。

「聞いてもいいですか、兄さん」

「なんだ」

「白河さんって、下の名前って」

「真琴だぞ」

「にゃあああああ……！！！！」

なぜか猫化して叫ぶ我が妹。

しつかり、頭に猫耳まで着けてやがる。

学校で流行ってるのか？

しゃーない、あれを見せて……って、あれじゃ完全体じゃないな。

「彩乃 前に白河と写メ撮ってただろ。あれ、メガネかけてもっかい見てみ」

「あ、はい、分かりましたあ。え〜っと……」

ポケットからメガネを取り出し、わざわざ後ろ向きになる妹。

そうまでして見られたくないのかよ。

別にいいけどさ……。

「にゃっ!?! し 白河真琴ですう……」

一瞬驚いて、その後ガクつと落ち込む妹。

「お〜い彩乃さ〜ん」

返事が無い……

両手を付いて、うなだれている。

が、突然猫のポーズで振り向いたと思ったら

「なんで教えてくれなかったにやー！ー！！ 酷いですっ、酷いですよぉ〜兄さんっ！！！」

猫手で必死にポカポカしてくる我が妹。

さすがに怒ったのか、未だに気付けなかった事が恥ずかしいのか、マジ半切れ。

ま、叩かれても痛くないけど。

その後、落ち着いた頃に妹が言った一言

「うっつ……サイン、貰っとけば良かったですう……。」

いつでも貰えるじゃねえか……。

ファーストライブ当日

俺達は、既に武道館の入り口まで来ていた。

周りには、物凄い人、人、人……。

付近では、コアなファンと思しき方達が円陣を組んで、

「我々は、全力で白河真琴を応援することを誓い」

などと、リーダーらしき人物に続き、一斉に掛け声が上がる。

かなり暑苦しいが、中々活気があっていいじゃないか。

隅っこの方では、『チケットあります』の看板を掲げた、おじさん数名がうろつろしている。

あれって　もしかして『ダフ屋』ってやつですかね？

すげえ、始めて見た。てか本当にそんな人達って居たんだ。

そんな感じの物珍しさでキョロキョロしていると、妹が「兄さん兄さん」と服を引っ張ってくる。

「　みんなウチワ持ってますねえ〜兄さん」

む、確かに殆どの人が持つてるな……。

あれだよな。

こういうのは、周りに合わせた方がいいよな。

例えば、某歌手のコンサートのコンサートなんかだと、全員でお揃いのタオルを振り回したりするだろ？

自分だけ持って無いのは、かなり切ないもんな。

買っとくか。

そう思い、妹を連れてグッズ売り場へ向かう。

しかし　そこは戦場だった。

マジかよ！？　入り口付近の混雑を遥かに凌ぐ人ばかり。

こりゃいかんと、妹を端っこに待たせ、一人突入する俺。

順番なんて、あったもんじゃない。

人を掻き分け行くぜ！　と思いきや……。

行けねえ……。

なんでかって？

以外にも、女子が多い……しかも妹ぐらいの年齢層。

無理に突入したら、痴漢で逮捕されそうだ。

一旦あきらめて退却。

何店舗かあるみたいなので、他を見渡す。

すると、ちゃんと列になって順番待ちしている店舗を発見。

大分待ちそうだが、あそこなら平和そうだ。

妹を手招きして、一緒に並んで待つこと30分。

やっと俺達の番になり……なったんだが……。

たかがウチワに800円って………どういうこと!?

しかも白河の顔がでかでかと印刷してあってさー。

自称硬派な俺としては、かなりキツイ。

躊躇したが、結局購入。

そして、うっかりその横にあった『白河真琴 高校生になりました』ってタイトルの写真集も買ったもんだから。

「また買うんですかあ兄さん？」

と、妹から冷たい視線を頂いてしまう。

て、ちょっと待て。

またってなんだよ、またって!?

くそ やっぱりあの写真集『白河真琴 15歳』見つかったのか……。

恐ろしいぜ、我が妹よ。

ていうか、家捜しするのは止めてくれ。マジでお願いします。

聞いて驚け。

なんと俺達の席は、ど真ん中、前から3列目だ。

かつてこんな良い席で、ライブを見た事があつたであろうか。

普段白河と会ってはいるが、生であいつの歌やダンスを見れるとなると、また別の興奮がある。

今日の為にアルバム買ってきて、彩乃と二人でたっぷり聞いてきたし。

あいつ、どんな表情で歌ってくれるんだろ。

あ〜マジでワクワクしてきた！

次第に館内の照明が暗くなり、会場が静まり返る。

そして パツと中央のステージにライトが点灯した。

にわかにざわめく会場。

皆の視線がある一点に注がれる。

ステージから伸びたスロープの先……白河が登場するであろうその登場口。

皆が固唾を呑んで、再び静まり返る。

そして 軽快な音楽と共に、白河真琴登場。

「キヤアー—————真琴お—————!!」

「真琴おおおおお—————!!」

「真琴ちゃ—————んっ—————!!」

凄い声!!

声援で歌が聞こえないじゃねえか!?

颯爽と、スロープを歩いて歌う白河。

曲はもちろん知ってるさ、『Real Love』あいつのデビュー曲。

ティーン女子の淡い恋心を歌った名曲。

切ない歌詞なのに、ダンスナンバーなところがナイスで斬新。

この曲は、キッズアニメの主題歌として歌われ大ヒット。

しかもそのアニメ、今時ゴールデンタイムに放送されて、一気に幅広い層のファンを獲得出来た。

偶然なのかは知らないが、まさに白河を売り出す為のアニメだったとも言える。

おっと、雑誌の受け売りの説明をしている場合じゃない。

集中しないと。

白河は、Aパートを歌った時点で走り出し、既に中央のステージに辿り着いている。

ち 近い……。

すげえ近いよ俺から。

マジ感動なんすけど！

間奏中、激しく踊り出す白河

次いで現れた、数人のバックダンサーグループの女の子達。

ステージは超華やか。

白河は、真っ白いミニのドレス姿。

ダンサーグループは真っ赤で統一されていて、紅一点ならぬ、白一点。

白河の可憐さが、際立つ感じで良い。

やがてBパートが始まり、再び可憐な天使ボイスが響きわたる。

か 感動だ 超可愛い。

Bパートが終わると、曲が激しくなる。

そして どこからか飛んで来たバトンを、華麗にキャッチー！

ん？ 何が始まるんだ？

バトン……というか、魔法の杖？

白河はその杖を構えて、前方でクルクル回転させる。

その勢いのまま、頭上へ高く飛ばした

瞬間　ステージ周辺に設置されたライトが、フラッシュのように
点灯！

うお！　眩しくて何も見えない　。

そして目が慣れてきて、徐々にステージの様子が見えてくる。

ぼんやりと、白河のシルエットが浮かび上がる　。

あれ？　さっきと衣装が違うような……。

その姿は　アニメに登場する主人公　魔法少女だった　。

杖を可愛く振り回し、華麗にダンスする白河。

「キヤアーーーーーー真琴お~~~~」

「やっべーマジ可愛いー！！　超似てるぞおおー！！」

それを見て、館内が更にヒートアップしていく。

特に野郎共の声援が凄い　　というかつるさい。

アニメは妹がたまに観てたから知ってるが、結構似てるぞ。

全身がパープル系で統一されたデザイン。

超ハイパーフリフリのミニスカートで、肩の部分がちょこっと露出した可愛らしい上着。

手にはグローブ、足にはハイブーツ。

極めつけは、背中に生えた大きな妖精の羽。

その一つ一つが、物凄いクオリティーだった。

唯一、アニメと違う部分は 胸 。

キッズアニメでは皆無だった、プルップルなその部分。

これなら毎週観てたな、うん。

館内大興奮の中、『Real Love』を歌い終わる

衣装はそのまま、次の曲が始まった

なんと、アニメのエンディング曲。

この曲は確か、来栖美月の曲だったはず……。

白河が歌い出す と思いきや

まさかの来栖美月登場

しかも、同じ主人公の格好　魔法少女で。

ワァア　と、一気に湧き上がる館内。

出だしを来栖美月が歌い、途中から白河真琴へバトンタッチ。

Bパートからは一緒に歌い、綺麗なハモリを聞かせてくれた。

大歓声の中、曲が終わり　白河のトークというか、挨拶が始まった。

「みんなぁー！！　今日は来てくれて、ありがとぉー　白河真琴でえーっす！！」

イエーっす！！

つい、彩乃とノリノリで返してしまう。

瞬間　白河が俺達を見つけ、視線が合い　ニコッとウィンクした。

ドッキーーーン

鋭い矢に、胸が打たれたかのようにだった。

「兄さん兄さん!! 今、白河さん気付いてくれましたねっ!!」

高まった妹が、俺のシャツをベロベロに伸びるくらい引つ張っていたが、当然相手にする余裕などない。

ライブで、女の子が気絶してしまう気持ちを理解出来そうな そんな気分だった。

「じゃ〜皆さんお待ちかねっ! 私の大切な友人であり、アイドルの先輩! 来栖美月ちゃんですっ!!」

一斉の大拍手が沸き起こり、自己紹介を始める。

「にははあ〜美月でえ〜っす!! 今日は何とお〜!! 友情出演ってやつなのだっ!!」

高々と腕を突き上げ、宣言する来栖先輩。

「ありがとう〜美月ちゃん〜ん」

「いいっていいえ〜。気になるなら金をくれ?」

どっ　と湧く館内。

「ご、ごめんね美月ちゃん!!　…あ…えと、後で、マネージャーさんに頼んで……」

「ね、面白いでしょう真琴ってえ。いつもこうなんだよお、冗談通じないのっ。ニッヒッヒィィ」

笑い声と歓声が巻き起こる中、穏やかに、そして美月ちゃん電波でコミカルに進んでいくトーク。

二人の会話は学校でもよく聞くけど、この場で聞けるとなるとまた格別だ。

なんだか、凄く特した気分だな。

しばらく仲の良い二人のトークが進み、来栖先輩が退場する。

温かい拍手が、先輩に送られる。

館内がほんわかとした空気の中

「それでは　君のために歌います　」

と白河が告げ 次の曲がスタートする。

しばらく、しっとりとしたナンバーが続いたんだけど……

俺の目は、白河から一度足りとも視線を外したりはしなかった。

それは

あいつが、ずっと俺を見ながら歌っていたから 。

自意識過剰だって!?

いや……それが分かる程、お互いの距離は近い。

白河が何を想って歌っているかは知らないが、常に視線は俺に向けられていた。

そんな俺はあいつの虜……。

今なら もしあいつが『私の為に死んで』と言っなら死ぬるし、
一生奴隷になったっていい。

もうそのくらい、俺の心は完全に魅了されていた。

つくづく、恐ろしいやつだ。

チャームの魔法でも使えるのか？ って想うほどに……。

コンサートは大成功だった。

今宵 この会場に居た全ての人は、一生白河を応援してくれるだろう。

なんて事を考えずにはいられない、素晴らしいライブだった。

でも、途中、ヒヤリとする場面もあった。

全力を出しすぎた白河が、ガチで倒れてしまうというハプニング。

おかげで20分程ライブは中断してしまったが、元気に再登場した白河に超感動の嵐。

スタンディングオベーション&ウェーブ発生。

その後、館内は益々ヒートUP。

それからは、歌う曲全て皆で大合唱。

『真琴ちゃんは休んでて』と全員が言ってくれているようだった。

ラストでは、白河が感極まって涙を流し、つられて大勢のファンが泣いた。

そしてアンコールが何度もされて、困り果てた末、スタッフが総出でファンに謝った。

俺がそうだったように、全員にとって夢のような空間だったに違いない。

本当にあいつ……特殊な能力でも使ったんじゃないだろうか。

俺と彩乃は放心状態のまま、未だ館内に残りジュースで喉を潤している。

「凄かったですねえ……兄さん……」

「ああ、コンサートでこんなに感動したの初めてだぜ……」

しかも、アイドルのコンサートだぜ？

もって軽いノリだと思ってた。

そんな自分がちょっと恥ずかしい……。

「あ、メールだ……」

妹が何やら携帯を弄っている。

全く興味はなかったが、次の瞬間俺は食いつく。

「白河さんからだ！」

「なに!？」

うおおおおおおおおお!!!!

会いたいぜえええええええええ!!!!!

あ　でも……なんだか次に会ったら緊張しちゃうな。

大丈夫かなあ。

「係りの人に伝えてあるから、休憩室で待っててだって、兄さん」

それから休憩室とやらへ移動した俺達。

そして待つこと一時間。

その間、彩乃へメールが何度も送られてきた。

『じゅ〜ん、もうちょっと待っててくれる？』

アイドルスターのお願いだ、いくらだって待つさ。

だけど、なんだか落ち着かない俺は立ち上がり

「飲み物買ってくるな」

と妹に告げ、部屋を出た。

確か、来る途中に自販機があっただはず……。

とぼとぼ歩いていると、ふと白河を見つけた

一瞬、声を掛けようか迷ったんだけど……

「しら」

「真琴　もう少し、休まなきゃダメだ。あ……ほら」

俺の声は、背の高いイケメン男に遮られた。

「あ、黒田さん……あの……」

「おっと、大丈夫かい？」

白河が、その超カッコいい男に抱きしめられた。

男は腰に手を回し、白河を優しく抱き寄せている。

しかも、白河本人もうっとりしてるし……。

二人は、まさに恋人のようだった。

は、はははは……そうだよな……。

あいつに彼氏が居ないなんて、誰が言った？

あんな可愛いくて、凄いいライブして……。

そもそも俺なんかとは、住む世界が違うって……。

今更だけど、気付けよ……俺。

それでも、目が放せないでいると、二人は少し距離を開け見つめ合っている。

まさに、これからキスしそうな雰囲気。

彼の顔が近づく……

その時、思わず眩いしまったんだ。

「嘘だろ」

声に気付き、顔を向ける白河。

立ち尽くす俺と目が合う。

白河は目を大きくして驚いた様子。

でも俺は、限界だった。

パツと踵を返し、逃げるように走りだす。

「待って!! 神崎君!! ちが」

それを見て、白河が何か言ったみたいだけど最後まで聞こえなかった。

とにかくここから逃げ出したかった。

妹の事もすっかり忘れて、俺は走った。

息が切れても関係ない。

どこに向かっているのかも知らない。

武道館が見えなくなる所まで、一刻も早く辿り着きたかった。

「ハア、ハア、ハア……」

でかい交差点で信号につかまる。

少し待って青になった。

もっと遠くへ

再び走り出した瞬間

「待ってよっ！！ 神崎君っ！！！！」

横断歩道を渡る途中 振り向くと白河の姿。

息を切らせて「ハアハア」言っている。

追いかけて……来た……？

「ちゃんと聞いてっ！ さっきのは違うのっ！！ あの人は」

そう言いながら、走ってくる白河。

そこからは、まるでスローモーションだった……。

その白河に、猛スピードで迫ってくる大型のトラック

声を掛ければ良かったのかも知れない。

でも、言葉を発する余裕すらなかった……。

俺は全力で走り、白河を突き飛ばし

その瞬間

俺はトラックに跳ね飛ばされた……。

ドン

という音だけが聞こえて、俺は意識を失った。

俺は死んだのか……？

何も聞こえない。何も匂わない。何も感じない。

ただ分かる感覚は、全身が燃えるように熱い……。

このまま死ぬんだ　とあきらめかけた頃、身体に電気が走った。

「一時的だと思っが、意識が戻ったぞ。」

如月さんの声だ。

「か、神崎君っ！？ 聞こえる！？」

白河の声が聞こえる……。

そうか、こいつがここまで飛ばしてくれたのかな……はは……助かるかな、俺。

でも 直感で分かった。俺は死ぬ。

だってさ、ほんと、何も感じないんだ。

もしかしたら、身体はぐちゃぐちゃなのかも……。

なら死ぬさ……このまま生きてたっしょうがないだろ？

でも、最後に少しだけ……白河と話しただけでも。

俺はなんとか力を振り絞り、口を動かした。

「し 白河……。」

「！？ なにっ、神崎君！！ 私ならここだよっ！！」

もしかしたら、手を握ってくれたりしてるのかもな。

だけと感じない。

白河との距離感も全く分からない。

「しら……かわ、ごめん……俺……死ぬよ……」

「や やだっ！ 何言ってるの！？ し……死なないでよお……
…神崎……くん……グスッ……ウエッ……うう……やだあ！ 絶対や
だあ！！！」

泣いてくれてんのか……嬉しいな……こんな最後まで悪くねえ……。

「……グスッ……ヒッ……好き……うう……好きなの……神崎君……
…大好きなの……だ……から……」

「お願いっ！！ 死なないでええ！！！」

嘘みてえ……聞いたか？ 俺の事好きだって……。

嬉しいな。

俺も……伝えたい。

「お……れも……だいす……き……だ……」

「ほんとぉ?」

「……ああ……」

「じゃ……じゃあ、元気になって、私を彼女にして? ね? ほら
あ……い……いくらでも……わ……私の胸とか触っても……いいか……
グスツ……ら……あ、ああああ うわああああん……! 神崎君
! 神崎君! 神崎君! ……!」

白河の泣き崩れる声が聞こえる……見た目でも、助からないって分かるんだな。

でもありがとうな。

「や……くそく……だぞ……」

「う、うん……! 約束……! ……グスツ……だから……。」

そして俺は死んだ……。

〜エピソード〜

数カ月後

俺は生き返った。

「久しぶり　だな、神崎君」

目を開けると、如月さんが居た。

「君を復活させるのには、本当、苦労したもんだ」

「そうすか……」

お、普通に喋れる。

「白河君が泣いて頼むもんだからな。彼女には、ちゃんと感謝するのだぞ」

「あ　はい」

身体を見る。

ちゃんと五体満足揃ってる……。

俺……完全復活？

手足を動かしてみる……特に違和感はない。

「ふむ。擬似生態組織に問題は無いようだな」

「え？ ぎじせい……」

「ああ、君の身体は殆ど潰されてしまったからな。身体の52%は擬似生態組織。つまりはサイボーグ……とでも言えば解り易いか」

サ、サイボーグだって!？

俺は飛び起きて、速攻で下半身を確認した。

「安心しろ、その辺は無事だった」

……よ、良かった……。ちゃんとあった……。

まさか、チェリーのまま無くなったかと思った……。

ふうー一安心。

「ふむ。折角だ、リハビリも兼ねて、白河君と彩乃君に会って来い。あの二人は、毎日ここに足を運んでいたのだぞ」

そっか……そうだな、彩乃も白河も、心配してくれたのか。

なんとか、生き返らせてもらえたんだし、会いにいかなきやな。

まあ、半分以上、人間じゃないらしいが……。

そして俺は、歩き出した。

愛する人に会う為に

完

第17話 最終話〜一つの区切り〜（後書き）

いきなり最終話って、おーーーい!..!

って思われた方、すみません。

とりあえず、区切りが良かったもんで……。

え〜とちなみに、これよりちょっと先の時間軸で、『浮遊学園都市 神楽』と話しが交差する予定です。

興味がある方は読んでみて下さい。

楽しく読んでくださった方々、本当にありがとうございました。

第1話 すれ違い 前編（前書き）

お待たせしました、やっと再開しました！！

これから始まる新展開！

ご期待に添えるものかどうか分かりませんが、まあ見てやって下さい。

第1話 すれ違い 前編

ひゃっほーっい!!

オッス！ オラ神崎駿。

オラのこと覚えてっか？

つい数ヶ月前、死にかけてパワーアップしたんだ！

オラ……相当強くなったみてーだ…。

よーし、ドラゴン球でも探しに出かけるか！！

「ようブルマ！ ドラゴンレーダー貸してくれっか？」

「何言ってるんですか……兄さん頭は大丈夫ですかあ？」

妹に冷たくされたよー……しくしく…。

ちよっとくらい乗ってくれてもいいのに…。

どうして俺がこんなに壊れてるか知ってるか？

知らねえよなー。

俺が復活してから既に3日が経過した。

だがしかし！

未だに白河と会ってないんだよ……ぐっすんしくしく。

なんであいつ、俺に会いに来ないわけ！？

「彩乃、白河にメール送ったんだよな？」

「はい、送りました」

夕飯を作る妹に確認をする。

おかしい……。

彩乃が俺に嘘を付くなんてありえないし…。

しかもあいつなら、すぐに瞬間移動で飛んでくるはずだ。

どういっことだ。

俺が悩んでいると、妹がそそくさと料理を運んでくる。

「出来ましたよ〜、今日は兄さんの大好きな、ハンバーグなので
す〜〜」

「お、また俺の好物じゃねえか、毎日いいのか？」

「いいんです！ 兄さんの喜ぶ顔が、彩乃は見たいんですっ」

「そっか じゃ、いただきます」

妹の手料理をガツガツ食う。

正直、まだそんなに量は食べれないんだが…やっぱりこいつの料理は上手い。

無理してでも全部食う。

それが兄の愛情だ！

「兄さん美味しいですか？」

俺が無心で食べていると、彩乃が何度も聞いてくる。

その度に、俺は上手いと答える。

俺が戻ってきてから、彩乃はずっとニコニコしてやがる。

今も自分は箸に手を付けず、俺の姿を見て満面の笑みだ。

「お前も食べるよ。折角上手いのに、冷めちゃうだろ？」

「あ、はい、そうですね」

手を合わせて、いただきます と、お行儀の良い妹。

しかし…改めて思う。

良く出来た妹だ。

俺が自由にやれているのも、こいつのおかげだな。

そして食べている今も、彩乃は嬉しそうに笑顔だ。

妹がずっとこんなだから、なんだか俺まで笑顔になってくる。

あゝ俺って幸せだなー。

とか思っつて、つい聞いてしまう。

「そんなに俺が戻ってきて嬉しいか？」

家族が戻ってきたんだ、嬉しいに決まってるんだが…ついな？

そんな俺の質問に対して、妹は即答だ。

「嬉しいに決まっていますっ！ 兄さんが居ない間、彩乃がど

れだけ寂しい思いをしたことが……」

あ、あれ…？

急に下を向いて黙ってしまふ彩乃さん。

俺も想像してみる　。

俺が居ない、一人っきりの彩乃。

誰も居ないリビングで、寂しく食事をする姿　。

ありえねえ。

なんて酷い事を……。

俺は……俺は……

「なんてことしちまったんだあ……っ……!!……!!」

「きゃっ……!!」

全力で叫んだ俺のシャウトで、彩乃が椅子から落ちそうになる。

俺は既に立ち上がっていて、彩乃のすぐ側に居る。

「彩乃」

「兄さん……？」

一瞬見つめ合う二人……。

そして俺は

「彩乃おおおおおー……っ！！！！」

義妹の名前を叫びながら、彩乃を強く抱きしめる。

「に……兄さん」

彩乃も抱き返してくる。

そしてしばらく抱き合う二人。

はんっ、シスコンだって笑うがいさ。

お前らは想像したのか！？

はあく助かったぜ…。

だが何故チャルメラ!?

ま、まあ妹の趣味に突っ込みとか入れねえし…。

「兄さん兄さん…」

席に戻ろうとした俺は、服を引っ張られて立ち止まる。

「なんだ?」

「メール、白河さんですよ」

「なんだって!?!」

慌てて妹の携帯をひったくる俺。

その行為に対して、なんの反抗もしない素晴らしい我が妹。

だが急いで確認しようとして、手を滑らせて携帯を落としてしまう。

すまん　と妹に一言謝って、今度は落ち着いてモニターを見る…。

画面には

『お兄さん元気?』

の一言。

淡泊な奴……。

俺は急いで携帯を操作する。

「わりい彩乃、勝手に送信するぞ!」

妹の返事も待たず、送信ボタンプッシュ!!

『すぐに会いにきてくれ!!』

この一言に尽きる。

とにかく会いたかった。

「兄さん兄さん」

早く返事こないかな…。

「兄さ〜ん」

送ったばかりなのに、何度も携帯を確認してしまっ…。

くそっ！ あいつ何やってんだ。

「兄さんっ！！」

「へ？」

彩乃に腕を引つ張られ、我に返る。

「兄さん！ 白河さんのメール、彩乃も見たいですうー」

「ああ、そっか……」

一旦携帯を妹に戻す。

内容を見た妹が一言。

「心配なら、会いにくれればいいんですよ」

もっともな意見だった。

夕食を済ました俺達は、二人でのんびりいつもの如くテレビを見ていた。

結局だ あの後、メールは帰ってきたんだが……

内容は、『そのうちね』……………。

そのうちってなんだよ。

俺に会いたくねえのかよ!?

あいつ、俺をなんとかしてくれて如月さんに泣いて頼んだんじゃなかったのか!?

「兄さん」

くそっ……………は！ まさか、他に好きな人が出来た とか……………。

つぶ、ありえそつで恐い……………笑えねー……。

「兄さ〜くん、お笑い見てるのに、どうしてしかめっ面なんですかあ？」

あ〜マジで超不安なんですけど……折角俺……あいつと付き合えると思ったのに……。

ちきしょー！！

早く！ 早く付き合って、あいつの！

「おっぱいを……マジで揉みしだきたいっ！！　そしてパンツを脱がして　……」

「……………」

は　！？　しまったーっ！！

彩乃がこっち見てるじゃねえか！？

妹の前で、なんて事叫んでんだ俺！？

「ち、違うんだ！！　あ、彩乃　い、今のはだな　」

必死に言い訳する俺。

彩乃は、ちょっと小首を傾げてこっちを見ている。

や やめろ…見るんじゃない！

Hな兄を、見ないでくれーっ！！

突然 変態発言をした兄に対し、それを冷静に見つめる妹。

こっぱずかしーっ！！

「兄さん」

彩乃は 何だか切ない表情で立ち上がると、ゆっくりと俺の側までやってきた。

「お、おい……」

俺を真っ直ぐ見つめる彩乃。

「……………」

「……………」

そして彩乃は、ソファーに座っている俺の膝の上に乗っかり、お互いが至近距離で向かい合うような格好になった。

「え〜と……彩乃さん……？」

「兄さん　彩乃でよければ……どうぞ……」

そう言っただけ俺の手を取り　その手を自分の胸へと導いて行く。

俺は何も抵抗出来ず、されるがまま、妹の胸を触ってしまった。

薄い胸だが…風呂上りで下着を着けていない為、柔らかい感触が伝わってくる……。

い　いかん……ガチで反応しそうだ　。

このままではいかん……！！

「彩乃　」

「わわわ……」

俺は妹を抱えてソファーに下ろすと、

「ちょっと出かけてくる」

と言って、急いで玄関へ走り外へと飛び出した。

後ろから、どこに行くんですか　と彩乃の声が聞こえたが、そんなの知るか！！

こっちが聞きたいぜ！！

ひたすら走った。

妹に……うっかり変な気持ちになってしまった自分が恥ずかしかった。

あんな事は初めてだった。

だから…尚更俺の動揺は凄まじかった。

でもふと考える　。

一緒に住んでいるのに、妹の裸　いやいや、そんなものは普通に見ないか。

そうじゃなくなてな、例えばちょっとスカートの中が見えたり、うっかり風呂に入るうとしてバッティングしたり……。

そんな普通の兄妹でありそんな事が、あいつとは全く無いんだよ…。

考えたら不思議だよな？

そりゃまあ、幼少の頃はそんなのあったような気がするけど……。

やっぱりあいつが俺を意識してたってことなんだろうか。

彩乃のやつ…マセてるからなー。

等と考えていると、いつの間にか駅周辺まで来ていた。

どうするか。

折角だから、如月さんにでも会ってくるか？

あそこなら、美琴も居るしな。

……。

やっぱ止めた！

白河に会えないからって美琴に会いに行くなんて、本人がどう思うよ？

悶々としつつ、駅前を彷徨う……。

すると、見慣れた奴に声を掛けられた。

「神崎じゃねえか！？ 久しぶりだなー！」

いかにもモテなそうな風貌をしたこの男は 坂崎だった。

「おう、元気だったか？」

「それはこっちのセリフだろ？ 死ぬ程やばい病気だって聞いたぞ
！？」

確かにガチで死んだけどな…。

忘れている人もいるかと思うんで説明しとくが……

こいつは坂崎慎太郎さかざきしんたろう 学園での、俺の一番の悪友だ。

普通にエロい……たぶん俺よりも。

大分自信なくなってきたけど。

まあ久しぶりに会ったんで、お互いの近況を話し合う。

俺の方は報告する事なんてないんだが、坂崎はここ数ヶ月でかなり
女の子に告白しまくっていたらしい。

「でな、校舎裏に呼び出したんだけど、なんと彼氏と同伴できちがつてさー。ははは、まいったぜ」

「あいかわらずだな、お前」

「まあなー」

てな感じで下らない話して盛り上がる。

改めて思う。。

男同士っていいよな。

殆どバカな話しばかりだから、楽でいいぜ。

これが白河と一緒にだと、大変だもんな。

すぐ怒るし……はは、でも会いたいんだな。

と、白河を思い出したところで坂崎が立ち止まり、映画館を指差して言った。

「寄ってかねー？」

「は？　なんでだよ」

「いや、俺さ、元々ここ目指してたし」

良く分からないが、映画を見に来たらしい。

でも、こんな夜遅くにやってるのかと聞くと、ここは新しく出来た24時間の映画館なんだと。

便利になったもんだぜ。

だがしかし！

男同士で映画館に入るなど、愚の極み！！

「んじゃ、俺帰るから」

素早く別れを告げて、反転。

「ちょっと待てよ！　せめて何見るかぐらい聞けっの！」

ガシッと腕を掴まれる。

まあ聞く程度ならいいけどよ…：映画だったら彩乃を誘った方が遥かに楽しいし。

「まあまあ、お前もちょっとは興味あると思うぞ？　俺が見たいの

は
「

あれだ と言つて指を指した先には

『Refrain 〈記憶の中の君へ〉』

という、ガチで恋愛ものだった。

バカ言つてんじゃないねえ、男同士超キモいっつーの。

だから俺は言つてやったさ、

「もちろん見るに決まつてるだろ！」

意気投合した俺達は、お互いルンルンで映画館へと突入した…。

え？ なんで見るのかつて？

それはだな…その映画のポスターには、こう書いてあったんだ。

『主演：白河真琴』

見るしかないだろ。

あいつ、いつの間に映画なんか撮影したんだ？

いやそれよりも、前にも増してビックになりやがって…。

頼むから、手の届かない所には行かないでくれよ。

夜だというのに、映画館は満席だった。

当日券で入れたのは運が良かったけど…さすがにカップルが多くてかなり居づらかった。

まあ始まってしまえば、関係ないんだが…。

んで、映画の内容だけど、見てみると実はちょっとSFチックだった。

不慮の事故で意識を取り戻せなくなった恋人　これが白河な。

その彼女の為に、命をかけて精神ダイブする超イケメンの主演男優。

まあ近未来の話した。

その中でヒロインの過去の姿が登場するわけだが…。

中学生って設定の白河がやけに可愛かったな！。

頭にリボン付けて、胸もかなり小さくして。

胸にCG使ったのか？

まさか……だよな？

しかし…これを見て、白河に恋をする男性ファンが何万人出るのか。

はっきり言って、本人に会ってる俺達でさえしつかり感情移入しちまって、改めてスクリーンの中の白河に恋をしてしまった…。

その証拠に、映画館を出た坂崎の最初の一言。

「真琴ちゃんマジ可愛い！！俺、白河が登校してきたら告白してみようかな」

「やめとけて…あいつは俺達の手が届く」

存在じゃない。

そう言いかけて押し黙る。

「とにかくだ、止めとこうぜ」

「えー？　そうか？　万が一って事もあるだろ？」

結局、最後まであきらめなかった坂崎。

好きにしてくれ。

一度死んだ俺でさえ、あいつを落とせてないんだ。

相当ハードル高いよ？

経験者は語るってやつだ。

　　つたく、死んでも叶わない恋ってどんなだよ？

そんな事を思いながら、お互い分かれて帰路に着く。

自宅に着いた俺。

「ただいまー」

と普通に言っつて靴を脱ぐと、妹がパタパタと二階から下りて来る。

もう寝る時間なんだから、わざわざ出迎えなくてもいいんだが、妹はいつもこれだからな。

「兄さん！」

バシッと抱きつかれる。

「な、なんだよ、大げさだなー」

「だ、だってえ……」

珍しく、子供っぽい甘え口調で見上げてくる。

目をウルウルさせて。

そんな妹に、俺は優しい声音で聞いた。

「どうした？　なんで泣きそうなんだ？」

「だって兄さんが……また居なくなるんじゃないかって」

そっか…そう言う事か。

こいつは俺が戻ってきてから、前にも増してしおらしかったからな。

しばらくは、迂闊な行動は出来ないな。

「バカ言ってるじゃねえ、さっき一人にしないうって約束しただろ？」

俺は妹の頭を撫でて安心させると、二人で自室に戻った。

さて、まだ寝るには早い。

どうしたもんか…。

おもむろにズボンを下げ　　。

おっと、変な事するわけじゃないぞ。

腰の所にな、あるんだよ。

指を腰に当て、強く押し込む…。

すると、その皮膚が割れて捲れるようになる。

ペラツと捲ると、中から現れた接続端子。

え、気持ち悪いって？

そう言うなよ、あの如月さんが、普通に俺を生き返らせたと思うか？

新機能が色々付いてるんだよ。

そしてこれは俺の一番のお気に入り。

早速パソコンと俺をUSBで接続する。

デバイスをクリックすると、沢山のフォルダーが表示される。

ふっふっふ……これはな、俺の脳内に記憶されている視覚データをパソコンで見れるのさ。

言うておくが、脳は自前だからな！

そこまでサイバーじゃねえぞ！！

まあ……羨ましいだろ？

え？ 大した事ないって？

バカ言ってるじゃねえ、例えばだな…

一度見たAVなら簡単に再生が可能なんだぞ！

ちゃんと見てればだが。

そして俺が見たいのはこれだ！

フォルダー名称『白河真琴』。

この中には、数々の白河の名シーンが収められている。

が、このフォルダーを作成したのは如月さんだけだな。

ぶっちゃげコピーされたし…。

「よし！ 見ちゃうぞー！ 何がいいかな〜」

ノリノリでフォルダーを開いて物色していると、なにやら後ろからの視線を感じる……。

気になって振り向くが、誰も居ない。

変だなと思いつつも再び物色を開始していると、また背後から人の気配……。

既に時間は11時を回っているんだぜ？

これって　まさか幽霊的な感じですか…？

普通に怖い。

でも気になって仕方ないので、恐る恐る振り向いてみる……。

しかし誰も居ない。

何だよ一体！？

正直、目に見えない恐怖でデータを閲覧する気も失せた。

とにかく気配の正体を探らねば、寝るに寝れんぞ。

そう思った俺は妹の部屋へと向かい、そこで小さな置き鏡を借りた。

その鏡を机の端に普通に置いてスタンバイ。

さて、何が写るのやら　。

何も写らないのが一番だが……。

コーヒを準備し、長期戦の構え。

だったんだが……結局30分過ぎて、何も起こらないまま俺は寝てしまっていた。

次の日から、俺は学校にも行くようになった。

通学途中で、妹に昨晚の怪奇現象を聞いてみたんだが……

「何もなかったです、兄さんまだ本調子じゃないんですよ……如月さんに聞いてみたらどうですか？」

と、何もなかった様子。

結局何だったんだろ……。

そして、何事も無く数日が経過した。

その日、俺は学校について思わず目を疑った。

朝 下駄箱を空けると、封筒が一枚入っていた。

まさか 果たし状!?

なわけないよな!!

俺はダツシュでトイレに駆け込んだ。

そして急いで封を開ける……ドキドキ……。

中には……薄いピンクの便箋が、入っているではないか!!

こゝ、これは間違いないだろ……。

思わず、ゴクリと唾を飲んでしまう。

期待しながら便箋を捲ると、可愛い女の子文字で書かれた文章……。

え〜と、内容はだな。

『お話しがあります。明日の放課後、体育館裏に来て下さい。』

条白露

!!!!!!!!!!!!

一条かよ!?

言っておくが、白露はくろって女子だからな。

男子でしたってオチではない。

一条はな、ガチで可愛くて人気がある子だぞ。

マジかよーっ!?

久しぶりに熱いぜっ!!

でも、明日?

なんで今日じゃないんだ?

手紙を見直してみる……。

すると、かなり下の方に追加文を発見。

『P.S 来てくれるなら、この封筒をそのまま私の下駄箱に入れて下さい。(中の手紙は大事に持っていて下さいね)』

なるほど〜。

これなら、気が無いなら行かなくて済むってわけか。
斬新だなー。

俺は迷わず下駄箱に戻って、言われた通り一条の靴箱に封筒だけを入れた。

え？ 白河一筋じゃないのかって？

ま、まあいいじゃないか…。

初めて貰ったラブレターで俺も興奮してんだよ。

それにな、ちゃんと話さないと今後気まずいだろ？

なんたって、一条は同じクラスだしさ。

そんな感じで興奮状態を隠しつつ、教室に入った俺は席に着く。

一条の机は斜め前… 白河の真ん前だ。

白河は今日は着て居ない。

今日もだけど。

あいつ、俺が復帰してからまだ登校してきてないんだよ。

忙しいんだろうか…。

一条を見るつもりが、つい白河の事を考えてしまった。
改めて一条を見る。

普通に座っているの、こちらからは表情が見えない。

印象的には、髪が長くて大人しいお嬢様タイプかな。

控えめで、恥ずかしがり屋。

そんな感じかな。

だから、手紙なんだろうな。

今時珍しいよな？ ラブレターなんて。

呼び出したければ、メアドをこっそり聞いたりするもんな。

だけど楽しみだな〜。

何て考えて一条を見ていたら、ふいに彼女が振り向いて視線が合っ
てしまう。

当然、パツと視線を外す二人。

やっべ〜とちょっと緊張しちまったじゃねえか…。

そしてその日は、何度も一条と目が合っ
てしまい、かなり恥ずかしい
思いをした。

別に意識してるわけじゃないんだけど…あいつが振り向くと、つい見ちゃって……。

で、あいつは普通に俺を見て、キャッ！って感じで目を反らすんだよね。

中々恥じらいがあっていいよな。

久々にドキドキだった学園生活を終え、その日の夜。

俺は一条から貰った手紙を見ながら、一人ニヤニヤしていた。

明日はちよつと早起きして、髪型決めていこうかな。

いや いくらなんでも…わざとらしいか…。

まあ、朝シャワー浴びてだな、多少清潔な状態

ビクッ

！！

手紙を持ちながら、そのまま硬直状態の俺。

何故なら…そのまま置きっぱなしにしてあった、例の置き鏡…。

そこに写っている白いシャツ…。

もちろん俺のシャツじゃない。

真後ろに誰か居るんだよ！

微かに感じる…後ろからの息遣い…。

俺は微妙に頭をずらし、鏡に写る角度を変えていく…。

そして写し出される…白河の顔…。

ガク。

白河じゃねえかよ!?

俺は慌てて振り向いた。

すると　誰も居ない。

再びガク。

あいつが犯人かよ!?

まあ、もしかしたら　とは思ってはいたんだが…。

みんなもそう思ったかい？

しかし、あいつ消えるの上手くなったよな。

って、今突っ込むのはそこじゃないだろ！

一体あいつは、どういうつもりなんだ!?

俺が気になるなら、普通に声掛ければいいのにさ。

前はさ、俺がチャック下ろした瞬間に声掛けてきたりして、全く空
気読まなかつたくせによー。

……考えても仕方ないか。

それより問題は……

ラブレター、覗き込んで見てたよな……。

やばくない？

どうすつか、やっぱ明日会っつの止めるか……？

はあ〜どろじょい……。。

その後悩んだ拳句、結局結論が出ない俺だった。

次の日 登校中 。

学園近くまでやってきた俺と彩乃は、坂崎に見つかった。

「お早う彩乃ちゃん！」

「あ、お早うございます、坂崎さん」

俺ガン無視で、彩乃一本にターゲットを絞るエロ崎。

「彩乃ちゃん、今日は一段と可愛いね！」

「は、はい…ありがとうございます」

「俺の妹はいつも可愛いんだよ」

色目使うんじゃない、このエロ男。

彩乃と居る時は、会わないよう極力時間をずらしてるんだが…こいつ研究してるな？

「ねえねえ彩乃ちゃん、昨日のドラマ見た？」

「はい見ましたっ！」

「かつちゃん死んじゃったねー、あの後…誰が甲子園目指すんだろっね？」

「え〜っつとですねー、彩乃が思うに」

「たっちゃんが甲子園目指すんだろ？」

会話の途中で割り込んでやる。

段々と、妹の趣味を理解してきたりして、気持ち悪いつたらない。

当然、坂崎がムツとして俺に突っかかる。

「シュンちゃんは黙ってて！」

「誰がシュンちゃんだっ、キモいわ！ 微妙に南ちゃん風に言うなっ！」

アホなやりとりをしていると、ふと彩乃が呟いた。

「あ　あれって白河さんですよね？」

その言葉に反応し、校門へと視線を向ける俺&坂崎。

そこには、いつも白河が乗ってくるレクラスの黒い外車が止まっていた。

あいかわらず、セレブなご登場だ。

ま、本人は嫌がってたっけ…。

ドアが開き、白河が降りてくる…。

そしてスタスタと歩き出す。

その姿を見た坂崎は興奮し、彩乃の前で言うてはいけない事を言いやがった。

「カーッと、やっぱ可愛いよな〜この前の映画思い出して、胸がキュンとしちゃうな！　神埼！」

「バ　お前　」

「え？ え？ 映画ってなんですか？ まさかまさか…リフレインですか！？」

ほら始まったじゃねえかよ！？

バカ坂崎！

「そうそう、神崎と見たんだよねー」

「むう…ずるいですよう兄さん、彩乃も見えたかったです…」

予想通り、俺の服を引っ張り駄々をこねる妹。

そして、野獣のような坂崎がすぐさま割り込んでくる。

「じゃあさ彩乃ちゃん、俺と一緒に行ってあげようか？ チケットも奢っちゃおうよ？」

「んん…でも…彩乃は兄さん意外の人とは…」

ま、坂崎程度じゃ彩乃は落とせないから、安心だけだな。

しゃーない。

「彩乃、今度一緒に行つてやるから、な？」

「ほんとですか！ 約束ですよ兄さん！！」

喜んで、腕にしがみ付いてくる妹。

嫌じゃないが、学園では止めてほしい…。

案の定、坂崎からの冷たい視線。

「お前ら、兄妹で仲良すぎ…」

その後、教室に着くといつもよりも騒がしかった。

久しぶりに登校してきた白河に、クラスメイトがわらわら集まっている。

「真琴、リフレイン見たよ！」

「ああ、私も見た見た！」

「私も彼氏と見たよねー」

「最後泣いちゃったあ」

まあそうなるよな。

ぶっちゃげ、俺も輪の中に加わりたいぜ。

坂崎は、頑張つて話しに参加してるけどな。

可哀相に…女子からは無視されてるよ。

しかし久しぶりに見た白河は、前よりもなんだか更に可愛くなった気がする。

俺がしばらく死んでたからか？

ここ数ヶ月で感じが変わったとか？

うっ…ま、可愛さアップにや文句はないが…。

はっ！ まさか…他の男が出来たとか！？

いや…別に俺と付き合ってるわけじゃないんだが。

そんな状態で、すっかり一条の事を忘れてしまっていた俺。

しかし、授業が始まり嫌でも思い出してしまう。

えっ…とだな、色々と連鎖が起きるんだ。

視線の連鎖ってやつ？

説明するとだな……

まず俺は、白河が気になって見ちゃうだろ。

そしたらタイミング良く一条が振り返り目が合う……。

そしたらその様子を見て白河が振り返り、俺に冷たい視線を浴びせてくる。

はっきり言って、白河のその目は明らかに怒っていた。

しかもその白河の様子を見て、周りの生徒全員が俺に視線を向けてくる。

そんな連鎖パズルのような光景が、二度三度と繰り返された。

そして放課後　　。

一条が教室を出たのを確認した俺は、立ち上がった。

しかし、そこでクラスの女子数人に囲まれる俺。

「神崎君さー、真琴になんかしたの？」

「怒ってたじゃない、白河さん」

「真琴に変な事したら殺すわよ」

ははは……さすがクラスでも、スーパーアイドルの真琴さん。

既に俺は何かの犯罪者扱い。

ここで捕まるわけにはいかない。

俺は早く体育館裏へと行かねばならんのだ！

てことで、坂崎すまん。

「俺じゃないと思うぞ、こいつだろ？」

そう言って、前の席で呑気に欠伸を掻いている坂崎を指差す。

そして、俺を囲んでいた女子の視線が一斉に坂崎へと向けられた。

「そつだよね…神崎君って、とりあえず女の子には優しいもんね」

「え？ 何？ おい神崎、なんだこの状況」

突然、恐い顔をした女子に囲まれ、坂崎はかなりビビッている。

「とりあえず、こいつの手足縛るつか？」

「だね、こいつはかなり危険だから」

「え、ちよつ 神崎ーっ！ 待てよ神崎ーっ！」

すまん………心中で二度謝ったから勘弁してくれ。

こついつ時に、普段の行いが重要になるんだよ。

哀れ坂崎………俺の捨て駒になってくれ。

勝手に彼の友情に感謝し、急いで待ち合わせ場所へと向かう。

タイミングをずらしたんで、玄関に人は居ない。

よし、いいぞ。

走って体育館へ…。

正面に着いた俺は、そのまま裏へ周ろうと角を曲がった瞬間

ドン ……

「キヤッ！」

「うわっ！」

走った勢いそのままに、女の子と激突してしまった。

俺は平気だったんだが、女の子がヨロヨロと倒れそうになる。

慌てて手を掴み、肩を抱き寄せる。

「ごめん、大丈夫だった？」

「あ　　はい…なんとか…か…神崎君　　」

顔を上げた女の子　　その子は一条白露。

待ち合わせの彼女だった。

俺を見上げるその顔は、ほんのり上気していて赤く頬が染まっていた。

流し目の似合いそうな、横にスツと伸びた切れ長の瞳　　。

艶やかで綺麗な黒髪……。

白河とは違う、お嬢様的な雰囲気を持つ彼女に、俺はしばらく釘付けになっていた。

「あの…えっと…神崎君、その…」

「ん……？」

腕の中で、彼女が恥ずかしそうにモジモジしている。

か　可愛い……。

何度も俺をチラチラと見上げる、その素振りが堪らない。

状況的に、柔らかく抱きしめていた感じだったわけだが、彼女の魅力にやられて離れるのを忘れてしまっていた。

が、次の瞬間俺の身体は凍りついた。

視線の前方やや左斜め前　　。

その木の陰に隠れ、あいつは俺を見ていた。

そう、それはもう鬼のような形相で……。

お気付きであろう、白河であった。

殺される　　！！

それほどのやばいオーラを感じた俺は、慌てて一条から離れた。

そしてあまりにも近い場所で白河が見ていた為、会話が聞こえないよう少し後ろに下がったんだが……。

恐ろしい事に、手前の木に一瞬で瞬間移動してしまう。

前よりも近いその場所は、はっきり言って会話は丸聞こえになるだろう。

しかし、何より納得出来ないのは、完全に俺から見えていて隠れる気が全く無い事。

当然、そんな修羅場だとは知らない一条は、普通に会話を始める……。

「神崎君!!」

「お、おう……」

「きよ、今日は 着てくれて……その……あ、ありがとう」

深々とペコンと頭を下げる一条。

とても礼儀正しくて良い子だ。

「そ、それで……私、そのっそのっあのっ」

「落ち着いて、落ち着いて喋ろう!!」

ハンパなく緊張してるみたいだ。

俺も違う意味で緊張していたから、チラッと横目で白河を見る。

あいかわらずガン見してやがる…。

そんな状態だったが、一条が困っているので仕方なく助け舟を出してやる。

「え〜と俺さ、女の子からあんな手紙もらったの…初めてなんだよ」

「ええ！？ そうなんですか!？」

「ああ」

「嘘 私、神崎君って凄くモテるだろうなって…」

マジすか!？

そんな風に俺を見てくれる子が居るなんて感激だぜ!!

そこで俺は油断した。

ちよっとニヤけた瞬間

コン。

「痛て！」

俺の頭に、突然空き缶が降ってきた。

「だ、大丈夫ですか？ 神崎君？」

「お、おう…ただの空き缶だから」

まさか今の、白河がやったのか？

白河を見る。

なんだか、さつきよりも負のオーラを撒き散らしているような…。

それでも会話は続く…。

「えと…神崎君っ！ 聞いてもいいですか…！」

「あ、ああいぜ、何でも聞いてくれ」

「今、付き合ってる人 いますか!？」

そう言われて、チラッと白河を見る。

あいつ…俺が死ぬ時に、彼女にして！　なんて言ってたんだけど…

…。

実際あれから会話してねえし、付き合ってるとは到底言えないよな。

そう考えた俺は、

「たぶん…いない」

そう答えた。

が、すぐその後何故かタイヤが落ちてくる。

ガン　　！！

「痛てええっ！！」

ツウ~~~~結構痛かったぞ……。

なんだよこれ、ドリフかつちゅーの…！

「キヤツ!! 神埼君、大丈夫ですか!!!!」

心配して、俺の頭を擦ろうとする一条。

だが、白河が恐いので俺は遠慮する。

そして、チラツと白河を確認……。

見えない黒いオーラが、更にアップしたように見える…。

心なしか、目が光っているように感じるのは、俺の気のせいだろうか。

これは早く切り上げないとヤバいな……身の危険を感じる。

よし! かなり惜しいが、断ってしまおう。

すまん一条。

「一条、聞いてくれ」

「は はい…」

う……非常に期待のこもった目で俺を見つめてくる……。

言い辛い……でも言わないと……。

「俺、好きな人がいるんだ！」

「！！！！」

言った瞬間、死にそうな顔の一条。

マジかよ……頼むから泣かないでくれよ。

俺だって一条みたいな可愛い子、フリたくないんだ。

そしてお約束、白河チエツク。

お、オーラが大分縮小された気がする。

だが、微動だにしない。

依然木から顔と身体を半分出して、こちらの様子を覗っている…。

ちょっとは表情変えろってんだよ……昨日から普通にホラーなんですけど、お前。

「でも！ 私頑張ります！！ あの、えと、お…お友達になって下さい！！」

おっと少し焦ったぜ、いきなり話し出すから。

しかしどうしよう……友達だって。

良いよな？ 友達なら。

それは断れないだろ……。

俺は必死に言葉を選んで話す。

「分かった……俺も一条の事、あんまり知らないし……友達でよければ」

そう言って、手を差し伸べ握手する。

その瞬間、

コン。

「痛て！」

また空き缶が降ってきた。

なんだ？

タライじゃないって事は、ちょっとだけ気に食わなかったのか？

良く分かんねえな　　ったく…。

「じゃ、じゃあ、私とアドレス交換して下さい!…」

「　　へ?」

予想外　　いや、良くある流れかも知れないが、俺には予想外の言葉が飛んで来た。

またまたどうしよう…。

チラツと白河チエック…。

ダメだ……鋭い眼光で睨んでくるだけで、その意図は分からない。

俺は迷いながら携帯を取り出した。

「神崎君、赤外線通信出来ますか?」

「え……さあ?　俺、友達少ないからやったことないな」

「じゃあ私が設定してあげます!」

パツと携帯を取られる。

なんとなく流れにまかせていると

斜め前方から、凄まじい波動を感じて慌てて白河を見る。

その形相　　説明するのも恐ろしい……。

髪の毛が物凄い勢いで逆立ち　　青々としていた木からは、葉っぱが一瞬で吹き飛んだ。

殺気を感じて頭上を見上げると、机やら椅子やらゴミ箱やら　　大量の教室グッズで埋め尽くされていた。　　大

や　　やばい　　。

いくらサイボーグな俺でも、生身の部分は多い。

あんなに大量に食らったらマジやばい。

それらを瞬時に感じ取り、慌てて一条に告げる

「やっぱりアドレス交換は　　」

「はいっ！　完了しました！！　　ウフッ　　私あきらめませんからっ！　　それでは！！」

クルリと嬉しそうに身体を回転させる一条。

グッズの山で身動き取れないまま見上げる。

そこには、俺の大好きな太ももと可愛いピンクのパンツが見えた。

良かった。趣味変わってないみたいだ。

そして更にその上には、涙目の白河の顔。

「なんで……言ったのよ……」

「え？」

「だからっ、なんで付き合ってたのっ！……！！」

怒ってるんだか、泣いてるんだか分からない顔で言い放つ白河。

だってさ。付き合ってるって言えるのか！？

「俺達。付き合ってたのか……？」

素直に聞いてみる。

「あの時。あの時約束したじゃない！！。彼女にするって言ったでしょ……！！」

思い出す 死ぬ間際の瞬間。

確かに俺は言った。

『約束だ』って……。

「嘘つき」

「いや ちよっと待て」

「嘘つきだもん……嘘つき……嘘つき……嘘つき……グスツ……ヒツ……」

え！？ 泣いちゃったよ……しかも妙に子供っぽくなっちゃった……。

俺が泣かせた！？

ど、どうしたら、どうしたらいいんだ……！！

「……グスツ……しかも……ヒツ……メアド交換までして……っ！！」

白河が叫んだ瞬間、俺の上にあったグッズ達が一気に吹き飛んだ。

「し、白河…ちょっと、落ち着いて話そう？ な？」

「……………やだ……………」

「やだ　とか言わないで、ほら　」

俺は立ち上がり、白河の肩に手を置こうとした　。

が、パシッ　と見えない何かに弾かれる。

「触らないでっ！…！」

「す　すまん……………」

目の前に居るのに、目も会わせない白河…。

そして少しの沈黙の後、白河が呟いた　。

「……………嫌いだもん……………」

「え……………し……………かわ？」

「嫌い嫌い嫌い嫌い！！！！　神崎君なんか大ッ嫌い　！！！！」

2話へ続く

第1話 すれ違い 前編（後書き）

また始まりました（笑）

終わったんじゃないのか！ なんて突っ込みは無しで^^；

第2話 すれ違い 後編

『嫌い嫌い嫌い嫌い!!! 神崎君なんか大ッ嫌い
!!!』

このフレーズ、何回俺の脳内で再生されたと思う？

「はあ〜……」

溜息しかでねえ…。

悲しすぎて思考停止。

あいつの中では、既に恋人同士だったんだろ？

そんな夢にまで見たシチュエーションを、俺はファイにしてしまった。

このままずっと口聞いてくれないなんて事 ありそうで怖い…。

くそーっ！っ！

あいつの考えてる事さっぱり分かんねーっ！っ！

体育館裏に散らばったグッズ 机やら椅子やらその他もろもろを、

半べそかきながら片付ける俺。

とりあえず倉庫にな。

そりゃそうだろ、あいつが何処から飛ばしてきたのか知らねえもん。

え？ そんな事どうでもいい？

そりゃ俺だって白河を追いかけたんだよ…。

でもな はつきり言って瞬間移動出来る相手にそれは無理だつて
。

行き先不明。

俺は一旦教室へと戻ったが、あきらめたとぼとぼ下校した。

「どうした？ 神崎、元気無いぞ？」

この聞きなれない喋り方の少女、その正体は美琴である。

「ちょっとな……いや ちょっとどころの話じゃないか…」

俺はガクツとうな垂れつつ、ソファーに倒れこむように座った。

そう、ここは如月さんの研究所。

だが如月さんは居ない。

居たのは美琴だけだった。

ひよつとしたらさ、白河が来てるかなぐりゃなんて思ったりしたんだが…。

美琴を見た瞬間、見つけたと思ってそりゃもう心臓バクバクだったぜ。

「元氣出せ！ 神崎っ」

隣に座って来た美琴が、俺の肩を叩いて励ましてくれる。

ここではお約束のメイド姿で。

こいつさ、かなり喋れるようになったらろ？

ぶっちゃげ、もう途中で嘔んだりもしないぜ。

凄いやな、たった数ヶ月でさ。

ただ……

「悩みがあるのか？ なら…美琴に打ち明けるが良いさ」

この通り、話し方が微妙…。

なんだか、白河と如月さんを足して二で割ったような感じに仕上がってしまった。

ここでの生活が長いからだろうか…？

「しつかりしろ〜神崎〜」

人がへこんでるのに、しつこく身体をあちこちにチョップを入れてくる…。

ちよっと待てよ……こいつも基本的に白河だよな？

記憶もかなり流れ込んだとかって、如月さんが言ってたし…。

相談してみる？

「美琴…お前さ、白河の考えてる事…分かるか？」

「え？ 真琴の考えてる事？ う〜ん……………」

あれ？ 唸って黙り込んだぞ？

なにやら額に拳を当て、うぐぐんと唸り続けている。

すると、ハッと顔を上げて、

「ダメーっ、遠すぎてテレパシーが届かない……ごめんなさーい」

「は？ テレパシー？ 何言ってるんだお前？」

「何って…！ 心の中で呼びかけているのだ！ 分かるう？」

テレパシーだろ？

その意味は分かるけどさ……常識を考えろよ、さすがにそこまでは無理だろ。

俺、おちよくられてんのか？

「お前、俺で遊んでない？」

「本当だよー。美琴と真琴は繋がってるんだ〜」

「またまた〜」

不思議な顔をする俺に、美琴はフンと自慢げな態度。

「これだからパンピーは困るな〜、説明したげよっか　？」

そう言った美琴はコホン　と咳払いをし、如月さんのような口調で話し始めた。

「真琴と脳波を同調させた私は、まず最初に空間転移が可能となった。その後　何度か記憶の移植をする度に、お互いの気持ちそうだな…考えている事がわかるようになった私達は　」

ははは…まんま如月さんなだけど…。

可愛くねえ…。

ま、そりゃ置いといてだ。

え〜と…話しが長いんで割愛させていただくと、要するに…思念というかテレパシーと言っか、心の中だけで会話出来るんだとぞ。

あいつら…益々ファンタジーだな…。

もう何でもありって感じ…。

え？ そんな能力がある事、もう知ってたって！？
そりゃ悪かったな…。

しばらく説明を続けていた美琴だったが、だからな と如月さんのような表情で言った。

「今度直接聞いて見よっか？ 何を聞きたい？」

突然、普通の女の子口調に変わる美琴。

調子狂うじゃねえかコノヤロー。

「いや それはまずい…え〜と、なんだかちよつとさ…喧嘩なのかな？ 俺、嫌われたんだよね」

はははーと、乾いた笑いが出る俺。

「もぉ〜…!! 君が私の胸ばかり見るからでしょ!？」

「ぬおっ!…!」
「いじめん白河 っておい!… あいつの口調で話すのは止める!…」

テヘッ　と下を出す美琴。

一瞬ガチで反応したじゃねえか……。

おさっしの通り　口調を変えれば、まんま白河の美琴さん。

物凄くクオリティーの高い物真似を見た気分だぜ。

そりゃ反則だっちゅーの。

「　で、どうして喧嘩したの？　言ってみ言ってみ」

ワクワクしながら聞いてくる美琴。

人事だと思って……。

でも、こいつは殆ど白河だもんな。

そう思い、俺が死んだ日の出来事　コンサートで起きた事や、
死ぬ間際の約束　そして、今日までの事　。

包み隠さず、全部話した。

すると、しばらく腕を組んで考え込んだ美琴は、顔を上げて言った。

「大丈夫だよ。まだ全然　君のこと好きだっつて」

真顔で言う。

そうなんだろうか…。

俺が黙っていると、美琴はこつも言った。

「美琴も君のこと好きっちゃ好きだけど、真琴ほどじゃないからだから本当の真琴の気持ちは分からない」

悲しいお知らせだったが、でも　と美琴の話しは続く。

「拗ねてるだけだと思っよ」

「そうなのか？」

「うん　真琴はまだまだ子供だからね」

やけに人生経験豊富な態度の美琴さん。

自分のクローンに子供扱いされる白河……切ないぜ。

しかし　美琴の解説によれば、まだまだ見込みはあるって事だ。
ちよつと安心した…かな？

「安心するのはまだ早い！ ほっとくとやばいよ、本当に嫌われるよっ。」

「うゝむ、そうなのか…?」

「神崎が落ち込んでいる以上に、真琴は傷ついているの!」

どうして分からないの？

まさにそんな顔をされてしまう。

そして 白河を傷つけてしまったという現実を言われ、自己嫌悪に落ちる俺。

「俺があいつを傷つけた……あいつを……俺にとって、天使みたいなあいつを」

「だからあゝゝ、落ち込んでる場合じゃないって 行くよ!」

。そう言われ、腕を捕まれた俺は人生初の瞬間移動に巻き込まれた。

一瞬で瞬間移動　　如月さん言わく空間転移したその場所は

「彩乃ーっ！　遊びに来ったよ〜」

「は〜い」

俺んちの玄関だった。

美琴に呼ばれてパタパタと玄関まで走ってくる彩乃。

「珍しいじゃないですかあ、美琴さんが遊びに来るなんて〜」

はて？　お前ら知り合いなの？

ま、どうでもいいか……はつきり言って、突っ込む気力すら無いし。

「うんうん遊びに来た。お姉ちゃんも別世界に行ってるし、暇なのさー」

はあー、みんなの為に説明するが、お姉ちゃんとは如月さんの事だ。

そう呼ばせるって宣言してたからな。

まあ別世界っていうのは俺も初耳なんだが、あの人ならなんでもアリだろ。

いつもなら突っ込むところだが、今日は勘弁してくれ。

「じゃあじゃあ、夕ご飯食べてってくださいよう」

「やったね！ いいの？ 彩乃ちゃんの料理って美味しいんでしょ？」

「まかせて下さいっ！ 料理には、かなり自信がありますっ！！」

「わはっ楽しみー じゃあ美琴も手伝うねー」

なんだかすっかり仲の良い二人は、俺を置き去りにして奥に消えて行きました…。

うっむ……美琴のやつ、すっかり俺の事忘れてるだろ…。

ま、いいけどさ……いじげちゃっぞ。

ノソノソ歩き台所を覗くと、キヤッキヤ言いながら二人で楽しそうに料理をしている。

メイド姿の美琴が料理……中々萌える光景じゃねえか…。

何度も言うつようだが、見た目白河だかな。

そして料理が出来るまで、俺は二人をボクッと眺めていた。

三人で仲良く食事タイム。

それは、俺にとっては何とも不思議な光景だった。

坂爪研究所から連れ出した頃は、赤ん坊のようだった美琴。

その美琴が、今や白河を子供だといい、そして彩乃と仲良くなって料理まで……。

ほんと不思議だ…。

しかも、美琴が担当したという味噌汁は、中々の物だった。

まあそんな幸せな食事が出来て、俺は嬉しかったわけだ。

少し立ち直ったぜ。

んで、お腹いっぱい三人は、仲良くソファでくつろぎタイム。

「さて、そろそろアクション起こそっか」

みんなでのんびりお茶をしていると、美琴が立ち上がった。

「聞いてよ彩乃〜、あんたの兄さんさあ…真琴にHしようとして泣かしたんだって」

「ぶーっ!!」

思わず飲んでいたお茶を噴射。

「バカ言ってるじゃねえ!! 彩乃、今のはデタラメだからな!!」

「ああ〜ついにやってしまいましたか…兄さん」

「だから違うって言ってるだろ!?!」

「無理やりはダメだよねー、彩乃〜」

「そうですよ〜兄さん」

くそー！。

ニコニコ二人で面白がってるじゃねえ…。

「でね？ 嫌われちゃったんだってー」

「はあ〜成る程…それは」

「だからっ、違っつて!？」

ブルブルブル〜〜〜

ふいに振るえ出す、俺の携帯。

テーブルに置いてあったから、三人の注目が一斉に集まる…。

そしてモニターに表示される『一条白露』。

俺は無言で携帯を確保し、ポケットに仕舞った。

「いちじょう…びゃくろ？ 中国人の方ですか？」

妹が頓珍漢な事を言っている。

今時とんちんかん言うなよ、とか無しな。

「そうじゃねえ、いいから　なんでもねえよ」

そう言っつて、何事も無かったことにする俺。

なんとなく、一条の事は妹には知られなくなかった。

なかったんだが…。

「ああ、秘密にするつもりだー、浮気相手の一条さん」

嬉しそうにゲロする美琴。

そう言えば、こいつには実名で既に話したんだっけ…。

コノヤロー、口止めしときゃ良かった。

「浮気相手…？　どついう事なんですかあ兄さん？」

当然の如く、突っ込んでくる我が妹。

「まあまあいいから。とりあえずメール見たい」

美琴が手を伸ばして、早く携帯を出せとアピールしている。

「なんでだよ！ これは俺宛てのメールだぞ？ プライベートの侵害だ！」

「えーっ、隠し事があると協力出来ないー」

腕を組んでそっぽを向く美琴さん。

ほっぺを膨らませ、不機嫌さを強調している…。

とっても表情豊かになったんですね……ってほっこりしてどうする。

「兄さん 隠し事は良くないのですう…彩乃にも言えないんですかあ？」

むむ…二人で責めてくんじゃねえよ、反則だぞ。

はあ、まあいいか……どうせ彩乃にはバレるだろうし…。

観念して携帯を取り出す。

そしてメールを開くと、ハートマークがいっぱいだった……。

『今日はありがとございました。恥ずかしかったですけど、やっと思いを伝えられて嬉しかったです。神崎君のこと、大大大好きっ！』

「わわわっ！！ 兄さんこれってこれって ！！」

「うわ 積極的……」

身を乗り出して俺の服にしがみついてくる妹と、少し顔を赤く染めて、口に手を当てている美琴。

そして俺は目が点 。

こんなラブメール……初めてだぜ 。

ひゃっほーい！！

俺は飛び上がりたい気分をなんとか抑えたが、どうも顔がニヤけていたらしい。

「兄さん、顔が気持ち悪いですう……プンプン！」

「神崎の変態 」「

二人共、凄く不機嫌なんですけど……。

妹にいたっては、プンプン言ってるし…。

可笑しいな…美琴はともかく、妹のやつは俺が恋愛する事に関しては大賛成なんじゃなかったっけ？

「え〜と…彩乃さんは、俺が一条と仲良くするのは気に食わないと？」

「あ〜〜う〜〜ん…：…兄さんが恋愛経験を積むのには、大賛成なんですけど」

「けど？」

「白河さん以外は…：…なんだかム力つくんです」

明らかに不快な態度の妹。

こんな態度を俺に見せるなんて　　いや、初めて見たかも知れない。

そんな彩乃に呼応するように、美琴も不満げな顔をしている。

そんな美琴を見て、俺はつい言ってしまう。

「妹はともかく、なんでお前まで怒ってたんだよ？」

しかし、それは俺の失言だった。

美琴は急に憂いのある表情を見せた。

「それ本気で言った？ 美琴だって、神崎が好きなんだよ…？」

ウルウルした目で見られて、思わずドキッとしてしまう。

「真琴と君が付き合ってたなら…何も文句ないよ。だけど、違っ子は絶対許さないっ！！」

ちょっと白河っぽいその口調　　まさにあいつに言われたみたいで、俺は更に鼓動が早くなる。

「兄さん？ 美琴さんが可哀相です。その子はちゃんと断って下さい」

妹にも釘を刺される。

仕方ない　　気の無い返事をしとくか　　って、俺は元々断ってるちゅーの。

なのに、どうしてそこまで責められにゃならん。

かなりの理不尽さを感じつつも、俺はメールを打った。

え〜と……こんなもんでいいかな？

『今日は俺もビックリしました。だけど、俺には好き人がいます。ごめんなさい』

いいよな？

かなりもったいないけどさ……ちえっ。

「どれどれ、見せて？」

打ち終わったところで、美琴に携帯を奪われる。

そして彩乃と一緒に確認している。

「んん〜、まあこんなもんかなー」

「ですねえ…：兄さんにしては、ストレートでいいと思います」

等と、勝手に評価する二人。

気が済んだなら早く送らせてくれよ、落ち着かないだろ…：。

〜美琴視点〜

一条さんには悪いけど、神崎と付き合わせるわけにはいかない。

真琴の気持ちを知っている私には、絶対許せない。

しかも、メールを見て喜んでいる顔なんかして。

さっきの神崎の顔見たら、真琴泣いちゃうかもよ？

あの子　　私達は純粹なんだから…。

「いいよ、このメールで。送れば？」

「お、おう……んじゃ送るぜ」

携帯を神崎に返して、私はふと思いつく。

やってみよっかな…。

たぶん出来る　　彼女はこの辺りに住んでると思うし。

彼が送信ボタンを押した瞬間　　精神を集中させ、周囲数キロの
気配を探る…。

送信して着信までつて、どのくらいかかるんだろっ？

一瞬？ それとも数秒後？

分からない……。

だから、近くで着信があった場所全てをチェックする。

彼女の顔は、真琴の記憶で知っている。

きっかけさえあれば……。

携帯を開く動作：着信音：バイブレーターの振動……。

瞬時に何百人という人の気配を探る。

さすがに疲れる　　彼女はこの辺りには住んでいないのかな？

もう無理かな……そう思い、真琴が住んでいる方向に的を絞って集中する。

すると

彼女を真琴のマンションの近くで発見した。

なんだ……そんなところに居たんだ。

「それじゃ、美琴はちょっと行ってきます」

「あ？ どこ行くんだ？ また戻って来いよ？ 折角だから、今日は泊まってけよ」

「そうですねー美琴さん。今日は彩乃と一緒に寝ましょう」

「うーん……それも良いんだけど……取り敢えずまた後でっ」

そう告げた私は一瞬で消える。

そして次に現れた場所は

狭い女の子の部屋。

そして目の前では少女が一人 携帯の画面を見つめながら、ハア〜と溜息をついている。

彼女は一条白露。

私は実際に会うのは初めてだったけど、成る程 可愛い子だね。

真琴がそう思っただけの事はある。

黒髪が長くて綺麗……。

神崎からのメールがショックだったのかな？

ずっと携帯を両手で握って固まってる。

黙って見ているのも何か卑怯に思い、私はそろそろ話しかけようと思っただ。

でも 私の気配を感じたのか、彼女の方が顔を上げた。

当然目が合う二人 。

「きゃっ！！ え？ 白河さん？ え？ え？ どうして突然目の前に ！？」

「お邪魔しまーっす 話したい事があつて来ちゃった…」

私を見て、かなり驚いているみたい。

そりゃそうだよな。

「あ、あの…え っと…ど、どうやってここに？」

「幽霊じゃないよ？ 私は…そうだねー、エスパーってやつ？」

「エスパー？ なんですかそれ？ 何かの資格ですか？」

「そうそう…ヘルパーとか社会福祉士とか栄養士とか…資格はなるべく取っておいた方が良いでしょう」

ってそうじゃなくって!!

危なかった……もう少しでノリ突っ込みを完成させるところだった
じゃない……。

「コホン、超能力よ…面倒だから見せて」

そう告げて、私は消えたり現れたりしてみせる。

「わぁ………凄い」

お口をあぐり開けて、目を丸くする一条さん。

こんなものを見せる為に、来たわけじゃないんだけど…。

「分かった？」

「あ はい！」

急に正座して、緊張感たつぷりの一条さん。

ちょっと驚かせすぎたかな…。

まあいつか、取り敢えず言う事言わなきゃね…。

「聞いて一条さん」

「なんででしょうか？」

「神崎君の事はあきらめてね？ 悪いんだけど、私と付き合うから

」

ちよつと冷たい感じで言い放つ。

可哀相だけど、私にとっては真琴の方が大事なの。

ごめんね？

「し…白河さんも…その…神崎君のことが好きなんですか!？」

急に声を張り上げて、必死に問いただしてくる一条さん。

勝手だけど、ここは真琴の代わりにはつきり伝えるべきね。

「好きよ…彼も私のことが好きなの。だから 私達の邪魔はしな
いで」

そう言い残して、私はここから消えた。

「そんな……神崎君の好きな人が白河さんだったなんて……勝てるわけない」

呆然とする一条。

無理もない、学園でも最強の人気を誇る白河　　そんな彼女が恋敵なのだ。

まさに絶望的　　。

と、本人は思ったのだが……実は彼女の人気も学園で五本の指には入る程のものだった。

気付かないのは自分だけ。

しばしうな垂れていた彼女だったが、何を思ったのか唐突に立ち上がり凛々しい表情を浮かべた。

そして携帯を打ち出し呟いた。

「最後まであきらめません！　だって……ずっとずっと好きだったんですっ……！」

実は彼女、小学校から神崎とは同じだったのだ。

しかし運悪く、今まで一度も神崎とは同じクラスにはなれなかった。その積年の思いを込めて打ったメールを見返し、彼女は送信ボタンを押した。

折角なので真琴の様子を見ようと、私は真琴の部屋に飛んでいた。

真琴は既に帰宅していて、ベッドの上でへたり込んでいる…。

あゝあ、相当シヨゲてるな…これは…。

どうしたもんかと考える。

が、考えても仕方ないから、こっそりと背後から忍び寄る…。

そして後ろから、思い切り胸を揉みしだく。

「だ〜れだ？」

「キヤツ！ んもつ〜美琴ーっ、やん！ ちよ ちよつと…
ダメ！ 止めてっばあ…」

ウフッ　中々可愛い反応の真琴。

もちろん、弱い部分はお見通しなのよ。ふふふ…。

「聞いたよ？　神崎君と喧嘩したんでしょ？」

「う…うん…　なんで知ってるの？」

「彼から直接聞いた　泣きそうな顔してたよ？」

「そ…そう…。」

「元気ないなーもう…。」

「取り敢えず、何があつたか美琴に教えてよ」

そう言つて私は真琴を抱きしめた。

お互いの心を一つにするイメージ…。

心を空っぽにして、真琴の記憶や思いを受け止めていく…。

こつする事によつて、私達は記憶を共有する事が出来る。

どうしてかは分からないけど、いつの間にかそうだった。

「うん　　だいたい分かった」

「ムカつくでしょ？」

「まあね」

神崎から聞いていた通りだった。

違うのは、その時の記憶と真琴の気持ちが伝わってきて、私もムツとしちゃったこと。

結構だらしないよね、あいつ。

「ねえ美琴…今日は一緒に寝よ？　ね？」

「いいよ…だけどその前に、神崎に会ってきなよ」

「え〜〜無理だよ〜〜」

「会わないと、どんどん会い辛くなるよ」

〜〜神崎視点〜〜

何もやる気が起きず、ベッドに寝ころがってボーっとする俺。

「あ〜白河とラブラブになりて〜」

なりたいけど、今はそれどころじゃないし…。

でもあいつ、こっそり俺の事覗いたりして…今日はあれだよな？
嫉妬してくれたんだよな？

そう考えると、かなり気が楽になる。

しかも、一条が俺の事好きだったなんてな…。

ふっふっふ…俺って実はモテるのか？

一人ニヤけてしまう。

例え白河に嫌われたとしても、俺には一条がいるってわけか…。

彼女も可愛かったよな〜。

正直、白河を好きになる以前に告白されたら、即OKしたと思う。

なんだかな…。

世の中にはさ、二股とか三股とかかけてるチャラ男が大勢いるって
聞くけど…。

今ならなんとなく、その気持ち分かるぜ。

でもな。

俺は白河に夢中なんだよ。

あいつの気持ち良さそうなお胸　　じゃなかった…美味しそうな太もも　　でもねえ…。

あれ？　俺ってあいつのどこが好きなんだ？

身体か？　顔か？

見た目ばかりじゃねえかよ!?

そうじゃなくってさ…性格だって、可愛いと思っぜ。

そうだろ？

だからこそ、あいつの身体を色々したい。

「絶対白河の胸を揉みまくる!!　それで太ももを、これでもかっ
て言うぐらい舐め廻す!!　後、パンツ脱がす!!　それが男つて
もんだーっ!!」

ブルブルブル。

「おお!？」

声高々に誓いを宣言していた俺の横で、携帯がメール着信のお知らせをしてきた。

慌てて起き上がる。

画面には『一条白露』。

落ち着いて携帯を操作し、メールの内容を確認する。

でも、ちょっと気が重い…。

だってさ、断りのメール入れたし…。

はっきり言ってまだ心の準備が出来ていなかったが、それでもメールを開いた。

思わず目を閉じて祈ってしまう…。

「どうか彼女が傷ついてませんように」

パッと目を開ける。

『明後日の日曜日、お買い物に付き合っただけなだけでいいですか？
もちろん、お友達として』

むむむ…そうきたか…。

非常に悩む…いや、悩む必要なんてないか。

一緒に買い物なんて、まさにデートじゃねえかよ。

すげえ行きたいけど行かないっ！

行っではいけない。

「ふ〜ん、付き合っただけじゃあ？」

え？ まさかこの声。

振り向くとそこには、白河が居た。

普通にベッドの横に居て、屈んで携帯を覗き込んでる…。

「行けばいいじゃない、嬉しそうな顔しちゃってさ」

「い、いやお前…行けって…」

毎度の事とはいえ、相変わらず心臓に悪い。

取り敢えず、メールなんかどうだっていい。

白河が来てくれた　このチャンスを逃してはならん！

俺はベッドから飛び降りその場に正座。

そして頭を下げ　　ようは土下座した。

「すまん白河！　お前を悲しませるなんてどうかしてた、頼むから
機嫌直してくれー！」

「やだ」

「……やだ言われたら……どうしろってんだよ……」

「じゃあ嫌い」

「そ、そんなに……き、嫌い？」

「大っ嫌い」

くそーっ！　なんなんだよこいつ！

そんなに嫌いなら、会いにきてんじゃねえよ！？

バフツと音がする。

白河がベッドに腰掛けたみたいなんで、俺も顔を上げてその場に胡坐をかく。

白河をチラチラ見る　。

夜だというのに制服のまま。

そして足を組んで、非常に機嫌が悪そうだ。

「やっぱりその…あれか？　付き合ってないって言ったのが悪かったんだよな？」

「……………」

そっぽを向いて無言、無反応。

くそっ、負けるな俺！

「……………なんで……………」

「へ？」

「なんで　　すぐ会いに来てくれなかったの？」

「　　今日の事か？」

「違ひよ…」

ってことはあれか…俺が復活した後の話しか…。

「あのなー、俺はあの日すぐにお前んちまで行って　　つっても、オートロックだったからマンションの入り口ですつと待ってたんだぞー!?」

「そ、その日は泊まりで撮影だったのよ……」

「そつか……じゃあ次の日は？　次の日も俺は、朝からずつとマンションの前に居たんだぜ？」

「え、えつと……その日もまだ帰って来てないっていうか……」

「じゃあどうやって会ったよ!?　その後…お前ウチに何度か来ただろ？　なのになにすぐ居なくなるし…俺にどうしろと!？」

「キヤッ」

あ……やべ　　つい声が荒くなっちゃった。

白河を怯えさせたみたいだ。

ちよっと涙目で下向いてるな……。

これはまずい　付き合っていないのに別れるような雰囲気じゃねえか……バカか俺。

気を取り直して、優しい声音で話す。

「とにかくさ、俺は一条と付き合う気なんてないんだ。あんな可愛い子に告白されたのなんて初めてだったんだ、だから俺」

「　　もん」

「え？」

「私の方が先だもんっ」

「さ……先って……？」

「私の方が　　先に告白したもんっ！！！！」

超ムクれ顔で、顔真っ赤にしながら言い放った白河。

そう言われると、確かにそうだった……。

あれも……告白だよな……。

俺が死ぬ間際に言ってくれた言葉　　。

好きなの

神崎君

大好きなの

確かにこいつはそう言ってくれてた……チッ
は……。 何やってんだ俺

勝手に初めてだ とか浮かれてさ。

「可愛い子じゃなくて悪かったわね……」

「バ お前！ ふざけんじゃねえ！！ お前が可愛くなかったら、誰が可愛いってんだよ！！！」

ダメだ……完全に拗ねてる。

後ろ向いて、枕抱きながらピクリともしない。

いや そんなに枕に顔埋めないでくれよ……た、たぶん汗臭いぞ……。

「と、とにかく！ 俺はお前が……その……お前のこと……本気で好きなんだ」

「……………」

「お前が好きなんだよっ！！！」

「……………身体が目的のくせに……………」

「な、何言って」

「さっき言ってたじゃない……パンツ脱がせるとか　なんとか……」

げっ！！　聞いてたのかよ！？

こ、こいつ……いつも絶妙なタイミングで来やがって……。

「絶対触らせないからっ！　Hなこともさせないっ！！」

白河が叫んだ瞬間

ガチャ　。

部屋のドアが開いた。

「入りますよう」

にゅっと顔を出したのは、当然妹だった。

「あのですねえ………会話が丸聞こえなんですよ」

そ、そうですね　隣の部屋だもんね…。

「あ、あ〜とだな…彩乃、すまんうるさかったか？」

「そうじゃないですよ〜、兄さんは女性を口説くのがへた過ぎます」

「は、はい？」

目を点にして呆ける俺。

白河も彩乃を見ながらキョトンとしている。

「白河さん　バカな兄で申し訳ありません」

「は、はあ…」

「これでも兄さんは、白河さん一筋なんです。それはもう、毎日がかさず白河さんの写真集を見ては一人で」

「　　っておいつ…!!　　や、やめてくれ!!　　俺の秘密をバラさないで…!!」

「わわっ!!」

慌てて妹にタツクルして止める。

な、何これ……何故に俺はこんな辱めを、妹から受けなければならぬ？

誰か教えて？

「あ、彩乃ちゃん…今言つてたこと

」

「だーーーーっ！！ お前聞いてんじゃねえっ！！！！」

何興味もってんだコノヤロ！。

そんな事実が発覚したら、もう恥ずかしくて目が合わせられん！！

「　　ですから白河さん、男なんて獣なんですよ。心より身体を優先してしまうのは、本能なんです。それが証拠に白河さんと仲良くなる前は、兄さんが一人でその行為をすることなんて滅多に

」

「ぎゃーーーーっ！！！！ 頼むからっ頼むから止めて彩乃さん！！
俺が何したって言うんだよ！！！！」

俺の後ろからは、そんなんだ　　と白河の納得したような声。

一体、何をこ納得されたんでしょうか……？

こ、これは罰ゲームなのか！？

俺はゲームで負けたのか！？

どんなゲームだコノヤロー！！！！

俺が悶絶して、床を転げ回っている時だった。

この後、とんでもない事が起きた。

「あ あれ？ に、兄さん……彩乃の身体が……身体が……」

「あん？ 身体がどうしたって？ もう俺のネタは勘弁してくれよ」

「ち、違うよ神崎君！！ 彩乃ちゃんの身体が変なのっ！！！！」

白河の焦った口調で、俺は飛び跳ねる。

「どうした彩乃！！………彩乃？」

彩乃の身体が緑色に発光している。

そんなバカな!?

「に、兄さん怖い、兄さん怖いですっ」

「ちょっと神崎君、これどういいうことなの!?!」

「俺が知るか!?!」

次第にその光りは強くなっていく。

そして 光り輝いた彩乃の肉体が、下から粒子と化して徐々に消えていつてしまう。

「い、いやーっ!! 兄さん! 兄さん!!」

「彩乃!! しっかりしろ!!」

「彩乃ちゃん!!」

俺と白河が彩乃の手を取る が、その瞬間、俺達二人も緑色に輝き出す。

「兄さん! に」

「彩乃ーっ!!!!」

消えてしまった彩乃。

そして、俺達の身体も徐々に粒子と化していく。

「なに？ なんなの！？ これなにっ！！ なによ神崎君っ！！！！」

「分かんねーっよ！！ とにかく！ 俺に捕まれ！！！！」

「うん！！！！」

きつく抱き合う二人。

だが、無情にもその後二人は消えた。

3話へ続く

第2話 すれ違い 後編（後書き）

2話でした。

突的な展開に作者もビックリ……なんてここまでは大筋予定通り。

この後どうなるかな〜^^^；

第3話 魅惑の身体に理性と本能（前書き）

お久しぶりです。

あ〜〜やっと3話が更新出来た。

良かった〜。

第3話 魅惑の身体に理性と本能

え〜とと……

俺達三人は、今のこの状況をまだ理解出来ないで居る。

「一体何が起きたんだ？」

「知らないわよ……私に聞かないでよ」

「彩乃…？ お前、話し方変だぞ？」

「だから私は彩乃じゃないってば……」

「兄さん、彩乃はこっちですよ」

「その姿で甘えた声だすなっ！！」

彩乃が消えて、そして俺と白河も消えて……というやばい状況からは一転。

引き続き、不可思議なこの現状。

第三者がこの状況を見ても、間違い無く何も違和感はないだろう。

だがしかし 俺達はこの異常さに付いて行けず、ただ焦っている。

自分の身体に起きた変化。

変化といっても、別に異常があるわけじゃ……いや、おいにあるんだが……。

何が起きたか説明が必要ですか？

だよな！。

取り敢えずだな、現状見たまましか説明できねえからな。

俺達は俺の部屋に居る。

もちろん彩乃と白河とだ。

え？ 消えたんじゃないかったのかって？

まあな、確かに消えたんだが……その後また身体が光ってだな……出現したんだよ、すぐに。

しかし大いに問題があつてだな、俺達は元の状態とは大いに異なつていたんだ。

まあ本当に説明が面倒なんで、見たままを言つぞ。

俺の前には俺が居る。

俺の横には彩乃。

そして俺が白河。

え？ 意味分かんない？

勘の良い読者の方は、冒頭の会話で気付いたかも知れんが…。

そう…俺達の身体は一度粒子化し、その後 再び現れた。

姿を変えて 。

白河は彩乃の姿に。

彩乃は俺の姿に。

そして俺は なんと白河に…。

姿が変わったのか、はたまた中身が入れ替わったのか…？

それは一切不明。

ありえないこの日常を説明するには、非科学的な推理が必要だ。

まずはあれだ。

如月さん絡みの、何かの実験…。

知らない間に、何らかの薬を飲まされた とか。

うゝむ…しかし、いくら如月さんでも人の姿を変化させるなんて事、可能なのか？

とすれば、考えられるのは…。

彩乃をじっと見つめる…。

俺の姿をした彩乃は、どこから持ってきたのか手鏡で自分の姿をまじまじとチェックしている。

まあ、こいつは部外者確定だろ。

次いで白河…。

彩乃の姿をした白河は恨めしそうに俺を見つめ、さも俺が犯人であるが如く問いただしてきた。

「何よこれ。何がしたいわけ？ 変なイタズラしたら怒るから」

「俺じゃねーしっ！！」

あゝあ、自分の声がやけに可愛い。

そりゃそうだ、白河の声だかな。

でも何だよ…白河のやつ、俺が何か企んでると思ってやがるな？

彩乃の顔で不機嫌な表情のまま、「どうすんのよこれー、元に戻るの？」と俺に訴えてくる。

って事はだ…。白河の新能力じゃないって事なのか…？

「これってお前の能力じゃねーのか？ 無意識に発動させたとか

」

「そんなわけないでしょ！」

即答で否定される。

変だな…それじゃ何が原因だ？

……………。

しばし考えて、一つの可能性に思い当たる。

そういえば俺の身体って、如月さんにかなり弄られてるよな？

まさかとは思うが、俺の能力だったりして…。

そんなバカなだよな〜。

いくら如月さんでも…な？

しかし…

彩乃の姿をした白河…。

不機嫌そうに腕を組んで、相変わらず俺を疑っているのかこっちを睨んでくる。

うゝむ…。

妹のこんな冷たい視線は、生まれて初めてだぜ。

「兄さん…彩乃…どうしたら…」

彩乃が俺の姿でモジモジしつつ、俺の腕（白河の腕な）にしがみついてくる。

ギャー…!!キモイ…!!

「ちょ、ちょっと私に触るのやめてよ!」

すぐさま白河が止めに入る。

バシッ!!

「い、痛いですう…」

彩乃の姿をした白河が、俺の姿をした彩乃を引っ叩いたの図。

「あ…ご、ごめん…彩乃ちゃんだっけ…あ、あははは…」

ポリポリと頭を掻く彩乃の姿をした白河…。

だあああああああ！！

ややこしい！！

「一体何なんですかねえ…」

「どうやってたら元に戻るの？」

それぞれ、いつの間にか鏡を手に持ち、自分の顔を必死に見ている。

この状況にかなりへこんでいるみたいだ。

まあそりゃそうだよな。

自分がいきなり他人になってみな？

そりゃ大変だよ、大騒ぎさ。

え？ 俺はへこんでないのかって？

別に？ へこむ必要なんてあるのか？

こんなの、絶対如月さんが絡んでるに決まってるだろ。

あれこれ考えたが、結局そうとしか思えん。

まあ大丈夫だろ。

そんな事よりさー聞いてくれよ、俺の身体…うししし…白河だぜ？

ちよーいい匂いするんだよね。

風呂上りなのかな？

ちくしょー！！ 色々気になるぜ！！

サツと顔を上げ二人を確認すると、まだ鏡とにらめっこ中だ。

よしよし…。

俺は二人に合わせ神妙な顔をしたまま、こっそり自分の髪の毛をクンクンしてみる。

すると、強烈な甘い柑橘系の匂いが、鼻をくすぐる…。

ああ…なんか、すげーいい匂いがする…。

か、感動だ…。

次は、さりげなく手で鼻を掻いてみる…。

そして普通に腕をクンクン…。

ああくなんだろこれ、俺の匂いじゃない。

女の子の匂いだ…たまんねー。

……。

え？ そうじゃないだろうって？

もっと気になるところがあるだろうって？

まあな。

この身体になってから、妙に肩がこるっていうーか…ある部分が重
いっていうーか…。

チラッと下をしてみる。

そこにはデカイ胸。

いつぞや俺が買った、あのパジャマを着たこの白河の身体…。

胸元が大きめに開いている為、薄いピンクのブラまでもが少し見え
る。

ぐおおおおお！！俺の憧れの胸がすぐそこにいいいいいい！！！！！！

さ、触りたい…。

あくまでもさりげなく、彩乃と白河をチェックする。

二人も自分の身体を気にして、こっちを見てはいない。

チャンス到来ってやつ？

しかしだな、わざとらしくはダメだ。

あくまでもさりげなく…何となく胸が痒いな…的な。

自然に手が伸びちゃって、全然無意識だったんだよー…的な？

ゆっくりと手を胸に伸ばす……。

伸ばす…。

ガシッ！

え？ ふいに腕を捕まれる。

「ちょっと、今、何をしようとしたのかなあ？」

目の前には、物凄い恐い顔の彩乃の顔をした白河。

「え〜っと…なんか、胸が痒いなくなんて…ははは」

「やめてよね！私の身体に触らないで！！ 触ったら…：本気で絶交だから」

こ、こんな怒った彩乃の顔を見たのは初めてだぜ…。

横目で彩乃（俺の姿の）を確認する…膝を抱えて小首を傾げ、指を口元に当てている。

キ、キモイ…俺キモイ…。

すると、何を思ったか彩乃は白河の身体（彩乃の身体）にしがみついた。

「キヤツ！ え？え？ 何するの？神崎君？ …：じゃなかった…：彩乃ちゃんっ」

「兄さんっ彩乃の身体だったら、また触ってもいいですっ！」

そう言って、彩乃は彩乃の身体を目の前に差し出してくる。

それはもう『どうぞ、好きにして下さい』的な感じで。

「ちょ、ちょっとやめてよ彩乃ちゃん…ていうか、またってなによ、またって！」

「べ、別になんでもねーよっ！！ 彩乃っ！！ ややくしくなるからお前は黙ってるっ！！」

「そ、そんなあ…はい…分かりましたあ」

俺が怒鳴ったんで、シュンとなる妹。

「兄さんのバカ…」

部屋の隅っここで、体育座りでイジイジする妹。

だからやめれ…俺の姿でイジケルの…。

全然慰めたくならないんですけど…。

そんな微妙な空気が漂う中、白河が唐突に立ち上がった。

当然、俺と彩乃の注目を集める。

しかし、白河は微動だにしない。

冷ややかに、俺を見つめている。

一瞬、俺の邪まな気持ち悟られたかとも思ったが、ここは動揺し

てはいけないと考え落ち着いて俺も対応する。

「ん？ どうした、白河」

「……」

あくまでも普通に声を掛けたが、反応の無い白河。

「おーい、どうしたー？」

下から可愛く手を振ってみるが、そんな俺を冷たい目で見下げてくる。

「……気安く声掛けないでくれる？ 君とはもう他人だから」

彩乃の声で、冷たい声を投げかけてくる白河。

他人？

他人って何？

胸触ろうとした事、まだ怒ってるのか…？

「な、なあ…さっきはごめんな？　もうこの身体触ったりしないから…な？」

「その事じゃないわよっ、一条さんと付き合っただけでしょ！？」

腕を組んで、ふんっ　とそっぽを向く白河。

げっ…またその事ぶり返したのかよ…。

まずいな…だいぶ根に持ってんな…。

「あ、あのさ白河…」

「…なによ？　他人だって言ってるでしょ。話しかけないで」

うっ…いつにも増して冷たい口調。

でも妹の姿だから、そんなに恐くはないぞ。

とか言いつつ完全に腰が引けてる俺だが、一条との件はもう終わったんだ。

だから、話せばきつと分かってもらえる。

なんたって、俺が好きなのは白河だけなんだし。

「その事は、身体が戻ってから…な？　その後、ちゃんと話そう」

「……いや……」

「嫌とか言っなくなって…このままじゃ、俺が白河なんだぞ？　…んで、お前は俺の妹…」

真面目な顔で白河を見つめる俺。

そんな俺を、チラッと一瞬振り返って一瞥する白河。

そして白河はこっちに向き直ると、「…分かった…」と小声で呟きその場にペタンと座る。

やれやれ…。

女の子って難しいよな。

しかし…彩乃の姿をした白河が妙に可愛く見えてきた。

不思議だ…見た目妹なのに…。

いや、いやいや…混乱するな！

元に戻った後、妹が可愛く見えたらどうする！？

いや、そうじゃなくて実際に妹は可愛いんだが…。

「じゃねええ!! 俺が好きなのはこの身体だろっ!!」

俺は無意識に立ち上がり、そしてまた無意識に自分の胸を両手で鷲掴みにした。

!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

しゅん

部屋の中に微妙な空気が漂う…。

で でかい 。

自分の胸の重みから、何となく質量は感じていたが…これ程とは。

この時、俺の中で何か切れ、我慢が出来なくなった。

もっと触りたい 。

でもこの硬いワイヤー入りのブラが邪魔だ 。

そう思った俺は、迷わず手を後ろに廻しホックを

外せるわけはなかった。

ガシツとつかまれる、俺の両腕。

当然つかんだのは、白河だった。

「彩乃ちゃんっ、ロープある！？絶対緩みそうもない、頑丈なやつ
！！」

「は、はいありますっ！　すぐに持ってきますっ！！」

慌てて部屋を出る彩乃。

そして目の前には、これまた彩乃の顔をした鬼の形相のなにか。

その恐い顔のお方は、肩をプルプル震わせ硬そうな握り拳を作っている。

「ぎ…ぎみねえ…」

「お、おい…女の子が、そ、そんな歯を食いしばりながら喋っちゃ
…ダメ…じゃないかな…ははは…」

右手の拳を硬く握った白河は、ワナワナとその手を震わせている。

「…その身体、私のだから暴力は振るわないけど　絶対…後で後悔させるから…」

低い声　さらに小声で話す白河は、マジで恐かった　。

「そのまま大人しくしてなさいよね」

「はい…」

「そうですねー兄さん、さすがに人が嫌がる事はしちゃだめですよ
お」

「はい………」

引き続き、俺の部屋。

三人が輪になって座っている。

そして…お察しの通り、俺の両腕は後ろ手でがっしりとロープで縛られている。

さながら、誘拐された少女のようだ。

悲しい…しくしく。

そして今は、どうしてこうなったかの会議中。

「私と思うに、如月さんに相談した方がいいと思うの」

「ですよね、彩乃達だけで考えててもお…」

チツ、やはりそういう結論に達したか…。

くそっ…俺はまだこの身体に、やり残している事が沢山あるというのに。

そう思いつつ、胡坐をかいていた足がしびれてきたんで組みなおす。

「ちょっと…なにもぞもぞしてんのよー」

「何もしてねーよっ！ いちいち反応すんなっ、お前の足はすぐしびれんだよっ！」

「そんな下品な座り方してるからでしょー！ やめてよ恥ずかしい

からっ

言われて自分の足を見る。

胡坐がきついんで、片足立てた状態で座ってる俺。

確かに、白河の身体でこの格好は似合わない。

ちなみに言っておくが、現在まだパジャマなんで下はズボンだからな。

味気ねえ。

太ももぐらい見たいよなー。

仕方なく、不本意だが女の子座りをしてみる。

ペタン。

お、座り易い。

膝の角度がありえない感じだが、内股の女子ならでわってやつ？

男の足じゃ絶対無理だよな。

そんな事を感じながら周りを見渡すと、何やら妹（俺の身体だぞ）に注目が集まっている。

何故かモゾモゾと、自分（俺の）股間をまさぐる妹。

その行為を止めもせず、見守る白河。

「あ、あのー…彩乃さん？ 何をなさってますか？」

「あ、はい…大きくならないかなあ…って…」

な、なんですとー！ー！？

嬉しそうに俺の息子いじってんじゃねー！ー！

「やめれっ！ー！ー！」

俺は身体ごと妹へダイブ！

ドンッ ゴシッ。

「痛っ！ー！」

させるかポケッ！ー！

「い、痛いですっ…た、棚に頭を…い、いきなり何するんですかあ

白河さん

「私じゃないって！ お兄さんでしょ！？」

その後もギャーギャー騒いで数十分経過。

「んで、行くんだろ？研究所。早くしないと如月さん帰っちゃうぞ」

「あ、うん、そうだよね。じゃあテレポするから」

「捕まって」と、手を差し伸べる白河。

「掴めねーよっ！…！」

自分の縛られた手を突き出す。

「ああそっか…ごめんごめん」

白河はそう言うと、俺の肩にそつと手を乗せた。

「ちょっと待ってね」

目を閉じ、集中しているのか、妹の顔で真剣な表情の白河。

横では、呆けた表情で天然丸出しの俺の顔をした妹。

部屋が静まり返り、緊張感が増した。

そのまま数十秒…いや数分が経ったかも…。

そして白河が、パチリと目を開ける。

「あはは…なんにも感じないし、出来ないみたい」

ガクッ。

今の緊張感は何だったんだよ…。

「彩乃ちゃんの身体じゃ無理みたい」

てへっと舌を出してハニカム白河。

その仕草は、妹の姿にとても似合っている

「じゃなくて！ どうすんだ？ 歩いて行くか？」

「ん〜、それでもいいけどお…その格好で？」

白河が俺に目配せしてアピール。

成る程…確かにアイドル白河を、パジャマで夜道は歩かせられない。

いや、アイドル以前の問題か。

「んじゃどうする？ 取り敢えず、妹の服でも借りるか？」

「ん〜…どうしようっかなあ…」

真剣に悩む白河。

「まったく…別にいいじゃねーか、ちょっと出かけるだけなんだから。」

と思ったが押し黙る。

すると、白河はスクッと立ち上がり、

「取りに帰る」と一言。

俺は慌てて「ちょっと待て」と制した。

だってな、白河んちって確か

結構遠いんだよな。

そう思った瞬間、俺の意識は夜空にあった。

そして空高く昇っていく…。

な　　なんだこれ…。

周囲の全てが感じられる。

全ての人の動きが分かる。

そんな中、俺の意識は猛スピードである一点を目指していた。

グングン近づく白河のマンション。

風も何も感じない…周囲の風景だけが、物凄いスピードで流れていく。

ふっ　　っと意識が飛びかけた瞬間、俺は白河のマンション

ン自宅に居た。

す、すげえ…俺、テレポしちゃった…。

き、気持ち良かったー。

あいつ、こんな感じでいつも飛んでたのかー。

だいが羨ましいな…。

……。

しばし放心。

……。

おっと、折角だから服でも持って帰ってやるか。

本来の目的である、この身体専用の服を探さないと。

キョロキョロと部屋を見渡す。

相変わらずのピンクのベッド、ピンクのカーペット。

目がチカチカするぜ。

ベッドの横には、新しいテレビとゲーム機。

俺が買出しに付き合ったやつだ。

汚れないようにか、どちらも布製のクロスが被せてある。

ぷっ　　。

いつの時代の人だよ。

昔、おばあちゃんちのテレビに布が被せてあったのを思い出す。

まあ大事にしてくれてるようで…微笑ましいじゃねーか。

そんな感じでニヤついていると、壁に掛けられた学校の制服が目についた。

おおいつものやつだ。

あれなら文句ないだろ、持っていくか…。

と思ったんだが…手が縛られてるんで却下。

…戻るか。

諦めて、テレポモードに入る。

感覚を広範囲にして集中　　。

さっきので、既に何となく感じは分かった。

この能力…慣れると簡単だぜ。

俺は自宅に意識を集中させると、一瞬で姿を消した。

お待たせ

再び俺は、一人で白河の自室にいます。

そつだよ、制服を取りにきたんだよ。

え？ よく一人でまた来れたなって思ってる？

だってな、他人をテレポに巻き込めなかったんだよ。

何度かチャレンジしたんだけど…無理だった。

『一人で私の部屋へは行かせない』

つて、白河には抵抗されただござ。

出来ないんだよ本当に…どうやってんだあいつ？

まあそういう訳なんで、出来ないフリをわざとしたわけじゃないからな。

別に家捜しする気も無いし、タンスとか開けたりもしない。

俺はそこまで落ちぶれちゃいないって。

え？ 少しは読者の期待に応えろって？

悪かったな、俺は変態じゃないし、本気で白河が好きなんだっ。

あいつの嫌がる事は、断じてしない！

てなわけで、俺はさっさと壁にかかった制服を手取る。

おおーちょっと感動。

これがいつも触りたくてしょうがなかった、白河の制服か。

さっきの発言が嘘のように、邪まな気持ちでいっぱいになる俺。

そしてテンション上がるぜ！

ついベタベタと触ってしまう。

……。

……ゴホン。

しかし…気付かなかったけど、随分この制服小さいんだな！

やっぱ女の子なんだよな。

感心しつつ、つい匂いを嗅いでしまう。

クンクン…。

ああ…これだ…白河の匂い。

こ、この位いいだろ？

続いて、自分の腕の匂いを嗅いでみる。

同じ匂いがする。

またちょっと感動。

……。

……。

……ゴホン。

おっと、楽しんでちゃいけないな。

早く戻らないと何言われるか分からん。

さて戻る…か

!!!!!!!!!!!!!!

瞬間、俺の目は無造作にほっぴり出されている、あるものに心が奪われる。

カーペットの上にある、二つの物体。

ブラとパンティー。

な、何故、このような物がここにある！

い、いや…落ち着け…冷静になれ。

ここはあいつの部屋。

あっても可笑しくないだろ。

しかもだな…あのパンツには見覚えがある。

いや、確信がる。

今日学校で見た、白河が履いていたパンツだ。

あのピンク色の物体…間違いない。

と、ということとは…ま、まさか…脱ぎたて…!?!?

ど、どどどじする!?!?

今なら、手にとって…あんな事やこんな事…。

でも待て、もしだ。

もし下着にそんな事をしたってバレてみる、ガチで命の危険が…。

…しかし、こんな無造作にここにあるんだ、俺が気付かない訳がない。

あいつがここに戻ってきたら、何もしてなくても俺は殺されるんじゃない…。

理性と本能が戦闘する中、俺は無意識にブラを拾い上げる。

あれ？　なんかこのブラ…ちょっと大きくないか？

まさかあいつ、更に成長したんじゃない…。

気になって、棚にあった大きめの鏡に全身を写してみる。

そして、上半身が入るよう鏡を固定する。

当然写る、可愛い白河。

ニコッとしてみる。

ぐおっ…！

か、可愛い……！

こんな無邪気な笑顔、み、見たことねえ…。

ああ、しまった、携帯持ってきてれば写メれたのに。

……。

……。

ハッ！！

な、何やってんだ…俺。

し、しかし…やっぱりちょっと大きいよな？

鏡の前で、色々態勢を変えてみる。

うゝむ…やっぱり、この斜め45度の角度が一番可愛く見えて、胸も大きく

ってそうじゃねえ！！

早く戻らないとっ！！

「ただいまー」

自宅に戻ってまいりました。

そして戻った瞬間　　白河が俺をギロリ。

ドキッ！

う…物凄い罪悪感。

え？　さっきのパンツはどうしたかって？

そ、そりゃ…君達…あんな誘惑に勝てると思うか！？

「　　くん」

若干…手に取ったりだな…。

え？　本当に手に取っただけかって！？

「　　くんっ！」

説明出来るか！！

文章に出来るか！！　ちくしょー！！！！

俺はもうダメだ…やっちゃいけない事をしちゃった…。

ああ…坂崎よりも、俺は変態だ…いや…犯罪者なのかも…。

「ちょっと…！ 聞いているの！？」

「へ？」

白河口調の妹声に我に返る。

「どろして制服とってくるだけで、こんなに遅いわけ！？ って、何度も聞いているだけど…」

「ひゃい！？ あーその…それはだな…」

緊張のあまり、声が裏返る俺。

瞬間、白河の顔（妹だけど）がサーっと青ざめる。

「ま まさか…胸揉んだりしたの？」

「へ？」

思わず間抜けな声が出てしまった。

とその時 妹にスリッパで叩かれた。

バシッ。

「痛っ」

「兄さん…大丈夫ですか」

「…はい、大丈夫です…」

「本当に見てないの？」

「見てないよ」

「でも触ったりとかは…したんでしょ？」

「触ってもねーよ」

今は、如月さんところに行く途中。

あれからずっとこんな感じ。

まあ俺の挙動も、明らかに可笑しいからな。

しかも聞いてくれ、俺は今、制服を着ている。

でもな、お着替え中は嚴重に目隠しされるわ、おまけに…やっとなカートを履けていい事あるかと思ったら、パンツの上に短パンなんか履かせやがって…。

どんだけ俺の楽しみを奪ったら気が済むんだよ。

そんな感じで、三人で歩いてるんだが…。

チラッと妹を見る。

何故か制服から、私服に着替えてやがる。

どうして俺の身体が外出するのに、着替えるわけ？

普通に必要ないだろ。

まあいいか…俺の身体がどうなるつと…。

良かった…白河が俺の身体じゃなくなつて…。

あ　　。

その時気付いた…。

白河が執拗に俺を責める訳。

想像してみてください、自分の身体が好きな人と入れ替わったとしたら…。

死ぬ程恥ずかしいよな？

見られたくない事、知られたくない事だって、そりゃ誰にでもあるさ。

かなり悪い事したかも。

よし…俺も男だ。

今後は紳士な対応を…。

「…っ…」

順調に研究所を目指していたが、緊急事態発生により俺は立ち止まる。

「ちょ、ちょっと何よ…なんで立ち止まるの？」

「どうしたんですか、兄さん？」

やばい、かなりやばい。

何がつて、説明もしたくない。

でもどうする？

このまま耐えたって、いずれ崩壊する。

その時は もちろんBADエンド確定だ。

ならば…ならば男なら、辿る道は一つ!!

つぶ、俺は紳士になるって決めたんだ。

こんな事じゃへこたれないぜ!

だから俺は、男らしく言ってやったのさ!

「ちょっとコンビニのトイレ寄ってくる」

俺はそう言い放つと、サツと踵を返して通りすぎたコンビニへと向かう。

が。

ガシッ。

当然のように腕をつかまれた。

「行かせるわけないでしょ!! バカなの君って!?!」

「仕方ないだろう、本当にしたいんだよ! 漏れそうなのっ!?!」

本当です。

やましい気持ちは一切ありません。

ガチで漏れそうなんだよ!!

俺だってやだよ!

好きな子の排泄行為なんか見たくもないっちゅーの!!

「ほ、ほんとなの?」

「本当だって! だから行ってくる」

悲壮な顔をする白河の手を振りほどき、再度コンビニへ。

が。

ガシッ。

再び腕をつかまれる。

「なんだよっ! 早くしないとやばいんだって!」

「やめてよコンビニとか！ 私って目立つのよ！ だから嫌なの！
コンビニは止めて！！」

必死に懇願してくる白河。

むむう…確かに。

アイドルが普通にコンビニに居たら目立つし、そんな中トイレとか
借りたくないよな…。

「兄さん、急いで家に帰りましょ？ ね？ 頑張って我慢して下さ
い」

妹に、俺の声で諭される。

そんな訳で、方向転換し自宅を目指す一行。

内股でモジモジしながら歩く俺。

き、きつい……なんだよ、これ。

そもそも、ここまで溜める理由が分からん。

もっと小刻みにトイレに行けよ……などと思いつつも、決して口には
出せるわけなく…。

そしてアソコを手で押さえたい衝動を、必死で我慢。

も、もつのだろうか…。

道中、白河には何度となく同じ質問をされた。

「大じゃないよね？ 小だよね？ ね？」

答えは小です。

もし大だったら俺、立ち直れねーよ。

そんな感じでようやく自宅に着いた俺達。

そしてトイレに入った訳なんだが…。

なぜか白河同伴です。

「早くっ！ 早くっ！！ で、出る！ 出ちゃっつてっ！！」

「あ〜んもう！ お願いだからもうちょっと我慢してよ！」

く、くそ〜マジかよっ！ こっちはトイレに入った瞬間に発射態勢なんだぞっ！！

そして白河同伴の訳。

再び目隠しされる俺。

しかも、濡れティッシュを鼻に差し込まれ、鼻栓までされています。

ここまでする必要あるか!?

今鏡見たら泣くぞ俺!

男つてもんは、好きな子に幻想を抱いてるもんなんだ!

そんな白河の顔想像したくないんですけど!?

「じゃあパンツ脱がせるから」

「お、おう、頼む」

ま、まあいいか…俺としても助かるし。

白河にパンツを脱がされ、いざ便器へ着座!

はあ〜〜間に合った〜。

俺は自発的に耳を塞ぐ。

出来れば、これはなかった事にしたい。お互いに。

何も聞こえない、何も見ない、何も感じ

「……あん……」

「ちょっと！ 私の声で変な声出さないでよっ！！」

「出したくて出したんじゃねーよっ！！ お前が変なとこ触るから
だろっ！？？」

「……しよ、しょうがないでしょ！？ 拭かないとダメなんだか
らー！」

そう言って、再びふきふきする白河。

「……あっ……」

「だから変な声出さないでってー！！」

「知らねーよ、もっと優しくしろってんだよ！ 思ったより敏感な
んだよそこー！！」

「何を思ってたのよー！！ Hな想像するのやめてよっ！！」

「してねーし！ じゃあせめて、ウォッシュレットべらいいしてくれよ

「嫌よっ！！」

そうかい、そうやって軽い嫌がらせをするってんだな。
分かったよ。

見えないが、ボタンの位置くらいは分かる。

こうなったら、自分で押して発射するさ。

その方が綺麗になるしなっ！

ボタンへと俺は手を伸ばす…

が、バシッ　　っと手を払われる。

「させるよー！」

「嫌よー！！　絶対させないー！！」

「なんでだよー！！　綺麗になるだろー！？」

「そうだけどっ！！　絶対やだっ！！」

「何がやなんだよっ！！！」

大騒ぎだった…。

たかだか小をするだけで、実に30分。

漏れなかったのが奇跡。

しかもこの後妹が、「彩乃もしたいです」と言い出し再び待つこと
10分。

そしてさっぱりした俺の顔で出てきた妹の第一声。

「兄さん！ いっぱい出ましたよっ 大きい方！」

好きな子の目の前で、なんて事してくれんだよ…。

白河も、思いっきり聞かなかったフリしてドン引きじゃねーかよー！

905

そして兄の尊厳は！？

何なの！？ この辱め！？

嗚呼………最初は楽しいと思ったのに…。

色々問題あるよね…。

だって俺達、生きてるんだもん。

如月さん、早く元に戻してくれ…。

4話に続く

第3話 魅惑の身体に理性と本能（後書き）

はい、3話でした〜。

作者究極のバカだろ？
とか思いました？

僕は思いました（笑）

第4話 理性と本能とイケメンと

「あ、その…俺は坂崎慎太郎…って、知ってるよな…ク、クラスメイトだもんな…ははは…」

俺は何故か、坂崎と二人で公園にいる。

ここは駅へ行く途中の、ちょっと大きな市民公園だ。

足元には芝生が生い茂り、真横には噴水もある。

噴水の周りにはライトが点灯し、洒落た夜の雰囲気を演出している。

坂崎の顔がそのライトに照らされ、これまたいい感じなんだが…

男の一大決心よろしく状態で、今にも告白しそうな坂崎がいる。

そして俺は、そいつを固唾を呑んで見守っているんだが…。

だからどうした、そんなの俺には関係ない。

男同士で甘い雰囲気を作りやがって、キモイ事この上ない。

そんな俺の気持ちも知らず、この悪友、とんでもない事を口走る。

「す、好きですっ！！ お、俺と付き合っして下さいっ！！」

顔を真っ赤にして、額に青筋立てて、心底必死に告白しやがった。
頭を深々と下げて、右手を突き出し、OKなら握り返して下さい
待ちの坂崎君。

どうしろってんだよ…。

この状況 何となく想像つくよな？

そう、俺は未だ白河のナイスバディー状態。

俺、彩乃、白河の三人は、駅に向かう途中で運悪く、こいつと遭遇
しちまったって訳。

ほんと最悪だよ。

それでだな、当然俺と白河が仲イイなんて言えないからな、偶然会
ったって話しにしたんだが…。

この男、街角での偶然の出会いに舞い上がっちゃって、白河一人引
っ張り出しこの公園まで連れてこられたって訳なんだ。

まあ当然その白河は俺なんだよね。

ま、『中身俺で〜す』なんて説明出来ないし。

こいつに事情説明する気なんて、サラサラないしで。

はあ〜〜まいったな…。

男に告白されるなんて、生まれて初めてだぜ。

まあこの先二度とないだろうけど…。

ふと、一条からの告白をちょっと思い出したり……してる暇なんてないんだが。

さて…どうすんの？

俺は困ってしまい腕を組んで、そんな返事待ち状態の坂崎を生温かく見つめてみる…。

そんな俺　白河に対して頭を下げたまま、チラチラ上目使いでこちらを気にする坂崎。

「お、お願いしますっ!!」

再度返事を促してくる…。

何でこいつは偶然出会って告白なんか出来るわけ!?

その決断力と強引さだけは、立派だと認めてやりたいが…。

断っていいよな？　当たり前だよな？

え〜と…白河なら、何て言うかな…。

「え〜とね…ちょっと待ってね…」

「は はいっ！」

一応、断りを入れて少し時間をもらう。

俺は腕を組んだまま考え込む…。

う〜む…それにしても腕を組んだ時に、なんと邪魔な胸なんだ…。

下からちよつとユサユサしてみるが、その質量たるや男の感覚じゃ分からないよ？

その乳重で肩は重いし、姿勢を常にシャキッと伸ばしていないと肩が懲りそうだ。

え？ そんな事考えてないで、早く返事を言えって？

分かったよ…じゃあ、一番白河が言いそうな感じでだな…

「ん〜、お前…じゃなかった…坂崎君の気持ちは嬉しいけど」

「え……………」

けど　　って言った瞬間、坂崎がハンパなく惨めな顔をしてくる。

そんな普段見せない顔に俺は言葉に詰まるが、言わなくてはいけない。

そもそも、こいつは誰かれ問わず告白しまくってんだから問題ないはず。

まさかとは思うが、白河相手に期待を持つなよ。

「だったら、みんな平等だよ！ 白河真琴公式ファンクラブに入っ
てね」

アイドルっぽく一回転して、

キラッ

ナイススマイル超時空シンデレラ風で、決めポーズも入れて俺様懇親の一撃をお見舞いしてみた。

うむ、今のはかなり可愛かったはずだ。

誰かビデオ撮影でもしてくれてないだろうか。

「俺……ファンクラブには、もう入ってるからさ……」

テンション下がりがまくりの坂崎。

あゝ、何か言わなくちゃいかん。

あくまでも、白河口調でっつと…。

「ふうん、そうなんだ…ありがとー。じゃ、そゆことだ」

俺は踵を返して立ち去ろうとする　　が、

ガシツツと腕をつかまれる。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ真琴ちゃんっ！」

真琴ちゃんっ！　　じゃねーんだよっ！！

気安く白河の腕触ってんじゃねーっ！！！！

チツと思わず素で舌打ちをして、坂崎を睨んでしまっつ。

当然、急変した白河の態度に驚く坂崎。

「あ、ご、ごめん…怒った…？」

「あん？ 怒ってねーよ」

「え…？」

「ああっ！ じゃなっくって…今日はこの後用事あるからっ、じゃあねー！ 学校で会っても、話しかけないでねーっ」

腕を振りほども、残酷な一言を浴びせ走って逃げる。

そのまま噴水を通り越して、その向こうにある木々を抜ける…が。

ズザザザー…。

慣れない内股で全力疾走したもんだから、足がもつれて盛大にコケた。

「痛ってっ」

「だ、大丈夫っ！？ ま、真琴ちゃん！？」

げっ…見上げると、心配そうに立ちすくむ坂崎がすぐそこに…。

くそ〜、女の子の足じゃ撒く事は出来ないか…。

チツと舌打ちを思わずしつつも、坂崎の視線が俺の方に向いていない事に違和感を感じる。

その坂崎の視線を辿ると、俺の顔の下の下。

コケた拍子に尻餅をついたせいで、おっぴろげになった足の付け根。要するにスカートの中を凝視してやがる…。

瞬間 全身に鳥肌が立ち、ハンパない気持ち悪さが込み上げて、慌てて足を閉じスカートを直す俺。

心配顔でラッキーハプニングを期待していたのか、坂崎はシュンと肩を落としている。

く あ、危ねえ…良かった、スカートの中に短パン履いてて…。

明らかに狼狽する坂崎を見て、改めてこいつの本性を思い出す。

ったく…パンツの事より、白河の身体を心配しろってんだ。

「真琴ちゃん立てる？ ほら、つかまって」

気を取り直したのか、このバカ、精一杯の優しい声で手を差し伸べてきやがる。

気持ち悪いっつーの。

取り敢えずこのバカはしつこそうなんで、走って逃げるのは無理だな。

そう考え、俺は奴の後方を指差し

「あーっ！！ 何あれーっ！？」

「え？ え？ 何？ どうしたの、真琴ちゃん！？」

坂崎がつかれて後ろを見ている隙に シュッ。

っふ、便利だぜ、このスキル…。

一瞬でテレポして、公園の反対側に現れた俺。

慌てて発動したからまだ公園の中だが、ここは結構広い。

まあ見つからんだろ。

「はあ、まいったな〜。とんだ災難に遭ったぜ…」

俺は呟くと、側にあったベンチにフワツと座りこんだ。

肩が痛い…。

どうやらコケた時に少し打ったようだ。

まあ大丈夫だとは思うが…借り物の身体だ、念の為全身を確認する。

え〜と…、足に怪我は　　。

特に痛みは無いが、なんせ白河の足なんで傷一つ付けるわけにはいかない。

身体を左右にずらして何気なく右足から左足と確認していくが、怪我が無いのを確認した後も中々目が放せない俺。

……………。

相変わらず…き、綺麗な足だな……………。

見慣れない自分の足　　白河の可愛い足に魅入ってしまう俺。

い、いや……………だってさ…、可愛いんだもん。

スカートから伸びたその長い足は以前よりも少し長いような気がする、自分が死んでた間に背が伸びたのかな？　なんて考えてしまう。

近くには公園灯があり、夜だけど今座っているベンチ周辺は結構明るい。

その光りに照らされて薄っすらと赤みがあった白い太ももは、男

の足と違ってとても柔らかかそうに見えた。

片足を伸ばしてみる。

細い。

何で女の子の足ってこんなに細いんだ？

まあ…だから坂崎を振り切れなかった訳だが。

おもむろにスカートを捲る…。

短パン、そして太ももの付け根の方までが見える。

太ももの上の方は結構太いのに、そこからどんどん細くなり、膝小僧もちっちゃい。

なんとなく、身体を屈め右足に履いている紺色のソックスを下げてみる。

膝から下が、更に細いんだよ…。

思わず、スベスベのふくらはぎを触ってしまう。

丸みを帯びた筋肉……男のゴツゴツとした感触とは、うって違って柔らかい。

そして、男みたいにモジャモジャと毛が生えていない。

いや、一本も生えてないぞ？

ふむ…処理してんのかな？

スネやら太ももやらをサワサワしてみるが、気持ちいいくらいスベスベだ。

……………。

あゝ、今男だったら普通にギンギンだな…………。

分かってもらえるだろうかこの気持ち。

男子諸君には伝わるだろう。

男が興奮するポイントは色々あるのさ！

そつだ、取り敢えずこの脱ぎかけのソックスを脱いで…………ぬぎぬぎ…………。

誰もいない公園を良い事に、勢いでどんどんエスカレートする俺。

もちろん最終目標はパン…………ってあれ？

俺は一体何をしているんだ？

。

白河の身体に興味津々で我を忘れていた俺だったが、一瞬我に返る。

そして、今居るベンチ
きはピタツと止まった。

そのすぐ横に人の気配を感じて俺の動

「ところで白河さん。さっきから、何をされているんだい？」

！！！！

気配は間違いなかったようで、若い男の声が急に聞こえ思わずビク
ツとしてしまう俺。

だ　　誰だ…？

恐る恐る横を向くと、そこには細身で背の高い超イケメンの男子

いや、年は俺達と同じ位の美少年が立っていた。

「どうしたんだい？　さっきから足を気にしているようだけど、ど
こか怪我でもしたのかな？」

優しそうな笑顔で話しかけてくる美少年。

少し長めの前髪を掻き分ける仕草が男の俺から見ても色っぽく、こ
こは公園だというのになぜかスーツを着ている。

そして口元から見える白い歯からは、キラツと擬音が出そうな程の

イケメンっぷりだ。

男の俺でも惚れ惚れしてしまう。

って、あれ？

何だかこいつの顔を見ると、胸の奥がキュンキュンするんですけど…。

意味不明の身体の反応が気になるが、取り敢えず話しかけられて無視はまずいので無難に「何でも無いです…」と応えてみる　　が、自分の意志とは反して妙にしおらしい少女っぽい声音が出てしまい、恥ずかしさで赤面してしまう俺。

そんな俺を優しく見つめ、「そう…良かった」とまるで王子様のような雰囲気ですくなく見守ってくる美少年。

ドキドキドキドキ……。

や　　やばいつ！　絶対によばい！！

間違いない、俺はこの目の前に居る美少年に好意を抱いている。

こゝ、好意というか……そんなレベルじゃない。

ストレートにこれは恋心だろっ。

キ、キモイ…キモすぎる！！

なんでだ！？

俺…もしかしてその…そういう嗜好があったのか!?

いやいや、冷静に考えろ。

ドキドキキュンキュンしてるのは、あくまでも白河の身体だ。

俺自身の精神には、何の問題も無いはず!

動揺もなんのその、拳を握り締める俺。

「どうしたんだい? やっぱり様子が変だね…こっちへおいで」

急に立ち上がった俺を見て、優しく手を差し伸べる美少年。

そして更に胸の奥がキュンキュンしてしまう、この身体。

よ、要するにだ…激しく言い訳するとだな、この白河の女子としての本能がイケメンに反応しているだけで、俺はノーマルなんだよ!

だからな、俺がこいつを好きな訳じゃなくて、白河がこいつを好きなんだよっ!!

……。

……。

ズーーーーー。

自分で言っけて激しく落ち込んだ。

何だよこいつ。

誰なの？ この男？

無意識に、キッ

ときつい視線を男に浴びせてしまっが

。

「ん…どうかした？ 気分でも悪いのかい？」

と、あくまで冷静な美少年。

まずいな…。

白河の知り合いだとさすがにまずい。

— 先ずここは逃げよう。

そう考え、坂崎に使った手を再度使用。

「あっ！！ 何あれっ！！」

そいつの後方を指差し、つられて振り向いた瞬間にシュツ。

次の瞬間、俺は公園の反対側　　最初に居た、噴水の横に現れた。

でも迂闊だった。

目の前には一度撒いた男が　　。

「あ！ 真琴ちゃん！！ 捜したよ〜、急にいなくなったから心配うつうつづづぐはっ！！」

ドサツ　　。

え？ 何があつたかつて？

俺はもういい加減に落ち着きたいんだよ。

やっとイケメンから開放されたと思ったら坂崎だろ？

イラッとして、つい腹にパンチ叩きこんじゃった……てへっ

さすがにこの細腕じゃ一発で沈まなかったんで、4発ぶちこんだけど……まあいいだろ。坂崎だし。

さすがにこれで嫌われてるのが分かっただろう。うん。

さて、そろそろ二人は研究所に着いた頃じゃないかな？

予想外のイケメンの登場で困惑したが、坂崎のおかげでスッキリした気分になれた。

やっぱり友達っていいもんだ。

『ありがとう坂崎』 心の中で俺はお礼を告げると、研究所目指してテレポした。

ただ…あの美少年と白河の関係が気になって仕方なかったけど。

研究所に着くと、既に如月さんは二人から事情を聞いていて大まかな出来事を把握しているようだった。

「遅かったな、白　いや、神崎君」

そう言って出迎えてくれたいつもの如月さん。

相変わらずのボサボサ頭をかきむしりながら、手にはタバコを持ってワークデスクに向かって座っている。

彩乃と白河は既に話しを終えたのか、ソファアームでくつろいでいる。

その日常的な光景（まあ身体は入れ替わったままだが）　　を見
て、事の顛末が如月さんの仕業であるだろうと確信し、安心して彩
乃の姿をした白河の隣に腰掛ける。

しかし、

「如月さんも良く分からないんだって」

座った瞬間に、白河から予想外な言葉が飛び出す。

「……………」

彩乃は黙ったまま、下を向いている。

あれ？　嘘？　実は暗い雰囲気？

「どつしどつ神崎君　」と、白河が俺の服（白河の制服だが）を
ツンツン引っ張る。

どうしようって言われてもなー。

如月さんは、デスクに向かったまま無言でパソコンを操作しているし。

仕事というか、研究がまだ終わらないんだろうか。

しばし無言且つ張り詰めた空気が続く中、俺はさっき公園で会ったイケメンを思い出し白河に知り合いかどうか聞きたい衝動に駆られる。

あいつは白河を知っていて、知り合いのような雰囲気醸し出していた。

いや、どうだろ。

白河って有名人だからな、知ってて当然っちゃそうなんだが…。

うーむどうしよう…今聞ける雰囲気じゃないよなー。

でも我慢出来ないから、それとなく聞いてみつか。

「なー白河」

「なに？」

「お前、イケメンの知り合いっている？」

しまったー！ 考え無しで話したら直球じゃねーか！！

白河も、彩乃の顔で思いつきり複雑な表情しちゃまったじゃねーかよ
っ！！

「あのさー、まさかとは思うけど…紹介してほしいの？」

「ち、ちげーっよ…！」

「…じゃーなによ」

「いやその…」

咄嗟に何て聞いたらいいか分からない俺。

「……君ってさ、もしかしてそういう趣味があったの？」

ん？ そういう趣味？ 趣味ってなんだ……？

「　　ってちげーって！！ 男になんか興味あるか！？ そう
じゃなくて、その…なんだ…俺達って付き合ってるんだろ？ だか
らさ…」

「もう付き合っていないし」

「へ？」

「もう他人って言ったでしょ」

そっぽを向きながら言い張る白河。

まだ一条の事言ってるのかよ…。

強情な性格してんな…。

余計な事聞いてぶり返させちゃったよ…。ぐすん。

「俺の事、嫌いになった？」

「嫌い」

即答かよ！

本気で嫌いなのか焼きもちなのか、どっちなんだよ！？

チラチラと横を見るが、白河は微動だにしない。

あーもう泣きたくなってきた。

「ま、まあ…君次第で嫌いじゃなくなるかも」

そう白河に言われてから、何も言えないまま無言タイムへ突入。

う…気まずい。

相変わらず彩乃は一切喋らないし…。

そんな状況が続く中、白河が急にブツブツ言い出した。

「どっしょどっしょ…明日どっしょ」

明らかに白河の雰囲気さがつきと違っているので、話しが変わった事にホッとする俺。

そして何もなかったかのように参戦。

「どっしょよっつて…大人しくするしかないだろう？」

「そ、そうだけど…明日は歌番組の収録と、アルバム製作の打ち合わせがあつてえ…」

良し良し。自然な会話。

怒ってるけど、思い出させなきゃ大丈夫なんだな。OK。

しかしだな…俺、歌番組なんか出れないぞ。

そもそも歌えないし。

でも俺が白河なんだから、出るしかないのか？

いや、もしかしたら身体は白河なんだ、歌えばあの天使ボイスが出るのか！？

なら歌詞覚ええないとな…幸いCDは持ってるし…。

と、真剣に歌番組出場を思案していると、「美琴呼んで」と命令口調の彩乃の声。

あーあいつがいたか…。

呼んでって事は、例のテレパシーってやつだろうか。

やり方を白河に聞いて、心の中で美琴に語りかける。

『美琴く〜、聞こえるか〜？』

十秒位待ったが、返事は無い。

「呼んだの？」

「いや、やってるんだけど…」

「え〜？ 心の中で美琴をイメージして、話すだけだよ？ 何で出来ないのよお」

白河はご立腹だけど、返事が無いんだよね。

俺じゃ無理なんじゃ…。

「そういえば、あいつ携帯持ってないの？」

「……あ、そっか…」

「俺、番号知らないから」

「あー、うん」

ま、白河本人の番号も未だ知らないけどね。

思い出すと落ち込むだろ。

「あ、私 え？ ああ…彩乃ちゃんの声だけど私 説明？」

うんうん あ〜だから違って」

美琴のやつ、混乱してんだろうな…。

だよな、彩乃が白河口調で電話してきたらなあ。

それでも電話を切ってから、10秒も経たないうちに美琴はやって来た。

「ちょっと、何がどうなってんのっ!」

そして当然の如く、開口一番俺に問いただす。

まあ、問いただしたのは俺の姿をした彩乃にだけどな。

仕方ないんで、今までの事を美琴に説明してやるか…。

と思っただんだが…。

「んんん分かった。詳しい話しは直接見るから」

そう言って「ちょっとじっとしてて」と美琴が俺に抱き付いてくる。

ああそうか、白河達ってお互いの情報交換が出来るって言ってたな。

きつと今からそれをするんだろう。

しかし、横では白河が大騒ぎだ。

「ちょっと美琴っ!」と白河が止めに入るが、「自分に焼いたってしょうがないでしょ」と美琴が言うと、白河は大人しくなった。

まあそんなやりとりを気にする余裕は無く、胸と胸とが密着する不思議な感触に全神経が注がれていた。

そして今の自分の匂いと同じ匂いに包まれて、白河の匂いでいっぱいになり、これまた不思議な気分だった。

「ちよつと神埼君…。Hな事考えてないで、頭を真っ白にするか、出来れば今日あった事を思い返してくれないかな？」

耳元で優しく囁く美琴。

そんな事されたら、余計Hな事想像しちゃうだろ。

『もうしょうがないなあ、これでいい？ 聞こえるでしょ私の声』

ふいに頭の中に美琴の音が響く。

凄い…これがテレパシーってやつ？

なんだか良く分からないし、どうやってるのか不明だけど凄い。

その後も声が聞こえる訳じゃないのに、美琴の考えてる事がどんどん分かってくる。

成る程ね、二人の間には言葉は不要って事か…すげえな。っていう

か便利だな、こいつら。

『余計な事考えないでって言うてるでしょ？ 今日の事思い出して
っ』

『へいへい』

言われたとおり今日の出来事を反芻する。

「ちよつと！ 何よそれっ！！」

「はい？」

「どうかしたの？ 美琴？」

突然、美琴が叫びバツと俺から飛び退いた。

「真琴、ちよつと神埼君借りるから」

そう言うのと、美琴は強引に俺をテレポに巻き込んで一瞬で研究所の外へと移動した。

「……………」

移動したはいいんだけど、恐い顔で俺を見つめる美琴さん。

ここは地下一階から地上に出てすぐの場所。

駅の周辺という事もあり、既に遅い時間だったが人通りはある程度あり、ガヤガヤと周りの喧騒が聞こえてくる。

でも俺達は無言。

そして空気に耐えられなくなり、

「もしかして、怒ってるのかな？ み、美琴さん？」

「ハア〜」

深い溜息。

美琴をそうまでさせる出来事ってあったけ…はて？

「謝ること、あるよね」

「え〜と…なんでしたっけ…」

美琴の雰囲気飲まれ、既に敬語の俺。

しかし…

「ヒントッ！ プリーズ！」

可愛く言ってみたが、美琴はローテンションで低く呟いた。

「真琴のマンション…」

ドキーーーーン！…

「マ、マンションってその…あの…」

白河の自室での出来事が、頭の中に鮮明に蘇る。

俺は瞬時にその場に正座、そして土下座。

「た、頼む、お願いだから白河には内緒にしてくれ！…」

「言わないよ…っていうより言えないよ。私だって知りたくなかったし…」

「ホントか！？」

「うん」

た、助かったあゝ。

あんな変態行為が知られたら、もう絶対に仲良くしてもらえない。

え？ 何があつたかつて？ そ、それは言えない…。

「まあ…裸を見ずに我慢したのは評価するよ。でも下着を手にとつてあんなこと想像するなんて…君って」

「わーっ！ 言うな！ それ以上言わないでくれ！」

「言えるわけないでしょっ！」

美琴は腕を組んで仁王立ち。

そして俺は地面に正座。

こんな若者二人を、過ぎ行く人達はどんな目で見ていらっしやるのだろうか…。

「君のことがちょっと好きな私でもね、鳥肌立つ程気持ち悪かったんだけど…」

「すまんっ！ でもな、考えてくれ！ 白河の事が好きで好きでしようがないんだよ！ なのにあいつ、毎度毎度Hなイベント起こすしさ…ホントに！ 俺が変態になるのはあいつに対してだけだから！ そこは分かってくれよ！！」

「あゝ…はいはい…そうだね、君ってホントに真琴が好きだもんね。自分の足、ベタベタ触りまくってさあ」

「嗚呼…それは公園での事を言ってるのか！？ し、仕方なかったんだ…もう、夢中だったんだよ…」

激しく後悔の嵐。

ていうか、足触るくらいいいじゃねえかよ…。

みんなも恋人や好きな人には、隠れて変態行為しちゃだめだぞ。

そしてその後も美琴のお説教は続き、もしかしたら一時間位話していたかもしれない。

なぜそんなに長くなったかと言うと、美琴の完全な口封じとマンシヨンの下着を片付けてもらっ約束をしたから。

俺が片付けたんじゃ不自然だからな。

良かった。結果的に美琴にバレたおかげで、逆に命拾いしたのかも。しれない。感謝。

そして最後に、俺がさっき白河に聞けなかった事を美琴が答えてく

れた。

「そのイケメンさん、真琴の知り合いじゃないから」

まあ良かったわけなんだが…続いて美琴はこんな事も言った。

「でも、はっきり言ってその人、真琴のタイプど真ん中だと思う」

さて、場所は再び研究所内へと戻る。

やっと如月さんは一段落したようで、三人でコーヒーを飲んでいた。

そして俺と美琴にもコーヒーが用意される。

「いや、如月さん、そんなコーヒーなんかのんびり飲んでいる場合じゃないんですけど」

「うむ、そうか？ こんな奇想天外な事象が起きたんだ、まずはゆっくり楽しむうじゃないか」

……変だな。

声だけ聞いてると、いつもの如月さんなんだけど……目が笑ってない。いつもの余裕のある如月さんじゃない。

俺は違和感を覚えたが、敢えて口にはしなかった。

だってな、他に頼る人がいないわけだし。

「はっきり言おう。お互いの精神を入れ替える事など、現代の医学、科学では不可能だ。お前も見ただろう？ あの坂爪博士でさえ、脳移植をしているのだ。もちろん、私にも推測や憶測といったある程度の方法論でさえ思いつかない状況だ。2002年のイギリスでの論文によれば

え〜っと、久しぶりに如月さんの長い話しがはじまったので割愛させていただきます。

結局…如月さんは分からない…らしい。

そうになると、はっきり言って元に戻る方法はないんだが、それでも最後に「私にまかせろ」と言ってくれたので俺は信じてる。

如月さんに対する信頼は絶大だからな。

まあそんな感じでその後すぐに解散したわけだが…良く分からない

のが、「君の姿をした彩乃君、彼女は私に預けてくれ。それが私が協力する条件だ」とかなんとか。

中身は彩乃だが、身体は俺だぜ？ そんなもの預かってどうすんだ？ そんな疑問もあるが、まあ言つとおりにするしかなく、とにかくなんとかしてくれって感じた。

明日が土曜日、明後日が日曜日で助かったよ。

ん？ 日曜日？ うゝむ何か忘れてるような気がする…。

まいつか。

一抹の不安を残しつつ、俺達は帰路へと向かった。

5話へ続く

第4話 理性と本能とイケメンと（後書き）

ああ〜書いてて何だかややこしかった。

読み辛いと感じた人、いましたら教えて下さい。

とにかく早いところ、中身を元に戻したい。

どうしたら戻るんでしょう？（笑）

第5話 俺に自由は無いのか

「あ、ちよっ！ 変なところ触んじゃねーっよっ！」

「しょーがないでしょ！？ ちゃんと洗わなきゃダメなんだからっ
！！」

「いや…でも…だっってお前…」

「が、我慢してよ…」

「我慢するけどさ…何で手で擦るんだよっ！ か、感じちゃうんで
すけど…」

「やっ ……！ やめてよそういうこと言うのっ…！ 変態っ
！！ しょうがないでしょ！？ いつもそこは手で洗ってるんだか
らっ…！！」

「変態っってお前っ！ お前のま いや…ア ……あ…っ…とに
かくっ！ そこは敏感だからもっと優しくしてくれっ…！！」

「う…っ…もうやだ…泣きたい…」

「俺もだよ…」

え？ 楽しそうだった？

ぶっとなばすよ！？

確かに絶賛白河とシャワータイム中なんだけどさ…。

これでもかってくらい目隠しされてるし、後ろ手できつく縛られてるし。

俺の自由はまさに皆無。

まあしかしだな、正直言つと楽しくない…こともない。

あいつ大事な所は手で洗う派らしくてだな…妹の手だが、白河が白河の部分を洗つて…って！ ややこしいわっ！！

そんでもってだな！ その時につ、思わず声が出ちゃいそうなんだよっ！！

分かる！？ その時の恥ずかしさ！？

元に戻つたら、たっぷり思い出してやるからな！！

じゃなくて！！

自分が感じてる姿を思い出して萌えられるかっ！！

ややこしすぎるわ！！

ああ〜…もうわけわかんね〜。

……………こほん。

実はだな、研究所を出てからずっと白河と二人つきり。

彩乃は研究所に残ったから、二人で俺んちに直行。

そして家に着いたとたん、

「シャワー浴びてよ…」

って言うもんだから、「喜んで！」と返事したところ今に至るってわけ。

一瞬一人で入れるのかと思った俺は、あんな事して　こんな事して　なんて思わず夢を膨らませちまったがな…。

そりゃそーだ、一人で入れるわけがねー。

それでも俺は、もちろん諦めなかったさ。

目隠しする為に頭を手拭いでグルグル巻きにしてあるからな？　そのままじゃ髪洗えないだろ？　そ

予想通り、その時手拭いを外された俺は全力で開眼。

彩乃の顔が目の前に見え、そしてすぐにシャンプー液が侵入…。

目が死ぬかと思っただぜ。

しかも目と目が合ってバレちゃって、「もう絶対信用しないっ」と

か言われるし。

その後のガードの硬いこと硬いこと…。

しかしだな、冒頭にあったようにその後はエキサイティングだったぜ。

こいつさ、身体洗うのに基本スポンジ使ったんだが、何故か最初に全身に泡を伸ばすんだよ。手で。

しかも重要な場所を手で洗いやがって…。

傍からみたら絶対怪しい関係だよ。女の子同士で。

このまま戻らなければ同性愛に発展するのか…？ など考えていると、なにやら白河が一人ブツブツ言い始める。

「あ…やだ…どうしょ…最近いつしたっけ…？」

したって何だよ。

ちょー気になるじゃねーか。

「ねえ神崎君、いつ元に戻れるのかな？」

「さあな…如月さんが何とかしてくれるとは思っけどね」

「そつだよねえ、うーん…」

何でか知らんが、シャワーでそんなに悩む事があるのか？

俺なんか、5分でシャワー終わらせんのに。

「なんかまずいのか？」

「べ、別に…何でもないからっ！　へ、変態は黙っててっ！」

気になって話しかけたら怒るし、意味わかんねえ。

「ちょっと手上げてくれる？」

「上がるわけねえだろっ」

後ろ手で縛られてんのに腕を上げると？

またこの天然娘は、意味不明な事を仰る。

結局、腕の拘束を外され自由の身になった俺は言われた通り万歳をする。

「言っとくけど、手を動かしたら絶交だから」

絶交は恐いので言われるがままの俺。

そしてそのまましばらく放置。

何してんだよ……。

「あー、上げた手がしんどいんですが……」

「いいから黙ってて」

冷たくあしらわれ仕方なくジツとしていると、脇の下を指でスリスリと擦られる。

右脇をスリスリ…左脇をスリスリ…。

……………。

あー、何がしたいか分かった。

妹は目が悪いからな。

触らないと分からないんだろう。

そしてその行動の意味を理解した俺は、つい白河をからかいたくなる。

「わき毛でも生えたか？」

「バ　　そ、そんな物、は、生えるわけないでしょ！？」

「あ、そうなんだ」

「ち、違うからねっ」

そんなに嘸みながら否定しちゃって、可愛い奴め。

まあ確かにあれだ…俺自身、好きな女の子　白河には幻想を抱いていたからな…まさかそんな所に毛が生えるなんて、正直考えもしなかったぜ。

でも…そうだよな、同じ人間。

みんなだって、きっとそうなんだろう？

…と、意味もなく全国の女子達に心の中で聞いてみる。

幻想が打ち砕かれた気分でちょっと切ないが、それ以上に白河の秘密の部分に触れて結構満足な俺。

ああ、男って不憫だぜ…。

しかしだな…何だか俺自身も恥ずかしくなってるって黙っていると、その後も全身を執拗にサワサワと触ってきやがる。

「は、ははははは！ 何すんだよっ、や、やめる！ こそばい！」

「い、いいから黙っててよっ」

何がしたいんだよ…。

まあ間違いなく、そういう事だと思っけど。

執拗に全身、太ももから足の先の方まで撫でられました。

「お前…そんなに毛深いのか？」

「ち、ちが ……！ え、ええと…マ、マッサージ！ そうよっ美容の為にこうやって擦ると、血行が良くなって…」

いや…絶対無駄毛のチェックだろ。

必死に言い訳しやがって、更に可愛い奴。

しかし…あれだな。

アイドルでも毛は生えるんだよ。

ピュアな俺も勉強になったし、なんだか少し興奮してきた。

目隠しもされてるせいかさ、想像力が膨らんじゃうっていつか…。

クツ ！！ 新たなフェチ要素を俺に植えつけるんじゃないっ
！！

相変わらず、こいつは天然でHな事をしてくる。

き、危険だ…。

「うーん…まあいいかなあ…じゃあ出よっか」

と、明らかに『まだ処理しなくてもいいか』と心の声が聞こえてき
そんなコメントを残して、風呂場を後にする俺達。

前から思ってたけど、お前は絶対嘘をつけないタイプだな。

そついうとコ、激しく好きだぜ。

と、一方的に愛を深めたところでシャワータイムは終了。

そして目隠しのままお着替え。

なんだが…。

「俺は何を着るんだ？」

「あ…」

「…い、いっておくが、俺のせいじゃないからな」

「分かってるわよ…」

当然の如く、着替えの無い白河の身体。

俺としては、別にノー下着でシャツを着る
とかでもいいんだ
が…。

「しゃーない、脱いだ服着るか」

「い、いやよそんなのー。ダメに決まってるでしょ?!」

「んじゃどうすんだよ、買ってくるのか?」

「誰が行くのよ」

「お前」

「き、君を一人に出来るわけないでしょ!?!」

そんな事言っただってな。

ああ、何この状況。

風呂場の前で、依然二人は素っ裸。

そして俺は目隠しに再び縛り手。

意味不明状態。

「は、座っていい？ 目隠しのまま立ってんの疲れるんだよ」

ペタン。

その場に女の子座り。

あ。

なんだかモフモフというか、モゾモゾというか…。

え？ なにがって？

いやその…毛が…。

足と足の間って言えば分かる？

何だかさつきから、毛の事はっかり考えてるんだけど…俺。

でもしゃーないんだって、男だったら、いつもプランプランさせてるものは無いし…。

要するにアレがあるせいで、ピッタリと足を閉じる事なんてない訳で。

つまりはそう言う事でした…。

「美琴呼んでくる」

気になる…。

どうやったたら感じる事が出来るんだ？

う〜む…。

色々と態勢を変えたり、腰を動かしたりしてみる…。

「……な、何してるの……」

「いやその、毛が気になって……」

「……………」

「……………」

げっ…！

やべっ、つい思った事が口につ！

「き、君ねえ……………」

「いやっ！ち、違うんだ！！これには訳がっ…！」

「どんな訳よっ!?!」

はい、怒られました。

たかが足を閉じてモジモジしていただけなのに…シクシク…。

しかも、今度はその足も縛られてしまう。

「これ以上変な事したら、元に戻った時ホントに酷いんだからねっ」

言葉だけ見れば所詮女の子。

酷いって言っても大した事ないって思うだろうけどさ、こいつはキ
しると本気で暴力を振るうんです。

しかも最近、新たな能力でどこからともなく凶器を呼び寄せるし
だな…。

学校で白河がやったように、机や空き缶を遠隔?で瞬間移動させて

なんて事、今の俺にも出来るのかな? と、ふと考えてしまう。

ま、必要に迫られたらやり方を白河に聞いてみよう。

そんなこんなで、過去に受けた暴力の数々を思い出しつつ、足をガ
ツチリ固定され大人しくなった俺。

どんな縛られ方なのかはご想像におまかせしますが…絶対これ何か

のプレイにしか見えないからっ！

いいのか!？

これ、お前の身体だぞ!？

元に戻ったら、同じように縛ってやるっかと変態想像まっしぐらでいると、すぐ側で一陣の風を感じる。

シュツ　。

当然周りが見えないので、何があったか知らん。

「あのさ、どんなプレイ中なわけ？」

そ、その声は！

美琴がきたらしい。

ナイスタイミング！

………なのか!？

「え〜っとさ…まだ中身神崎君だよねえ？」

いまいち状況が分かってないのか、不思議そうな美琴。

「あ、あのさ…一体二人で何してたの？ どうやってたらそんな事になるわけ？ どんなプレイ？」

明らかに、『私ついていけないんですけど』的な反応の美琴。

ま、まあ正常な反応と言えよう…。

仕方ないんで簡単に事の顛末を美琴に説明。

二人でシャワー浴びて全身洗ってもらって…そして恥ずかしい部分は上手く説明出来ない俺。

すると「楽しそうで良かったね」などと、完全に第三者的な雰囲気醸し出しているんで、つい同じボディーをお持ちの美琴さんにつきかり聞いてしまった。

「あのさ、白河って実は毛深いのか？」

この一言が運の尽き。

ほぼ同じ性格の持ち主である。

どこかのスイッチを入れてしまったのか、

「き、君って人は……お、女の子に何て事聞くのよっ!」

恐らくこの身体が白河の物だという事も忘れていたのだろう。

一瞬で頭上に無数の気配を感じ、次の瞬間にはドサドサと何かが降り注いで俺に打撃を与えてくる。

たぶん匂いからして本やら雑誌やらだろう。

硬い物じゃなくて良かったと思いつつも、

「痛っ!」

中にはハードケースの角といった凶器も含まれる。

そして怒った美琴は「ふんっもう知らないっ」と、どこかへ行ってしまう。

再び一人にされてしまった俺。

傍から見たら、手足を縛られた少女が何十冊という本に埋もれて、伸びているという図である。

「彩乃〜早く帰ってきてくれ〜」

普通に妹に助けを願う俺だった。

「じゃ私そろそろ帰るね、明日早いし」

「あーうん、そだね。朝普通に事務所に出勤だから」

「うん、りょうかい」

あの後、なんとか落ち着いた俺達。

明日の白河の予定　テレビ出演と打ち合わせを美琴に頼み終わった俺達は、リビングのソファでくつろいでいる。

「ふああ〜…もう眠いね」

「ああ、さすがにな」

既に結構遅い時間だった。

「んじゃ、白河は彩乃の部屋使ってくれよ」

「うん分かった」

という感じで、お互いの部屋に別れたはずだったんだが…。

「紐解いたらどうなるか分かってるよね？」

「も、もちろんです」

「ちゃんと寝てよ？ 寝不足はお肌に悪いから」

「ああ…で、でも寝れるかな」

何故か妹のベッドと一緒に寝ています。

お互い、姿形が変わっているとはいえ、基本は俺と白河です。

二人で寝るなんて…悪くねえ。

悪くないんだが…。

「あのー白河さん？ せめて足だけでも自由にしてもらえないでしょうか？」

「それは無理」

「じゃ、じゃあ…後ろで縛っている手をせめて前で縛ってほしいなあ、なんて…」

「あーもつと無理」

シクシク…。

こんな状態で寝れるかつちゅーのっ!!

酷くない!? 俺の扱い酷くない!?

こうして、初めての二人の初夜は何事もなく更けていったのだった。

隣ではス〜ス〜気持ち良さそうに寝息を立てる、我が義妹の可愛い寝顔。

そして身体が不自由で、ゴロゴロと寝返りを繰り返すが眠れない俺。

明日は土曜日だ。

この状態で、一日白河と一緒になんだよな…。

どう過ごそうか…はたまたこの天然娘が何を言い出すのか…色々妄想しつつ、やがて眠りに落ちた。

6話に続く

第5話 俺に自由は無いのか（後書き）

第5話でした。

こんな小説を読んでくれて本当にありがとうございます。

しかしですね、最近時間が無くてなんとか仕上げた前話のクオリティが、悲惨なことになっていました。

なので今回は少し短めです。

勘弁下さい。

第6話 修羅場る予感

清々しい朝だった。

カーテンの隙間から注いだ朝日が俺の顔を照らして、土曜の朝の始まりを教えてくれる。

あー、しかし、なんだか面白い夢を見たなあ。

俺と白河と彩乃の身体が入れ替わるっていう……そんな事あるわけないっちゅーねん。

でもなんか……超リアルで楽しかったんだよなー。

……ムフツ、思い出すとついニヤけちまう。

くそ〜〜憧れちゃうなー、白河の……コホン、いかんいかん朝っぱらから何考えてんだ。

……。

ふ〜朝一での雑念はダメでしょ と、ふと寝返りを打つ。

横には、ス〜ス〜と寝息を立てる我が義妹の姿。

ったく、こいつ俺のベッドに入り込んできたのか……。

たまにこいつう事がある。

こいつはさ、兄である俺のベッドに侵入して、いつの間にか寝てるんだよな。

ん〜でも、中学生になってからは初めてか？

まったく可愛いやつだぜ などと思いつつ、スヤスヤと眠る妹の頭を撫でてやる…。

とその時、ふと自分の手がやけに小さくて違和感を感じる。

おや ？

妹の頭に伸ばした手を引っ込め、まじまじと手を見つめる…。

なんだこの可愛い手は…。

慌てて起き上がり、自分の身体をチェック。

はれ？ なにこの可愛いパジャマ…。

まさに女物。黄色い生地に水玉模様。

え？え？ 軽くパニックの俺。

そして最大の違和感 それは、毎朝ギンギンの息子が

ないっ！！！

慌てて股間をまさぐる俺。

「何でだっ！！ 何でチンコがねーんだよっ！！！！」

その時、激しい鈍痛が頭を襲った。

ゴツッ 。

「朝からどこ触ってんのよっ！！！！」

「え〜っと…うちの朝はパンなんだけど…いい？」

「いらない」

「ま、まあまあそんな事言わずにさ、今日玉焼き作ってっから」

「っーん」

『っーん』って口に出すものか？ いやいやそっじゃなくて。

完全にご立腹な白河。

よそよそと朝食を作る俺なんぞガン無視で、リビングでテレビを見ている。

足を組み尊大な態度である。

まあ要するにだ、てつきり夢オチだと思ったんだが…現実だったらしい。

そしてさっきの股間まさぐり事件から、あまり口を聞いてくれません。

不思議だよな。寝る前は手足を紐で縛られてたんだけど、朝にはすっかり自由の身。

まあ、女子が縛ったんだから緩かったんだろ。

そうこうしている間に朝飯が完成する。

ジューっと焼き上がった目玉焼きにソーセージ。

それらを皿に盛り付けて軽くサラダを加える。

うーん、ヘルシー。

そしてチン　という音とともに飛び上がったトースト。

梅ジャムとマーマレードどっちがいい？と聞いてみるが音沙汰ないので適当に塗る。

そしてそそくさとテーブルに準備をして、楽しげに呼びかけてみる。

「へいっおまたせ！ 神崎家の朝食だよっ」

一緒に食べようと、相変わらずテレビを無言で見つめる白河を手招きする。

ハア〜と溜息をつきながら立ち上がり、とぼとぼ近寄ってくる白河をキッチンのテーブルに着かせ、食べようぜと声をかける。

俺も向かい側に座り、わざとらしく『いただきます』と手を合わせ食べ始める。

俺しかまだ食べてないんで、ゆっくりと食べていると不思議そうな顔で見つめてくる白河。

「……君って料理出来るんだ」

「ま、まあな…っ、これが限界だけだな」

ふーんと、聞いておいて興味ない感じの白河。

でもやっと食べてくれたんで一安心。

このまま機嫌直ってくれればいいけど。

今日は学校休みだぜ？この調子じゃさすがに辛い。

しばし無言のまま食す俺達　　。

しかし　　残念ながらその時はやってきた。

実はこんな雰囲気だからさ、行けてないんだよね。

え？何がつて？

朝起きたらさ、皆行くよね、トイレ？

さすがにもう限界なんだよ。

だから俺はさりげなく立ち上がり、おもむろに言った。

「ちよつとトイレ　　」

あわよくば一人で　　と思っただが…結局俺は廊下でガシツと腕をつかまれ、また二人で排泄。

あーこんなにトイレが嫌で嫌でたまらない日がやって来るなんて…。

自分の身体じゃないとはいえ、彼女同伴じゃないとトイレ行けないなんて…恥ずかしすぎる…。

別に不自由じゃないのに、介護されてる気分なんだよ。

え？楽しそうだった？

バカ言っつな、期待値を込めて楽しかったのは一回目だけだ。

ま、そんな感じでスキンケアもとれてだ、その後やっと普通に戻った白河とリビングでまったりティータイム。

白河には妹がいつも飲んでるハーブティー。

そしてもちろん俺は水分補給したくないんで、飲みません。

白河の機嫌が直り、回復した空気の中、俺は普通にテレビを見る。

そんな俺を横目に、ボソツと呟く白河。

「神崎君ってさ、絶対彼女を大事にしないタイプだよな」

何を言い出すかと思えば、その後も私にいやらしい事ばかりするだの、変態だのと最後には「私って君のことホントに好きなのかなあ？」などと、危険なセリフが聞こえてくる。

やばい空気を察した俺は必死にフオローにまわる。

「お、お前がどう思ってたよーがだ…お、俺はお前の事が…好きなんだよっ、好きな子にエッチな感情もつのは普通だろっ！」

なんだかフラレそうな空気なんで、そりゃもう必死な俺。

なんだが…必死すぎたのか、俺の顔を見てプっと噴出す白河。

「あはははっ、自分の顔した人にそんなこと言われても…」

クスクスと笑い出す。

くそ…真剣だっただけに、ちょっと腹立つじゃねーか…。

ま、おかげで場が和み、しばしだべってまったりする事が出来た。

「うっ…彩乃ちゃんのパジャマきつ…いい」

俺もきつい。

しかしだ、そんな事はどうだっていい。

俺の興味と視線は白河に釘付けだ。

彩乃と白河じゃ胸のサイズの次元が違う。

そりゃきつかるう。

「あ…やだ…ホック外れた」

ぶっ！ ホックが外れただと！？

一瞬たゆんと胸が弾み、慌てて手で押さえる白河。

へ？何があつたのかって？

そりゃあれだよ、元の身体に戻つたに決まってるだろ。

さっきな、また身体が緑色に光ってだな

「ねえ、ちよつと私着替えてくる…」

パツパツの胸を両手で押さえながら、上向き加減な白河。

恥じらう感じがたまらん！

思わず前屈みで、ぶっきら棒に「おう」とだけしか答えられない俺。

「すぐ戻って来るから、じゃ行って来るね」

シュツと消える白河。

ああそっか、自宅に戻ったのか。

うゝむしかし……何故戻る時は服がそのままなんだ？

いやいや、そんな事が問題じゃない。

取り敢えず元に戻って良かったんだが、いったいどうやって!?!?

何がどうして!?!?

ブチッ

あ　パジャマのボタン飛んだ。

ま、まずは俺も着替えっか。

そう思い立ち上がった瞬間　。

ピンポーン

おや？　誰か来た？

響いてくる呼び鈴に反応して、慌てて玄関へと向かう。

もう白河戻ってきたのか？

って、早すぎるだろ。

あー彩乃か。

あいつもきつと元に戻ったんじゃないか。

でも自宅でピンポンって可笑しくないか？

などと考えながら玄関のドアを開ける。

ガチャ　　。

「あ、お、おはよう…」

「お、おう…おはよう」

なんだか礼儀正しく挨拶してしまったが、そこには一条が立っていた。

「あ…その神崎君、突然来て…ご、ごめんね」

最後にてへっとハニカム一条。

う…ちょっと…いやだいが可愛い。

突然の来訪者にびつくりの俺。

「ど、どうしたの突然」

「え…えと、あ、遊びにきました…」

俯き加減で目を反らしながら、恥ずかしそうにする一条。

遊びに来ただと!?

俺んちに!?! しかも女の子が!?!

こ、こんな事が今まであっただろうか!!

そ、それに…なんだか今日の一条はいつもと違つぞ。

髪は俺の大好きなツインテール。

え?初めて聞いたって?

だよなー、だから彩乃はいつもツインテなんだよ。うん。

いやいや、今の発言はかなりのシスコンだぞ。

ち、違うからな、あいつが勝手にしてるだけで…。

「あの…神崎君？ 迷惑…ですか？」

うおっ、いかん、トリップしてた。

すぐさま」「どうぞどうぞ」「と一条を家の中へ促す。

「ちょ、ちょっと待って下さい…」

ファアの付いた長めのブーツを立ったまま、んしょんしょと脱ぐ一条。

うむ、生足にブーツいいね。

しかもヒラヒラの超ミニスカートで、見えそうで見えぬおっ
見えた！

チラッと白っぽいのが…イッツアファンタジー。

「お邪魔します…」

思わず目が合う。

当然良からぬ所を見ていた俺は、無意識に目を反らしながら「遠慮

しないでいいよ」と優しい声音でリビングへと案内した。
その僅かな道中。

「あの、神崎君。可愛いパジャマ着るんですね」

「へ？」

言われて気付く、白河のパジャマを着たままの俺。

しかも、中にはブラとパンティーを装着。

「ぶーーーーっ!!」

思わず吹き出してしまったではないか！

リビングに一条を置いて、慌てて自室に戻った俺はもちろん速効で着替えたさ。

普通にジーパンに長Tシャツ姿になり、リビングへと向かう。

やばい、もしかして俺：変な誤解されるかも。

そしてリビングでは、ソファアにちょこんと座る一条が当然の如く言った。

「あ、あの…私、口は硬いほうですから…」

っておーいっ！

やっぱり誤解してるじゃねーか！

「いや…だから、あれは妹のパジャマで…っ！ 妹に変な事をしているわけじゃないぞ！ だから、たまたま俺のが洗濯していな…」

苦しい言い訳を長々としてしまう。

しょうがねーだろ。

それなのに、結局「だ、誰にも言いません、本当ですっ」と、誤解が解けてない様子的一条さん。

はあ…いいぜ、別に…。

おっと、一条にお茶でも入れてやるか と、テーブルの上に残っているハーブティーに気付く俺。

やばい。

こんな事をしている場合じゃないだろ、俺。

そろそろ、あの方が戻られるではないか。

天然のくせに沸点が低く、最近知ったが嫉妬深いあの方が…。

いや、そろそろじゃない。

いつ一瞬で目の前に現れるか…。

そんな事になったら絶対にやばい。

間違いなく修羅場るとみた。

「オツケー、一条。ここじゃなんだから俺の部屋に行こう、うんそうしよう」

「え…？ 神崎君の部屋に…」

「そうそう、俺の部屋。ゲームとかあるし。あゝその、なんだ、もうすぐ妹が帰ってくるし」

「妹さん？ なら私、妹さんに挨拶したいです」

「まあまあそんなのいつでも出来るし」

そう言いつつ、強引に一条の腕を掴んで2階へと向かう。

「あんっ、ちよっ…神崎君！ 私、男の人の部屋にいきなりは

「

なんか言ってるが無視。

事態は急に迫られているのだ！

「や、待って…そんな引つ張らないで下さい」と嫌がる一条を半ば無理やりに俺の部屋へと連れ込む。

「わ、あぶねっ、おとつと…」

「キャツ！ わっ！！」

ドサッ。

入り口で足がもつれた俺達は、そのままベッドに倒れこんだ。

「わ、わりい…だ、大丈夫…？」

「う…うん、平気…」

顔と顔が近い。

倒れこんだと言うより押し倒した感じで、俺が一条の上に乗っかってます…。

完全に体重を一条の身体に預けてしまっていて、柔らかい感触を全身に感じる。

触れ合う吐息…。

名残惜しくてなかなか離れられない。

思わず見つめ合い、固まってしまう二人…。

つい、柔らかかそうな唇に目が行ってしまふ。

スツと目を閉じる一条。

なにっ!?! オッケーってこと!?! オッケーなのかつ!?!

急激に全身の血が一箇所に集まってくる。

やばい。

色んな意味でやばい。

一瞬、白河の恐い顔を思い出し、物凄い勢いで一条から離れる俺。

目を開けて、不思議そうに見つめる一条。

その一条の、捲かれて丸見えの白いパンツをガン見する俺。

だーっ!?!?!

潔く諦めろっ、俺っ!!

「と、取り敢えず…お茶入れっから、ちょっと待っててくれ」

そう言い残し、そそくさと退場する。

「嗚呼…俺の初体験の絶交のチャンスがああああああっ!!!!」

階段を下りてリビングに入った瞬間、小声で絶叫してみる。

「なに？ 初体験って？」

って、白河居たし！ あぶねー！

ホント、こいつのテレポはいつも突然だかな。

まあ、なんだか可愛い私服に着替えてきてくれたんで良しとしよう。

生足じゃなくて、黒いストッキングにミニスカートだが、これもまたイイ。

「ねえ、なに？ チャンスって？」

「ばっ 何でもねえよっ、それより早いな戻ってくんの」

「うん、着替えてきただけだし ってなによ、私が戻ってきたら何かまずいの？」

「べ、別にまずかねーよっ、お前が戻ってくるの俺待ってたし……」

「ふ〜ん…ま、いいけどさ……」

ソファーに座って足を組んでいる白河。

ハーブティーを入れ直したのか、カップからは湯気が出ていて丁寧な俺の分まである。

この一瞬でそこまでやるとは……かなり俺んちに馴染んでんな。

「紅茶入れたから飲んで」

白河に促されて俺もソファーに着く。

大丈夫。絶対にこの危機を乗り越えてみせる。

まずは考える。

二人を鉢合わせしてはいけない。

修羅場る。確実に修羅場る。俺の本能がそう叫んでいる。

「ねえ、私のパジャマ返してよ…あと、下着も…」

「おう…そうだよ…な。でも、下着は俺履いちゃったからなー。処分しとくよ」

「いいから返して」

「はい…」

チツ、やっぱり下着も返さなきゃダメだったかー。

ま、服は2階だ。ちょうどいい、紅茶でも持って一条の様子を見に行かなくては。

俺は白河の入れてくれたハーブティーを片手に立ち上がる。

「え、なんで紅茶持っていくの？ 上で飲むの？ じゃあ私も…」

「ってちょっと待て、お前はここでお茶してろ」

「なんでよ。話したいことあるのにー。私一人でここに居るのって可笑しくない？」

「いやだから、昨日からの出来事があまりに不可解で俺も動揺して

んだよつ。だから2階で頭冷やしてくつから、ちょっと待っててくれよ、な?」

「あ…そう。早く戻ってきてよ」

「おつ」と軽く返事をしていざ2階へ。

ふっ、いくら天然のあいつといえど、さすがに俺の行動は怪しい。気をつけねば。

トントン　　入るぞーと一応声をかけて自分の部屋へ入る。

「あ、神崎君…あの、これって…」

入るや否や俺ピンチ。

一条が手にしているのは白河のブラジャー（薄いピンク色）。

「あ、ちょ、そ、それはだな…」

慌てた俺は思わず手元がくるい　　ガチャン。

「アチーー!!」

「あつつい!!」

紅茶をモロに自分の足と一条の上半身にぶちまけた。

「じ、ごめん！ 熱かった!? 今拭くからっ」

「え？ いいです自分でやりますっ」

「いいからいいから」

焦って近くにあつた布を手に取り、一条の服をふきふき……。

「じつとじつと」

「は、はい……」

胸の辺りをふきふき……。

ムニッ

「……あ……神崎君そこは……」

いや、わざとじゃないぞ。

本当にそこにこぼしたんだって！

「……………あ……………」

「あ、ごめん」

「い、いえ……………」

参ったなー、思ったより一条の胸がでかくて柔らかか……………じゃなくて！

「後は自分でしますから……………」

さすがに胸を触りすぎたのか、いや触っちゃいけない、拭いたんだが……………嫌がられました。

しかし、結構濡れちゃったなー。

シャツが透けてブラが透け透けに……………。

「あの……………これってパンツ……………ですよね?」

今まで拭いていたものをヒラヒラさせる一条。

げっ、しまった。白河のパンツで吹いてしまったらしい。

「あゝ参ったなー、妹のパンツじゃなーか…ったく、あいつ、こんな所に洗濯物置きやがって」

咄嗟に誤魔化そうと試みるが、

「でも、このブラジャーは妹さんのじゃないですよ？ 彩乃さんでしたっけ？ たまに教室に来るから私知ってますけど…」

「だー！ー！！ それ以上言うな！ 分かった正直に言おう、それはある女性へのプレゼントだと思って買った物なんだっ！」

かなり苦しいが、嘘をついたら最後まで貫くのが男ってもんだ。

「白河さんに？」

「そつ白河さん」

ってなんで知ってる！？

「でもこれって、絶対使用済みですよ？」

「あ、当たり前じゃねーか！ あいつはな、今は古着に凝っていてだな……」

「下着に古着ってあるんですか？」

「いや……あると思っただけ」

く、苦しい自分で言っていて苦しい……。

だがしかし！ 俺は負けない！ だって男の子だもん！

と、取り敢えず話題を代えてだな……。

「ところでさ、今日はなんか用事あったんじゃないか？」

「……は、はい……あ、あの……メール何度も送ったのに、返事がないから……その……」

「へ？ メール？」

慌てて携帯を探す……。

が、無い。

どこいった……。

あ、そうか、あれからずっと彩乃が持ってたんだ。

「あの、わりい。妹が間違えて持って行ったまんまなんだ」

「え、ホントですか？」

「そうそう、だからメールも見えないし返事もだな」

「良かった〜私、無視されてるのかと思って」

急に笑顔になる一条。

成る程、そういえば最初からなんだか元気ない感じだった。

しかし、笑顔が破壊的に可愛いな。

白河がいなければ、間違いなく学年ナンバー1美少女決定だな。

「じゃ、じゃあその…明日の日曜日、一緒にお買い物に付き合ってください…クチュンツ！」

「お、おい、大丈夫か？ 服が濡れて寒い？」

「は、はい…クチュンツ！ ちょっとだけ…」

どうすっかな〜、やっぱここはあれだよな〜。

風邪引くとまずいもんな…しかし危険度が増すだろ…うーむ。

「クチュンツ！」

「分かった！ シャワー浴びてくれ」

「え？ そんな…悪いです」

「気にすんな、俺のせいだし。着替え用意すつから」

「遅ーい。もう私帰ろつかと思っちゃったじゃないっ」

さすがに待たせすぎたかと思えば、案の定ムクれている白河。

「わりい、ちよつと精神統一してた」

「何が精神統一よ」「とご機嫌斜めな白河嬢なんだが…。

どうしよう。ここは適当に言っておいつを帰すのが無難か。

でもなー、なんとか白河と久しぶりにイチャイチャしたいんだよな
ー。

いや？　そもそもイチャイチャした事なんてあったのか？

「ちょっとおー、なんで黙ってるの？」

あー、ちなみに一条はシャワー中だ。

取り敢えず濡れたの上だけだから、俺のTシャツだけ着替えて渡し
てある。

え？　白河にバレないかって？

ああ、激しくやばい。

廊下に出られたらアウト。

だからだな、こいつは自宅に帰そう。うんそれがいい。

「ねえってば！　聞いてるの！？」

「聞いてるって。取り敢えずだな、昨日からの事はあまりにもフア
ンタジーすぎて、俺らにはさっぱり分からないよ」

「そ、そうだけど…彩乃ちゃん大丈夫かな？」

「大丈夫だろ？」

「…む、それなんか冷たくない？いつものシスコンな神崎君と違う」

「違くないよ！如月さんと共に居るんだから問題ないだろ。心配だったらシユツと様子みてきたら？」

「な　なによそれ…変なの」

何が変なのか、さっきよかムクれっ面の白河。

何度も足を組み直しているのを見ると、まずまずご機嫌斜めってとこだな。

「なんか隠してる　？」

ぶーっ！

「ゲホツゲホツ……なんだよ唐突に！思わず紅茶吹いただろ！」

「やっぱり怪しい…」

「怪しくねーよ！だから言っただろ？今回の事で俺は動揺してんだよ」

なんだ？ 今日はやけに勘がするどいぞ。

いつもボケボケしてんのに、女の勘ってやつか？

「なんかさ、今日の神崎君っていつもより冷たくない？」

「え？ そうかな…わりい。じゃあ頭冷やすから、今日は一人にしてくれない？」

「あー！私を帰そうとしてる！ 絶対可笑的いよ」

指を差してアピールする白河。

自然な流れのつもりだったんだけど…ちょっとわざとらしくったかな。

「帰そうなんてしてないって！ 本当は俺、白河ともっと一緒に居たいんだって！」

「…そうだよなー、いつも私と…なんとか一緒に居ようとするもんねー…」

「だから可笑的いの、今の君の態度」と言いつつ、再び指を差される俺。

だいぶ上から目線でのご意見ありがとうございます。

そういうの、嫌いじゃないぜ。

ま、さっきから足を組む度に、ストッキング越しにパンツがチラチラしてるのを見逃してないけどな。

いやいやそうじゃなくて。

「まあ俺も、たまにはそういう時があるって。だから今日は別れて明日会おうぜ」

「やだ、帰んない」

「ど、どうして?」

「2階になんか隠してるでしょ」

「隠してねーし」

「ちょっと見てくる」

「話し聞けよっ」

「やだ」

立ち上がって2階へ向かおうとする白河。

その手をがっちり掴んで話さない俺。

「放してよっ」

「何も無いって、もう少しお茶してよっぜ」

「いーやっ!」

シュツ。

目の前から消える白河。

あちゃ〜やっちまった。

やばい。絶対2階は修羅場と化している。

あ〜〜浮気がバレた男の気持ちってこうなのか〜!!

しかも、突然白河がシュツ　とかいってあらわれたら…一条ビビるぞ。

などと言っている場合じゃない!

俺も2階へ行くべきか…。

いや、家から出ようかな…そもそもなんでこうなった…。

一人悶々としていると、目の前にシュッと白河が現れる。

「……………」

しばし無言の白河。

お、怒ってるのか……ドキドキ……。

すると、何故か照れてるのか怒ってるのか良く分からない表情になり、ボソツと呟いた。

「……………なんにも無かった……………」

「だろ？ 何も隠してないって！」

ホツとしてつい笑顔の俺。

「むう！ やっぱり怪しい！ もっかい見てくる」

再び消える白河。

ダメだ！ 万事休すか！？

ど、どじするどじする？

あ！ まずは玄関の一条のブーツを隠さねば…。

いそいそと廊下に出る。

そしてそこで一条とバツタリ。

「あ、勝手にバスタオル借りちゃった」

「お、おおおう、構わねーよ。取り敢えず今日は帰ろうか」

「はい？」

路線変更！ 一条を直ちに帰宅させる！

「明日、なんだっけ？ 買い物行こうぜ！」

「ほ、ホントですか！」

「ホントホント！ 後でメールすっから、今日は帰って。早く早く」

「は、はい…わ、分かりました…あれ？ 靴が無い」

NO…！！ 何やってんだ俺！

さっき迅速にキッチンに持ってつちまった。

「ちよい待ち」と振り向いた瞬間。

冷たい視線を向ける白河と目が合った。

7話に続く

第6話 修羅場予感（後書き）

いや〜お待たせしちゃって…。

読んでくれてありがとうございます。

第7話 修羅場？ そして誰？

「私さあ、今すつごく気分悪いんだけど」

「あ、あの…私のせいなら帰ります」

「うーうん、一条さんは悪くないよ」

「あ、はい…」

お待たせしました、修羅場突入です

いやーっ！！ 楽しくないからっ！！

結局白河に見つかって、何故かリビングでティータイムへ。

白河が恐いんで、今俺はとてもゆっくりお茶を淹れてます。

「コーヒーまだ？」

「え？ 紅茶じゃないの？」

「今はコーヒーの気分」

「は、はい！ わっかりました！」

慌ててコーヒーを淹れなおす。

怖い。どうしよう。

そして一条が怯えてる。どうしよう。

場が無言のまま時間が過ぎる。

一応、事の顛末は既に全部話しました。

別に変な事してないし…ちょっとパイタッチしたぐらいで…。

そんな事報告しないけど。

コーヒーを二人に出す。

さて、俺はどこちに座るべきか…。

一条の横か、白河の横か。

俺が迷っていると、無言で自分の横をポンポン叩く白河。

う　超恐いんですけど…。

指示通りに白河の横に座る。

場の空気がやばいんで、「よいしょ」とか無駄に言いいながら。

そして和ますように、

「コーヒーどうぞ。冷めないうちに飲もうぜ」

これまた無理に明るく言ってみるが、一条は「それじゃ…」と飲んでくれたけど、白河は全く微動だにしない。

なんだよ…自分がコーヒー飲みたいって言ったんじゃねーか…。

などとは決して口には出せない。

目の前には一条。

着替えて渡した俺のTシャツを着ている　　ん？なんだ？

なんだか、一条がコーヒーをすする度に胸がたゆんたゆんして…。

しかも胸の先端に突起が…。

ま、まさかのノーブラ！

もう場の空気なんて関係ない。

俺の視線はギンギンに先端突起にロックオン。

なんだかさ、薄っすら透けてるような気がするんだよね。

黒っぽい影が見えるっていうか…。

ま、まさか…！　こんな清纯そうな顔して、先端黒いのか！？　黒

いのか!?

しかも結構ポチってるぞ!

「立ってるのか!? 先端立ってるのか!？」

その瞬間、手でサツと胸を隠す一条。

それを見て、ムツとした顔で俺をガン見する白河。

うつ…まさか、ここでいつもの癖が出て声に出してしまつとは…。

完全に白河のお仕置きタイムかと思われたが、何故かスルー。

「一条さん、私の上着着てて」

「す、すみません」

一条に優しい白河。

ま、まずいな…今の発言…とってもまずい。

さんざん言ってきた。

俺が変態になるのは白河に対してだけだつて。

その言葉が嘘になる。

これはまずい。ハンパない。どうしよう。逃げる？

あ〜。

俺は頭を抱えてその場にうずくまる。

「一条さん、神崎君がこんな変態だって知ってた？」

「し、知らなかったです…学校でも、いつも硬派だし…女の子に優しいし」

「だよ〜。私なんか、会う度にセクハラされてるから」

「えっそうなんですか！ ショックです…神崎君がそんな人だったなんて…」

え？ 何この会話の流れ。

俺のダメ出し会？

凄く居ずらいんですけど…。

しかもこの後、一条がボソッと呟いたことが、

「私、さっき2階で胸を触られました」

ギャーーーーー!!!!!! 何でそれを言っただよ!?

「え!?! 嘘っ!?!」

「ホントですっ、何度も何度も…」

ちよつと待て!

そりゃ聞き捨てならん!

た、確かにちよつと楽しんだけど…

「違っつて! あれはさ、こぼしたお茶拭いてたんだって!」

「し、しかもその時…雑巾代わりにしたのが、ピンクの下着だったんですっ」

ギャーーーーー!!!

だから全部言っただよ!!

「ま、まさか…それって…」

「はい、ブラと上下お揃いで、しかも結構大きめサイズだったんで……白河さんのかなって……」

「はぁ……なかなか持っていてこないと思ったら……」

汚い物を見るような目でみつめてくる白河。

うう……そんな目でみないで……しくしく。

「私、神崎君がこんな人だったなんて知りませんでした……」

「う……うん……」

「小学生の頃から好きだったのに……私……う……ぐすっ」

突然泣き出す一条。

おいおいおい……泣き出す程に俺が嫌なのか!?

「あ、あのね一条さん。男の子って結構みんなこんな感じだって聞いたよ?」

「そうなんですか?」

「そうそう」

あれ？　なんか流れが変わってきた。

「この子ね？」

この子！？

「私の事何度も身体張って助けてくれたし、最後は私を助けて死んだんだから」

「えっ！？　死んだって、神崎君が？」

「うんそう」

「え？　本当に死んだわけじゃないんですよね？」

そんな大袈裟な　　的な雰囲気で、俺の答えを待つ一条。

「あ〜っと…なんていうか…トラックにひかれてさ、全身ぐちゃぐちゃになったんだよね、俺」

まあそれで死んで、今は軽いサイボーグだけど。

ああ、如月さんは生体サイボーグって言うってたけどな。

「え、じゃ、じゃあ…何ヶ月も学校休んでたのって…」

「まあな。治療してっただって感じ？」

「そつ…なんだ…病気って聞いてたから…」

「そっか」

なんだか場が暗くなっちゃった。

でも白河からこんな事が聞けるなんて…。

「あの時、神崎君が助けてくれなかったら…私、死んでた…と思う」

誰に言うでもなく、俯いて呟く白河。

そして顔を上げ俺に向き直り、優しい笑顔で言ってくれた。

「あれから、ずっと言おうと思ってた。だから言っね。あの時、助けてくれてありがとう。真琴はね？ たぶん、君より君のことが大好きだよ」

言った後、えへっと舌を出した白河。

「嫌だっ！ 絶対離さないっ！！ もう2度と離さないっ！！！」

「も、もう…しょうがないなあ…」

そつと俺の背中に手を回して、軽くギュッとしてくれる白河。

その行為で安心した俺も、力を緩めてフワツとした力で抱きしめる。

「……あ……」

「……白河……」

しばらく抱擁した俺達。

そして離れるタイミングが分からず、しかも一条が見ていると思うと段々赤面してくる俺。

そういえば、最近妹と似たような場面があったような…。

「ね、ねえ神崎君…そろそろ…私、離れたい…」

「お、おう…分かった…」

なんとも恥ずかしい離れ方をしてしまう。

でも、身体が離れても、しばらく見つめ合う俺達。

白河の顔が今までに見た事もないくらい、真っ赤になって妙に可愛くて…俺は徐々に顔を近づけて

キスをしようとしたんだが、「やだ…」と直前で顔を反らされてしまった。

「素敵ですっ！！ 凄いですっ！！」

キス出来なかったけど、幸せいっぱいの中、何故か一条は興奮していた。

「私、二人がそんなに愛し合っていたなんて知りませんでしたっ！！」

「あ、ああ…」

「もう素敵っ！ 断然二人を応援しちゃいますっ！！」

目をキラキラ輝かせ、興奮冷めやらぬ一条。

折角良いムードだったのに、きよとんとする俺と白河。

「私、神崎君の事は忘れて、二人のような新しい恋を探します！」

そして「頑張つて下さいねっ」と言い残し、「お邪魔虫は帰ります」と言つて風のように出て行った一条。

二人残された俺達。

さっきの抱擁が忘れられない…。

白河の感触が身体全体に残ってる。

もう一度抱きしめたい気持ちで、白河をチラチラ見るが。

「あ……」

「あ……」

何故か同じタイミングで目が合い、瞬間恥ずかしくて目を反らしてしまふ。

何度かその繰り返し…。

一体何やってんだ、俺達。

しまいにや白河が、「もう帰るね」なんて突然言い始めるし。

もちろん俺は全力で引き止めたさ。

まあ、なんとなくさ…一緒に居たくて…。

「彩乃ちゃん帰って来ないね」

「そうだな」

「美琴、上手くやってるかなー」

「あいつなら大丈夫だろ？ お前本人なんだし」

「そっだよねー」

結局その後、何も進展しない俺達。

つい、二人以外の話題をしてしまう。

くっ！ 俺って情けない…。

強引にでも、唇を奪うべき！

心ではそう分かっているんだが…しかも嫌がられない自身あったし…。

「でもタイミングなんだよな〜くっくっくっくっ〜!」

「なんのタイミング？」

「キスするタイミング」

「えっ!？」

いつもの癖でつい言ってしまったが、言い切る俺。

ある意味男らしい。

「キス…していい？」

真っ直ぐに白河に向き直って、肩を優しく抱く。

俺を見上げ、目をパチクリさせる白河。

やばい、超可愛い。

そしてイケる！ 絶対イケる!!

そう確信した俺は、一気に顔を近づける。

近づける…でも目を閉じない白河。

頼むから目を閉じてくれっ！ これ以上近づけないだろっ!!

吐息が触れ合う、僅か数センチが進めない！

もう強引にこのまま　　！！！！

そう思ったその時、

ピンポーン

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン。

突如響き渡るピンポン連打。

ガクツ　　。

一気に空気が冷え込むのを感じ、さすがに諦めた俺は玄関へと向かう。

なんだよ、誰だ？

まさか新手の嫌がらせじゃねーだろーな。

そんな事を考えていたら、何やら外が騒がしい。

「彩乃ちゃん誰もいないっぽいよ」

ピンポン、ピンポン、ピンポン

うるせーな…なんだよ。

「ノノちゃん、彩乃、鍵持ってますから」

「え、そうなん？ んじゃ早く開けてよ」

ガチャガチャ……

「あれ、空いてる」

入ってきたのは彩乃と友達か？

にしてはちょっと大人っぽいな。

彩乃の後ろから入ってきた女の子。

身長は白河と同じ位…いや、あいつ最近背が伸びたみたいだから、ちよっと低い位か…。

「まったく、騒々しいな。彩乃おかえり」

「あ、兄さん只今です」

「たっただいま〜」

兄妹の挨拶の後に、図々しく入ってくる女の子。誰？

「兄さん兄さん、見て下さいよこの服っ」

俺の前でくるくる回転する彩乃。

なんだか良く分からんが、ワンピースって言うのか、チュニツクて
いうのか…。

とにかく俺が見た事がない服を着ている。

要するに新しい服を手に入れて、俺に褒めて貰いたいらしい。

こんな時、優しい兄はこうだ！

「おお可愛いな、どうしたその服？」

「如月さんに買ってもらったんですよ！」

「へーそうなのか、良かったなー」

「ふふふ〜いいでしょう〜」

「ご機嫌な我が妹。良きかな良きかな。」

「ねえじーちゃんノノのも見てー！ ノノのも買ってもらったのー」

「は？ あ、ああ…可愛いねー」

「うんー！」

彩乃と似たような服を着て、同じようにくるくる回る女の子。

誰？

「ノノちゃんも上がって〜」

「うん、今行く〜」

「あ、彩乃の部屋は2階なのですよ〜」

「うん知ってるよ〜」

誰？ と聞く暇もなく、さっさと家の奥へと消えていく二人。

そつえば、俺、じいちゃんって呼ばれなかった？

まあ聞き間違いだろ。どうでもいいし。

しかし、彩乃が友達連れてくるなんて珍しいな。

まあいいかと、リビングに戻ると白河がソファの上でさっきの態勢で固まったままだった。

「彩乃ちゃんの友達？」

「そうじゃねーかな？」

「ふーん、楽しそうだよね」

「そうだな」

なんだかあの二人は盛り上がってるが、こっちはすっかり冷え切っちゃったぜ。

まあいわゆるまったり空間。

「なんだか私が居たら悪いから、そろそろ帰るね」

「え、ちょ、ちょっと待てよ」

まだキスしてねーっちゅーの！

まあそんな空気はもう作り出せないと思うけど。

「ん〜でもお…する事ないしい〜」

「彩乃があれからどうなったか聞かないとさ」

「う〜んそっかー」

帰りたがる白河を制して、彩乃を呼びに行く。

要するに、まだ白河と一緒に居たいだけなんだけど。

でもそれ以上に、昨日からのファンタジアを解明しとかないとな。

「彩乃ー、降りてこーい。ちょっと下でお茶するぞー」

「はい」と何故か二人分の返事が聞こえて、すぐさまドンドンと降りてくる彩乃と謎の友達。

「兄さん、彩乃は日本茶がいいです」

「じーちゃん、ノノもそれでいい〜」

やっぱりじーちゃん言ってるし…しかも馴れ馴れしいな、この子。
でも悪い気はしなかった。

なんでか知らんが、妙に可愛い何かがあった。

まあ見た目、確かに可愛い感じなんだけども。

ちやつちやと4人分のお茶を淹れる。

その間、彩乃とノノちゃん　だっけ？　は、相変わらず仲良さそうにしゃべってる。

おいおい、白河を一人ぼっちにするんじゃない。

そんな感じなんで、急いで茶を運ぶ。

「取り敢えず、飲んでくれ。まだ熱いぞ」

4人で大人しく茶をすする。

「うわっ、アチチチ…じいちゃん熱すぎるよー」

訂正、一人うるさい。

あと、またじいちゃん言われた。

ま、いいか。本題に入ろう。

「ところで彩乃、例のファンタジックな現象の原因は分かったのか？」

「あーはい、身体が入れ替わったことですね。もうバッチリですっ！」

事情を知らない人間がいるので敢えてボカして言ったのに、ストレートな返事の彩乃さん。

さすが我が妹。

「さすがだな如月さん。やっぱり頼りになるなー」

「あーえっと…今回は違うんですよー、えっと」

「はいはい！ここはノノちゃんの出番だよ」

急に間に割って入るノノちゃん。

なにこの子？ 的な空気が俺と白河の間に生まれた瞬間。

しかし、そんな空気の読める子じゃないらしい。

「え〜とね、パーティーグッズなんだよ。じーちゃんとはーちゃんに楽しんでもらおうと思って　あと…面倒だから彩乃ちゃん
でいいよね?」

「いいですよ〜」

意味が分からん。

じーちゃんって百歩譲って俺だとしても、ばーちゃんって誰だよ?

「ん〜でもー、ホントは3分くらいしか効かない筈なんだけどさー、結構長かったよねー1日ぐらい?　そんでさー、ノノも混ざる筈だったのに、彩乃ちゃんに吸収されちゃって参ったっちゅーの!　あはははー…」

「あのさ、さっぱり意味不明なんだけど?」

「え?　イミフだった?　しゃーないなーだからさー、じいちゃん達に楽しんでもらおうと思ってパーティーグッズでえー…」

「ちょっと待て、そもそもじいちゃんって誰だよっ」

「あ〜そっか、ごめん。正確にはひいじーちゃん
とひいばーちゃん」

そう言って、俺と白河の顔を指す。

ハア〜この子大丈夫かな。

まさか、秘密結社から送り込まれた新たな刺客か？

どう対処すればいい？

「あと、昨日じいちゃんが会った男の子紹介するね」

おもむろに、左耳に付いているスカウターのような物をピコピコ弄り出す…。

いや、最初から気付いていたんだ。

なんか耳に付いてるな〜って。

ガチでスカウターっぽいんですけど。

まさかとは思いますが、サイヤ人ですか？

「ジャジャ〜ン ……あれ？ ちょっと待って」

失敗したのか、首を傾げるノノちゃん。

何か飛び出すのか？ 3Dってやつ？

「今度こそっジャジャーン」

ジャジャーンと共に、凄い煙。

「ゲホツゴホツ…」

「ケホツケホツ…」

「うゝ何これ、目に染みるうゝ」

「フッフッフ…弱っちーね、ちみ達。見て見て、シローちゃんだよ」

いや、煙で何も見えないし。

しかも、目が超痛いし…。

「あーごめん、煙が強かったかなー。ちょっと雰囲気だそうと思って多めにしちゃった。ごめーん」

わざとかよ！ あー着いていけねー。

段々と目が慣れて、視界がはっきりする。

目の前には男のシルエツトが。

マジで現れたな 若干の驚きはあるけど、マジックみたいなもんだろ？

と思い、意外と平常心。

しかし、はっきりとその男の顔が見えた瞬間、背中に悪寒が走った。

「駿さんと真琴さん、ご機嫌麗しゅうございます」

現れた男は超イケメン。

スーツでバリツと決めて、なんだか執事っぽい振る舞い。

そう このイケメン…というか美少年というか は、昨日公園で会ったなんとも感じの悪いやつ。

思わず白河の前に出て、イケメンにガンを飛ばした。

「おっと…そんなに睨まないで下さい。昨日は少しからかっただけです。フフフ」

クツ、超感じ悪い。何こいつ。死ねばいいのに。

嗚呼…昨日も感じたけど、ホントこいつ格好良いんだよ。

マジムカツク。

「ちょ、ちょっとなによこの人！ 超カツコイイ！！ ノノちゃん
だっけ？ 私にも紹介してっ！！」

俺を押しつけて前に出てくる白河。

「あの、え〜っと…白河真琴ですっ！ あ、あの、その、貴方のお
名前は！？」

ガクツ　。

白河の目がハートなんですけど…。

俺ですら見た事のない位に嬉しそうだし…。

「はいはい、シローちゃんにもうゾッコンですかい？ 気持ちは
分かるよ〜」

「うんうん、シローさんカツコイイですう〜」

「ホント！ こんな人芸能界にも居ないよっ！！」

ハァ、俺だけ蚊帳の外かい。

はいはい、分かりましたよ。

なんだか昨日から変な事ばかり起こるな！。

一人いじけて、さっきの白河との抱擁シーンを思い出す俺だった。

8話に続く

第7話 修羅場？ そして誰？（後書き）

いや〜頑張つて書きました！

え？ いいから続きを早く書けっつて？

ですよ〜w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9101o/>

カラダがどんどん改造されるわけ

2012年1月4日06時45分発行